魔法少女リリカルなのは　Only Her Hero

Hell&Heaven

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ

【Ｎコード】
Ｎ１０６７Ｍ

【作者名】
Ｈｅｌｌ&ａｍｐ;Ｈｅａｖｅｎ

【あらすじ】
世界から1人の少年がはじき出された。

少年は生きる目的を失った。

世界に1人の少女が投げ出された。

少女は生きる意味を失った。

少年は、少女を見つけた。

少女は、少年に出会った。

物語は2人の数奇な運命という、小さな歯車の一つによって動き始めた。

※思いつき設定ゆえに、更新は遅くなります。ご了承を

コラボ受付中。もし、していただける方がいらっしゃいましたら、感想ｏｒメッセージを

現在アルカディアにも投稿中

コラボ企画スペシャル外伝　拳視（前書き）

どうもこんにちわ、Ｇ－Ｃです。今回

ごまだれ作者が執筆なさる「とある封魔の歯車破壊」とコラボさせていただきました。

ごまだれさん、遅くなって大変申し訳ありませんでした。

ではでは、外伝。お楽しみください

ＳＩＤＥ　ＨＩＲＯＫＩ

俺は今、驚きと共にたった今…そう、たった今俺の隣を横切った女の子の背中に釘付けになった。

…背中に揺れているのは腰まで伸びた長い銀髪。どう見たって日本人じゃない。後ろ姿だけでも普段俺と一緒に過ごしてるなのは達と同じくらい…いや、それ以上の容姿なんじゃないかってくらい。

…ん？別に惚れてねえよ？

ライトノベルじゃあそんなパターンはお決まりだが、今回に限って…もとい俺に限って彼女に対する考えはたった一つ。

銀髪綺麗…だとか、顔はどんなんなんだ…？とか。

そんな事じゃあ無い。

ただ一つ

「…で…できる…。」

そう呟いている頃には俺は考えるより先に、本能で女の子の肩を後ろから掴んでいた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

休日、カータは完全に時間を手持ち無沙汰にしていた。

本来ならば漸くできた友人に呼びかけて一緒に遊ぶ。というのが有るべきスタンス。

だが、家に一人姉を置いてどこかになど彼女にはできなかった。
季節は巡り、現在日本列島は梅雨前線と呼ばれる雨の悪魔（カータ命名）とも呼ぶべき物が絶賛接近中。
因みに天候は、晴れ。
それはもうびっくりするくらいの快晴。雲が職務放棄をした完全な青空。

こんな糞良い天気にカータは何をしているかと言うと…。

「頼まれたのは、これで全部だよね。」

メモを片手に箇条書きされた物を目で確認し袋に目を移す。

…お使いの真っ最中である。

『私が行くから、お姉ちゃんはうちでお昼寝でもしててよ。』

そんな妹（義理だが）の発言を呑まないはやてではない。
彼女にとって買い物は苦ではないがせっかく一人歩けるようになった妹が行くというのなら是非も無い。
彼女はあっさりとカータにヒラヒラと手を振り行ってらっしゃーいと見送ったのだった。

と、まあそういう訳でカータは買い物を終えて帰宅の真っ只中。そんな中、目の前を中性的な顔立ちの女の子（カータにはそう見えた）が視界に映る。

（サバサバした感じ…こういうのをボーイッシュって言うのかな）

見た目は自分と同い年くらい…雰囲気は僅かに年上。後ろで結ってある長い髪型もあってかカータには女の子に感じた。

ここまではまあその人物だけが視界に映る唯一の人間なら誰にでもすること。

ここまでしたって別にいきなり挨拶をしたりするなんて突拍子も無い事をするほど彼女は酔狂では無い。

…無かったが、通り過ぎた女の子（しつこいようだがカータはそう思っている）はすれ違い様にいきなり肩をグッと掴まれた。

「ッ…！？」

ほぼ条件反射。掴まれた右肩を引きながら相手に正面を向くようにクルリと踵を返しながら右手を掴んでそのまま引っ張りながら捻り上げようとする。

が、手を掴まれた子はそのままカータの無意識の握力など意にも介さないのかそのまま振り払ってしまう。

ちなみに買い物袋は左手に持っています。

正面から向き合ったままカータも女の子も動かない。

カータとしてはいきなり肩を掴まれ無意識とはいえ自身の対処を軽

くあしらわれたせいで明らかに敵意むき出しである。

「…なに…？…何か用…？」

そんな風に尋ねる口調にすらトゲトゲしい敵意がむき出し、だが対する相手側は何が嬉しいのか口元を正に不敵な笑みと呼ぶに相応しい形に歪めている。

それがカータにはますます気に食わない

「「……。」」

「……いや、やっぱりな！」

「…はい…？」

睨み合う事数十秒、小学校低学年とは思えない二人の視線と視線のぶつかり合い、その拮抗を相手側が突然崩して先ほどのソレとは全く違う朗らかな笑みを浮かべながら嬉しそうにはしゃぎ始めた。

…カータはますます訳が分からない。

「いや、悪かった。久しぶりにさ、胸が高鳴るもんだから。思わず声をかけちゃったよ」

「……。え…えぇぇぇぇぇぇ！？」

買い物袋落とさずに何を勘違いしたのか、頬赤くしカータは戸惑うように後退する。

…というよりカータはここで初めて目の前の子供が男だと気がつい

た。

「俺の気持ちを鎮めるにはコレしか無い！」

そんなカータの肩をガシッと掴み瞳に文字通り炎を映し叫びだす。
もうカータは口をパクパクするしかできなかった。

「俺と…」

女の子…もとい少年の言葉に、カータがゴクリと生唾を飲み込む。

「…是非とも決闘を！」

「……ハイ？」

空気が凍りついた瞬間だった。

「…で、浩樹さんは私と是非とも手合わせを…と…？」

結論を言うと、あの後浩樹はカータの怒りの鉄拳ならぬ鉄脚により数メートル吹き飛ばされるハメになった。

『乙女の純情弄びやがってぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！』

と怒号を発しながら。そんな一撃を食らって尚もケロリとしている彼もまた異常ではあるが

――閑話休題

「隠すなよ、何かやってるだろ?何となく解る。」

「アニメのキャラですか貴女は。」

「字がおかしいからそれ。俺男だから」

因みに場所は高坂邸の道場。
ちなみにきちんとお使いの品は八神邸に持っては行った。一応外出する旨と連絡先を記した書き置きを残して
そこで知る所はあったがそれはまた後ほど

「結論を言うと、小さい頃から空手をかじってました。」

「…た…?」
妙な所に鋭い高坂浩樹と名乗った少年はカータの語尾に首を傾げた

「お父さんもお母さんも死んじゃって、たまたま遠い親類のお姉ちゃんのとこに来てから空手はやってません。」

「そっか、悪いな。」

「…いえ、別に。」

そのやり取りで二人の間に沈黙が流れた。
浩樹自身、なのは達とはまた違う触れては崩れてしまいそうなどこか危うげな少女に対する接し方が解らず
カータ自身、砕けたばかりの心がどう感情示していいのか解らず

お互いがどう出るべきかわからない状態だった。

ふと、カータは浩樹が手袋をしているのが気になった。

時期というのもあったが例え寒いとしてもここは道場の中で屋内。

聞かずにはいられなかった。

「あの、浩樹さん。」

「ん？」

「その手袋、外さないんですか？」

カータの質問に、止まった空気を動かすチャンスと取り、浩樹は懇切丁寧に答えた。

自身の手に機械ならなんでも機能を停止させる力があること

小さい頃からの癖だからつけないと落ち着かないこと

手袋はおじいさんが贈ってくれたということ

流石に料理の時は手袋は外すこと

「機械なら、なんでも…？」

「嗚呼、なんでも。」

カータはその答えを聞き数秒間目をぱちくりさせるとクスッと笑い顔を綻ばせる

「やっぱ笑った方が可愛いな。」

と、浩樹の伝家の宝刀。

が、先の一件で陥落しなかったカータには通用はせず、ジトッとした半目で浩樹を睨む。

「…いつか刺されますよ…？」

「……？」

だが浩樹はその言葉を理解する事は無かった。

「…面白そう、いいですよ。ブランク長いですけど、私で良かったら。」

数秒の間を置いてカータが呟いた。

浩樹の有する不思議な力に興味が沸いたのだ。

…もちろん浩樹の戦闘能力に関して、という意味だが。

「…そう来なくちゃ…。」

お互いニヤリという不敵な笑みで見つめ合って同時に立ち上がった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

「胴着容易してくれるなんて思わなかった。」

浩樹さんが私が申し出に応じた時、おじいさんを呼んできた。彼の

おじいさんを見たとき、なんとなく今彼が強い誰か（まあ自分が強いなんて認識があるわけじゃにけど）と闘いたがる戦闘狂のような性格もなんとなく解るような気がした。

「さらしまで借りちゃって、なんかごめんなさい。」

「気にするな。浩樹が珍しく名指しで仕合いたいと言ったからな。こちらとしてもお前さんがどれくらいなのか、と気になっただけだ。」

彼のおじいさんは一言で言うと、達人っぽい何か。
多分私なんかが挑んだら一瞬で天井を見上げる羽目になるんだろうなぁ。

「じゃあじいちゃん、勝敗はじいちゃんの判断に任せる。…カータも、それでいいよな。」

私はコクリと頷く、確かに審判としては申し分ないとは思う。まあ彼のおじいさんがどれほど強いのかわからないけど、少なくとも私や浩樹さんが同時に挑んでも歯が立たない気がする。

「では、好きに始めよ。」

大した合図でもない言葉だったが、浩樹さんの鋭い回し蹴りが私の即頭部に襲いかかった。きちんとした合図に慣れきっていた私はその速さに僅かに遅れを取り回避できるものが間に合わず咄嗟に出した右腕でなんとか受け止める。

「ッ…。」

年上といっても向こうは9歳。一体どこにそんな威力がひねりだせるのかわからないほど防御越しでも衝撃はかなりの物だった。よろけてしまいそうな体をなんとか踏ん張り、攻撃直後の隙をついて床を蹴りなんとか懐にもぐりこむ。

「はぁっ！」

裂迫の気合を込めた声とともに拳を相手の顎に向けてアッパーの要領で叩き込む。そのまま拳に手ごたえは…無かった。

それもそのはず、私が懐に入り込んだ時点で、浩樹さんはすでに足を下ろして体制をほぼ立て直し、私の攻撃を視界に納めて首を僅かに傾けて回避を成功していた。なるだけダメージを与えようとし渾身の力が籠められていたせいか、大きく隙を見せたのは今度はこちら側になる。

だけどこっちだって負けてられない。
売られた喧嘩を買ったからにはそうそうに負けちゃあカッコ悪い。

だけど、撃ち損なった腕をそのままひっつかまれる。
体幹をくるりと変えて浩樹さんはそのまま背負い投げで私を地面に叩き伏せた。
とっさにその昔体育の授業で習った柔道の受け身、掴まれて無い腕を床に叩きつけ衝撃を緩和させる。

「ッ…ハッ…！」

が、背中からの衝撃は強く、肺の空気を一度に体外に絞り出される。
多分受け身を取らなかったら、意識を失ってた。

両脚を振り子にしてヘッドスプリングの要領で立ち上がり、そのまま数歩下がって呼吸を整える。

対する浩樹さんは全く呼吸を乱して無い。
たった数度、時間にして大体４５秒くらい。私と目の前の相手との力量差ははっきりした。まあこの数ヶ月何もしなかったのだから当たり前なんだけど

「ハッ…！」

絶望的な差ではない。
今の短時間でわかった事。

とりあえずこの世界は私が居た世界とはけっこう人間の体が丈夫って事。

今の衝撃だって下手したら意識を奪われるじゃ済まなかったかもだし

そう、つまり枷が外れたような物。
だったらもう少しむちゃくちゃな動きにチャレンジしてもいいかもしれない。
という事で私は浩樹さんの側頭部目掛けて渾身の力を込めて回し蹴りを放つ。当たれば多分一撃で昏倒させられる勢いで。

だけどソレを当然のごとくそれを屈んで回避する。

狙い通りの展開に口元が歪む。

勢いは殺さない。むしろそのまま遠心力が加わり私の体の回転は加速する。

目前にはしまったと表情を変える浩樹さん。
だけどもう遅い。

軸脚で軽く跳躍するように地面を蹴り飛ばし私の体は回転しながら宙に躍り出る。

回避からの反撃より早く独楽のような回転をして、私は空中にて振り向きざまに軸だった脚を彼の胴体に叩き込んでやった。

「ッ…ク…」

苦悶の声と同時に今度は浩樹さんが体を横に飛ばされる。

もう叩き込むのは今しか無い。

空中で蹴り飛ばした姿勢を回りながら立て直し宙から着地と同時に再び距離を詰める。

もうすでに起き上がりかけてる彼の前で軽く跳躍し右足を同時に高く振り上げる。
狙うは脳天直撃の踵落とし、全身のバネを使って体を縦に回転させさながら鉄槌のごとく振り下ろす。

「チッ…！」

とっさの反応だろうか防御の姿勢を取るがそんな半端な立ち上がりで防げるほど私の体重のかかった一撃は軽く無い。

そのまま踵に人体を蹴り飛ばした衝撃が伝わる――――事は無か

った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＨＩＲＯＫＩ

正直驚いた。

最初の投げ飛ばしで早々に決着がついたと油断したのがそもそもの俺の過ちだった。

『焦れば人の動きは単調になる。』

カータは正にそんな状態だと勝手にタカをくくり。

彼女の予想外過ぎる動きに全く反応できなかった。

つまり、『焦っていた』のは俺だったらしい。

あの状況で何の策も無しにあの子が動く筈が無い（まあよく知らない子だけど）。

思考が単純になってたのは俺だったというオチ。

反射的に手をついて受け身を取り

転がりながら衝撃を緩和しその余った勢いで立ち上がろうとした時には既に遅し。

俺の顔より高く跳躍した彼女の踵が俺の頭目掛けて振り下ろされる。

…が、俺の頭に衝撃が走る事は無く。

代わりに虚空を過ぎる踵落としで切られた空気による風が当たるだけだった。

「え…？」

呆けたようなカータの声があがる。
それはこっちのセリフだが、ソレを言う前にその無防備な腹に全力とまではいかないが、俺の拳が食い込む。

「う…ぁ…。」

多分表情からしてあの子は訳の解らぬまま、勝負を決せられたんじゃないだろうか？

「…負けた…？」

仰向けに倒れたまましばらく天井を見つめていたカータはポツリと呟く。

「そうじゃな、浩樹の拳が綺麗に入った。アイツは加減をしたようだが、勝敗をつけるには充分だ。」

「……立てるか？」

俺の代わりにじいちゃんが答えてしまった為に、かける言葉が見つからなかったから倒れたカータに手を差し伸べた。

「…大丈夫。立てますから。」

カータは大の字に倒れたまま首を振るとゆっくりと立ち上がる。

「…負けちゃった。」

思った以上に沈むカータ。
あまり気にしないと思ったけど、案外子供っぽくて面白い。
…なんてのは沈む女の子にかけられるほど俺はすかぽんたんじゃあない。

「まあブランクが有るんだろ?仕方ないさ。俺は毎日鍛錬してるし、むしろ勝たれたら俺の立場が無い。」

「……。そうですね…。」

カータは何がおかしいのか、俺の返事に目をしばたかせるとクスクス笑った。
…よく解らんが元気になったのなら何よりだ。

「…じゃあ私は帰ります。…この胴着洗って――」

プルルルル、プルルルル

カータの言葉に被さるように電話の子機が着信音を響かせた。
恐らくはやてだろう。
書き置きを見て連絡をくれたと考える。

――カータが買い物袋を置きに行った時は本当に驚いた。
はやてに義理の妹が居るとは前から聞いていたが、外国人の女の子

だとは思いもよらなかった。
一応携帯の番号は公開していたが、俺が出れる保証も無いしせっかくの機会だから、という事で家の番号を書き残しておいた。
…まあ、目的は別に有るんだが。
「浩樹、あの嬢ちゃんの家からだろ、出てやれ。」
「解ってる…もしもし。」
じいちゃんの促す通りに子機の明滅するボタンを押して着信を受ける。
電話の相手は
『もしもし…そちらにうちの子がお世話になってるって書き置きが有ったんですけど…。』
独特の関西系の訛り、声色、間違い無い。
はやてだ。
…ちなみになんでこんなにはやてが他人行儀なのかと言えば。
答えは単純。俺がカータに「誰の家に行くのか」明記させずに電話番号だけ書かせたからだ。
たまにはあの子狸をからかってやらなきゃな。
「そうだ、お前のとこの娘は預かった。返して欲しかったら――」
「浩樹くん、流石に其のネタはお約束過ぎてナンセンスやで。」

ありゃ…驚かれる前に冷静に対応されちまった。

「…って、あれ？カータがお世話になってるって浩樹くんのとこなん？」

「ちょっとな、いろいろあって、俺んちで茶を飲んでる。」

「末永くよろしくお願いします。」

「待てコラ狸。どうしてそうなる。」

「ええやないか、カータみたいな美人さんそうおらへんでー」

「残念だな、そういう対象じゃあ見れない。…ほら、カータ、代わる。」

このままだと話が泥沼になる事は目に見えていたからとりあえずカータに変わる事にした。

「代わったよ。うん、解った。…わかってる、気をつけるね。はーい。…じゃあそろそろ私は帰ります。」

どうやらお帰りの命令がはやてから下りたらしい。まあ別に引き止める理由もないし。

「悪いな、付き合ってもらって。」

「いいえ、私も楽しかったので。…機会があったら、次は負けませんから。」

「それはこっちの台詞だ。一つ下に引けを取るつもりは、無いから

な。」

…意外とカータの奴も俺と同類なのかもしれない。…まあ誘ってよかった。

送って行くと提案したが、別に距離も無いからと見事にフられてしまった。

おーいはやて、仮に俺にその気があったらここで玉砕してたぞー

「んじゃ、気をつけてな。」

「それは危ない人に気をつけろってこと?それとも危ない人を返り討ちに合わせる時に加減に気をつけろってこと?」

「前者だろ、どう考えたって。いくら腕っ節があっても女の子が一人歩きするには一応危ない時刻だ。」

「ハーイ。キヲツケマース」

そう言ってカータは小動物のようにトトトと走って行ってしまった。

人の忠告を某スノーボーダーみたいな態度で返しやがって。お兄さんの忠告を無碍にするような美少女はアレだ。一度変態か何かに誘拐されて死ぬほど怖い目に見ればいいんだ。

「…変わった娘だったな。」

カータが曲がり角に消えてポツリと隣で一緒に見送っていたじいちゃんが呟いた。

「嗚呼、義理とはいえあのはやての妹だしな、変わってるのも無理は――――」

「そうではない、風貌の割にやけに落ち着いた戦闘態勢、それでいて普段の様子はどこか危なげな…崩壊寸前の塔に似ているソレ。…大方お前もそのような事を思っていたのではないか？」

「……そういうことね。」

確かに腑に落ちない感覚は多々あった。じいちゃんみたいにそこまで明確な違和感を感じた訳じゃあなかったけど。

「なあじいちゃん。」

「なんだ？」

「カータが俺に最後の最後で決定的な一撃を外したの、アレ。じいちゃんにはどういう風に見えた？」

俺が一番引っかかってるいる点。あの一撃さえ外さなければ天井を見上げていたのは俺のほうだった筈。

「どうもこうも、あの娘が自分の体を解っていなかった。としか見えなんだな。」

「…だよなぁ。」

そう、まるでカータは「自分の体をうまく扱えていない」ように俺は見えた。

もちろん、タダのブランクだと言われれば納得できる違和感だし、アレもしばらくやっていなかった故のちょっとした失敗だ。と言われればもちろん納得する。…要するにただの杞憂に近い疑問点な訳。

…まああのはやてが良い子だと言うんだ。俺もそうだと思うし、なにより俺が抱く疑問は本当に瑣末な事だ。友人として付き合うのに何か問題がある訳でも無し。

「じゃあじいちゃん、俺ちょっとシャワー浴びてくるよ。晩飯すぐ作るからさ、待っててくれ。」

「ああ。」

まあ、あれで勝敗が決まったとは思ってないし、決着はまたの機会に。

コラボ企画スペシャル外伝　拳視（後書き）

いかがでしたでしょうか。コラボは二度目なんですが、誰かの作品のキャラクターを再現するのは難しいです。

さてさて、ここでごまだれさんの作品紹介とさせていただきます

とある封魔の歯車破壊
主人公、高坂浩樹には右手で触れると機械系統のものを停止してしまう能力の持ち主。
そんな彼が幼馴染のなのはとひょんなことから魔法に触れます
なのはとお互いに力の無さを励ましあいながら浩樹は降りかかる次々の難題に鍛錬により培った武術とほんの少しの異能のちからで立ち向かいます

以上、宣伝でした。
次回投稿でまたお会いしましょう。

ＰＳ．３／７現在にて本編最新話完成度およそ５５％

外伝　姉妹（前書き）

今回は、外伝です。
はやてと主人公の出会いの話です。
本編の進行度合いに沿って少しずつ解禁してきます
短めですが、本編で語るといろいろとめんどくさいのでちょこちょこ外伝として綴っていきます

外伝　姉妹

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

１２月。
世間ではクリスマスとかいう催しもんに忙しなく動き回る時期。そんな中私は、一人寂しい朝ご飯を済ませた後、お洗濯を取り込んでいた。

「ええお天気やあ、これでクリスマスプレゼントかなんか貰えたりしたら最高なんやけど」

そんな妄想に近い発言と共に

ドサッ

そんな、何かが落ちてきたようなそんな音が聞こえた。

「な、なんや…新手のスパイ…？ハッ、まさか私の私生活を誰かに…ってそんな訳あらへんか。」

誰もツッコミを入れてくれないから自分でツッコミを入れる。

まあ、家主として見に行かぬ訳には行かない。
ゆっくりと庭に出るとびっくりする者が居た。

「女の…子…？」

庭には私と同い年くらいの綺麗な長い銀色の髪をした女の子がボロ

ボロの大人用の服を纏って倒れていた。
まるで本人が縮まったみたいな、そんな光景だった。

「大丈夫ですかー…？
い、石田先生に電話せな…」

――――――

「命に別状は無いけど、酷く衰弱してるわね…。
はやてちゃんが見つけなかったら危なかったかも。」

石田先生に電話を入れると先生は直ぐにかけつけてくれた。

「先生、ありがとうございます。」

ぺこりと頭を下げる。
この先生には本当に頭が上がらない。

「気にしないで、それにしても、彼女…随分と変な恰好だけど本当に何も知らないの？」
石田先生は静かに寝息を立てる女の子に視線を移すと、疑わしげに私を見つめた。

「私にもお洗濯の最中やったし…何が何だか…」

そんな私の言葉と共に女の子はゆっくりと目を覚ましてフラリと起き上がった。

「気がついた？気分はどう？」

医者としての条件反射なのか石田先生は目を覚ました女の子にすぐに声をかける。

「……」

だけど女の子は先生を意にも介さしていない。それどころか視線に意思が感じられない。

「ちょっと、あなた大丈夫？」

石田先生が肩を揺らすが全く反応は無い。
それどころか聞こえているのかすら怪しい。

女の子は自分の体を生気の無い目で眺め回す。

「ァ…ぁ…。」

声にならない声を上げながら、立ち上がる。
異様とも言える雰囲気に私と先生は呆然とするしかなかった。

窓の前に立ち、銀の綺麗な長い髪がお日様の光に晒されキラキラ反射して輝く。
だがそんな綺麗な雰囲気は次の瞬間吹き飛んだ

「■■――■■■■■―■■■■■■■■！！！」

不意に片手で自分の顔を覆うと言葉にならない絶叫を上げ始めた。

それは端から見れば少女の悲痛な叫びではあるが、聞こえは獣の雄叫びだった。

まるで自分自身の心が何かに引き裂かれ、その痛みに悶えているような
そんな女の子の絶叫。

「――――――」

叫びが終わると、不意にふらりと体を崩してそのまま女の子は床に倒れてしまった。
先ほどまでの絶叫が嘘みたいに静まり返った。

「だ、大丈夫!?
これは、少し重症かも…」

我に帰った石田先生が慌てて女の子を抱き起こす。先ほどまで痛々しい悲痛な叫びをあげていたとは思えないほど安らかな寝顔だ。

「何がですか…?」

重症という言葉に思わずドキリとしてしまう。

「体は衰弱してたけど、確かに健康だった。でも、心が、壊れちゃってる…。」

静かに寝息を立てて眠る女の子を見ながら先生は悔しそうに呟いた。

「先生、この子私が面倒みてもええですか？」

私は気がつくとそんな事を口走ったいた。

先生は案の定ポカンとしている。

「病院の狭くて堅苦しい場所に居るより、ここでゆっくり私と過ごした方がいい気がするんです。」

我ながら随分と正論だとは思うんやけど、どうしてこんな事までしてるのかわからない。

私としても、一緒に暮らす人間が欲しいんやろか…。

「…そうね、はやてちゃんも一人で居るより、この子と居るほうが…多少は寂しくないかも…」

思いの外先生はあっさりとＯＫサインを出してくれた。

「ありがとうございます。」

思わず顔が綻ぶ、妹ができたみたいでとても嬉しい。

「これからよろしくなあ。」

静かに眠る子の頭を優しく撫でてあげると、女の子はゆっくりと寝返りをうった。

これが、私八神はやてと、後々私の妹を名乗る八神カータとの最初の出会いだった。

外伝　姉妹（後書き）

いかがでしたか？

主人公のギャップに、は？とか思った方もいるのでは、と思います。

こうなった理由も後々話しますのでどうぞお楽しみに

外伝　言葉（前書き）

今回は外伝です、というより解禁するとかほざいておいて放置しておいてすみませんでした。

しばらく外伝の過去話が続きます。予定では後2，3話くらい。
もう少し少ないかな?それとも多いかな?
もしかしたら次でいきなり本編更新するかも…

まあそれくらいです。

ではどうぞ

外伝　言葉

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

あの女の子が来てから数日が経過した。相変わらず意思というものを見せてくれへんけど、この前みたいに突然叫びだすなんてことはアレ以来起こらなかった。

あの子とは毎日会話してるけど、まるでお人形さんに話しかけてるみたいやった。

でも、この子はキチンと生きてる。少し普通と違うだけや、最近私が話しかけてるときに僅かに見せる反応が見極められるようになった。

なにより、誰かと一緒に生活するということがうれしくてたまらなかった。今まではいっつも一人やったけど今はこの子のお世話で随分と充実している。

一番大変なのはご飯のときやった。最初にご飯を作ってあげたとき、あまりにも食べようという意思を見せてくれへんかったから口の中に無理やりねじこんだのを今でも覚えている。

そんな生活が大体二週間ほどたったころだった。

いつもどおり朝ご飯の支度をしている時。

ギシッ…

自分以外が立てるはずもない音が部屋に響いた。不思議に思って振

り向くと、今の入り口にこっちを見つめるあの子が立っていた。
初めてだろうか、あの子が自分の意思で行動をしたのは

「おはよう。」

思わずうれしくなって顔が綻ぶのが分かる。火をつけたのも忘れて目の前まで行って顔を覗き込んだ。
返事は無かった。それどころか表情はまだ感情というものが見られなかった。

まあ仕方ない、つい先日まで人形みたいだった人間が突然動き回って言葉をペラペラ喋りだすのもまた不自然な話だと思う。

数秒視線をあわせていると、後ろでコトコトという音が聞こえた。

「あ、忘れとった。」

車椅子を操作して、後ろで危険信号を発している火を止める。
危ない危ない。とりあえずはもう支度は終わった、と一息つくと隣にあの子がついてきていることに気がついた。

なんだ、まだ表にでていていないだけで意思はしっかり持っている。
安心した。

自分の行動をするようになってくれたのか私が作ったご飯をゆっくりながらもきちんと食べてくれた。
やっぱりうれしいなぁ、こういうの。

その後も、あの子はしきりに私の後についてきた。
その状況を一言で表すと。雛鳥が親鳥についてくる感覚。

時折私の代わりに車椅子を押してくれたりもする。

ある日、私は久しぶりに図書館に本でも借りに行くことにした。このあいだまであの子の面倒で忙しかったから、ずっと行けへんかったから、今日は沢山借りることにする。

私が玄関に手をかけたその時

ギュッ…

何かが横から私の服の袖を掴んだ。

「……。」

そこには相変わらずの無表情のあの子がジッっと私を見つめていた。

「…今からお出かけするんやけど、君も来る？図書館なんて退屈な場所やけど。」

女の子は答えない、その代わりに私の代わりにドアを開けてくれた。どうやら、一緒に行きたいという意思表示らしい。

そういえば、この子とお出かけするのは初めてや。外に出ればもう少しこの子に刺激が与えられるかもしれへん。

この私の楽天的な思考はこの子に予想外の刺激を与えることになると思い知ったのはそれから数分後の話…。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「す、すみません。」

「すみませんじゃねえよ、人にぶつかっておいて謝って済むと思ってんのか？」

現在、絶賛怖いお兄さん達に絡まれ中の私八神はやて、事の顛末を話すと、私は何もしてへん。
強いて言うなら向こうがぶつかりに来たという事や。

私みたいなのが一人で車椅子で外に出歩くと時々こういう人たちがこういう事をしてくる。
いつもは適当に謝って退散してもらうんやけど、今回は中々行ってくれない。

「あん？なんだこのガキ…？」

不意に私の前に立ち塞がるようにあの子が私とお兄さん達の間に立った。
その子の表情に感情は無いように感じたけど、お兄さん達は明らかに怒ったような素振りを見せている。

「駄目やて、こっちおいで。」

私が背中の裾を引っ張るが意にも介してくれない。
まるで一つの事を目的に動くロボットみたいに。

「どけ糞ガキ！ぶち殺すぞ！」

お兄さんの一人が女の子を跳ね飛ばそうと肩に掴みかかる。

「！…やめ――」

て。と言い切る前に私の言葉は途切れて目の前の光景に唖然とした。他のお兄さんもそうらしい。

女の子が掴みかかってきた男の人の鳩尾に綺麗なパンチを決め込んだんやから。

「グェ…？」

女の子はそのまま屈みこんだ男の人の顔面に容赦なく、まるで映画のアクションみたいな動きで回し蹴りを叩き込んだ。

「グハッ…」

……

女の子は銀の長い髪を揺らしながら相変わらずの無表情で他のお兄さんに歩み寄る。その様子は人の形をしたロボットそのものだった。定められた目的という名のプログラムの通りに動くその様は、異様だった。

「ヒッ…！？」

その悲鳴とともに男の人たち倒れた人を引っ張って逃げていった。

「……。」

女の子は正に、『逃がすか』といわんばかりに駆けだそうとした。

「あかんて！もうあかん。」

その服を思いっきり掴む。流石にこちらに振り返ってくれた。
その頭をコツンとゲンコツで叩いてやった。

「駄目やで、いきなり人様を殴ったりしたら、あれじゃ君も悪い人と変わらへんで？」

思いっきり睨みつける。こういうのはしっかり言っておかんとこの子のためになれへん。
すると、予想外すぎる反応が返ってきた。

「ご…め…な…さい」

「！？」

さすがの私も驚いた。漫画やアニメの世界ならこういった子は人格が復活して元気になる。というのが王道だ。だが、これは現実だ。ましてやこの子の看病したんは私…私にそんな凄い力なんてあらへんし、だからこの子は最悪一生このままっていう覚悟もあったんやけど…

「……。」

再び黙りこんでしまった。いやそれ以上を望むのは罰当たりってもんや。

「でも、助けてくれてありがとうな。…君は強いなぁ…」

などと言いながら優しく頭を撫でてやる。光の無い瞳が私を見つめる。

「行こか。図書館はもうちょっと先や。」

その言葉で理解してくれたのかあの子はそのまま私の車椅子を押し始めた。

いろいろ有りすぎ日やったし、最初の言葉が「ごめんなさい」だったのが不満やけど、それでもこの子が一歩でも進んでくれたのはたまらなくうれしかった。

外伝　言葉（後書き）

以上、外伝でした。本編にて、はやてがカータに強いから安心。

と言ってたのはこの為です。

と、別に書くことも無いので今回はこれで

では、次回投稿にてまたお会いしましょう

外伝　意思（前書き）

どうも、作者です。

ああ…実況動画を間違って投稿前に消しちまった…
データ復旧はできねえし…

というわけで外伝です。連続投稿で本編も上げますので其方のほうもよろしくお願いします

外伝　意思

ＳＩＤＥ　Ｅ…ｍ……

ある時、私は死んだ。それはまたどうしようもないくらいに死んだ。死期っていうのが誰にも平等に与えられていたというのなら私の死期は正にそれだったんだなって痛感するくらい見事な交通事故死だった。

ちなみに、私こと…誰だったっけ？…女性Ａはもうしばらくで離れることになるであろう自分の街を自転車でまわりながら瞳に刻みつけているなかスリップしたダンプカーに思いっきり巻き込まれて１８年と少しの生涯を終えたのでした。

意識の塊だけになったのが今の私。今じゃ、自分の死んだときの事以外思い出せない。

そりゃ頑張れば記憶を掘り起こせるが、そんなことをする気が起きないし、する意味も感じられなかった。

この意識

わたし

だってもうすこしで消える。そう考えると何もしたいとは思わなかった。

しばらく何も無い真っ暗な空間を漂ったと思う。これが死後の世界なのかな。

そう考えている自分が以外にも落ち着き払っている事にようやく気がついた。

生き物というのはあれだけ死を怖がる物だというのに私は、もう死んでいるからか、はたまた本心では死なんてなんとも思っていなかったのか。

恐怖のきの字も感情として湧き上がらなかった。

カコン

不意に何か音がした。もはや音を聞くという器官を持たない私に聞こえたということはそれは音じゃないんだろうけど、とにかく音がした。

音源に振り向くと、一筋の光が見える。

どうやらこの空間に孔が開いたみたいだ。あの音はそれを告げる警鐘だったらしい。

ということはハイってはいけない。という意味なのだ。

にもかかわらず、私は興味本位で近づいた。

どうせ死んだのだ、これ以上最悪な事は有りえない。有りうるはずがない。

小さく開いた孔に触れたその瞬間。私はまるで掃除機にでもすいこまれるみたいにズルリと小さな孔に吸い込まれていってしまった。

ここで私の意識は完全に途切れる。

切れるというより

コワサレルニチカカッタ

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

SIDE　HAYATE

言葉を喋るようになったあの子を石田先生に会わせた時、先生は酷く驚いていた。
どうやら先生も私と同じようなことをかんがえていたらしい。
あの子が自分の意思を持って行動するようになるなんて誰が想像できただろうか

「はやてちゃん、この子、名前はなんていうの？」

「まだそんなに意思疎通はしてないです。この子がちゃんと名乗るまで、キチンと待ってよう思ってます。」

そう先生に返して、あの子に笑いかけると此方に向いた。表情はほとんど変わってへんけど私の服の裾を弱弱しく握ってきた。

「はやてちゃん、お姉ちゃんみたいね。」

そういう先生の顔は楽しげに笑っていた。私も自然に笑みがこぼれる。

「じゃあ先生。今日もありがとうございます。ほら、君もありがとうってせな」

車椅子に座りながら視線を投げる。その意を解したのか先生に向かって小さくお辞儀をした。
ホント、この子の回復スピードは異常とも言える速さだった。
でもそれを不思議がるのも恐怖を抱くのもこの子に失礼やし、なにより人がまともに治っていくのは私個人としてもうれしい。
今は静かにこの子がしっかり名乗れるまで待っていることにしている。

「今日は晩御飯何にする？」

「な…ん…でも…」

私の言葉に答えようと唇が震える。この子自身にまだ欲が無いのか、はたまた本当に希望が無いだけなのかそれだけ言うとまた少女は沈黙した。

「せやなあ、まだ寒いし今日はおでんにしよか」

そう言って振り向くとあの子小さくコクリと頷いた。

買い物を終えて帰宅すると大分日は沈んでいた。買ってきた荷物を置いて冷蔵庫にしまっていく

「ちょっとそれ取ってくれへん？……あれ…？」

近くに居たはずのあの子はいつの間にか居なかった。どこだと探す必要はなかった、何故ならソファの上で小さい動物のように丸まって眠っていたから。

「もう、風邪ひくで？」

気持ち良さそうに眠っている所に二階から毛布を持ってきて被せてやる。毛布が呼吸に合わせて小さく上下する。いつもは全く表情が無いのに、寝顔はどこにでもいる普通の女の子にしか見えなかった。コレは起こすというのも無粋というもんや。

「んぅ…。」

小さく寝返りをうつ。その姿は本当に普通の女の子。だけど

「かあ…さん…」

その呟きのような寝言は明らかに普通ではなかった。意味だとかそういうのではなくてもっとこう…別次元の…

「仮にご家族がおっても、ここは君の第二の家やからな…ゆっくりお休みな…？」

外伝　意思（後書き）

このページに後書きはありません

外伝　少年の苦悩（前書き）

今回は次の話数のための大事な伏線みたいな話なのですが、既に９０％以上書きあがってるんですよね…。

まあ、突然話が持ち上がるよりはマシかなと思うので、投稿します。

では、外伝です。お楽しみください。

外伝　少年の苦悩

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

冬になった。僕が夏の次に嫌いな冬が来た。何が嫌いって布団から出づらくなるのが一番憂鬱になる。

僕の物語が終わってからもう半年以上が経過した。そんなことなど当に忘れていたころに僕の体にある異変がおき始めた。

アレは季節が変わり始めて、最初に寒くなり始めた日の朝ごはんの出来事。

がちゃーん！

朝ごはんの最中僕は唐突にお茶碗を持つ手の力を失ってお茶碗を床に落し割ってしまった事がそもそもの始まりだったんだと思う。

「概貴！…大丈夫か？怪我はないか？」

一緒に食べていたおじいちゃんとおばあちゃんが慌てて破片を拾いながら聞いてくる。幸い、飛び散った破片は僕の方とは見当違いのほうに飛んでいったし、そこまで大事には至ってない。

「う、うん。…ごめんなさいお茶碗割っちゃって。ちょっとボウっとしてたみたい。」

僕自身も困惑しながら、慌てて二人に笑いかける。もちろん呆けてたわけじゃない。突然、突然の体力が全部抜け落ちてしまったかのように、一瞬力が入らなくなった。

「いいんだよ。茶碗は替えが効く。だけど、お前は替えが効くわけじゃない大切な孫だからね。」

「あはは、ありがとうおばあちゃん。」

そんな僕が浮かべる笑顔とは裏腹に内心僕は非常に困惑していた。自分の感覚だからいえるけど、これは多分病気とかそういうものではない。もっと別の…何か。

それからというもの、僕はちょくちょく物を取り落とすようになった。

学校では親友たちに絶対気づかれないよう細心の注意を払ってたから、多分気づかれて無い。

極めつけは１１月の終わり頃、冬がそろそろキツクなって来た頃…

僕はついに一部の物に触れる事ができなくなった。

幸い、触れる事ができなくなったのは廊下に飾ってある自分の手のひらよりちょっと大きいよくわからない形の置物で、生活に支障は無い。それも素手でなければ問題は無さそうだからなにかしら間接的に触れれば事は済んだ。でも、触れられない物はどんどん増えていく。家の片隅の小さな窓や、教室の一番綺麗な雑巾、クラスの前にある水道場の一番左の蛇口。

僕自身、自分の体に起きている異変がだんだん深刻になっているのが解ってきただけに、たまに怖くて夜が眠れない事もあった。そのうち、僕はこの布団にも潜れなくなるのかな?そのうち、僕は人にも触れる事ができなくなるのかな?そのうち僕は…彼女にも触れる

事ができなく…なっちゃうのかな…？

考えて何回か一人で泣いたこともある。でも、救いの偶然が来たのも唐突だった。

本当に偶然だったと思う。まさか廊下で滑ったときにたまたま置物に手が当たってそのまま掴む事ができるだなんて、思いもしなかったから。

だから、その埃がかぶった置物を自分が掴めているうちにこっそり部屋まで持っていった。

部屋に入るとあの急激に力が抜ける感覚と一緒にまた置物に触れなくなってしまった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「できない…」

アレから三日、日付は１２／２。数日間いろいろな触り方で触ろうとしたけど、やっぱり素手では触れない。

「どうやって触ったんだろう。」

あの時は完全に怪我の巧妙というやつだし。

「確か…こう…ズルッって滑って…バランス崩して…」

あの時のことを正確に思い出そうと脳内でシュミレートする。不慮の事故だったのはまず間違いない。

いつもはここで行き詰るが、僕はここである結論にたどり着いた。

「…無意識…？」

無意識…つまりあの時の僕はいつもは触れないこの物体に触ろうとしていなかったということと同義になる。

「よ…よし。」

出来るかどうかわからないけど、これで前に進むというのなら儲け物だ。なるべく意識を集中させる。そしてなるだけ目の前の物体に触ろうとするのではなく、すり抜けてやろうと考える。

そう、つまり真逆の意思を持ちながら物体に触ろうとする。

ゆっくり手のひらを近づける。置物を手が包み込む。後は指を握るように閉じるだけ。

「すり抜ける。すり抜ける。」

答えにたどり着けることを信じて僕は指を、閉じた――――――――――

指はそのまま置物に近づきいつもの通り、そこに何も無いがの如くするりと通り抜け――る事はなく、当然のように僕は置物を握る事ができた。

「…でき、た…！」

やったーと、僕は久しぶりにはしゃぎながら部屋を飛び跳ねた。と、あんまりはしゃいだ物だから

「概貴…！少しうるさいぞ。夜中なんだからもう少しおとなしくし

てなさい。」

部屋ドアの向こうに居るおじいちゃんに扉越しで怒られてしまった。

…何はともあれ、僕のこの考えが間違ってはなかった事に違いは無い。

ここで湧き上がった疑問はただひとつ

『どうして僕は今まで触れる事ができない物があったのか。』

それも対象は殆どが日常生活に関係の無い物ばかり。

もしかして

「終わった僕の物語と、何か関係が、あるのかな。」

そう、今の僕の始まりとも言える。あの奇妙な衝撃、あれから何も起きてはいないけど、僕のこの体の異常は間違い無くアレが関係してる。

その時、僕のなかで何かが閃いた。

「これが…僕の…」

チカラ…？

普通じゃ持ち得ない…僕の…

でもそうなると、僕は…

「今はそれを考えてる時じゃないよね」

そうだ、これでカータちゃんの力にきっとなれる。

…まだコレがなんなのか僕にはわからないけど、きっと時が来れば、使うべきときにそれが解るはずだ。

その時だった。

ゾクッ

「!?…」

言い様の無い悪寒が僕の背中を貫いた。何か大きな物が何かを壊したような、そんな具体的な不安感。

「カータ、ちゃん…。」

僕は居てもたっても居られなくなって、部屋から飛び出して、気がついたら受話器を上げて電話をかけていた。

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル…

『ハイ、八神です。』

「もしもし…?カータ…ちゃん?」

聞こえてきたのは、確かに僕が身を案じた女の子の声だったけど、確認せずにはいられなかった。

『どうしたの…?珍しいね。この時間に電話かけてくるなんて。』

「ううん、居るなら、いいんだ。ちょっと悪い予感がして不安にな

って…。」

自分の本心を受話器に伝えながら、僕は心の中で大きく安心のため息をついた。…すると、向こうは数秒の無言が流れる。疑問に思って声を上げようとすると、受話器から少し早口で彼女の声が流れた。

『そ、そうなんだ！じゃ、じゃあ私お姉ちゃんのお手伝いで忙しいから切るね！また明日！』

「え…？カータちゃん？」

ガチャン。

言い終わったと思えば、一方的に切られちゃった。まあ、カータちゃんの無事がわかればよかったから、僕の用件は済んでるんだけど、どうしちゃったんだろう？

と、いつまで考えても解らない疑問は胸の隅に片付け、僕自身の力について思いを馳せた。

考え過ぎたせいで、中々眠れなかったせいで、翌日危うく寝坊しそうになりました。おばあちゃん、起こしてくれてありがとう…。

外伝　少年の苦悩（後書き）

とりあえず簡単なフラグだけばら撒かせてもらいました。

恐らくコイツを投稿して間もなく最新話が投稿できると思います。

遅くなって申し訳ないです…。

第零話　プロローグ

唐突なんだけど。
最近、私は悩んでいた。

あ、自己紹介がまだでした。

私、八神カータ。８歳。

外国人みたいな名前だけど、中身は日本人です。

ちょっと私はいろいろあって外国人みたいな姿になってしまったんです。

悩みってのはそれじゃなく、私は本当はこの世界の人じゃない…と、思います。

思うってのは私自身信じたくないから…。

もともと私は、ごく普通の女子高生。正確には大学受験を無事終えて、４月から華の女子大生…だったんですが…

不幸な事に私は交通事故で、多分…死んだんだと思う。
多分ってのは、凄く、痛かったから。

もう、この先味わう事が無いくらい、悲しかったから。

それで、目が覚めたら、私は何故か外国人みたいに髪の毛が銀色に

なってて、背丈が小さくなってました…。

たまたまお姉ちゃん…はやてが私を見つけてくれて、今に至ってます。

信じられます？

いいです、信じてもらえなくても、はやてにも話していません。

そしてはやては何故か詮索しません。

だから、私は余計に悩んでいます。

見てくれは小さな女の子ですが、中身は立派な女なんです。

だから、はやてが私が悩んでいるのを知っていて悩んでいるのもなんとなく分かります。

でも、話したって解決する訳がありません。

だって、もう

私は元の世界に戻れっこないんだから。

だから、私はせめて姉になってくれた、はやての優しさと愛情に答えるために

可愛い妹になってあげなくてはと、謝罪の代わりに目一杯甘えています。

そう、生きる意味が分からなくなってしまったから。
せめて、姉と二人で幸せに暮らそうと少しでも努力する事を

生きる意味にするために

第一話　出会い（前書き）

おはよーございまーす。

なのはらを空気にしたくて書き始めたこの小説。

ふはは、どうだ、読者よこの発想はなかっただろう。

そしてなのはにする意味も無いだろう。

あっはっｈ…すみません、調子乗りましたごめんなさい。

と、とりあえず、美少女主人公が書きたくて始めちゃいました。

っていうかはやての妹が作りたかった。

後悔はしてるが、反省はしてない！

え、逆？

気にしたら負ｋ

第一話　出会い

ある日の休日。

僕は突然、世界の異変に気がついた。

正確には、僕に対しての異変なんだけど…

それはいいとして、僕の名前は鳥宮概貴（とりのみやがいき）、８歳。

唐突に、両親を事故で亡くしました。

それを知った時、僕は何かが崩れたのを感じました。

物語が死んだ音。

僕は何かの主人公だったらしいんです。

でも、それも終わり。神様が僕を綴るのを止めてしまったから。

だから僕はただの不幸な子供に成り下がった。

幸い、お金はたくさん有る。お父さんとお母さんは僕のためにたくさんのお金を残してくれた。

僕はそのお金でうちを出た。

引っ越しをした。

新しく生活を始めたかったからだ。

街はおじいちゃん、おばあちゃんが住んでいる隣町の海鳴という町。

小学校は海鳴小学校という近くの市立の学校に通う事にしました。

【※学校に関しては、完全な二次創作です。ご了承を】

さっき不幸と書いたけど、僕はまだまだマシな部類。
お父さん達は死んじゃったけど、おじいちゃん達は僕を可愛がってくれます。

でも、僕は、何かを悟ったかのように、今までのように
はしゃいだり、笑ったり、泣いたり、できなく、なりました。

よく、わかりません。

これが…【大人】なんでしょうか。

とにかく、僕は随分と冷めた視点でこの海鳴小学校に転入してきました。

そこで、僕は多分、運命だったんだと思う。
僕は彼女を見つけました。

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

「ん、ふあ、あ～…」

差し込む朝日に否応なしに、眠りからの覚醒を迫られる
小さく伸びをしながら、あくびを同時にする。

「朝…」

片手で目をこすりながら寝ぼけたような声を上げて、私こと八神カータは朝を迎えた。

「おはよう。」

「おはよう…お姉ちゃん。」

一階の今には車椅子に乗りながら器用に料理を終えた少女、つまり私のお姉ちゃん。八神はやてがにっこりと笑って挨拶をしてきた。私も笑いながら寝ぼけたまま挨拶を返す。

「寝癖が凄いなあ、おいで?直したげる。」

んむ…などと寝ぼけた返事をしたまま、私はお姉ちゃんの前の椅子に座った。

銀色の腰まである髪の毛を持ってきた櫛で、お姉ちゃんは丁寧にといてくれた。

「ありがと。」

ようやく覚醒した意識で、はっきりとお姉ちゃんにお礼を言う。

「ほら、はよ食べないと遅刻やで?」

お姉ちゃんは何が楽しいのかクスクスと笑いながら私の背中をポン

と叩く

「はあ～い。」

気の無い返事を上げてお姉ちゃんと一緒に朝の食事を取る。

昔は朝は食べれなかったけど、お姉ちゃんが朝食を作ってくれるうちに、食べられるようになった。

正直、元の私よりしっかりしてると思う。

ご飯を食べた後、私は洗面台に向かった。

鏡に映る自分の姿。

前の自分より少し肌が白い。

多分白人だと思う。その白い肌に目立つサファイアみたいな青の瞳をしている。

正直、傍から見たら凄く可愛い。

なんていうか、自分も前の姿はそこそこ自信があった。でも、今の自分を見たら多分裸足で逃げ出すと思う。

ただ、まだ子供なだけに胸は小さい、これは私は少し優越感に浸れただろう。

だけど、なんとなくだけど、僅かに膨らみを感じる。８歳なのに…

末恐ろしい。

「はあ…」

というわけで、私は鏡が苦手だ。

自分の今の姿を見たくないから。

それを知っているから、毎朝お姉ちゃんは私の髪を手入れしてくれる。
だから、これはきちんと乗り越えなくちゃならない。

「じゃあ、行ってきます。」

ランドセルを背負い、見送りに出てくれたお姉ちゃんに向かって言う。

「いってらっしゃい、友達できるといいな。」

お姉ちゃんはそう笑いながら、痛い所をついてきた。

別に人付き合いが苦手ではない。
ただ、周りが私を敬遠するから、私も周りの子に一歩が踏み出せないでいる、まあこんなお人形みたいな女の子だ、当然の反応なんだけど

「うん、じゃあ行ってきます。」

私の通う学校は、市立の海鳴小学校。
少し遠いが私立なんて柄じゃないから、一応校区に入っているこの学校を選んだ。

歩くのも嫌いじゃないからおあつらえ向きではあるし。

学校に着く。教室に入ると先ほどまでいつもより、騒がしかった教室の空気が僅かに沈むのがわかった。

だが、気にしてたら埒があかないので、静かに自分の席に座る。

視線を感じないでも無いが視線を返す訳にもいかない。どうせ、好奇の視線だ。

そうこうしているうちに担任が入ってくる。

「皆さん、おはようございます。」

おはよーございまーす。

などと小学校さながらの風景。

「今日は皆さんに新しい友達が来ます。」

転校生？

どうりで教室が騒がしかった訳だ。

「概貴くん、おいで。」

先生の言葉と共に1人の男の子が入って来た。

名前の特異性とは裏腹に、髪と瞳が日本人らしい黒で、これまた男の子らしい短めのショート。

見た目は少し子供だが、なぜだろうか。私には少し大人に見えてし

まった。

「ご家庭の都合でこの町に引っ越して来ました。みんな、仲良くしてあげてね。」先生の簡単な説明と共に槻貴という少年が名乗りだした。

「鳥宮槻貴です。よろしくお願いします。」

ぺこりと頭を下げる。みんなはそれを称えるようにパチパチと拍手で答えた。

「席は、カータさんの隣を空けておきました。ほら、あそこの女の子よ。」

先生は私の隣の空席を指差した。
槻貴くんは、たたたっと私の隣に座ると屈託の無い笑顔で

「カータちゃん、よろしく。」

などと言ってきた。
いきなりちゃん付け辺り、小学生らしいなと考えながら

「うん、よろしく槻貴くん」

と、彼とは対照的な愛想笑いしか作れない自分に嫌気が差すもなんとか言葉を返した。

ちなみにカータと言うのはこちらで考えた名前。
とある海外のＳＦドラマから抜粋した。

そして休み時間。
私は逃げ出すように教室を後にした。
理由は転校生の質問責めに巻き込まれたくはなかったから。
結局私は、その日1日逃げ惑う1日となってしまった。

「はあ…」

放課後、彼の周りの喧騒は留まる事を知らない。
私は1人階段でうずくまっていた。
吹き抜く風邪が銀の髪を揺らし、夕日髪が反射してきらめいた。

「…帰ろう…。」

なんとか立ち上がり、倦怠感を振り払って、未だ雑踏やまない教室に侵入し、ランドセルを持つと、そのまま私は再び逃げるように下校した。――――――

「お姉ちゃんただいま！」

なるだけ元気に扉を開ける。
完全な空元気だがやらないよりマシという物だ。

「おかえり。学校はどうやった？」

「うん、転校生がね私のクラスに入ってきた。それでね、私の隣が席になった。」

靴を脱いでお姉ちゃんの車椅子を押しながらなんとか明るい話題をひねくり出す。

「それは良かったなあ、お友達になるチャンスやで。それで、男の子？女の子？」

お姉ちゃんは本当に嬉しいのか、飾り気の無い笑顔で笑ってくれた。
お姉ちゃんのこの笑顔が私は大好き。

「男の子。だからちょっと話しかけづらくて…。」

アハハとごまかし笑いをしながらお姉ちゃんから視線を逸らした。

「駄目やで、カータは可愛いんやから、話しかけなもったいない。」

返す言葉も無い。
私は照れたように頭をかいて誤魔化す。

なんとかおかしな空気にならなくて済んだようだ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

SIDE　HAYATE

「お姉ちゃんただいま！」

我が妹が帰ってきた。

いつも通り私は可愛い妹を出迎える。

が、その妹本人は、どこか必死さが感じられた。

ははぁ、何か嫌な事が有ったんやな。

この子は辛い事が有っても、私には決して言わない。

ちょっと悲しいけど、まだ信用無いみたいや。

「おかえり。学校はどうやった？」

「うん、転校生がね私のクラスに入ってきた。それでね、私の隣が席になった。」

だからなるだけこの子がこれ以上落ち込まないような空気を作る。

「それは良かったなあ、お友達になるチャンスやで。それで、男の子？女の子？」

「男の子。だからちょっと話しかけづらくて…。」

アハハとカータは笑った。

なんでもっとポジティブになれへんのやろ。

この子は文句なしに美少女だ。
男だったらちょっと話しかければ誰だってついてくで。

「駄目やで、カータは可愛いんやから、話しかけなもったいない。」

私はちょっと意地悪に笑って、妹を茶化した。

「だって、だってぇ…」

茶化されて拗ねたのか口を尖らせて視線をそらされた。
可愛い所は否定しないんやな…
全く、とんでもない妹を持ってしまったわ。

「拗ねたんか？カータは可愛いなあ。」

だけどこれしきで止まる私やないで。
暗い顔をさせる暇なんあげへん

自分でも分かるくらいに意地悪なニヤニヤ笑いをしながら彼女の銀髪をわしゃわしゃと撫でる。

「もう、お姉ちゃん。髪が乱れる～。」

「それを手入れしとんのは私や、うりうり」

顔を真っ赤にしながら両手をブンブン振り回し怒っているのか嬉しいのかよくわからない反応。

少しだけ、明るくなったわ。

血は繋がって無いけど、カータが寂しく無いようにきちんとお姉ちゃんになったげるからな…
安心してや…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

「わあ、思ったより遅くなっちゃった。」

駆け足で帰る。

きっとおじいちゃんたち心配してるなあ…

そう思うと余計に足に力が入る。
結局クラスの子達は僕をしばらく解放してくれなかった。

だけど、楽しいクラスに成りそうで少し楽しみ。

でも、僕は隣の席の女の子が気になって仕方がなかった。

何故だか凄く避けられてる気がする…ってのも有ったけど、表情はどこか儚げで、何か悩んでるようなそんな感じ。

お父さんたちが死んで、僕の物語が終わっちゃってから、僕は急にそういう事が分かるようになっちゃった。

あんまり嬉しく無いけど。

とにかく、カータって子は何か悩んでるように僕には見えた。
同時に何か使命感が僕をかきたてていた。

そう、物語という僕の世界が音を立てて消えた時みたいに
何か不思議なメッセージを頭の中に書き記されたような、そんな感じ。

つまり、僕はカータちゃんを助けたい。
うん、多分そうだ。

っと、そうこうしているうちに着いたみたい。

「ただいまー。」

元気よく声を出しながら扉を開けた、僕を待ってる人達を安心させるように

うん、とりあえず、カータちゃんと友達になろう。そうしよう。

僕は明日が来ることに少しワクワクしながら、帰宅した。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――――

第一話　出会い（後書き）

いかがでしたでしょうか、第一話

本当はもう少し書きたかったのですが面倒くｓ…ぐだぐだになるかと思って切りました。

Ｅｄｇｅ　ｏｆ　Ａｖｅｎｇｅｒと並列しますので少し更新が遅くなりがちですがご了承を

ではでは、ＧｏｌｄｌＣｈｉｌｄでしたー

第二話　鬱屈（前書き）

二話連続投稿です。

特に書くことがありません

強いて言うなら、感想とか欲しいなあってのが一言。

あはは、流石に厚かましいですよね。

ではでは、本編をどうぞ

第二話　鬱屈

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

朝。
目が、覚め…なかった。

なんて事は無くいつも通り、朝日に覚醒を余儀無くされ私はのそりと起き上がる。

この長い銀髪は何かと不便。

寝る時はどうしていいかわからないし、何よりお風呂の時に洗うのが面倒。

でも、切らないでいるのはこの顔にはロングが似合ってると思っているから。

ぶっちゃけ、まだこの外国人美少女の顔には慣れていない。
お姉ちゃんもよくもまあ順応してくれた物だ。

１人で内心苦笑いを浮かべる。そうこう脳内でいろいろ考えている

うちに意識は冴えてきた。

「お姉ちゃん、おはよう。」

居間に入り、我が姉ににこやかに挨拶をした。

「おはよう、今日は少し早いなあ、どうかしたん?」

お姉ちゃんは少しびっくりしている、見ればまだ調理の最中。
あれ?と首を傾げる。それもその筈。
いつもより１０分以上早い。

「いつもそれくらいならお姉ちゃんも嬉しいんやけどなあ。」

クスクス笑いながら、お姉ちゃんは味噌汁の鍋を覗き込む。

「いつもだって早いよー、お姉ちゃんより遅いけど…」

思わず拗ねたように口を尖らせてしまう。
うーん…なんというか、中身は１８なんだけど、お姉ちゃんのほうが年上に感じる

「そうやな、カータは偉い偉い。」

一通り支度が終わったのか、お姉ちゃんは車椅子を私に近づけるとニコニコ笑いながら頭を撫でてくれた。

多分からかってるのだけど、私はお姉ちゃんのそういう所も好きだ

ったりする。

「ほら、後ろ向いてや、お姉ちゃんが直したげるから」

もはや車椅子の標準装備となったブラシを手に持ちながら私の背中に触れる。

私の髪がもともと綺麗なのか、お姉ちゃんが上手なのか、髪はいつもすぐ綺麗に整う。

「カータは綺麗な髪やねー」

フフ、と羨むでも妬むでも無い、率直な感想をお姉ちゃんは呟く。

「うーん、私はお姉ちゃんみたいな落ち着いた色がいいなー」

だが、こちらは羨望感丸出しの言葉を出す。

微妙に負けた気がするのは気のせいだろうか。

「隣の芝生は青く見えるんやなー。さ、ご飯食べよか。」

お姉ちゃんは思い出したように切り出す。見れば時間もいつもの時間。

早起きは三文の得っていうけど、こういう時間が過ごせるなら、早起きも悪く無いなーって思った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

「じゃあ、おじいちゃん、おばあちゃん、行ってきます。」

玄関まで見送りに来てくれたおじいちゃんたちに手を振りながら元気よく僕は登校した。

学校まで少し距離こそあるが、苦になるわけじゃない。

だが、今日に至っては少しこの距離が嫌になる。

だって、早く学校に着いてカータちゃんとお友達にならないといけないから。

学校に着く頃にはすっかり息が上がっていた。

走りっぱなしってけっこう疲れるんだね…

疲れた体を引きずるように歩きながら二年生の僕の教室に入った。

少し早かったせいか、教室には人は居なかった…が、１人目立つ銀髪をしたあの女の子…カータちゃんが、入ってきた僕に一瞬視線向けてきた。

「おはよう。」

もちろん僕は挨拶した。

カータちゃんは何か困惑したような顔をした後

「おはよう…。」

と返してくれた。

昨日から感じていた、彼女の表情から感じる妙な鬱屈。

なんとなくだけど、彼女にそんな顔をさせてはいけない。そんな気がした。

この使命感がなんなのかはよくわからない。

でも、使命感云々より僕は彼女からそんな物を吹き飛ばしてあげたい。

エゴに近いそんな思いがあった。

挨拶の後はお互い何も喋らなかった。

と言うより、彼女は席を立ってどこかに行ってしまった。

追いかけるのもなんだか嫌だから、ランドセルを下ろし、何もする事も無いから仕方なしに少しの間の静寂な教室を、僕は楽しむ事にした。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

「……。」

逃げるように教室から私は離れていた。
あの子と二人きりはなんだか嫌だったから。

なんというか、私が隠している物とか大事な物を見せてしまいそうで

私が向かう先は人が滅多に通らない、屋上に続く階段。

居場所が無くなった時はいつもここでうずくまっている。

前の世界じゃ、こんな事したことなかった。友達も人並みにはいたし、人並みに恋もした。
こういう、自分から誰かを隔絶するような真似は絶対しなかった。

だから、自分のやっている事が酷く、醜くも感じた。

『カータは可愛いんやから…』

お姉ちゃんの言葉が頭で反芻する

『話しかけなもったいない…』

「ダメだよ、やっぱりダメ。」

どうしても、自分はよそ者なんだからとみんなから一線引いてしまう。

これじゃ、幸せになんてなれっこない。

「はあ…」

きーんこーんかーんこーん

予鈴が鳴り響いた。そろそろ行かないと間に合わない。

「行かなきゃ…」

流石に小学校の授業をすっぽかすのは格好悪い。
私は急いで教室に戻った。

「はあ…はあ…」

私は今、席についたまま机の上に突っ伏して息を整えている。

忘れてた、余りに過去の事を考えすぎてたせいで

私の体は小学二年生だったんだと
そりゃ女子大生の体だったら、小走り程度で大丈夫な距離も、小学生となればそうは問屋が卸さない。

結局私は長い髪を振り乱して、息を上げたままるで遅刻したかのように、先生と同時に教室に入った。

「どこに行ってたの？」

概貴くんが私に小さく尋ねてくる。

「は、はは…ちょっと…ね…。」

階段でうずくまってました。なんて言える筈も無く、疲れた苦笑いを浮かべながら『聞かないで』と表情で返した。

気づいてくれたのか、諦めたのか彼は「ふーん」と返して、それきり聞いてはこなくなった。

授業が始まる。

因みに、私こと カータは、とてつもない秀才。

と、思われている。

それもその筈。テストでは１００点しか取った事がないからである。

異常だと思った方は思い出して欲しい。

私が【元受験生】だったと言う事を。

解く時間なんて余るし、その膨大な余り時間で見直しをする。

こんなだから、たまに全く話さない子が宿題を聞いてきたりする。

まあ、やってしまった物は仕方ないから素直に秀才を演じるまでなのだが。

はあ…家庭訪問とかどうなるんだろ…。

因みにお姉ちゃんはこの事を全く知らない。
だってお姉ちゃんまで私を敬遠しだしたらそれこそ、私は本当に孤立してしまう。
というわけで、私はまた先生の抜き打ちのテストを受け取りながら苦笑いをしている。

と、言うか私の場合は負けず嫌いに問題がある。

受験だって、友達に負けたくない一心でやってたし、これに至って負けたくないからやりすぎてしまった結果なのだ。

みんなは何点だー何点だーと一喜一憂している。
1人黙々とテスト用紙を片付けていた私に隣の概貴く…いやアレが話しかけてきた。

「カータちゃんは何点だったの？」

もちろん彼はテストを受けてはいないから点数などない。
だから、自分も点数の聞きあいとやらに参加したいんだと思う。

「さっき先生が私に言ってたと思うけど…ひゃ…１００点…」

案の定、目をぱちくりする。そう、みんなこういう反応。そして次にはこういうんだ。
『わー満点ー？すごーい！』

私がいつも後悔する瞬間。

手を抜けば良かった…と。
もちろんそんな真似はできない。
私にだってキョウジと言う物がある。
だから、仕方ない事だ。だが、彼は、私の予想を、大きく、裏切った。

「頑張ったね。偉い偉い。」

「え…？」

などと言って私の片手を握手するようにブンブン振りながら言った。
何を言われたのか、わからなかった。

「あ、ありがとう。」

そう返すしかできなかった。

そのあと、私は授業どころではなかった。
幸い算数だから、私が聞き逃して問題になる物ではなかったから良かったが、彼への疑問符は増える一方だった。

とりあえず、今日は私の隣の席は煩く無かったから昨日よりは平和に過ごせたが、アレはちょくちょく私に話しかけてきた。

別に嫌いな人間じゃないが、苦手なタイプ。
と言うより、得体が知れない。

ちょっと他の人違う程度で大袈裟かも知れないが、私のなかでは魔物みたいな扱いになってしまった。

昼休み

私は先生に相談をしに言った。
もちろんアレに関して
適当な理由を話して、なんとか次の席替えで席を離して欲しいと、
頼み込んだ。

あんまり良い返事ではなかったけど、頷いてはくれた。
あんまり期待はできないけど、行動しない事に変化は無い。おかげ
でコミュニケーションを取りたがらない女の子にされちゃったけど…

だけど、変化は起きた。残念な事に悪い方向にだが…

「カータさんの言う事も分かる。でも、まだ会って数日で判断する
のは軽率だと思うの。だから、もうちょっと考えさせて？」

放課後に呼び出しをくらって、そうお説教をついでご馳走になった。

つまり、望み０。

ため息をついたまま帰ろうと教室に入ると。

「カータちゃん。ちょっと、良いかな？」

アレが私に話しかけて来た。悪い予感しかしない。

「？、いいけど、なに？」

でも、断っても明日また同じ事をしそうだから、付き合う事にした。

そのまま私はアレと一緒に校門をくぐりながら一緒に下校する事になった。「何か私に話があるの？」

アレは私の問いかけに考えながら口を開いた。

「うーん、何か悩みでも有るみたいだから、聞いてあげたいって思って。」

「別に悩みなんか無いよ。概貴くんの気持ちだけで嬉しい。」

一瞬ドキッとした。たしかに悩みはあるが、私はそんなに暗い顔をしてたんだろうか。

「ううん、じゃあそんなに暗い顔しないよ。話してよ、話せば気が楽になるよ。」

引き下がらない。アレは善意で言ってるんだろうが、私には、喉笛に噛みついた狼に感じた。

「考え過ぎじゃない？私は別に悩みなんて無いし。生まれつきこんな表情だから。」

だが、引き下がらない。

「話してよ。僕たち…その…友達じゃないか！」

アレの言葉に足が止まる。

友達？ともだち？トモダチ？

何も知らないコイツが？

そんな理由で？

私に聞くの？

お姉ちゃんだって聞かないのに？

そんなに私を丸裸にしたい？

なんだか、よくわからない苛立ちが胸に渦巻いた。
渦を巻いて。それは溜まりに溜まった今までのいろんな物を詰めた
爆弾に変わった

「うる…さい…」

自分が何を言ってるのかわからない。

「え…なに…？」

彼の無垢な声色に私の爆弾に火がついたのか

「うるさい！何も知らないくせに！友達？私は…要らない。必要無
い、そんな、人の事をかき乱す。あなたみたいな人、必要無い！」

「……。」

彼は無言でこちらに視線を送る。
驚いているのか、目をぱちくりさせている。

「あ……。」

気がつくと、私は有らん限りの力で逃げ出すようにうちに向かって走っていた。

第二話　鬱屈（後書き）

如何でしたでしょうか

いきなりの超展開

になってるのか…？

まあいいや、別にプロじゃないｓ（ｒｙ

あ、なのは達いつ出そうかな…ｗｗ

今回はここまで、次回投稿にてまた会いましょう

第三話　謝罪　（前書き）

いやあ、勢いで書いたはいいが、設定まとまってないやあｗｗｗｗｗ

まあ、なんとかしますかねー

とりあえず、なのは、フェイトたちは空気

異論は、認める！

第三話　謝罪

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

あの子が帰って来た。

出迎えようと玄関に行ってやった

が、カータは既に二階に駆け上がっていた。

昨日もアレやったけど、これは重傷やね…

二階に上がり、あの子の部屋の前に行く。

がきっ…

鍵がかかってる。

全く…世話のかかる子や…

「カータ、どないしたん？」

コンコンと扉をたたきながら優しく尋ねる。

これで出て来たら苦労は無い。

が、カチャリという音と共に扉が開いた、と同時にカータが私の胸に飛び込んで来た。

「どうしたん？」

抱きつく妹の頭を優しく撫でる、肩が僅かに震えている。
こらえてるんやな。
遠慮すること有らへんのに…

「お姉ちゃん…」

抱きつかれたまま、経つ事数分…ようやくカータは私に話しかけてくれた。

「ん？」

「私ね…せっかく友達になってくれるって言ってくれた子…突き放しちゃった…」

カータは時折、年齢らしくない行動を取る気がする。
私の知らない所で、よほどの事が有ったんかな…

私は黙って、妹の言葉を聞き続ける。

「その子、ね…私が悩みがあるって…感じた、んだって…」

肩の震えがだんだん顕著になっている。
声にすら、涙が混じる感極まったような物になり始めた。

「でもね…私、素直じゃ…なくて…本当は、お姉ちゃんにも、その子にも…聞い、て…欲しい、んだけ、ど…」

嗚咽が混ざる声で一生懸命説明してくれる。
私は安心させるように頭を撫でてやることしかできひんかった。

「うるさい…って、一番酷い言葉で…返し…ちゃった…」

「そっか。」

返せる言葉が見つからず私はありきたりな言葉で返した。
くだらない会話はポンポン出せるくせに、こういうことには無力な私…お姉ちゃん失格や。

「お姉ちゃん、私…最悪だよね…最低だよね…。」

それはカータも一緒らしい、次には自身を乏しめ始めた。

「そんなことあらへん。カータはええ子や、私が保証する。」

カータは黙って私の言葉に耳を傾けている。
私は妹の体をキュッと両手を背中に回して抱きしめてやった。

「カータ、つらかったら泣いてええんよ?ぶつけてええんよ?
話してくれとは言わへん。でも、溜め込んだらカータが壊れてまう、
吐き出す為にお姉ちゃんが居るんやで?」

抱きしめた体を少し離して、俯いたままの妹に語りかける

この子が何かに悩んでいたのは何となく、出会ってから感じていた。
でも、聞いても何かできるような気がせんくて、口にできんかった。
無力で何の力にもなれん、ダメなお姉ちゃんって思われたくなかったから。
でも、それは間違い。
それこそ私が、妹を信用してない証拠になる。

カータは恐る恐る、ゆっくりと顔を上げて、ゆっくりと視線を私に合わせる

宝石みたいな青い瞳は涙を溜め込み、私が部屋に来る前にも少し泣いていたのか。
白い頬が濡れている。

「う…う…うわあああああぁぁああぁああん！
ごめんなさい…ごめんなさい…わあああぁああああああぁぁん！」

まるで、ダムが決壊したかのようだった。
吐き出すかのように大粒の涙をポロポロ流しながら声を上げて私に泣きついてくれた。

何となくやけど、本物の姉妹に近づけた気がした。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

部屋を開けて私は思わずお姉ちゃんに抱きついた。
お姉ちゃんは私の銀色の頭を優しく撫でてくれた。

自分がまだここに居て良いと感じさせてくれる、不思議な安心感。

お姉ちゃんとの問答をしているうちに私はついに声を上げて、大泣きをした。

私は泣きながら、お姉ちゃんを見つめ、気がついたら、何度も何度も謝り続けていた。

遠慮してごめんなさい。
信用しなくてごめんなさい。
話せなくてごめんなさい。
お姉ちゃんと呼んで、ごめんなさい…。

私が落ち着いた後、お姉ちゃんは結局深くは追究しなかった。
どうしてお姉ちゃんは詮索しないんだろうか…

「カーター、今日の晩御飯何にしよかー？」

私が言うのを、待ってくれてるのかな。

「そりゃ！」

バシンッという音と共に私の頭に閃光が走った。

「ぁいった…！」

ふと、顔を上げるとはりせんを振り切ったお姉ちゃんの姿があった。

「何するのー？」

そこまで痛くはなかったが、頭を両手で押さえながら返す。

「お姉ちゃん無視した罰や！」

そう言いながらはりせんを車椅子の中に…ってそれも標準装備なの…？

「聞いてるか～？」

はりせんに唖然としていた私の頬がニョーンと左右に引っ張られる。

「いはい、いはいよ、ほへいひゃんー。」

滑舌などあったものじゃない、発音で私は必死に抗議する。

「で、カータは今日何が食べたい？」

漸く私の頬を解放してくれた。

けっこう痛かったなあ…

少し腹が立った物だから

「お姉ちゃん。」

こう返してやった。

「１０年早い。」

即答…っていうか突っ込む所はそこじゃないような

「じゃあ１０年経ったらまた言うね。」

負けじと私も言い返す。でも、お姉ちゃんはなにやら不気味な笑み

を浮かべた。

「せやな、１０年経ったら私もカータもおっきくなるしなあ～」

「!?」

なんてことを仰った。

私は何故かわからないけど、無意識のうちに顔が熱くなるのを感じた。

「顔が赤いよ?どうしたん?」

クスクス笑いながら、私の顔を覗き込んでくる

「あぁ、うるさーい!ナイムネは黙ってろー!」

どうやら私は相当テンパってたようで、自分でもよくわからない。

「!?、カータが大きいだけやー!」

先ほどまで私をいじくって遊んでた不気味な笑みが消えて、うがーと攻撃してきた。

「わっ、ちょっ、お姉ちゃん!」

―――――

数分後、ようやく落ち着いた私たち。
意味も無く疲れているせいか息が上がってる。

「ねえ、お姉ちゃん。」

上がりつつある呼吸を整えて、あの事を聞こうと切り出す。

「ん？」

お姉ちゃんもまだ肩が少し上下してるが大分落ち着いたようだ。
私は少し勇気を出して

「どうして聞かないの？私の事。」

尋ねてみた。

「聞いて欲しいんか？」
お姉ちゃんは静かに返してきた。
こういう時、お姉ちゃんは全然雰囲気が年相応じゃない。

「そういう訳じゃ、無いけど…」

「じゃあそれでいい。私は聞かない。カータが私の事を本当のお姉ちゃんみたいに信じてくれて話すまで、待ってる。」

さらりと、この人は聞き捨てならない事を、言い始めた。

「ち、違う…」

私は今まで

「わ、私…」

そういう風に

「お姉ちゃんを…」

思われて…た…？

「信じてない訳じゃ…ない…」

体が震える。

自分が間違いを犯していたという、そんな些末な事に気がつかなかった己の浅はかさ、間抜けさ、愚かさ。

そう、おかしな事を言って嫌われるのは嫌だ。

そんなのが、自分勝手なエゴであると、どうして気がつかなかったんだろうか。

今まで、『私の姉』に精一杯成ろうとしてくれたこの人への裏切りだと

どうして気がつかなかったのか…。

「？、どないしたん？」

お姉ちゃんが私の顔を覗き込んでくる。

言わないと、ダメだ。

「言わないと、ダメだよね。」

自分に言い聞かせるように呟く。

「え？はっきり言わんとわからんよ？」

私の呟きがよくわからないのか、それともわかった上での発言なのかだが、そんなのはどうでも、いい。

「お姉ちゃん、聞いて。私の隠し事。」

これで縁が切れるなら、それで構わない。
これ以上裏切りたくは、ない。

「私、ね――――」

「ストップ。」

突然私の言葉はお姉ちゃんの言葉で遮られた。

「え？なに？」

覚悟をしていただけに、思わず脱力して返してしまった。

「その前に晩御飯や、其のほうがゆっくりできるしな。」お姉ちゃんは、にっこりという表現が似合う笑みを浮かべてそう言った。
この人には、かなわない。

―――――

「ん、じゃあ、話してくれるか？お姉ちゃんに。」

晩御飯の後、片付けを終えて、お姉ちゃんは私に向き合いながら静かに言った。

「うん…お姉ちゃん…私…ね…」

あ、緊張してきた。
震えてきた唇を気合いを入れて締め直す。

「馬鹿らしい話かもしれないけど…この世界の人間じゃ、無いの。」

言ってしまった。
でも言ってしまった物は仕方ない。
お姉ちゃんのキョトンとした顔なんて無視だ。

「私は本当は１８歳で、もっと日本人みたいな神谷恵美（かみやえみ）って名前が有ったの。」

とりあえず、単純な内容だったが、私が隠していたことは全て話した。「それだけか？」

お姉ちゃんの言葉が妙に優しく心に染み入る。

「ううん、あと私が今まで悩んで理由がある…つまらない理由だけど。私、今まで元の世界に帰りたかったの。」

お姉ちゃんは黙って聞き耳を立てている。
私は息を吸うのも忘れるくらい必死に語った。

「でも、私がこっちに来たのは、向こうで死んじゃったから…。だから、もう私は戻れない。そんなつまらない理由で私は悩んでたの。」

語り終えると私は急に疲れを感じた。
体が酸素を欲し、息切れする。

「死んだってどういうこと…？」

お姉ちゃんは不思議そうに私に尋ねる。
予想通りの質問、私は淡々と返す。

「向こうでね、大きな交通事故にあったの、内容は思い出したくないから言わないけど、多分即死だったと思う。」

話すだけで心が沈む。
私の魂が痛みで悶える。
「死ぬ」という概念を思い出して

「そっか、ありがとうな、話してくれて。お姉ちゃん、嬉しいよ。」

疑いのうの字も感じさせない優しい笑みを浮かべて私の頭を撫でる。

「信用、してくれるの…？」

不思議そうに私は尋ねた。
すると、お姉ちゃんはコツンと私の頭を叩く。

「そんな面白い話、私が信用しない訳ないやろ。私、異世界人のお姉ちゃんになれるんやで？」

クスクスと笑いながら答えてくれる。
その言葉に冗談は混ざるものの、嘘は全く無いと…思う。

何となくだけど、本物の姉妹に近づけた気がした。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

こんにちは、あれ？この時間帯はこんばんはかな…

カータちゃんに凄い剣幕で怒鳴られてから一時間と少し経ちました。
気まずくなってしまったせいか、カータちゃんは凄い勢いで走って帰ってしまったので、仕方なく一人で帰路についた僕です。

「ただいまー。」

引き戸を開いていつも通りおじいちゃん達に帰りを告げる。

「おぉ、がいきちゃん、おかえり。」

「おばあちゃん、ただいま。」

家事の最中だったのかエプロンをかけたおばあちゃんが出迎えてくれました。

「どうかしたかい？」

不意におばあちゃんが問いかけてくる。
思わずキョトンとした顔を返してしまう。

「？」

問いかけの意味を理解できずに首を傾げる。

「何か、悪い事でもあったのかい？顔が暗かったもんだから、おばあちゃんちょっと心配だよ。」
「ううん、ちょっと疲れてただけ。心配しないで」

首を横に振ってなるだけ笑顔で返事を返し、部屋に向かう。けっこう顔に出るもんなんだなあ。

「概貴、おかえり。ちょっとおいで。」

自分の部屋への途中、おじいちゃんがひょっこり顔を出した。

「ただいまおじいちゃん、なに？」

僕はおじいちゃんに誘われるままおじいちゃんの部屋に入った。
よくわからない木の小箱を出す。

「その箱なあに？」

僕の問いかけがよほど嬉しいのか、おじいちゃんは嬉しそうに話し出した。

「これはな、おじいちゃんがまだ概貴くらいの年の時に拾ったもんでなあ。今の今まで、何故かたんすに入っとったんだ。これを見たら、どうしてか概貴の顔が浮かんでの。お前にやろうと思って出したんだよ。」

おじいちゃんが箱を開けるとそこには不思議な銀色の綺麗な十字架のネックレスが入っていた。
十字架の真ん中に赤い宝石がついている。
赤い宝石がまた銀色の中によく映えて十字架の綺麗さが引き立てられている物だった。

「貰っていいの？」

不思議と顔が綻ぶ、久しぶりに感じる気分の高揚をおじいちゃんも感じたのか、嬉しそうに頷いた。

「ありがとう、おじいちゃん。」

木箱に十字架をしまって僕は自分の部屋に戻った。

この不思議な十字架が、後に誰かを救う物になる事など知らず。

第三話　謝罪　（後書き）

いかがでしたでしょうか

微妙な伏線を起きました。

主人公らをどうしようかってのと、そろそろなのはか、フェイトを出さないと不味いかな、とか思ってます。

まあ、そんな作者の御託はどうでもいいよね、うん。

っていうか、結構閲覧してくれてる方がいるみたいで嬉しいです。

こんな誰とｋ（ｒｙに付き合っていただいてまあ…

暇ｊ（ｒｙなんですかねー

す、すみませんすみません。

やめて、だからそのでっかい岩の塊みたいな剣で叩き潰そうとしないで。

すみません取り乱しました。

では、次回をお楽しみくださいませ、また会いましょう。

第四話　友達（前書き）

皆様こんにちは、作者です。

なんだか、Ｅｄｇｅ　ｏｆ　Ａｖｅｎｇｅｒよりこっちのが楽しくなって参りました（笑）

こんなふうに放置小説が誕生するんですね（笑）

自分はそんな気サラサラありませんが。

とりあえずのんびり更新しますかねー

第四話　友達

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

皆様、おはようございます。

八神カータです。

私、今日は思い切ってクラスの誰かに話しかけようと思っています。

昨日のお姉ちゃんとの一件で、進む事を改めて学んだので、前に進みます。

っていうかそろそろ友達作らないといい加減完全に孤立しないでも、アハハ…

私だってあれだよ？氷のように冷たくは無いんだよ？

だから、これからクラスから外れるなんて考えたら…

とまあ、こんな状況を招き入れたのは他ならぬ私だから、弱音を吐いたところで仕方がない。

という訳で私は現在教室の前。

くっ・・・柄にもなく緊張してるなんて・・・とりあえず挨拶からだよね、うん。どんなことでも挨拶からだよ！

空元気な気がするけど。やるしかない！

教室の扉を開く。勇気を出して周りを見渡した結果・・・

「誰も居ないって・・・どういうことよ・・・。」

軽くへこむ。自分の一歩はなんだったんだろう。まあそのうち誰か

くるよね。そんなことを考えながら
私は教室の自分の席に静かにたたずんでいた。
んーでも、何か忘れてるような気がするのはどうしてだろう。
そんなことを考えていると、教室の扉が開く音がした。
よし、とりあえず挨拶だ。

「おはよ・・・う・・・」

私が勇気を出して挨拶をした相手は、昨日私が一緒に帰るときにつき放つも同然に逃げ出したその相手、概貴くんが立っていた。

「うん、おはよう。」

彼は一瞬、キョトンと困惑したような顔を見せるも、何の屈託も無い表情で私の挨拶に返してくれた。
彼はゆっくり私の隣の席に座った。必然的に2人きりとなる。

「あ、昨日は、その・・・」

まずは謝らないと・・・このままじゃ仮に彼が気にしていなくても、私の踏ん切りがつかない。

「昨日はごめんね。」

「え?」

彼の予想外の言葉に私は素っ頓狂な反応をしてしまった。どうして?どうして君が謝るの?悪いのは私じゃない。

あの場に誰かが見ていたのなら、悪は明らかに私のはず。だってわざわざ気に掛けてくれたのを、『うるさい』で封殺してしまったんだから。

「ちょっと、僕変だったかも。初対面なのに、いきなり全部話せるないのにね。カータちゃんが怒るのも当然だった。ごめんね?」

「あ・・・え・・・その・・・私も・・・ちょっと頭に血が上ってて・・・その・・・」

なかなか言葉を返せない。出てくるのは目の前の男の子みたいなまっすぐな綺麗な言葉じゃなくて言い訳みたいな私の汚い言葉。

「うん、じゃあ仲直りだね。」

私が謝罪を口にする前に概貴くんは私の手を取り仲直りの握手といいたいのか、手を握ると上下に振ってにこりと笑いかけた。

「あ…ありがとう…。」

不思議と顔が熱くなる。
どうしてかは分からないけど。

「あ、そういえば」

彼が思い出したように私の顔を覗きこんだ。

「え?なに?」

「カータちゃん、宿題あったけど、やった？」

時間が、止まっ、た。

なんて事は無く、ただ私が固まっただけであり、時間にして多分２０秒ほど。

「算数…だよ…ね…？」

「あれ？やってない？」

私は無言でランドセルの中から教科書とノートを引っ張り出した。

ここに来てボロを出すとか私の馬鹿ーーーー。

「で、でも、今日の宿題は難しかったよ？いくら時間があっても厳しいんじゃ…」

概貴くんの御託はどうだっていい。

そんなことより自己嫌悪で死にたい。

小学校の宿題やり忘れるなんて…

あぁ～私の馬鹿馬鹿。

開いたページの先には予想以上に酷い展開が待っていた。

こんな時に限ってまとめページの問題軍団。

仕方ない、まとめて相手をしようかな。

私はちょっとガチで問題に取りかかる。

正直、私にとってはこんな問題は途中計算みたいなもの。
時間をかける訳にはいかない代物だ。

私は無心に解く。びっくりするくらい集中してる。
何だか微妙に視線を感じるけどそれも気にならない。
「…67＋25＝…23＋…」

問題をぶつぶつ呟きながら私はカリカリ解いていく。

ちなみに、今の私は＋をプラスと読み、＝をイコールと読んでいる。
小学生っぽくないことに後々気がついた。

「…36＋97＝133…できた…！」

最後の問題を書き終わって、ノートをパタンッと閉じる。

ふうっ…とため息をつく。

「わあ、早いねー。」

概貴くんの言葉でふと我に帰った。

気がつくと、私が宿題に躍起になっていた姿がよほど珍しかったのか、数人が私を見ていた。
だけど、その視線は数秒ほどで消えた。
その中、私の傍らに先ほどからずっと居たのか、はたまた今来たのか女の子が立っていた。

「八神さんでも宿題を忘れるなんて事、あるんだね。」

女の子はにこりと私に笑いかけてきた。
ただ、顔と名前が一致していないせいか苦笑いしかできない。

「あ。改めて言うけど、アタシ関原理恵。リエでいいよ。その代わり、アタシもカータって呼んでいい？」

矢継ぎ早にタカタカと言葉が並ばれていく、マシンガントークという訳じゃないけど。口数が多いなと感じた。

「あ、うんいいよ。よろしく、リエちゃん。」

なるだけ自然に笑顔を作りながら首をこてんと傾ける。

最初の彼女の言葉から、嫌みのような物を感じたから、少し敬遠したんだけど、今のやりとりで、いわゆる冗談のつもりだったんだなと、感じた。
直感的に、なんとなくなんだけど彼女とは良い友達になれるような気がした。
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＬＩＥ

朝、教室にアタシは到着した。なんだか最近日々がマンネリ化してるような気がしてウンザリしてたけど、教室に入るとちょっと驚く光景があった。

八神カータが、懸命に宿題に取りかかっている。

それも凄い早さで。
荷物を置いて、アタシは彼女の机に行ってみた。
面白そうだから…
だけど彼女はまるでアタシを意に介さないようにカリカリと問題を片付ける。

こういう所が流石秀才なんだなあっと詰まらない感想がよぎる。
彼女の凄い所は、全くといっていいほど先生のテストで凡ミスをしないって事だと私は思う。
うちのクラスは比較的、先生がよくテストを出す。だから、彼女は直ぐに頭角を現した。
彼女と友達に成れたら、このマンネリも消えると思ったし、何より彼女は凄くかわいい。
これでマンネリしたら、きっとアタシの人生はずっと灰色だろう。
とにかく、今日、アタシは近寄り難くもあった彼女に近づくチャンスが訪れた。

「八神さんも、宿題忘れるんだね。」

つい、皮肉げになってしまう。
八神カータは困っているのか少し苦い顔をしている。

「あ。改めて言うけど、アタシ関原理恵。リエでいいよ。その代わり、アタシも八神さんのことカータって呼んでいい？」

マシンガンのように言葉を放った。
いつもなら、こんなに急がないんだけどなあ…。
ホント、躍起になるなんて、アタシらしくない。

「あ、うんいいよ。よろしくねリエちゃん。」

カータは首を傾けながら笑い返してくれた。
にこり。という表現が似合うけど、ちょっと笑顔がぎこちない。

「算数、得意？」

この放課の間はせめて会話がしたい、そう思ってなんとか、質問をひねくりだした。

「うーん、どうだろう。得意ってわけじゃないかな。」

カータは困ったように視線を泳がせてアタシにアハハと苦笑いしながら答える。

「じゃあ何が得意？アタシは国語なんだけど。」

「え？え…っ…と……」

アタシの質問に完全に固まってしまった。
得意な科目が無いのか、それとも何か言えない理由でもあるのか

「分からないならいいよ。何でも屋なら、それはそれでカータらしいし」

アタシの言葉が相当な助け舟となったのか、カーターは直ぐに明るい顔になりアハハと笑い返した。

キーンコーンカーンコーン…

「あ、授業だ。じゃあね。」

ホームルーム――うちのクラスでは朝の会と呼ばれている――が始まる。私はもう少し彼女の事がしりたかったが、席からいつまでも離れる訳にもいかずそのまま席に戻った。
というか、彼女の隣の転入生を無視して何をしてたんだろアタシは…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

理恵という女の子がカータちゃんに絡んでいたため、僕は必然的に空気になってしまった。

そして、お昼休み。
理恵ちゃんは給食の片付け当番で今はいない。でも、僕も特に話す事も無いから、学校でも、回ろうかなと席を立った時。

「概貴くん。」

カータちゃんが僕の裾を引きながら呼んだ。

「ちょっといいかな。」

そう言いながら、彼女は立ち上がって僕を少し強引に引っ張って、どこかに連れて行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
―――――
ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

向かった先は人気が無い、いつもの屋上に続く階段。
階段とは名ばかりで、使わない機材とかがたくさん置かれて物置に

なっている。
私の避難所。

「こんな所まで来てどうしたの？」

概貴は首を傾げた。キョトンとしている

「昨日のね、事、話そうと思ったの。」

銀の長髪をなびかせながら振り返る。

「いいよ、無理しなくて。」

でも、彼は首を横に振った。昨日の私はよほど異常な態度だったのか、僅かに引かれた気がする。

「ううん、友達が心配してくれたんだから私は答えなきゃ。」

勝手に友達を名乗る。
なんて、わがまま。
自分で突き放しておいて、少し相手と距離が縮まったと感じただけで友達扱い。
ホント、酷い女（ヤツ）。

「うん、分かった。友達だもんね、僕ら。」

でも、彼はそんな私を非難もせず空いている所にちょこんと座る。

彼の隣に座り

「ありがとう。」

そう、言ってから、私は昨日お姉ちゃんに話した、信じてすら貰えないかもしれない話と同じ話を彼に話した。

「じゃあ、カータちゃんはホントはお姉さんなの？」

私は無言で首を縦に振った。
不思議と恐怖は無かった。

「そっか…。」

彼は誰に言うでも無くそう呟くと

「頑張ったね。」

そう言いながら、私の頭をぎこちなく撫でた。

「うん……うん…。」

何でかわからない。わからないけど、頬に温かい物が流れた。

「転入生ー、こんな可愛い子泣かすなんてー…」

ふと気がつくと、リエが私たちの前に居た。
私は泣いたまま、彼女を呆然と見つめる。

「おっ二人さんっ、こんな所で何話してたの？」
リエは私の隣に座り、私たちを覗き込んできた。

私は袖で流れた涙を拭き取り

「今度話してあげる。ね、概貴くん。」

顔を赤くしたまま隣で縮こまっている男の子に助け舟を出してあげた。

「あ、はは。も、戻ろうか…。」

先ほどの悟ったような雰囲気はどこに消えたか、逃げるように彼は階段を下りる。

「待てい、転入生ー君も隅に置けないなー」

リエはそんな彼の横につきまといながら、ウリウリとからかっている。

私は、そんな二人についていきながら、心のどこかでくすぶっていた厭な鬱屈とした感情が、いつの間にか消えていたのが分かった。

――――――

放課後。

リエは私と概貴くんをまるで旧知の仲みたいに帰ろうと誘ってくれた

「え…帰り道が…違う…だって…？」

そう、私と概貴くんは帰り道が同じ、だがリエは方向が反対だった。

「と、言うわけだから、また明日ね。」

「リエちゃん、バイバイ。」

私と概貴くんが手を振るも、彼女は私の手を掴んだ。

「この数十分が故に私とカータのできたての友情が崩れない事を祈ってるよ…」

「お、大袈裟だよ…じゃあね。」

半ば振り払うも同様に私は概貴くんと帰路に至った。

「じゃあ私はこっちだから、また明日。」

「うん、バイバイ。」

しばらく歩いた後に概貴くんとも別れた。
少し小走りで自宅に向かう。

「ただいまっ」

元気にお姉ちゃんが待つ家の扉を開ける。

「おかえり、学校、どやった?」

いつも通りの姉の言葉。
今日はいつもみたいな苦笑いはせず、私は笑顔でかえした

「友達が、できたよ。」

第四話　友達（後書き）

第４話、いかがでしたでしょうか？

そろそろなのは達を登場させたいです。

次かその次あたりになりますかねー…

あれ？この前も同じこと言ってようなｒｙ

感想、レビュー、要望などなどくれると嬉しいです。

では皆様、次回投稿でまたお会いしましょう。

第五話　喧騒（前書き）

皆様こんばんは

ただいま日付が変わった0時すぎでございます。

今回は、ちょっぴり長めの物になってしまいました。

予定外の増刊号と思ってください（笑）

さて、では本編をお楽しみください

第五話　喧騒

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

「ただいまっ！」

あの子が帰ってきた。昨日のそれとは打って変わって明るい。何かいいことでもあったんやろな。

「おかえり、学校どやった？」

いつもどおりの言葉を返す。いつもならばこの言葉で少し陰が差すんやけど、今日は違った。

「友達が、できたよ。」

なるほど、明るい理由はそれだった。この子と最初に出会った時は、顔立ちはもちろん、感情というものが感じられないものやから、お人形さんかと思った。

今じゃ、こんなに感情豊かな明るい子になってくれたけど。

「この間の転校生？」

「うん、後女の子の友達が一人。」

早く私に伝えたかったんやろか、カータの顔から笑顔が耐えない。

私も釣られて顔が綻んでしまう。

「良かったなぁ、今度お姉ちゃんに紹介してなぁ。」

うん。と元気に笑ってくれた。この子はやっぱり笑ってたほうが断然いい。もちろん暗い顔の方がいい人間なんてこの世に居るはずあらへんけど、それでもやっぱりそう思ってまう。
それが、この子が私の一義妹（妹）だからか、はたまたこの子自身の魅力からなのかはわからん。ただ分かる事は、私はこの子の笑顔を壊してはあかん。だから、このわけのわからん病をさっさと治さへんとな…。

SIDE　OUT
――――――

SIDE　CATA

あれから一週間が経過した。
私はだんだん、クラスの子達と馴染んできた。ちゃんと会話もするし、談笑もするようにもなった。
ここまでは良かった。問題は、私に実はファンとやらが居たという事実だ。
今までは私は自分自身と他人を意識的に遮断していたおかげで気づけなかったことに今更ながら気づいた。というわけだ。

私も、最初は、小学生が同年代にそんな意識など持つものかとタカを括っていたが、この世界の小学生を甘く見ていた。
授業中以外、学校に居る間は、常に何かしらの気配を感じるのだ。
そこで、概貴くんと、リエに相談してみたところ。

「カータ今まで気づいてなかったの？」
「てっきり気にしてないのかと思ったよ」

といわれる始末。だが、リエがこんなことを言い出した。

「なんなら、私がなんとかしてあげようか？」

「ホントッ！？」

これに食いつかない私ではない。そして、最近できたこの女友達に裏が有る事に気がつかない私でもない。

「…対価は？」

こう繋げてやった。

「よくわかってるじゃないカータ。」

クスクスと目の前で笑みを絶やさない性悪女。根は良い子だけど性格が異常にひんまがっている。

「この間、知り合いと賭けをしたの、それで賭けに負けちゃってね。その賭けのベッドをアンタで払って欲しいの。」

なんだ、思った以上に対価が少ないことに驚きを隠せない。

「でも私、お小遣い少ないよ？」

「誰がお金なんていったの？」

え？そう思った時、私は先ほどの言葉の異常に気がついた。『ベッドをアンタで払って欲しい。』

つまり

「私の行為で払えと？」

口元をヒクヒクと痙攣しながら私はあらん限りの友人の理不尽さへの怒りを理性で抑えながらひきつった笑顔を作った。

「そ、元々プライドが高かったからさぁ、ちょっと鼻をへし折ってやりたいなぁって考えたら見事に負けちゃって。」

アッハハと私と対照的に朗らかにリエは笑っている。

「で、何をすればいいの？」

「コスプレ。」

「断る。」

我ながら惚れ惚れするほどのテンポの良さだ。この言葉と言葉の間の感覚は一秒を満たない。

「別に断るならいいよぉ。カータの悩みは今後も絶えないねぇ、カワイソウニー」

私がわなわなと震えていると先ほどまで黙っていた概貴くんが口をひらいた。

「それって、僕がやるのは駄目なの？」

私とリエは同時に概貴くんを見つめた。

「だぁめ。ガイキンのコスプレも見たい気がするけど、それだとアイツが許さないだろうし。」

ガイキンとはリエが概貴くんを呼ぶ愛称、アイツってのは多分賭け事の相手のことだろう。

「じゃあ、私でも文句言うんじゃない？」

フフンと勝ち誇ったように笑う。やば、私いま超いやなやつ。

「残念でしたー。アンタみたいな美少女に文句言うなら私なんかお呼びじゃないのでしたー」

くっ…この性悪…

「わかった、そのかわり。この状況、なんとかしてよ。」

完全に追い詰められた私は仕方なくこの要求を呑むのであった。

「リエさんにまっかせなさぁい！」

リエは勝ち誇ったように胸を張っている。概貴くんは少し申し訳なさげに私に向かって

「だ、大丈夫。カータちゃんならメイド服でもチャイナ服でも似合うよ…！」

本人はフォローのつもりだろうが、この発言は逆に私に追い討ちをかけた。

「ガイキン、そのネタいただきだね。フフ当日を楽しみにしてるのだー」

リエは私から逃げるように、その場から逃げていった。
概貴くんと二人っきりになる。私は無意識にわなわなと震えながら彼を見つめた。

「え…えっと…」

彼は言葉を探しあぐねているようだが、私は言うべきことは既にきまっていた

「概貴くん・・・」

「な、なに…？」

あらん限りの感情を込めて私はこう叫びながら逃げ出した。

「バカーーーーーーーーーーー！！！」

――――――

そして、夜中。明日は土曜、リエのギャンブルのベッドを払うべくその友人の家に行くことになっている。なんでも、その友人はどこぞのお嬢様らしく、名前はアリス…バニ…忘れた。私たちより一つ上らしい。（まあ実年齢から行ったら１０ほど私のが上だけど）

『明日はアンタのうちに迎えが行くからうちでまってて。』

リエにこういわれたが、お姉ちゃんにだけは絶対知られたくない。どんな手を使ってもついてくる筈だ。考えるだけで鳥肌がたってくる…。

しょうがないので、近くの公園まできてもらうことにした。

「寝よ…もう為すがままだ…」

不貞寝に近い形で、私は自分のベッドの中にもぐりこんだ。意外と眠気が来るのは早く、私の意識はすぐに闇の中に落ちていった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＬＩＥ

ふっふっふ面白いことになってきた。もともとこうなることを計算して、ベッドは私ではなく、カータ自身を賭けておいて大正解だったようだ。

アリサのほうにも話はつけてある。

明日が楽しみだ。やはりカータと友達になれてよかった。おかげで毎日退屈しない。

さあて、明日はどういじくってやろうかな…っとそうこうしてる間にアリサから電話がきた。

「もしもし?どしたの?」

「明日、私の友達も呼べって…いいの?カータって子には何も言ってないみたいじゃない。」

なんだ、わざわざ電話したかと思えば…

「なに?傍若無人なアリサにしては心配なんて珍しい。」

少しばかり意地悪に返してみる。こういう時だって楽しまないと

「ばっ…馬鹿言わないで、別に、心配とかそう言うのじゃ…」

アタシの言い回しが効いたのか、少し低かったトーンが明るくなった。

「あっはは、良いの。明日はカータを虐め…カータに払って貰うだけなんだから。」

思わず本音が出そうになった。出そうにしたに近いけど。

「あんた、相変わらずね…まあいいわ、あんたが責任取るなら私は何も言わないから。」

「そーよー、それでいいの。全部アタシにまっかせなさぁい。」

電話越しにため息が聞こえた後に、じゃあねと言ってアリサは電話を切った。

さあ、楽しくなる。ガイキンも呼ぶし、さあ、どんな反応見せてくれるんだろ…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

朝、休日だけど、私はお寝坊な訳ではない。

いつもと同じ６時過ぎに目が覚める。

最近の私の朝の日課は顔を洗うついでに鏡を見る事。
そろそろこの容姿にも折り合いをつけなきゃならない。
そのための鏡だ。

その昔神話に怪物に堕ちた女神様は、鏡の盾によって倒されたって話があったっけ。

まあ、私は女神でも無ければ怪物でも無いんだけど。

さて、ぐしゃぐしゃな頭を頑張って直そっと。

――――――

「おはよー、お姉ちゃん。」

「はい、おはよー。」

お姉ちゃんは私を見て少し意外そうな表情をしている。
まあそれもそうだ、なんたって今朝は自分で髪の毛を整え…あれ…？なんかお姉ちゃん笑ってる…？

「ぷっ…あ、ははははは！カータ、アンテナが、アンテナが立ってるー、あはははははは！」

「！？」

頭を触るや否や、私は急いで洗面所に戻った。

「くそーあの狸ーあんなに笑うこと――あ――――」

ふと、鏡には、顔を真っ赤にした【私】が映っていた。
他の誰でも無い【私】が…。

「お姉ちゃん…」

私は直すのを止めて、居間に戻った。

「直して無いけどええの？」

先ほどまでの態度とうって変わって静かに言ってくる。

「うん、いいの。」

アンテナみたいにアホ毛がニョーンと伸びている。
これもこれで可愛いと思うし、立ち直れた証だ。

――――――――

「それじゃあ、行ってきまーす。」

「はいよーあんまり迷惑かけるんやないでー。」
はーい。と大きく返事を上げながら公園へと足を進めた。
概貴くんは既に待ち合わせに居た。

「おはよ。」

私はピョコンッと跳びながら背中で手を組み概貴くんに声をかけた。

「うん、おは…よ…う。」
概貴くんは私の頭を見て固まった。
「なに?」
「その、ねぐ…せ…」
私が気づいてないと思ってるのか、言いづらそうに口を開く。
「いいの、これは勲章だから」
「?」
私の言葉が理解仕切れなかったのか、首をこてんと傾げている。
話すつもりは無いけど
そんなことをしていると…
「おーい、ガイキーン、アンテナー」
後ろから例の性悪女の声がしやがった。
なにやら気になる呼び名だが気にしたら負けな気がするから無視。
「おはよ」
「おはよう。」
概貴くんと同時に挨拶。おぉ、後ろに見えるリム…ジ…ン…?
ちょ…あんなのが来るなんて聞いて無いんですけど…

「ねえ、リエ。私たちアレに乗るの？」

「そうだけど？」

そうだった、コレはアリ…なんとかと友達だったんだ。
まあ仕方ない、好意を無碍にするのも無粋だし。

「さあ、ガイキンとアンテナー。さっさと乗る乗る。」

性悪女に引っ張られ私たちはリムジンにつっこまれた。

「おはようござ…いま…す…」

リムジンの中に突っ込まれ、まずは挨拶だと、周りを見た時、私は何故か見知らぬ顔が【三人】居た事に固まった。

金髪の強気なオーラを出してるのが、多分ア…なんとかで、その隣に紫色の髪の優しそうな女の子、そしてもう一人が茶色い髪をおさげに結ってあるおとなしそうな子だ。
まぁ優しそうもおとなしそうも大して意味合いは変わらない気がするけど

（これってどういう事…？）

小声でリエに話しかける。だがリエはこんな反応

（そういえば言ってなかったっけ？アリサの友達、すずかさんと、なのはさん。）

なんてことをのたまいやがった。

（そうじゃないっ。私が言ってるのは、あの金髪のなんとかっての以外に人が居るってことっ）

（アタシは、【アリサ一人だけ】なんて言ってなけどぉー？）

こ、こいつぅ…

「どうかした？」

金髪のなんとかが私に絡んできた。
相当不審な態度だったようだ。

「な、何でもー？あ、あははは…」

なんとかは、それでいいのか、ふーん。などと言ってそれ以上の追求はしなかった。

「それにしても、凄く可愛い子なの、お人形さんかと思っちゃった。」

なのはって子が私に話しかけてきた。
確かにお人形というのは同感。

「あはは、こんな変な髪だからよく言われるよ。」

苦笑いをしたまま答えた。
実際に銀髪なんて見たこと無いからとりあえず、自分の中で【変】扱いしておいた。

「ううん、そんな事無いよ。綺麗な髪だと思うなー。」

今度は紫色の髪の…すずかって子が話しかけて来た。
やっぱり紫とかがあるから銀も変じゃないらしい。

「さて、とりあえず一応紹介。この銀髪アンテナが八神カータ、私のクラスの超絶美少女。んで、その隣の黒い美形はついこのあいだ現れた謎の転校生、鳥宮概貴。通称ガイキン。」

性悪の反応に頬をカリカリかきながら周りを見渡しながら概貴くんは言った。

「謎じゃないけど…概貴って呼んでください」

美形は否定しないのね…。

まあ、私も超絶美少女を否定してない所、人の事はいえた義理じゃないか。

「私はアリサ・バニングスよ。よろしく。」

金髪のなんとか…じゃなく、アリサが口を開いたそれに続くように2人も口を開く。

「月村すずかです。アリサちゃんとはクラスの友達、アリサに誘われて今日は来ました。」

「高町なのは。三人とはお友達になれたら嬉しいな。」

どうしてこの金髪と仲が良いのかさっぱりだ。
まあ私の預かり知らぬ物があるんだろうな…。

そうこうしているうちに、私たちを載せるリムジンはアリサのうちに到着した。
第一印象は、犬が多い。
多分どれも由緒正しい血統だろうが、私にはよく分からなかった。

「リエ、その旅行カバンはなに？」

ふと、気がつくと、リエはなにやら大きめのカバンを重そうに抱えていた。

「あんたの着る服だよ？アブノーマルから変態衣装までよりどりみどりなんだから」

フフンと得意気に言っているが私にとっては死刑宣告にもほどがあった。

「グズグズしてないで行きましょ。鮫島、リエのカバン運んであげて」

「かしこまりました。」

鮫島と呼ばれた多分彼女の執事であろう人がリエのカバンを屋敷まで運んでいった。

アリサが先頭きって私たちを誘導して、彼女の自室の中に…ここからが私の地獄の始まりであった。

―――――

「で…まともな衣装は無い訳…？」

別室で着替えるためにカバンを開いた私はこめかみに青筋が絶えなかった。

「いいじゃーん、このフリフリの天使ー可愛いよー？…アタシは絶対着たくないけど。」

そう、こいつのカバンの中からはまともな服はでなかった。

真っ黒の悪魔の羽と尻尾がついたビキニだとか、おかしなフリルがついたいわゆるゴスロリに羽がついて、天使の輪みたいな帽子みたいな衣装…そりゃ、そういう服が好きならあれだろうけど私はそういうのは恥ずかしい。

「あ、なんだまともな服あるじゃない」

よくみればただのワイシャツが入ってた。サイズ大きいけど

それに、下に履く物がない…

「リエ、これスカートかズボンは？」

「ないよ。」

私の言葉にリエは即答した。

「え…？」

「それ、サイズが大きいし丈も長いから必要ないの。」

前言撤回、まともな服なんて有りやしない。

「くっ…」

「さあさ、おとなしくこの際どいメイドさんになるのだー」

カバンを前にへたり込んだ私にリエが迫る。
もう、どうにでもなれ…！ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

――――――
ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ
カータちゃんをリエが連行していってから、数分間。僕はアリサさん達とずっと話していた。

話のネタは本当に普通な内容、好きな色だとか食べ物だとか、初対面の人が話すような内容だった。

「概貴くんは、本とか読む？」

すずかさんが僕に聞き始めた。

「好きかどうかは分からないけど、読むほうだとは思うよ」

僕の返事に彼女は食いついてきた。

「へぇそうなんだ、どういう本が好き？」

「うーん、ファンタジーとか読むけど、ミステリーとか推理物も好

きだよ。」

一応僕は本に関しては雑食なんだけど、自分の中で頑張って好みを探してみた。

「私もファンタジーは好きだなー、ねぇ今度――」

すずかさんが何かを言いかけた時…

『ちょっ…カータ、それは酷ぃ――』

『今更負け惜しみかーー！』

ガタンッドタンッ

そんなやり取りが廊下の方から聞こえた。

「お待たせー」

得意気に手を上げながら扉を開いたカータちゃんの姿はすごかった（ひどかった）。

丈の短いチャイナドレスのうえにこれまたダボダボと言えるようなワイシャツを羽織り、頭には天使の輪みたいな帽子…というより飾りをつけ、更にはどうやっているのかワイシャツの背中部分に悪魔みたいな羽と、腰の部分に尻尾がある。

で、下には何を考えたのか何も穿いてはおらず、ワイシャツの丈で隠しており足は裸足という訳じゃなく、黒と白で横にしましまがある太ももまである長ーい靴下を穿いていた。

「か、カータ…あんた…」

固まる僕達を置いてアリサさんが、なんとか言葉を絞り出した。

「？どしたの…？」

不思議そうに首を傾げるカータちゃん。
言わんとせんことはなんとなくわかる。
だってあんなにめちゃくちゃな恰好なのに、その、凄く可愛いかったから。
文句の一つでもつけたくはなると思う。

「あんた何でそんな恰好でそんなに似合ってるのよ！？」

アリサさんがカータちゃんに詰め寄るのを引き金になのはさんもすずかさんもカータちゃんに詰め寄る。
ポカンとするしかなかった僕はそのまま座ったまま。

そのあとが大変だった。
カータちゃんはみんなの着せ替え人形みたいにくるくるくるくる衣装を着せ替えさせられて、写真を何枚も撮られてた。

途中カータちゃんは何度かＳＯＳの救難信号な視線を僕に向けていたが僕は視線を逸らす事しかできなかった。
ごめん…カータちゃん僕にはあそこに割り入る勇気は無いよ…。
そんなこんなな後のお昼は、そのままアリサさんの家でご馳走になった。
てっきり凄い物が出てくるのかと思ってたら、思ったよりインパクトに欠けるちょっぴり豪華なサンドイッチのメドレーだった。
もしかして、アリサさんなりに気を使ってくれた昼食だったのかもしれない。

お昼が終わった後も、カータちゃんはみんなの着せ替え人形の恰好のまま、トランプやテレビゲームをして楽しんだ。

そんなゴタゴタの騒がしくも楽しい1日はあっという間に終わった。

「や、やっと終わった…」

着せ替え人形からの解放にカータちゃんは魂が抜けたみたいに、だらんとしている。

それをよそに、アリサさん、なのはさんを筆頭に撮った写真で盛り上がっているなか、僕はそっとカータちゃんに駆け寄った。

「ごめんね？本当は、止めたかったんだけど…」

どう謝っていいかわからないから、苦笑いしかできないなあ…。

「いいよー、私もなんだかんだで、楽しかったし。」

カータちゃんは苦い顔だけと優しく僕に笑いかけてくれた。

「あ、その、カータちゃんの衣装、可愛かったよ、うん。」

なんとかフォローをしようとしたけど、やっぱり無理があった。

その証拠に、カータちゃんは顔を真っ赤にしている。

なんて言えば良かったんだろ。

「へい、ガイキン、君も罪な男だねー」

突然リエちゃんが僕に飛びかかってきた。
言ってる意味がよくわからない。

「？どういうことー…？」

本気で悩む僕にクスクスと笑いながらリエちゃんは僕の肩を叩いて来た。

「悩め悩め若人よー、アッハッハー」

なんて風にごまかしまでされちゃった。

その後は、朝みたいにアリサさんの家の車で公園まで送ってもらった。
みんな携帯の番号や、アドレスを交換してたけど、僕とカータちゃんは携帯電話を持ってなかったから、電話番号だけを交換した。
電話番号の交換しただけなのに、凄く仲が良くなったみたいに感じるのは僕だけなのかな。

「今日は楽しかったよ。ありがとう。」

帰り際に僕はみんなに振り返って言った。

「バイバイ。」

カータちゃんも僕に続いて小さく笑いながら手を振る。

「じゃ、またね。」
「さようなら。」
「バイバーイ。」
「ガイキン、アンテナ、月曜にねー。」

一様な返事と共に扉が閉まると車は行ってしまった。

「私たちも帰ろっか。」

カータちゃんが、笑いながら僕に言った。
夕焼けが彼女の白い肌を照らす。

「な、なに…？じっと見て…」

僕は今更カータちゃんに視線を固めていたことに気づいた。

「ううん、何でも無い。帰ろ。」

僕らはゆっくりと帰り道を歩いて行った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

概貴くんとの帰り道、私の顔は夕焼け以外の要因で赤かった。

彼がおかしな事を言うからだと思う。
変に意識しちゃうじゃない。

こういう人の事を、鈍いとかそういう風に言うのかな。

ま、いっか。

この気の高揚も数日立てば多分消える。
だって私達はそういうのに発展なんかしないしない。

私の中身と彼の中身は釣り合いが取れて無さ過ぎる。
もちろん、見下してるとかじゃなくて、概貴くんに見当たった人間は私じゃないって
何考えてるんだろ。

そんな事を私が考えていると、概貴くんとの別れ道に突き当たった。

「じゃあ、僕はこっちだから。じゃあね。」

概貴くんは無邪気な笑顔で大きく手を振りながら私に言った。

「うん、じゃあ週明けに。」

こっちも負けないように明るく笑って、彼とは対照的に頬の辺りで小さく手を振って、別れた。

――――――

家に帰って、お姉ちゃんにただいまと言った。
何をしたのか包み隠さず話しはしなかったけど、思ったより明るい話題になった。

こうして、5月は終わった。
桜が青くなり、ジメッとする6月を迎えた。

6月、私たち八神家の家族が生涯忘れる事の無い物語の幕開けになる4人との出会い。

私と同じ銀の風を纏った姉さんとの

不思議な不思議な魔法の物語が、幕を開けようとしていたのを、この頃の私はまだ気づきもしなかった。

第五話　喧騒（後書き）

如何でしたか？

ようやくなのはを登場させられました…

いやー、長かった！

まあ、俺としては早くヴォルケンを出したi

と、とりあえず！

序章も終わった事ですし、張り切っていきたいと思います！

お付き合いして頂ければ幸いです。

感想やら何やら頂けたら嬉しいです。

励みになります。

では、次回投稿でまたお会いしましょう。

第六話　新しい家族（前書き）

さて、何かに追われるかのように書き綴ってしまいました。

こんにちは作者です。

理由は、ずっと書きたかったから！

このシーンのためだけに書き始めたと言っても過言じゃｒｙ

さてさて、それでは本編をどうぞ！

第六話　新しい家族

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

現在、私はお姉ちゃんとお買い得。
それも半端な量ではなかった。
新しい住居者のための普段着と寝間着その他もろもろの生活必需品。

それらを二人で処理していた。

どうしてこうなったのか私自身意味が分からない。
すべてはあの朝の発言が始まりだったのかもしれない…。

――――――

「お姉ちゃん、ずっと気になってたんだけど、この本、何？」

とある休日の朝、ご飯を終えお姉ちゃんと食後に読書をしようとお姉ちゃんの部屋でふと気になった事を口走った。

机に飾られて入るように立てられた古びた本。茶色い革でできたような立派な表紙にタイトルは無く、金色の十字架のような飾りが付いている不思議な本。

「私もわからへんのよ、物心ついた頃にはもうあって、綺麗な本や

から大切に飾ってあるんよ。」

「ふーん…。」

私は机に飾られた本を覗き込みながらお姉ちゃんの説明に相槌を打つ。

何となくこの本からは嫌な感じしか、しなかった。

「どうしたん？そんなに本がきになる？」

私はよほど本に見入っていたのか、お姉ちゃんのクスクスと笑いながら私をからかう言葉で我に帰った

「ううん、ただよく見た事がなかったから見入ってただけ。」

私は不気味な本の事など思考から外し、姉の座るベッドに乗り込み静かに本を読むことにした。

私はお姉ちゃんほどじゃないが本は好きなほう。

読む物はだいたいファンタジーやＳＦ、現実から逸脱したジャンル。

本の中でくらい現実から離れたいし…。って小学生の発想じゃないか。

黙って読むこと数時間ちょっと、お昼前くらいに本をパタンと閉じたお姉ちゃんは不意に口を開いた。

「夕方図書館に行くんやけど、カータも行く？」

「うーん、私はいいよ。本が多いなら、荷物持ちにはなるよ？」

何となく、新しい本を読む気にはなれないから行く気はしないが、足が不自由な姉の手伝いくらいははせねば。

「別に気にせんでええよ。カータが行かへんなら私一人で行くし。」

「そっか、じゃあ留守番してるね。」

――――――

お昼が過ぎて少しすると、お姉ちゃんは、図書館へと出かけた。
何でもゆっくり見て回りたいだとか。

てなわけで、私は暇な半日を過ごす事になった。
こういう事ならお姉ちゃんについていくべきだったろうか。

こういう日に限って何のお誘いも無いし。

「あ、そういえば…。」

気がつくと、私はお姉ちゃんの部屋に脚を運んでいた。

机には相変わらずあの本が我が物顔で居座っている。

にらめっこすること数十秒。私は意を決して本に向かって手を伸ばして

手に取ってみた。
ズシリッ
結構重いなあ、などと思ったその時私の意識は急激に真っ暗になった。

―――――

目が覚める。でもそこは私が居た姉の部屋ではなくズタズタに荒らされた森の中だった。というより森と形容していいのかすら怪しい場所だ。
朧気な意識の中立ち上がり、辺りを見回す。
視界がまだ眠ったようにぼやけているせいでよく見えない。

「痛っ…！？」

歩き出そうとした時、何かが脚に引っかかって転んだ。
こんな所に木が倒れて…

「！？」

視界がはっきりすると共に私は言葉を失った。
私がつまづいたのは木なんかじゃなかった。

「死んで…る…？」

私がつまづいたのは恐ろしい形相で白目をむいて死んでいる人間の

死体だった。

そして、そんな死体はこれだけじゃなかった。

辺りには無数とは言い難いが、それでいてけっこうな数の死体が転がっていた。

「なに…？なんなの…ここ…？」

私はうわごとのように呟く事しかできない。

膝は笑い、腰は砕けて立ちあがれない。

本能がガンガンと警鐘叩き鳴らす。

逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ。

でも私の意思に反して体は全く動いてはくれない。

カタカタと体は震えたままこれは夢だから早く覚めろと自分自身に言い聞かせることしかできなかった。

「何度繰り返すのか…」

不意に

「どこから狂ってしまったのか…」

女の人の声が聞こえた。

声の源は私の真上、輝く銀髪にそれと対照的に漆黒のドレス（？）みたいな服を着た、綺麗な人が浮いて居た。

恐怖で壊れた体が嘘みたいに動いた。
立ち上がりながら彼女を見つめた。

「お姉さん」

声をかける。

「どうして泣いているんですか？」

泣いてもいないその女性に問いかけた。
でも彼女は私を意に介さない。
というより聞こえていない風に見える。

私が声を張り上げようと息を吸ったその時

「無駄だ、あの私にお前の声は届かない。」

後ろから、先ほどの声が聞こえた。

「え？」

振り返ると、上空に佇む女の人が私の後ろから話しかけている。

「お姉さん、誰？」

私は、目の前の女性が二人居ることや、二人とも悲しそうに見えることなどお構いなしに、名前を尋ねていた。

「名乗れるほどの名前は持ってはいない…我が存在を忌み嫌う人々は私を【闇の書】と呼んでいる。」

闇の書…？
この人が何を言っているのか、私は不思議と、そういう事を意識せずに会話を進めた。

「そっか、私は…」

「知っている。お前の意識が私の中に入って来た時にお前の記憶を垣間見た。神谷恵美。」

「どうして…私の名前…？」

ここにきて私は、自身の本当の名前を知っていることより、相手が私の【名を知っている事実】に驚いていた。

「いや、今は我が主の妹か。カータよ。」

何が嬉しいのか【闇の書】は小さく笑って呟いた。

「お姉ちゃんが…主…？」

私の問いかけに【闇の書】は笑みを浮かべたまま答えない。

「さあ、ここはお前が居るべき場所ではない。在るべき世界に帰れ。」

その言葉と共に私の意識は再び急激に真っ暗になった。

――――――

目が、覚めた。
視界に入って来たのは、私を心配そうに覗き込んでいるお姉ちゃんと、石田先生だった。

「お姉、ちゃん…わた、し…」

「カータちゃんはお姉さんのお部屋に倒れてたみたいよ。一時間も倒れてたみたいだけど、大丈夫?」

一時間…?
そんなに立って居たのか…。
私は鉛みたいな体をゆっくりと起きあがらせる。
お姉ちゃんと先生をボケた眼で交互に見据える。

「心配したんよ?いきなり倒れてて…急いで先生呼んだら、眠ってるだけやなんて…。」

コツンッと私は頭を叩かれた。
心配させた罰だろう。
気をつけないと…。

でもなんだろう…この感じ、何か決定的な間違いに気づいたのに忘れさせられてる感覚…。

「石田先生、わざわざすみませんでした。」

「いいの、はやてちゃんの妹さんだからね、何かあったら大変だもの。」
先生はにこりと笑い、少しお姉ちゃんと話した後、帰っていった。

―――――

「本を持ったら倒れた？」

お姉ちゃんは私に信じられない事を口にした。

あの茶色の本は、私が持ったまま倒れたために床に転がった筈なのに、なんとお姉ちゃんが帰った時は、触れた形跡すらなかったらしい。

「そうだよ、あの本を持ったら気が遠くなって…そこからはよく覚えてない。」

私の言葉にお姉ちゃんはしばらく考えた後、おかしな事をしゃべり出した。

「もしかしたら、魔法の本なのかもしれへんなあ…」

もちろん冗談なのは分かっている。

「じゃあ、あそこから変な怪物が出てくるかもねー」

そんな姉のジョークに乗ってやる。

「そういう時はカータが守ってくれるからお姉ちゃんは安心やー。カータ強いもんなー」

なんてとんでもない事を返してきた。

確かに私はそんじょそこらの連中よりは遥かに強い。

だって、私は前の世界で一部じゃ全一のエミと呼ばれる空手の全国一位だったんだから。

だから、確かに並大抵の事が無ければ大丈夫だけど…

「お姉ちゃん、世間ではそういうのフラグっていうらしいよ。」

そんな事は有るわけない。　だってアレだってただの夢なんだし…
アレってなんだっけ、まあいいか。思い出せないんだし。

そして、この会話がただの冗談ではなくなったのは、この日の深夜の事だった…。

――――――

「……。」

ふと、目が覚めた。

この時期の夜はまだ肌寒い。
布団に潜り込めばそれだけで眠れるんだけど、口が異様に乾いていた。

それを気にしたら喉が渇いた。

「水を一杯飲もう…。」

そう一人で呟きながら部屋を出る。
一直線に台所に向かう筈が、私の視線はなにやら紫色に光るお姉ちゃんの部屋に向いていた。

「もう…まよなかになにしてんだか…」

眠い頭を活用しつつ、私はフラフラと紫色に光り続けるお姉ちゃんの部屋に入った。

「もう、お姉ちゃん今何時だと――――」

ハラッ…何かが私の髪を数本切り裂いた。

本能的に歩みが止まる。ついでに口も止まる。

「動くな。何者だ。」

私は首筋に剣を突きつけられていると今更きがついた。

「誰だてめえ…」

なるだけ冷静に視線を回した。

お姉ちゃんのベッドの前にはなにやら魔法陣みたいなのが回っている。

そして目の前には黒いインナーみたいなのを身にまとった、赤いおさげをした女の子と、金髪の女の人に、ピンクのポニーテールをした女…今まさに私に剣を突きつけている張本人に、後一人唯一のがたいが凄く良い犬耳をつけた男の人が居た。

そして、お姉ちゃんはと言うと

「……。」

目を回して気絶していた。

「何者だ、と聞いている。」

ジャキッと剣が震えた。

こ、殺される…。

「や、八神カータ。そこで気絶している八神はやての妹です。」

我ながら内心の動揺とは裏腹に随分と流暢に喋れた。

だが、剣は降りない。

「もう少しマシな嘘をついたらどうだ…？主とお前は、見るからに他人に見えるが…？どちらにしろお前が我ら守護騎士にとって危険なのには変わりはない。」

女の人は冷たく返してきた。

え…？なに…？つまり、私がお姉ちゃんに似てないから、見た目人種が違うから、妹じゃないって…？

「…あったま来た…。私が自称妹なら、そっちは自称、ボディガードじゃないっ…

いいよ！、そんなに言うなら病院行こ、お姉ちゃんの主治医さんなら今日は病院居るだろうし！」

私の自称という言葉にピンクの女は流石に怒った。

「貴様…我らを侮辱する気か…！」

だが、犬耳の男が私たちの間に割って入った。

「止めろシグナム。この娘の言うのは正しい。まずは、我らの主を病院に連れて行くのが先だ。」

シグナムと呼ばれた女は納得したのか剣をしまうかと思えば、いきなりキーホルダーみたいな物に変える。

驚く私を尻目にシグナム達はお姉ちゃんを抱えてくれた。

「さて、電話電話…」

すっかり覚めた頭で私は病院に電話をかけた

――――――

「石田先生、夜中にすみません…。」

「いいのよ…それにしてもカータちゃん…あの人達、何…?」

病院についてから私はまず石田先生の元へ直行した。

私たちが義理の姉妹だと先生の説明で簡単に理解してもらい、私の誤解は解けたが、次はシグナム達が不審者扱いされてしまった。

まあ、当然と言えば当然なんだけど。

私とお姉ちゃんは先生の問いかけに何と答えれば良いのか迷っていると

（主、ご命令が有れば従います。）

そんな言葉が私の頭に響いた。

お姉ちゃんにも聞こえたみたいでお互いを見合わせきょとんとする。

（思念通話です、妹様にも聞こえているようですが…心で念じて下さい。）

私がパニックになっている間…

（じゃあ命令というかお願いや、ちょっとだけ話合わせてな。カータもええ？）

（あ、う、うん。）

（承知しました。）

流石我が姉、見事に思念通話なる物に順応してくれた。

「石田先生、実はこの人達、遠い親戚の人で、遠くの祖国からわざわざ仮装までしてサプライズしてくれたんやけど、私がびっくりして気絶してしまって…な、みんな。」

お姉ちゃんがとっさに考えた言い訳に

「そうです。えと、みんな私が義妹になったってみんな知らなくて、それでこんな騒動に」

私がちらっと四人に向かってアイコンタクトを送る。

「そ、そうなんです～ちょっと遣りすぎてしまったみたいで…」

「そのとおりです。」

すると、金髪の女の人と意外にもシグナムが見事に反応してくれた。

「あ、アハハ…」

もう笑うしかない、あのお姉ちゃんですら苦笑いを浮かべているんだ、私がどうこうできる物じゃない。

――――――

家に帰ってからもまた大変だった。

「私に魔法の資質？」

「主はともかく、お前は私の思念通話にしっかり反応した。恐らく、いや確実に魔法の資質があるだろう。」

なんだかよく分からないけど、私は魔法少女になれる才能があるみたい。

シグナムの口振りからそれはお姉ちゃんにも当てはまる事だった。

「そして、主の持つその魔導書こそ、ロストロギア【闇の書】。」

「ろすとろぎあ？なんだか訳の分からぬ単語がいっぱい並んで…【闇の書】…？」

私がシグナムの言葉に戸惑っているなか、お姉ちゃんが顔を覗き込んできた。

「なんか、聞き覚えがあるような、無いような…大事な事な気がするんだけど…」

私のつぶやきに意も介さずシグナムは続けた。

「そして我らが、主、あなた様を御守りする守護騎士。」

シグナムの言葉に四人はお姉ちゃんの前に膝をつく。

「烈火の将シグナム。」

「湖の騎士シャマルと言います。」

「鉄槌の騎士ヴィータ。」

「盾の守護獣ザフィーラと申します。」

四人が膝をつき頭を下げたまま順々に名前を名乗る。

「私は八神はやて、この子が妹のカータや。みんなよろしくな。」

堅苦しいみんなの態度にお姉ちゃんは実にフレンドリーに返した。

「で、お姉ちゃんが持つこの本が【闇の書】？」

話を元に戻そうと私はお姉ちゃんの膝に乗る茶色の魔導書を覗き込む。

「そうだ。魔力を蒐集し、６６６ページの魔導書を完成させれば、

主はやては真の闇の書の主として目覚める事になる。」

６６６ページ…

確か聖書の獣の数字…だっけ…

「覚醒前に、闇の書の声を聞いたはずです。」

私の思考を無視し、シグナムが続けた

「せやけど、私魔法使いじゃあらへんしそういうのは分からへんけど、とりあえず分かった事が一つある。」

お姉ちゃんのシグナムへの返事に私たちの視線を集めた。

「闇の書の主としてみんなの衣食住、きちんと管理せなならんって事や。幸い住む部屋はあるし料理は得意や。みんなの服を揃えるから、サイズ計らせてな。カータ手伝って。」

私たちはきょとんとするが、私はアハハと声を出して笑った。

「……うん任せて。」

―――――――

こうして今に至る。

「疲れた…。」

実に三人分の女性物の下着から衣服を揃えた。
小学生に運ばせるには荷が勝ちすぎてる。
ちなみにザフィーラについては、自分は普段は狼の姿になるから構わない…と、サイズを計らせてくれなかった。

「さて…」

みんなの衣服が揃った所で守護騎士…ヴォルケンリッターの四人に私は話を持ち出した。

「私たちは今日から家族に成るんだけど、誰か姉、兄で誰妹かはっきりさせよう。」

四人は、家族という言葉に酷くびっくりしていたが、そんなの構うもんか。

「まず、シグナムとシャマルは、確実にお姉さんでしょ、ザフィーラも私より上だし…問題はヴィータなんだよね…」

私の呟きにお姉ちゃんが割り込んで来た。

「ヴィータはカータの妹でええんやないか?」

この言葉にヴィータがあの時以来始めて口を開き吐き捨てるように言った。

「アタシは別にどっちでもいい。」

だが、そんな言葉を見逃す私ではなかった。

「じゃあヴィータは私の妹ね。うん、みんなよろしく！」

なるだけ元気に、やりすぎなくらい私はみんなに笑顔で言った。

昔お姉ちゃんがそんな風に私を迎えてくれたのを思い出したような気がしたから

第六話　新しい家族（後書き）

いかがでしたか？

あ。アニメで石田先生が登場するのは翌朝みたいな展開になってますが

そこの描写がよく分からず、どう仮説を立てても疑問点が残るため夜中急に押しかけた形にしました。

ご了承を

詳しい事をご存知の形は、感想か何かで教えて頂けたら改変致します。

随時感想やレビューなどお待ちしてます。

感想、レビューをお書きの方にはもれなく作者が作品を覗きに行きますｗｗｗ

ついでに感想でも綴らせてもらいます。

ではでは、次回投稿でお会いしましょう

第七話　騎士の誓い（前書き）

外伝と続いて本編投稿
1ヶ月間を置いての投稿です
読者の皆様お待たせしました。

忙しかったわけではなく、ストーリーが頭でずっとごちゃごちゃしてて、今回の話をなかなか綴れなかったんです。

とりあえず、久々の本編をどうぞ

第七話　騎士の誓い

ＳＩＤＥ　ＳＩＧＮＵＭ

新しい主の元で仕えてから早くも数日が経過した。

今回の主は、年の若さはさることながら何もかもが今までの主とは違った。

我ら守護騎士を物扱いするでも奴隷扱いするでも無く、我らを家族の一員として受け入れてくれた。

驚いたのは、一緒に住む銀髪が良く映えている少女、カータ…あぁ…今では私の妹であったな。

こいつは主以上に私たちを気にかけてくれた。

おかげで我らは、少しずつまともな感情が働くようになって来た。

「ねーえさんっ。」

とある日の朝方、新聞に目を通していたカータは胡散臭い笑顔をしながら私に抱きついて来た。

「どうした、今日は学校に行く日の筈だが？」

自身の責務を放るのは感心しない。

視線を変えずに淡々と返事をする。

「今日は振替休日。この間土曜日学校だったでしょ？」

私の態度が気に食わなかったのか、カータは不満そうに頬を膨らませた。

『えと、シグナム姉さん…その…ごめんね…？』

あの日、我らが家族として迎えられた日の翌日。
カータが私にかけて来た言葉だった。

――――――

「すまない、何に謝られているか、わからないのだが。」

私の言葉にカータはきょとんとしていたが、再び口を開いた。

「えと、私が姉さんたちの事…自称ボディガードだなんて言っちゃった事。由緒ある守護騎士って奴なのに酷い事言っちゃって…」

申し訳なさげにおずおずと口を開く。
私としてもいろいろあって忘れかけて事実だろうに、この娘は覚えていた。

「いや、私もお前の事を主と似ていないという理由で浅はかな発見をしてお前を怒らせたんだ。お互い様と思ってくれ。」

考えてみれば謝るべきは私の方だったろう、家族の繋がりに血の繋がりは瑣末な問題…あの状況で言われて頭に来るのは道理という物

だ。

「うん、ありがとう姉さん。」

だというのに、こいつは自分のが悪かったみたいに許された事に屈託の無い笑顔を私に向ける。

本当に、今までの主らとは全く違った。

「あ、姉さん。あともうひとつ。」

「なんだ?」

先ほどまでの謝罪の態度ではなく、何か怒っているようにも見える。

「私が怪しかったのは分かるけど、いきなり剣を向けるなんて穏やかじゃないと思う。気絶しなかった私自身も不思議なんだから…。」

どうやら、カータなりのお説教らしい。

言われてみずとも反省の余地はある。

話を聞かずに剣を向けるのは騎士としてある前に人の形をした者の基本だというのに。

「すまない、気をつけよう。」

――――――

「シグ姉さん、聞いてるの?」

妹の言葉で私は過去の回想から現実に帰った。

「あぁ、今日は休みなのだろう？」

「やっぱり聞いてない。」

どうやら随分と惚けていたようだ、何か私に話しかけていたらしい。

「すまない、もう一度頼む。」

無視していた事に拗ねてしまったようだが、にこりと笑いながらカータは口を開いた。

「姉さんの魔法がみたい。」

随分とくだらない内容だった。

全く…真剣になった私が馬鹿らしい…。

「すまないな、それはできない。」

えー、なんでー、どうしてー

と機関銃のように文句がひっきりなしに飛び出る。

「私のはお前が求めるような物ではないし、易々と見せられるような物でもない。」

「ヴィータにも言われたよその言葉…私に素質があるなら一度くらい見てみたいのに…」

カータは今度こそ拗ねてしまったのか口を尖らせて視線を私から外した。

「シャマルやザフィーラにでも言えばどうだ？あの二人なら、お前の期待に応えられる。」

「…分かった。」

私の最善の妥協案だが、何が気に食わなかったのかカータはまだムスッとしたまま私の前から消えた。

だが、その数十分もした後だった。

「し、シグナム！ちょ、ちょっと…」

平静を装いつつも完全に慌てた様子のシャマルが私の元にやってきた。

ＳＩＤＥ　ＳＨＡＭＡＬ

「シャマル姉さん。」

はやてちゃんが私に用意してくれた部屋にカータちゃんがちょこんと入ってきた。

「今大丈夫？」

こてんと、容姿に見合った女の子らしい振る舞いで首を傾げる。

「大丈夫よ、なあに？」

もちろん特にやることがあるわけでは無いため断る理由は無い。

「姉さんの、使う魔法が見てみたいの。」

宝石みたいな青い目をキラキラと輝かせながら私を見つめる。

「魔法…？」

よくわかりきっていない私にカータちゃんの言葉は続いた

「うん、シグ姉さんや、ヴィータからは門前払い食らっちゃって…。」

彼女はアハハと笑いながら頭をかいた。

確かにあの二人の魔法は見せられるような軽い物ではないし…かといって私も見せることに前向きじゃないけど…

でも、可愛い妹みたいな…というより妹の頼みを無碍に扱うのも私としては好きじゃない。

「分かった。じゃあちょっと準備するから、待ってて♪」

「！、うんっ。」

笑顔で頷く妹の頭を微笑みかけながら撫で、自身の相棒、クラールヴィントに合図を送り、部屋を魔力を遮断する簡易結界で覆った。

「これは何？」

結界によって部屋の空気が変わったのが分かるのか、カータちゃんは辺りをキョロキョロと見回す。

「魔法が外に漏れないおまじないをかけたの。あんまり私も見せたくないから、ちょっとだけよ？」

魔法見せるとは、言ったものの、見せると言っても転移か、バインドくらいじゃないかな…。

あまり見せるとカータちゃんがこちらに入り込んじゃっても困るし…少し脅かしてあげちゃおっと…

容易に解除できないようなバインドを組んで、数分縛り付けを…

カータちゃんに向かって手のひらを向ける。きょとんとする彼女に魔力でできたミントグリーンの輪が彼女を縛り付ける。

「！？、！？」

突然の出来事彼女はかなり動揺している。

「シャ、シャマル姉さん、こ、これ…って。」

「そう、こんなのしか見せて上げられ無いけど、これが【魔法】よ。

バインドって言って対象を拘束するための魔法よ。」

クスクスと笑いながら目の前で私のバインドに悪戦苦闘をする妹を見守る。

ちょっと強めに編んでみたから、まともな魔導師でないこの子には解除は無理。

そう踏んだ私はこんな風に挑発した。

「それを壊せたら、シグナム達に説得してあげてもいいですよ、カータちゃん。」

「ホント!?よーし…これを解けばいいのね…?」

案の定その気になったカータちゃん、私はてっきり力づくで暴れるのかと思ったら、静かに目を閉じ何か考えているようにピタリと止まってしまった。

そんな事をしてもまともな魔力運用もできないこの子にはこのバインドは壊せる物ではない。

「X＝…だから…この値…に……代入して…」

何か私には理解できない事を呟いている。

不思議に思って私が声をかけようとしたそのとき。

「計算、完了!」

彼女の言葉とバキンッと

「え…？」

そんな音と共にバインドが砕け散った。

「やった！私の勝ち！」

嬉しそうに無邪気なガッツポーズをするカータちゃんを私は呆然と見つめた。

「シャマル姉さん、私の勝ちだね。」

「え、えぇ、そうね…アハハ…ちょっとシグナム呼んでくるわね。」

という訳でカータちゃんの制止も無視して、混乱気味な私は急いでシグナムの元へ向かった。

――――――

「お前のバインドが緩く設定された訳ではないと…」

シグナムに粗方の説明をした。

いつもの凛とした表情を曇らせ思考に耽っている。

「ともかく、ちょっと来て、それが一番手っ取り早いわ」

「そうだな。」

と、いうわけでキョトンと状況を理解できてないカータちゃんを2人で見据え…というか睨みつけてる。

「え…えっと…シャマル姉さん?私、なにか悪い事しちゃった?」

シグナムの視線がよほど鋭かったのか私の服をすがるように掴んできた。

「えっとね――「カータ。」」

「は、はいっ。」

私の言葉を遮ったシグナムの言葉にビクリと直立するカータちゃん。こうして見ると普通の女の子なんだけど…

「そう、怖がるな。先ほどシャマルのバインドを破ったそうだな。私も見ておきたい。」

いいな?シャマル?

シグナムの視線が私に問いかける。

コクリとアイコンタクトに答え、再び目の前の少女に先ほど同様バインドをかけた。先ほどより少しばかりキツく編み込んだ。

「ちょっ…、ッ……。」

突然のバインドに困惑気味のカータちゃんだったけど、すぐに目を

閉じやはり何かに集中しているような仕草をすること数十秒。

バキンッ

「「……。」」

シグナムはもちろん、二度目の私でさえ驚きが隠せなかった。

一体この子は何をしたのか？

それが全く分からない。

「ね？シグ姉さん。すごいでしょ？」

そんな私たちをよそに目の前の少女は明るい笑みを浮かべてシグナムに問いかけていた。

「カータ、お前は一体何をした？」

「え？」

コテン、と首を傾げているカータちゃんにシグナムは続けた。

「シャマルのバインドをどうやって解除したんだ。と聞いている。」

私が聞けないでいた言葉をシグナムが代弁した。

「うーん、どうやって…って言われても…見えた数式を解いたら…としか…？」

数式…？
確かに私たちの魔法はプログラムみたいな物だけど…この子はそれが見えるっていうの…？

「「レアスキル…。」」

魔導師の中には、その人だけしか保有しない稀有な能力があると聞いた事がある。

もしくは、私たちが無意識下でやってる事を意識的にこなせるだけか…

「カータ、お前の両親は私たちと同じ魔導師だったか…？」

シグナムが不意に問いかける。

「う、ううん…少なくとも普通の人だったけど…。」

シグナムがこちらに視線を向けた。
そういう事ね…。

リンカーコアとはそもそも遺伝するもの。
でも、中には父母にリンカーコアが無くとも突然変異でリンカーコアが発生する…詰まりは不正分子―イレギュラー―…。

「私、おかしいのかな…」

そんなカータちゃんの消えそいな言葉に私たちの思考は中断された

「そ、そんな事ないわ。ね、シグナム？」

月並みな言葉しか出せない私は思わずシグナムに問いかけた

彼女なら私よりうまい言い回しをしてくれる。

「あぁ、例えおかしなチカラでも、それはお前だけのチカラだ。誇りを持て。」

その言葉に彼女の顔は少しだけ明るくなった。

「うん、ありがとう。」

その顔を見るだけで、早く姉になって、妹となるこの子をしっかり守らなくちゃ

などと、シグナムみたいな事を考えてしまう私でありました。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

夜、みんなとの晩御飯を終えた後、私はシグナムに抱かれて夜空を見上げていた。

綺麗な夜空を夢中になって眺めていると

「主はやて、よろしいのですか？」

と、不意にシグナムが話しかけてきた。

「なにが？」

私が見上げて尋ねると、シグナムは戸惑うように続けた。

「闇の書の事です。あなたの命あれば、すぐにでも蒐集を始めます。そうすれば大いなる力を得られる。この足も…治る筈です。」

なんや、何かと思えばそんなことかいな…

そんなの答えは

「あかんて」

もちろん

「ページの蒐集はよそ様にご迷惑がかかる。そういうのは、よくない。」

ノー、や。

「私は今のままで十分幸せや、父さん母さんは今はもうお星様やけど遺産の管理はおじさんがやってくれてるから生活にも困ってない。」

そう、これ以上、私は何もいらへん。

「お父上のご友人、でしたか…？」

「うん、おかげで生活にも困ってない。…それになにより、今はみんなが居るからな。」

可愛い妹に、新しくできた家族みんなが居る。
これ以上望むなんて贅沢も甚だしい。
だから…

「はやて！」

そんな私とシグナムの会話はヴィータの言葉に中断させられた。

「おぉ、どないしたヴィータ。」

「はやて、冷蔵庫のアイス食べていい？ちょうど一つ残ってた。」

買ってあげた人形を抱えたままヴィータは相変わらずな様子。
そ、私はこれで十分。

「お前…夕食をあれだけ食べてまだ食うのか」

「うるせえな、育ち盛りなんだよ。はやての料理はギガウマだからな。」

シグナムの言葉にもっともそうな言葉を返してるけど、ヴィータたちの体って成長するんやろか…

「しゃあないなあ、ちょうどだけやで。」

「おぉ。」

一つってのが気になるけどまあ多分気のせいと思おう。
あ、言い忘れてた。

「シグナム。」

「はい？」

こちらに真っ直ぐ目を向ける守護騎士の将。

「シグナムはみんなのリーダーやから約束してな。」

シグナムなら、きっと守ってくれる。なんたって闇の書の主の最初の命令や。

「現マスター八神はやては闇の書に何も望み無い。私がマスターでいる間は闇の書のことは忘れてて。みんなのお仕事はうちで一緒に仲良く暮らすこと、それだけや。」

シグナムは私の言葉に明らかな戸惑いを見せた。
分かってないなら、もう一度、締めの一言や。

「約束できる？」

そう言うとシグナムはもう一度私を真っ直ぐ見つめて返してくれた。

「誓います。騎士の剣に賭けて。」

私は思わず顔が綻ぶのがわかった。
すると、うちの中から怒号が飛んできた。

「あー!!!!、ヴィータあああ!!!!私のアイス食べるなあああ!!!!」

聞こえてきたのはカータの声。
やっぱりカータのアイス…。
そういえば、『手をだしたら許さない』と釘を打たれてたような…。

「う、うるせえな…姉ちゃんのなら、ちゃ、ちゃんと名前書いとけよ!」

明らかに動揺してるヴィータの声。
いやヴィータ、ちゃんと名前はあった筈やで…

「その親指をどかせええ、ちゃんと名前があるでしょ!!!!」

そんな喧騒が聞こえてくる。これはそろそろ割って入らないと早速戦争が始まってまう…。

ここはお姉ちゃんとしてちゃんと管理せんと

「全く、騒がしいですね。やらせておきますか?」

思ったけど、微笑ましそうなシグナムの言葉にそんな気は失せてしまった。

「せやな、もう少しやらせとこか。」

そ、私は今のままで十分。
闇の書ができたってこれ以上の幸せは得られへん。

ちなみに、アイスでご乱心のカータはそのあとヴィータがアイスを返して私が後日新しいのを買う。

という話がまとまりようやく落ち着いてくれた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第七話　騎士の誓い（後書き）

第七話、いかがでしたか？

前半はカータの主人公特有の能力の話でした。

果たして彼女の切り札と、成るのでしょうか…？

今回はこれまでです。

お読みくださってありがとうございました。

次回投稿でまた会いましょう

第八話　記憶（前書き）

第八話とありますが、完全な閑話です。

無駄に長いのはお約束。

どうしても言わせたかった台詞をいうためだけに作った閑話です。

ではどうぞ

第八話　記憶

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

あれは、夏休みに入る少し前のお話だった。

「よし、遊びに行こう！」

そんなリエちゃんの言葉から始まったんだと思う。

「ほんと、唐突…何？いきなり？」

カータちゃんはため息をつく、うんざりだとでもいいたげな口調だけど僕には楽しそうに見えた。

「夏よ！？夏！海に決まってるでしょーがあああ！」

妙にハイテンションで騒いでいる。

因みに場所は僕の部屋。

だから赤の他人にみられるような杞憂は無いけれど、それでもおばあちゃんたちがうるさがらないかどうか考えてもいいんじゃないかな…

「ん？なあにガイキン？その…もう少し恥じらいを持っておしとやかになりなよ…な視線は。」

彼女の視線に思わずドキリとする。

全く…リエちゃんには生涯かないそうにない。
苦笑いでとりあえず僕はごまかした。

「…遠出なら私はパス。」

不意にカータちゃんが呟いた。
どうしたんだろ…

「うちからあまり遠出できないお姉ちゃんに申し訳ないし…なにより」

「なにより…？」

俯いたカータちゃんの顔をリエちゃんが覗き込むように尋ねた。

「小2の私たちじゃ制限がありすぎるっ」

カータちゃんの口から荒ぶる正論が飛び出た。

「うん、確かに…僕電車に一人で乗った事無いし…」

当然僕はそれに賛同する。あんまり遠出しておじいちゃんたちを心配させるのは僕も良いとは思えない。

「ふっふっふ…」

そんな僕らを前に不敵に笑う少女、カータちゃんはこういうときのリエちゃんを「悪女」と呼んでいる。

「お二人さん…アタシたちには強い味方がいたのを、お忘れかな？」

クスクスと不思議な気配をだしながら笑っている。…あぁ、そういえば僕らにはそういう面には滅法強い友人がいたのを忘れていた。

「アリサさんたちに話すのはＮＧだからね。」

もちろんそんな戦法を許すカータちゃんでもない。そもそも彼女は遠出を反対してるのだから、それも当然と言えば当然である。

「小学校二年生の私たちには近場の市営のプールで十分なの。」

僕には良くわからない発想だけど、なるほど的を射ている発現だとは思う。

「…チッ…わかったから、そうやって私をいじめないでよー」

今明らかに舌打ちをしたけど、この人にそういうのを問いただしたらきりが無いのを僕らは既に思い知っている。

「えーっと…つまりは、夏休みのどこかで、プールに行くって事でいいの…かな…？」

既に頭の中が混乱しつつある僕にはこれくらいの言葉しか出てこなかった。

「そういうことなのだよガイキン、君は両手にお花を持ったつもりでいたまえー」

よくわからないけど、とりあえずプールに行くというのは正しかったらしい。うん、そういうことなら夏休みが楽しみだ。

そ、これは僕達が友人として初めて過ごす夏休みのほんのひとときの思い出の話だ。

――

夏休みは思いのほかすぐに訪れた。というより、夏休みが訪れるほんの数日前だったというのもあったからだ。

でも、僕の前には二人の約束よりも強い障害が立ち塞がった。

「うぅ…宿題ってこんなにあるんだ…。」

学校を午前中で終えて僕は机に座りながら先生からもらった夏休み用の所謂日誌と呼ばれる宿題を恨めしげに睨んでいた。

悩んでも仕方が無いので、とりあえずは開いて少しずつやっていこうと、鉛筆を握ってそぼそぼと問題を片付けていると

「概貴や、お友達から電話だよ。」

おばあちゃんが部屋に入って呼びかけてきた。

「おや、宿題かい？偉いねぇ、早めにやっておくんだよ。」

「うん、それで誰から？」

おばあちゃんの言葉にうなづいて、僕は首をかしげて尋ねた。

「あぁ、そうだったそうだった、この間来た元気のいい女の子…外国人の子じゃない…」

おばあちゃんのカータちゃんの認識は外国人の女の子で定着してしまったらしい、なにしろ第一声が『おやおや、日本語が上手だねぇ』と声をかけたくらい。とりあえずカータちゃんじゃないなら、もう一人しかない

「リエちゃん?」

「おぉそうだそうだ、リエちゃんだったねぇその子から電話だよ。」

僕の言葉におばあちゃんは手のひらをポンと叩いて閃いたように答えた。

というかリエちゃん…電話なのに名乗らなかったんだ…。

「はい、替わりました。どうしたの?」

「はぁい会いたかったわぁダーリン」

「うーん、僕に奥さんは居ないから間違い電話かな、さようなら。」

「ちょっ、冗談冗談。お願いだからきらないでぇー」

おかしな前置きをされて困ったからとりあえずカータちゃんみたいなあしらい方をしたけど間違いじゃなかったみたいだ。

うん、これからちょくちょく使ってみよう。

「わかってるよ。で、どうしたの？」

「む、最近カータみたいなあしらい方をするんだね、まあいいか。前に話したプールの件いつがいいかなって思って。」

さすがリエちゃん、こういうときでも早い、でも僕としては行くんだったら本当にいつでも良かった。受話器を手に持ったまま直立不動の姿勢でクビをかしげてみるも一向に良い返答の仕方が見つからない。

「ふむふむ、君はいつでも良いというクチか。よし、ではもう一つの質問。」

受話器越しにリエちゃんは勝手に理解を進めて質問を変えてしまった。

でも、他に質問なんて無いと思うけど一体なんなんだろう。

「アタシたち三人というのも悪くはないが、例の三人も混ぜるのはいかがかと思ったのようん。」

あの三人…あぁアリサさんたちのことか。ここでもう一回あの人たちと親交を深めるのも悪くない話だと思うけど。

「うーんそうだ…ね…？」

不意に

「何故に疑問系だし、こちらはキチンとガイキンの意見を仰ぎたいんだけど。」

何かよくない予感が僕の脳裏を走った。

「ぼ、僕は三人がいいな…うん。三人がいい。」

突如の意見換えに電話越しに沈黙が流れた。

が、数秒もしないうちに

「わかった。カータにはアタシが言っておくね。じゃあバイビィー♪」

と、電話を切ってしまった。

ツー、ツー、ツー、という独特の音が鼓膜を震わす。

あれは一体…なんだったんだろう…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

さて、小学生の夏休みには宿題と呼べる大きな壁が存在する。

でも私には、それはフェンスくらいの高さ。

もらったその日に日誌を終わらせるつもりで日誌を開いたその時。

コンコン

扉をノックすると共に狼の姿のザフィーラ兄さんが入って来た。

狼の姿なのはお姉ちゃんは兄さんをペット扱いしてるからだ。本人は魔力燃費がどうとか言ってたけど…。

「なに?兄さん。」

「お前に電話だ。級友からしい。」

そう言うと、子機をくわえて私に渡してくれた。

「うん、ありがとう。」

かがんで子機を受け取ると、兄さんはそのまま足早に部屋を出て行った。

電話だから気を使ってくれたのかな。

でもあの姿でどうやってノブを回してるのか未だに謎な気がする…

「っと、電話電話…。」

余分な思考で電話の存在を忘れるとこだった。

「もしもし替わりました。」

「マイハニー、ボクを放置なんて酷いじゃないかあー」

受話器から聞こえたのは聞き覚えのあるアレの声だった。

「間違えてますよ、切りま――」

「嘘々嘘々!…全く…ジョークもまともに流せないなんて…」

電光石火の切り返しと共にため息の合わせ技をかけられた。

めんどくさいなあ、ホント。

「わかったわかった、用件は？」

最近はこれを言わないとこいつは永遠にだべり続ける。
ネタ切れというのを知らないのだこいつの頭は

「プールの話。あんたはいつがいい？いつでも良いならアタシが調整するけど」

あぁ、そんな話もあったっけとりあえず考えるフリをして唸りながら首をかしげて見る。まあかしげたところで見えはしないけど

「特に予定なんか無いから適当に決めちゃって、私はいつでも大丈夫だから」

数秒にて既に出ていた結論をリエに叩きつけた。電話越しに何故かため息が聞こえたけど多分気のせいだろう。

「りょーかい、じゃあもう一つこれが重要。」

「まだあるの？いいから早く済ませてよね日誌を今日中に片付けるんだから」

こちらも受話器にため息をつきながらちらりと机に広げられた日誌に視線を向ける。

「全くできる才女はおっしゃることが違うねぇ、まあいいやアタシたち三人以外にも誘おうか考えてるんだけどアンタの意見を仰ぎたいの。まあガイキンは三人が良いって言ってたんだけど」

リエの言葉に私は少し驚いた、大勢のほうが楽しいからって真っ先に概貴くんは言いそうなのに…案外そういう所もあるんだなぁ

「概貴くんに合わせる。私も三人のほうが落ち着くし」

あの三人にまた会いたいという気持ちは0ではなかったがたまに出る彼の意見は尊重しないと。

「了解、じゃあ日程の件と水着の件はアタシに任せたまえそれじゃあねぇー」

聞き捨てならない言葉とともに受話器が切れる瞬間

「待て、水着くらい自分で用意できるから変な真似したらタダじゃオカンゾ」

その言葉とともに一方的に電話を切ってやった。前途多難ではありそうだけど、夏休み最初の良い思い出になるといいな。

「宿題宿題。」

さて、まずは目の前の壁を打ち崩しましょう、うん。

リエの決定は早かった、私が日誌の9割を片付けた頃合…時間にして8時ちょっと前くらいだったろうか

一本の電話とともに日程は三日後という知らせをリエから直接聞き

その三日の間に私は用意された宿題を粗方片付け、自身の能力落ちぬよう密かに用意した高校生の参考書片手になんとか自身の能力維持しつつ私はその日を迎えた

「じゃあいってきます。」

「気いつけてなぁ」

「いってらっしゃーい」

玄関にて見送りにきてくれたお姉ちゃんとヴィータに向かって一言つげて二人の言葉を背に受けながら私は待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所には既に二人の姿があった、いつもどおりの意味不明なリエをあしらいながら市営のプールに三人で歩いて行き歩くこと大体5分少し、市営のわりには中々に綺麗なところなのに少し驚いた。

「去年改装があったからねぇ…ってアンタは知らなかったのか。だからこの夏はいつもより混むのだよハッハッハ」

びっくりするくらい混みあっている脱衣場にて朗らかな笑い声を上げながら爽やかな笑顔で私にグッと親指を向けてきた。

「で、リサーチも無しに行動を起こした結果がこれって事ね。まあ別に構いやしないけど」

どちらにしたって夏休みのプールなんてこんな物だ。というか私はリエがいるけど概貴くんは単身で男用脱衣場に入ってしまったからそっちのほうが不憫でしょうがない。

「あれも男として生まれた者の運命だよ。諦めたまえ」

そんな杞憂をよそにリエは同じようにハッハッハと笑いながら淡々と着替える。

こんなのには何度生まれ変わろうとなれる気がしないな。うん。

学校用の水着でないところがまたコイツらしいっていうか白いスクール水着って訳のわからんチョイスだ、もちろん私は学校用の水着、ぶっちゃけ買いに行くのがめんどくさかったというのもあるけど小学生がそこまで色気づいたって仕方ない。

「そういえば、ここのプールって施設的にはどうなの？私来たこと無いから全く知らないんだけど」

コイツの水着について触れたら負けな気がするからとりあえずプールサイドにて歩きながらテキトウな話題をふる

「まあまあだと思うけど、しょぼいけどスライダーと流れるのがあるし」

思ったより施設的には良いみたい。まあ私は三人で楽しめれるならなんでもいいけど

「というかカータ、アンタ学校用の水着かい、アタシを見よ！この純白のスクｍ――」

「あ、概貴くんだ。こっちこっち。コレはほっといてれっつごー」

「え？ちょっとカータちゃん？」

こんな阿呆に付き合ってたら日が暮れるのは必至だ概貴くんの手を引いて半ば強引に連れて行き、そのまま私はリエを置いていく

「ちょ、放置は酷い！待てい」

後ろで何か聞こえるが気にするもんか、アレの思考回路には付き合ってられん

――――――――――――――――――――――――――――――――

久しぶりにプールで思いっきり楽しんだ、リエはまあまあとは言っていたが私が知ってるような市営のプールなんかとは比べ物にならない
スライダーは思いのほか長かったし面白かった。流れるやつだってはしゃぐにはもってこいの空間ではあったし。
とりあえずなんだかんだでお昼に回るのはとても早かったというわけ。

弁当はお姉ちゃんに頼んで三人の分を用意してもらったのだが、肝心な飲み物を置いてきてしまった。
私が取り乱しリエがそんな私をからかうなか

「じゃあ僕ちょっと買ってくるよ。」

と、施設内の少し離れた自販機に走っていった。

「愚か者めぇクックッ…」

悔しい…ここまでコイツにコケにされたのは初めてかもしれない。

「う…うるさい…」

クスクス笑うリエの笑い声で余計に恥ずかしくなる。あぁきっと顔真っ赤なんだろうなぁ

「カータ」

「もう言わないで。」

リエの調子が変わったのにも気づかないほど私は取り乱していたのか拗ねたように私は返した。

「アンタさ、たまぁに意味深に暗い時とかあるでしょ？」

「え？」

不意に変えられた話題に素っ頓狂な声を上げてしまった。

「そっちは隠しきれてるつもりかもだけど、結構分かっちゃうんだよねぇ。アタシじゃなくて、ガイキンが。」

ガイキン実は結構鋭いんだぞぉ？などといいながらリエは私の顔を覗き込んだ。返す言葉が見つからなくて私はただただ気まずくて視線をそらすだけ。

「いつもアタシに言うんだよ。『カータちゃん、今日なんか変』って、いや驚いね。あの鋭さで私と同い年だなんて。」

「っ……」

押し黙る私にリエはいつも私をからかうような口調だけど、トーンは低い。つまり、私に怒っているんだ。

「まぁカータにはカータなりの理由があるんだろうし、アタシは何も言わないけど。どうせ気づけないし、だけどガイキンくらいには話してやりなよ。あれで結構ナイーブなんだからさ。」

どこか自嘲的な感じの言葉にはしっかりと私を叱咤する言葉があった。

「うん、ごめん。」

「分かったならいいのだよ。まあつまりは君の発育の良い体を私に堪能させろという意味ｄ」

「えぇい黙れえええええええええ」

後ろに回ってセクハラ行為直前にいたるリエに渾身…にしたら不味いので倒す程度の勢いの裏拳をお見舞いしてやった。
すっかりいつもの調子に戻ったリエにどこか安心した私がいたのは内緒。

「ただい…ま…リエちゃんどうしたの？」

戻って来た概貴くんが目の当たりにしたのは私の体面でテーブルに突っ伏すリエの姿だった。

「概貴くん、悪を滅ぼしたよ。」

なぜか清清しい気分になってる私だったけど、事情を知らない彼はもちろんキョトンとした顔で首をかしげるだけであった。
まあ、その悪はこの数秒後に蘇ってしまったんだけど。

――――――――――――――――――――――――――――――――

時間感覚というのは結構曖昧な物で、楽しいときに限っていつの間にか終わってしまう。
まあ辛いときでも過ぎてしまえばあっという間なんだけど。
でも、今日は本当に一瞬のような出来事だった。夢かと思えるくらいに。
多分、ここに来ての最初の友達との思い出だからじゃないかと私は思っている。
私がそんな思考をしていると、不意に視線を感じた。そういえば帰り道だったのを忘れていた。
視線の主はどうやら概貴くんらしい。
リエがいないのにようやく気づいた。そういえばさっき別れたんだっけ。

「なに？」

首を傾げて視線を重ねる。

「何を考えてたのかなって思って。夕焼けに良く映えてたから、つい。」

思わず顔が熱くなった。
それって綺麗だよーとかそういう意味合い？

考えれば考えるほど　赤くなるのがわかったから思わず顔を背けてしまった。

「？、どうかした？」

たちが悪いのは目の前の少年はそれを理解してないこと。
私だけ赤くなって馬鹿みたいだ。
そう考えると自然と火照りは消えていった。

「…楽しかったね。」

問いかけに答えないのを諦めたのか概貴くんがふと呟いた。

「…うん、また行こうよ、今度はなのはさんとかも入れて。６人ならもっと楽しいよきっと。」

私の言葉に概貴くんは僅かに表情を曇らせて、笑いだした。

「でもそれだと僕が居づらいよー、女の子５人に囲まれるのって結構しんどいんだよ？」

「あ、そっか…」

概貴くんの言葉でようやく気がついた。つまり彼が渋ったというのはそういう事だったのか。

「あはは…でも、みんなが誘ってくれたら僕は行くからね！？」

何故か強い口調で返してくれたけど、別に非難はしてないのに。

「そんなに強く言わなくても分かってるよー、それに無理強いはしたくないし」

アハハとよく分からない勢いでお互い笑いながら帰り道を歩いて、別れた。

夏休みのワンシーン
なんだかんだで夏休みで一番印象に残る思い出。

何事も最初の感動には勝てないという奴。

まだ幸せな時間が続いていた時間。

でも、その時間は急に壊れてしまった。

あれは、秋が終わって冬が顔を出す、季節の境目。
私が永久に忘れる事が無い大切な記憶で、私の中に残る永遠の罰の話。

第八話　記憶（後書き）

如何でしたか？

さて、次回からはようやくA'ｓ本編です。原作の大筋をぶち壊す恐ろしい考案がすでに頭に出来上がってます。

ですが、考えた以上は完結さます。

感想、レビューお待ちしてます。

あ、不躾ながら、主人公のデバイスの名前候補を募集します

名前のテーマは

「繋がり」

お待ちしてます

では、次回投稿でお会いしましょう

第九話　始点（前書き）

こんにちは、作者です。ようやくA'ｓ本編が始まりました。

ここから原作ブレイクが始まって参ります！

俺が見たなかでは
誰も展開していないおかしな展開のA'ｓ始まるよー

…サーセン調子に乗りすぎました。
というわけで、本編が始まります。どうぞ。

第九話　始点

ＳＩＤＥ　ＳＩＧＮＵＭ

我々の平穏は長くは続かなかった。

我ら守護騎士の出現から僅か半年待たず、主に異変は訪れた。

闇の書が主はやての命を蝕んでいる。

それは我らが守護すべき物を食い物にしていると同義だ。

私は自分が許せなかった。何より、異変が起きるまでのうのうと平和ボケしていた自分がもっと許せなかった。

「姉さん…どういう…事…？」

カータは今にも崩れてしまいそうな顔をして言った。

「「……。」」

私とシャマルは何も返せなかった。その震える肩を支えることすらもできない無力さに腹が立つ。

事情を話したのは失敗だった。

だが、話さなければいつかは露顕する。
相手がカータならばなおさらだ。だから、ヴィータに話すついでにカータにも話してやった。

「助けなきゃ……なあ…シャマルは治療系得意なんだろ！そんな病気治してくれよ！」

ヴィータがようやく口を開く。縋るようにシャマルに叫ぶ。だが、あれは治療でどうにかできるレベルの話ではない。

「ごめんなさい…私の力じゃ…」

シャマルの言葉で沈黙が流れる。重い沈黙。
これまで確かにあった平穏な日常は音を立てて崩れていく絶望を突きつけられたかのように。

「お姉ちゃんが…闇の書の主に目覚めれば…いいんでしょ…？」

カータはうつむいたまま口を開いた。
長い銀髪に隠れる表情には何があるのか、私には分からなかった。

「あぁ、主が真に覚醒すれば闇の書は主を蝕みはしない。」

カータは顔を上げ、こちらに真っ直ぐ視線を向けた。
強い光が、その蒼い瞳にはあった。

「闇の書を完成させよう！お姉ちゃんを…助けるために！」

「言うまでもない、主の幸せは我らの幸せ。主の命のためならば騎士の誓いであろうと折らねばならん。」

幸い、甲冑は既に主はやてが用意してくれている。
蒐集の準備は完璧だ。

だが…

「私も――――」

カータには

「駄目だ。」

その責務を負わせる必要は無い。
血なまぐさい戦場をかけるのは我々の役目だ。

「ど、どうして!?」

カータの反論に私が返す前にヴィータが前に出てきた。

「姉ちゃんにやらせる訳にはいかねえ、これはあたしらの役目だ。
姉ちゃんを危険な目に合わせる訳にはいかねえ。」

「で、でも!…私にだって…」

だが、カータはなかなか食い下がろうとはしない。

「では、お前に闘う術はあるのか?仮にお前が魔法を扱えるとしても、デバイスはどうする?お前には闘う為の武器が存在しない。それでもお前は闘うつもりなのか?」

事実だけを突きつけた。カータにとっては辛い事実だが、巻き込まぬ為なら致し方ない。この世界で新たにデバイスを手に入れるなど不可能に等しい。…それこそ奇跡でも起こらぬ限り。

「いいよ、手に入れてやろうじゃない…私がデバイスを手に入れて姉さんたちと同じ魔導師になればいいんでしょ！？」

「あぁ、話はそこからだ。」

私は頷きながら答えた。

だが私は、この軽率な発言の後悔と義妹であるこの娘が持つ幸運と奇跡に驚く事になる。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

夏休みが終わってからやっと二ヶ月。早く冬休みが来ないかななんて、考えながら布団から出づらくなりつつある室温に愚痴りながら部屋から出た。

朝ごはんを片付けて学校に歩くこと３０分。これは僕の登校時間、いつもの通り教室の扉を開く。少し早く来てしまったせいか、教室には隣の席の友人しか居なかった。

「おっはよう。」

静かに座っている銀色の髪の友人…カータちゃんに目一杯笑いなが

ら挨拶をした。

「あ、おは、よう。」

でも、カータちゃんは僅かに表情を暗くし、すぐに笑いながら挨拶を返してくれた。

こういうとき、僕はどうしたらいいのかたびたび判らなくなってしまう。

だから僕はいつもこんなときは黙っていることにしている。教室にある学級文庫の棚を覗き込んだり、廊下にある窓から上級生の人たちが走り回るのを眺めたり、とにかくできるだけ話しかけないようにそっとしておくことにしてる。

だけど、今回ばかりはこうはいかなかった。

不意に背中を叩かれ、振り向くとそこにはカータちゃんが僕から不安気に視線をそらしてそこにいた。

「?、どうかした?」

「えっと、ね……ううん……なんでもない……。」

何か言いかけるように口が開いたけど、首を横に振りながら答えるとそのまま階段を駆け上がって行ってしまった。

何か悪いことをしてしまったかと、必死に心当たりを探してるけど、やっぱり分からない。

もしかして、6月に新しく来たっていう親戚の人と何かあったのかな…?

考えても答えが出るわけでもないから、僕は一旦そのことについて考えるのを止めて、席に戻ることにした。

そのうちリエちゃんが来るだろうし、リエちゃんに任せればどうにかなるかな。
なんて楽天的な考えで僕は少しばかり静かな教室を楽しむことにした。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

今日の授業が全部終わった。結局、朝のアレ以来カータちゃんが僕にそれらしい行動をしてくることは無かった。触れるつもりは無いにしてもやっぱり気になってしまう。うーん、そんな態度が表に出てなければいいけど…

「へい、おふた方一緒に帰ろうＺＥ☆」

僕らの後ろから突然の声とともにいきなり背中から何かがとんできた。

「うわっ…リエちゃんは僕らとは別方向じゃない。どうやって帰るつもり？」

「ふっふっふそんなの校門前にきまってるじゃないか…」

だんだん声のトーンが低くなっている。自分でも分かってるんだろうなぁ…【空しい】って。

「うん。じゃあ、早く帰ろうか。」

以外にも一番今のリエちゃんにツッコミを入れそうなカータちゃんが静かに笑った。やっぱり今日の彼女はどこかおかしい。

「素直な奴はお姉さん大好きだア、さあ先生と一緒にあの校門までダッシュだぁ！」

どこぞの熱血教師みたいにウガアと両手を挙げて僕らの手を引っ張りだす。

ダッシュしたら一瞬で一人になってしまうんじゃ…まあここはスルーが大事だよね、うん。

そして、校門までのダッシュのおかげでモノノ一分もたたずに校門を出ることとなった。

「アアアアアしまったあああああああ、これでは早々と一人になってしまうぅぅぅ！」

案の定ぎゃあぎゃあとわめきながらカータちゃんに抱きついたまま離れようとしないリエチャン。

分かりきっていただけに笑うしかない、というより僕は今楽しくて爆笑に近いんだけど…。

「全く家も近いのに何いってんだか。ほら、離れろい。」

ウリャッと頭をボスリと叩かれそのまま大人しくトボトボ彼女は行ってしまった。途中何か言ってた気がするけど気のせいということにしよう。

「相変わらず元気だねーハハハ」

さっきまでの笑い声がまだ止まらず、笑いながらカータちゃんに振り向いた。

「うん、ホント、元気。」

駄目だ今日のカータちゃんはどこかおかしい。
やっぱり黙っているべきだったかな、そんなことを考えながら並んで歩き続ける。
言葉一つかわされずにもう１０分ほど経過している。

「ねえ、概貴くん」

「なに？」

突然の言葉に思わずドキリとしてしまった。

「今から遊びに行ってもいいかな。時間が有ったらで構わないんだけど。」

こっちを見てるはずなのに、どこか別の虚空を見ているかのようなそんな視線。そんな彼女の言葉に僕は思わず頷いた。何か用事があったわけじゃないから別に構いやしないけど。

――

「ただいまー」「お邪魔します。」

途中カータちゃんのうちに寄り道して、僕は彼女をうちに呼んだ。
おばあちゃんも最初とは違って『よく来たねえ』と気さくにカータちゃんに挨拶をしてくれた。

「うーん、何して遊ぶ？あんまり遊び道具が無いからさ。」

自分の部屋にあるものをひたすらさばくりながら首をひねっている僕にカータちゃんは突然しゃべりだした。

「概貴くん、魔法って、信じる？」

唐突な質問。でも、彼女の視線はあの時自分のことを話してくれたときの視線だった。だから、僕も真剣に時間を置いて返事をした。

「カータちゃんや、リエちゃんがもし魔法使いだっていうなら、僕は信じるよ。例え魔法を見せてくれなくても。」

「そっか……私ね、魔法使いにならないといけないんだ。…お姉ちゃんのために…姉さん達を助けるために…」

うつむきがちに床を見ながら彼女は語った。僕はそれを変だと蔑む気にもならずに黙って聞き続けた。

「でもね、そのためには杖が必要なんだって。でも、私はそんなもの持ってない。きっと姉さんたちもそれを分かってて私にそうやって言ったんだと思う。私を巻き込まないために。」

そこで話は止まった。なぜなら、カータちゃんの目から涙が流れ始めたからだ。

「カータちゃんがやりたいと思うことをすればいいんじゃないかな？そのためなら、僕はなんだって力になる。魔法の杖が欲しいなら、僕が手に入れてきてあげる。」

「うん…ありが…と…気持ちだけで…うれしいよ…。」

少し吐き出して楽になったのか、やっといつもの笑顔を見せてくれた。よかった、いつものカータちゃんだ。

「そうだ、お守りあげる。この間おじいちゃんに綺麗な物をもらったんだ。」

僕は夏にもらった不思議な十字架を思い出し、机の中から引っ張りだし、箱の中から取り出してカータちゃんの手の中に握らせた。きっとカータちゃんの力になる。そんな確信があった。

だって

「本当だね、大事にする。」

僕は

『魔法資質確認』

君のためだけの

「え？」

主人公（ヒーロー）だから

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

『魔法資質確認』

突然の出来事だった。概貴くんからもらった、十字架…多分首にかけるタイプのアクセサリーだと思う…それが突然声を発した。

「え？」

私が出来た反応はそれだけ、うん。我ながら普通すぎる。

『現在このデバイスを持っている人物の魔法資質を確認。問います。貴女が私のマスターですか？』

目の前のこの十字架は私に問いかけているのだろうか？分からない、何がなんだか分からない。

「カータちゃん、大丈夫だよ。コレは君に問いかけてるんだ。」

概貴くんの言葉でようやく我に還れた。戸惑いがちにコクリと頷いた。

「そう、わ、私がアナタの持ち主。マスターだよ。」

私の言葉に電子音はどこかうれしげに答えた。

『了解、マスターの認証を行います。貴方の名前と私の名称をお付けください。』

名称…名前をつけてくれって事かどうしようか、名前を付けてくれといわれても自分にそんなご大層なネーミングセンスなど有りはしないし…あ、どうせ名前は物語からの抜粋なんだから、こちらも抜粋すればいい。同じ作品から取って…ゲイト…なんてどうだろうか。

「ゲイト、アナタの名前は、ゲイト。」

私の命名と共にゲイトは電子的な音をピピピと出し始めた。

『デバイス名称、【ゲイト】。登録完了しました。マスター次は貴女のお名前を私にお教えください。』

名前か、そんなのは迷う事など

「私の名前は八神…」

有った。

私は、誰だったのだろうか。【カータ】ではなく、【私自身】を忘れないために私はこう名乗った。

「エミ。カミヤ、エミ。アナタのマスターはカミヤ　エミだよ。」

再び電子音が鳴り響く。その音は機械のソレを彷彿させる物ではなく、どこか神秘的な物を感じさせるなあ…と今更ながらに気がついた。

『マスター登録が完了致しました。これより私は貴女の第二の頭脳。魔法の使用に関する演算能力の全てに於いて、貴女を全面的にサポート致します。』

電子音の声が十字架から響く、つまり、今日からコレが私のパートナーということ。

そう、ここに一人の魔導師。【カミヤ　エミ】が誕生した瞬間だった。

「よかったね。」

概貴くんの言葉で再び呆然とした意識が還ってきた。
そうだ、これもそれもみんな概貴くんのおかげじゃないか。

「うん、ありがと。君には助けられてばかりだなぁ…」

「僕は何もしてないよ、ゲイトに認めて貰えたのは純粋な君の能力。」

首を左右に振る概貴くんの言葉に謙遜や世辞は全くなかった。
彼は本音で私を褒めて、本音で助力をしていないと思っている。
言葉は更に続いた。

「でも、もし僕が君を助けることになるなら、それは当然の事だよ。」

嬉しかった。様々な理由を全て差し置いて嬉しかったという感情が真っ先にその言葉で感じられた。
言葉は更に続く。

「だって、僕は君の為だけの主人公(ヒーロー)だから。」

「!?」

顔が熱くなるのを感じた。
え?ど、どういうことだろう?本当に、どういう意味?どういう使いまわし?
ちょっと待って、仮に愛的な意味だとしてもどうして私は慌ててる

の！？
つまり、これは概貴くんを無意識下にでも…ああ！！！！この先は考えてはいけないと理性が叫ぶ！
ストップ、カット、ブレイク、キル！

「？、どうしたの？何か変な事、言った？」

顔を真っ赤にしたまま概貴くんを力の限り睨みつける。

ここまで敵意をむき出しにするのはリエ相手ですら有り得ない。これは鈍いとかそういう領域では済まない気がする！というか済んでたまるものか！
それはハナから私のことを眼中に入れてないということ！？つまりそういうこと！？
って、なんで私は怒ってるの！？
もう、この場に居られない。頭がパニックになってしまう。…もう既にパニックだけど。

そのまま概貴くんから顔を背けて、私は凄い勢いで立ち上がった。
自分でも驚きの速さだ。

「か、か、帰る！アクセサリーあ、ありがと！」

そのまま私は物凄い速さで扉を開けて、そのまま早足でズンズンと玄関に向かう。途中おばあさんに頭をペコリと下げて、概貴くんの制止を無視しお暇すると、全速力でうちに向かって走って帰った。

帰宅後、私は冷えた頭でようやく状況の把握に努めることができた。
まず、私の首にかかっている銀の十字架がデバイスであるということだ。大きさの割りに随分と重いけど、純銀とかそういうふざけた材質でできているんじゃないだろうかってくらいな高級感…私はメッキと言い張るけど。

「アレ依頼、うんともすんとも言わないけど、故障かな？それとも夢だったとか…」

『会話の必要を感じられなかったため、今までマスターに話しかけなかっただけです。』

思わずビクっとする。やっぱりこういうのは慣れない。なんていうか突然ファンタジーな…ってもう十分ファンタジーな事件に…

「ああ！！」

忘れていた。概貴くんとのやり取りで頭が燃えていたせいですっかり忘れていた。
姉さん達に認めてもらわないと…前に進めない。
と、その前に姉さんたちがやってもらったアレをしておこう

「ゲイト、早速やって欲しいことがあるんだけど――――」

――

「し、信じられん…こんなことが…」

シグナム姉さんの第一声はそれだった。私の前に居るのはシグナム姉さんとザフィーラ兄さん。
とりあえず私の部屋に来てもらった。そして私は、いきなりゲイトをセットアップし、バリアなんとかを身に纏った。

「これで文句は無いでしょ？」

全身タイツのような白い服の上から銀色の防弾ジョッキのようなベストを羽織り、ゲイトをボクシンググローブよろしくの殴るための手袋みたいな形に変化させ姉さんと兄さんを見上げた。

「……」

だが、姉さんの顔からは先ほどの驚きの表情は消えていた。むしろ、険しさを増しているような、そんな気がするが私は気圧（けお）されない。

「まだ認めてくれないの？」

私は一応下手に出たつもりで言葉を発する。だが、私は次の言葉に

「子供が玩具を抱えた程度で良い気になるな。お前に闘う術など無いだろう？魔法は以っての外。お前は敵と相対した時に対処する術はあるのか？私に冷や汗を一筋でも流させる事が、できるか？」

私は少し頭にキタ。姉さんが私を脅すつもりだったのか物凄い敵意と威圧感を纏っている。これが、騎士というやつなのだろう。でも私にだって、一応武術をやっていた。私なりの矜持というものがある。
爆発寸前で、私は姉さんにもう一度聞いた。

「認めて、くれないんだね？」

「そうだ、お前を、巻き込むわけにはいかん。」

「…兄さんも…？」

「シグナムの発現は的を射ている。私も同意見だ。」

気がつくと私は、頭に焼きついた自身の体の動きだった動きを今の体にインプットし、左足を軽く踏み込み、腰を軸にしながらそのまま重心を左足に置いてグルリと回りながら姉さんの左側頭部狙って、回し蹴りを放っていた。

「！？」

でも、姉さんはさすが騎士といったところだった。私の完全な不意打ちである攻撃を完璧なタイミングで左腕を防御の姿勢に成立させて完全に私の攻撃の勢いを殺してしまった

滅多に驚かない姉さんと兄さんが、驚愕している。
そんな情景に、私の頭は一気に熱が冷めた。

「ご、ごめん…えと…そ、その…」

慌てて足を下げてとりあえず謝った。どうしたものかと何度か視線が逸れる。

「カータ…お前…そ…それは…」

左腕を未だ防御の姿勢にしたまま姉さんは呟く。私はどうしていいかまるで判らなかった。

「カータ、落ち着け、シグナムはお前を責めている訳ではない」

兄さんの言う事は当然分かっている。私が困っているのは姉さんに蹴りを放ったのは【八神カータ】ではなく【私自身】だということにある。

【私自身】を説明するのはぶっちゃけ気が引ける。信用してくれることなんて有り得ないから。

だから私は敢えて姉さんにこう返した。

「姉さん、あ…汗をかいてるけど。それって【冷や汗】って奴じゃない？」

このまま弱気にしていたら、確実に追究される。そう考えた私は敢えて強気に姉さんに話の続きを再会させようとした。

「…そうだな、まさかお前に一杯食わされるとは思わなかったぞ。」

私の言葉に我に還ったのか、姉さんはいつもの落ち着いた表情で私に返してきた。

アブナカッタ

「仕方ない。全くの不本意ではあるが…これも、約束だ。お前の力も磨けば光るだろう、お前も――」

「駄目だ。」

姉さんの言葉に被さるように、今まで私と姉さんの話の中の中立にいたザフィーラ兄さんが口を開いた。

「どうして？私にだって身を守れるくらいの力はあるよ！」

それでも強気に、私は兄さんを見上げながら詰め寄った。

「そうだ、身を守れるくらいの力だ。それが問題なのだ。」

「え？」

以外な肯定の言葉に私は言葉を詰まらせ、何も言い返せなくなった。

「身を守れはするだろうな、だが、お前は魔導師の戦いというのを知らない。確かに、我々の戦いが体術や剣術に限った戦いであったならばお前の力は十分脅威になり得た。だが魔法が絡めば、お前は簡単に我らが相手をする可能性のある人間に捕らえられてしまうだろうな。」

痛いところをつかれてしまった。それは全くの事実。でも私にだって武器はあった、手を握りこぶしに思わず変えながら私はカラカラに乾いた口を開く。

「魔法って、あのプログラムのことでしょ？だったら、私にだって

ゲイトが…デバイスがついてる。魔法が全然使えない状態って訳じゃない。それに、兄さんの考えは常にマイナス面の可能性でしょ？戦うかもしれない相手が私より弱いかもしれない。」

必死に言葉を頭の中から引っ張りだしながら兄さんの反論に食らいついた。ここまで来て後戻りは、できない。だけど…

「カータ、確かにお前には才能がある、魔法を短期間で会得し強力な魔導師にもなり得る可能性もあるだろう。しかし学校はどうする？いかに戦いができても体が生活についてはいくまい、そしてなにより私とシグナムは、血がつながっていなかろうと、妹であるお前に血なまぐさい世界を見て欲しくは無い。」

これがヴォルケンリッター４人の本当の考え、戦いはできない、足手まとい、それは手に入るはずもないデバイスを持っていない私への殺し文句。それがあれば私は黙っているはずだった。だけど、本来手に入るはずもないデバイスを私は手に入れてしまった。つまりはこういうことだった

みんなはタダ、私に『自分達の世界に来るべきではない』と伝えたかっただけだったんだ。

黙り込んだ私に再び兄さんは私に問いかけた。

「カータ、それでも、それでもお前はこちらに来るというのか？」

多分、これが最後通告。覚悟を決めて選ばなければならない私の二つの選択肢。

ＹＥＳか、ＮＯか。

「……一緒に、戦わせて。私もお姉ちゃんを助けたい…！」

回答は、ＹＥＳ。兄さんは、そうか。と一言言うとこれ以上私に何も言っては来なかった。いや、言ってくれなかった。のほうが多分正しいのかな。

「カータ、もう話は終わりなのだろう？バリアジャケットを解いたらどうだ。いつまでもそんな格好のままで居る訳にはいかないだろう。」

姉さんに言われて私は自分が魔法少女（格好は全くソレとはかけ離れているけど）のままだったことを思い出し、バリアジャケットを解いた。

「ヴィータとシャマルには私が言っておこう。それと、お前に少しずつ魔法を仕込まなければならんな。」

姉さんの手が私の頭に置かれる。この言葉でようやく追いついたような気がした。

ようやく、始まったんだ。お姉ちゃん。待っててね、すぐに治してあげるから。

第九話　始点（後書き）

いかがでしたか？

今回は少し長めに執筆してみました。多分次の投稿では元に戻っていると思います。

今回から本編なので、カータが戦闘を行ったり、何かしらの解説が必要な際、ここに書き綴るつもりです。

え？本編遅くないかって？

気にするな！！！

ネタが分かった方はどうぞ感想にてお書き込みを

ではでは、次の投稿でまたお会いしましょう

第十話　歯車（前書き）

はいこんにちは、Ｇ－Ｃです。
そろそろ主人公の本格的な基本ステータスを上げておきたいなと思います。
詳しいことはあとがきにでも乗せようかな

だんだん話の構成がザルになってきたな。
なんとかしたいけど、どうにもならね…

第十話　歯車

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

私たちの魔力蒐集が始まって数日が経過した。
私はと言うと、現在姉さんたちに稽古をつけてもらっている。魔法的な物ではなく、物理的な物で。
どうしてか？今私は魔法が使えないから。その事については、蒐集をはじめる数日前に遡る事になる。

――――――――――――――――――――――――――――――――

姉さんたちが蒐集に私も加担させてくれると決まった次の日、私はあることに気がついた。

「私の力ってどれくらいなんだろ…」

魔力…という奴かな、とにかく聞いてみようと思い立った事が始まりだった。

「お前の魔力値…か…。」

とりあえずはシグナム姉さんに聞いてみた。姉さん自身も失念していたのか、少し考えこんだまま黙ってしまった。

「基本的に魔力というのは、リンカーコアにて生成される…のは知ってるな？」

いきなりの質問に私は戸惑って答えるのに時間がかかった。

「う、うん。確か、魔法を使う時にその中で魔力を結合させるんだよね？」

「そうだ、リンカーコアは人によって魔力の保有量が違ってくる。高い者もいれば低い者もな。」

コクコクと頷きながら姉さんが淡々と話す説明を頭の中に呑み下す。分かるような分からないような…

「ふーん、どうせなら蒐集しちゃったほうが早いんじゃないかな？」

なんとなくだけど、自分の魔力は魔法を使わない今のうちに闇の書に食わせてしまったほうが良い気がした。姉さんもそんな私の意志を感じ取ったのか、すごく真剣な表情で私に視線を向けた。

「…やるか？それなりに痛みは伴うぞ？」

多分、覚悟を問われてる。今の発言に責任を持てるか？とか、これからの戦いに向けて本当に自覚があるのか？とかいろんな事ひっくるめて私に姉さんが問いかけてる。

「…うん。表面的な痛みなんて、怖く、ない。」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＳＩＧＮＵＭ

「…うん。表面的な痛みなんて、怖く、ない。」

これがカータの答えだった。幼い…コレがどこまで今の問いを理解したかは分からんが、どうにもひっかかる言い回しだ。まあそのことは追い追い聞くとしよう。

「そうか、少し待っていろ。」

シャマルを呼び話をつけた。とりあえず、シャマルの部屋の中で、音遮断と魔力遮断の結界を張る。
私たちの空気に圧倒されたのか、カータはどこか落ち着かない。

「カータちゃん、大丈夫？」

やはりシャマルは私と違い年下の扱いが似合っている。私ではあまり上手いことはできないな。

「うん、大丈夫。は、早い所やっちゃって欲しいな…こう、あんまり焦らされると、なんというか…緊張しちゃって…」

カータは明らかに引きつった笑顔を浮かべている。早めに終わらすとしよう。願わくばその苦痛が長引かないことを…

「あ、ガ…アアアアアア！…あ…アグ…ウアアアアア！！！」

私たちの思いとは裏腹に、カータはしばらく苦しむ事になった。私たちを気にかけているのか、なるだけ声を抑えようとしているのが

分かる。それがまた酷く心が痛んだ。

「大丈夫か？」

蒐集が終わった。随分と長く感じた、実際は一分程度くらいだったんだろうが。

倒れたカータを抱き起こす。呼吸が酷く乱れてはいるが、命に別状は無い。

「うん、あり…がと…」

そういうと、カータは私の腕の中でそのまま眠ってしまった。困った、こういうときはどうしてやればいいのか分からん。シャマルは何かよく分からん笑顔を見せるだけ、つまり部屋に運べ。ということか

「…仕方ない。」

シャマルはどう転んでも動いてくれそうにない。そのままカータを担いでカータの部屋に向かうことにした。

「スー、スー」

静かに寝息を立てたまま眠っている。先ほどまで苦痛に歪んでいたソレとは違い、随分と安心したような穏やかな顔だ。コイツには何かよくわからないが、得体の知れない物を感じる。

それがなんなのかは分からないが…

「ん？シグナム、カータどないしたん？」

後ろから声をかけられた。この独特な口調は、主はやてか。

「いえ、少しばかり蓄を話していたところ、眠ってしまいまして、カータには早かったようです。」

当たり障りのない言葉でごまかした。いつも思うのだが、私たちの行動がよく主に知られない物だ。このお方なら真っ先に感づかれると思ったのだが、はたまたわざと見逃してくれているのだろうか。

「シグナムもすっかりお姉さんやなあ、ええ顔するようになったで。」

意外な事を笑顔で言われた。それも満面の笑みで。確かに柄ではないと思ってはいるが。

「そうですか？私は変わらないつもりですが。」

時として人の変化は無自覚というが、私もその部類にあったようだ。

相変わらず、この姉妹にはつくづく思い知らされているようだ。…もちろん、良い意味で。

SIDE　OUT

SIDE　CATA

夢を、見た。

真っ暗な暗闇だった。一応自分の足元は見えている。まるでスポットライトで照らされているような、そんな感覚。

辺りを見回すと、銀色の後ろ姿があった。

「――――…■■■…」

声が出せない。出す必要がないからか、はたまた夢の中だからか。

私は気がつくと、銀色の後ろ姿…闇の書ご本人の背中をつっいた。

「カータか。」

闇の書ご本人は、私に振り向くと表情を変えずに呟いた。

「……。」

返事をしようにも今の私は沈黙状態。

言葉の代わりに精一杯の笑みを浮かべた。

「喋る容量を持ち合わせていないのか…まあここはお前の中だ。意思の理解など容易いから、問題は無い。」

闇の書は一人で呟いている。私はわからないからとりあえず首を傾げて表現した。

「分かる必要は無い。お前の中に残った闇の書の残滓（私）もいずれ消える。いちいち理解しようと努力するのも無意味だ。」

相変わらずよくわからないが酷く、寂しくなった。理由は無いけど、この人にそんな事を言って欲しくない。
だから、寂しくなって思わず抱きついてしまった。

「…お前は優しいのだな。この気持ちが私に届く事はほぼ有り得ないが、私の中には留めておこう。」

闇の書は戸惑いはしたものの、僅かに笑うと優しく私の頭を撫でた。

「だが、優しさと愚かを履き違えるのは間違っているぞ…カータ。」

突如、棘が生えたかのように口調が鋭くなった。
どういう意味だろうか…

「我が主…姉を救いたい気持ちは解る。だがお前がやるべき事は、将達の帰りを待つことだろう。お前は矛を取るべきでは、無い。」

どうやらこの人は、私の選択に怒っているらしい。
口調が先ほどよりずいぶんと感情的になってる。

「カータ、何故リスクを背負う？リスクを背負わずともお前には安全な場所があるだろう。何故わざわざ危険を冒す真似をするのだ？」

口調が少し変わった。相変わらず感情的ではあるけど、これは怒ってるんじゃない。きっと私の身を案じてくれている。
私は真っ直ぐに視線を返して強く笑った。

それは違う。リスクってのは背負うべくして背負う物、生きるためには当然リスクが伴うんだと私は思っている。貴女の言うことは正しいけど、リスクを背負わなければ人は前には進まない。人の歴史だって、リスク無しでは決して前には進まなかった。私だって前に進みたい。

「…それがお前の答えか。」

そういうと、闇の書は私の額に指をつけた。

「!?」

映像が流れる。ありえない映像が流れる。認めたくない映像が流れる。

流れたのはお姉ちゃんの映像だ。でもそれはお姉ちゃんではなかった。

茶色の髪を銀に変え、黒の瞳を翡翠に変え、そしてなにより認めたくなかったのは、死んだ人を踏みにじって楽しんでいた、私が知るはずのないお姉ちゃんの姿だった。

「これがお前の背負うリスクというものだ。お前たちが失敗をすれば、主は私の暴走に身を委ねる事になり、優しいあの笑顔は二度と現れることはないだろう。」

何を言ってるのかよく聞こえない、ついでに目の前のこの人がどんな姿なのかも今は見えない。

瞳孔が開いたのか、はたまた焦点が合わないだけか。

だけど最後の一言は私の頭にスルリと入り込んできた。

「お前にその覚悟はあるのか？カータよ。」

……………。その問いは疑問ではなく確認だ。この人は私に覚悟があると分かっているからこそ、私にあの最悪（えいぞう）の事態を見せたのだから。

もちろん。

言葉で答えず、焦点が合わない目線で精一杯の意思で返した。

「そうか、ならば私からは何も言うまい、結果がどうなることであれ満足の行く結果が出る事を祈ろう」

その言葉と共に私の意識が希薄になってきた。

ああ、これは夢なんだったとようやく思い出した。

あ、でもその前に聞かなくちゃ、もう一度だけ…

「私の名か…？それは以前答えただろう。私は闇の書そのものだと。
」

それ以上会話をこなすことはできなかった。

ああ…やっぱり　　　　　この人は大きな勘違いをしていた。

――――――――――――――――――――

――――――

時間軸を戻して、現在。

今はというと、人気の無い森で兄さんと組み手もどきで手ほどきを

受けている。
姉さん曰く

『自分と同じような戦闘タイプのものに教わるほうがプラスになる。それに、武器を使わないお前に私たちが教えられる事は少ない。』

らしい。個人的には姉さんたちの武器を捌く練習をしといたほうが実践に向いてるんじゃないかと思ったけど、こと戦いにおいて素人の私が意見なんかできるはずもなく、今に至る。

「カータ、お前は体格故に一撃の威力が弱い。だが、その分小回りと手数は十分にあるはずだ。それを武器に戦え。」

とのこと、兄さんの動きはなんというか戦士そのもの。私みたいなスポーツから出来たポッと出の拳士には無い。鋭さと重みがあるし、そして何より私より筋肉の鎧がある。まあ、男の拳士ならば当然といえば当然なんだけど…

「うーん、手数よりズカッと急所に当たっちゃわないと決定打にはならないんじゃないかな…」

首をかしげながら問いかける。いくら1の威力が１００あろうと結果的には１００。だったら最高の一撃を最高の場所。５００を一度たたき出せばいいんじゃないか。ってのが私の意見。

「そうだ、確かにお前の考えは一理ある。だが戦いは常にイレギュラーで動いている。その中で経験の浅いお前が、敵にむかって効果的でかつ決定打になるであろう一撃を与えるのは難しいだろうな。」

「あ、そうか。」

失念していた。私が目指しているのは戦闘だったんだ。ルールという守りで生ぬるくなった闘技場で戦っていた私に、情け無用の戦場では生き残るのに精一杯だろう。兄さんの言葉でようやく気がついた。

「よし、それではもう一度打ち合ってそれで終わりにしよう。そろそろお前も疲労してきたころだ。」

兄さんは再び私に向かって身構える。

「えー、私まだ大丈夫だよ。疲れてはいるけどそこまでばててないし」

兄さんに習うように握りこぶしを作って腰を落として構えを取りながら、返答する。

「今は、な。だがその僅かな疲れが蓄積すれば、話は別だろう。ギリギリまで疲れて、休息を取った後に疲労が溜まっていてはその日の行動に支障をきたす。無論、我らが主の為の蒐集行為にもな。」

『蒐集』その言葉で私は黙りこんでコクンとうなずくしかできなかった。

兄さんの戦いは第一印象で言えば直情的だった。卑怯なところなど微塵もない正々堂々と言ったらいいのか、どういったらいいか解らないけど。

一撃一撃に重きをおいて確実に当たれば致命的なモノになり得る一撃。

私はといえば、そんな重い一撃を受け止めきれるはずもないからなんとか回避をする。
そして、一撃を全神経を集中させていなした後、同じく連続で攻撃が放てるように全力の蹴りを兄さんの鳩尾めがけて槍のように突き出す。
まあそんな一撃が通用する訳もなく、結局その蹴りは簡単に受け止められ完全に無防備となった私の頭にコツンと兄さんの拳がぶつかる。

つまり、『お前の負けだ』。と言われたわけだ。

「はは、やっぱりか。」

そのままコテリと地面に座り込んで笑いながら見上げる。うん、やっぱり強い。

「いや、今のは良い一撃だった。日を重ねぬうちにコレなのだ。時が経てばお前は私を簡単に超える。」

あたりを見回して、人の気配が無い事を確認したのか、兄さんは狼の姿に戻って私に返した。
そういってくれるのはうれしいけど、やっぱり兄さんと私との間には絶対的な何かがある。
それが何かはわからないけど、兄さんを超える日はしばらく先になりそうだ。

私が蒐集行為に参加するには魔力の回復が大前提と言われてからお

よそ一週間強の日数が経過した。
正確には8日ほど。私のローテはヴィータとシグナム姉さん、ザフィーラ兄さんの誰かに付き添う形になった。大体二週に一度くらいという決め事。

蒐集はそんな周期だけど、みんなからの鍛錬は毎朝続いた。早朝の5時ほどから大体6時ほどまで。近くの丘にある小さな広場、その時間帯はまるで私たちに用意されたかのように人気がない。
そんな状態なら組み手だろうと大立ち周りだろうと周囲の視線を気にする必要はない。

私も学校があるからそこまで無理はできない。蒐集をするのは決まって次の日に学校が休みの日だけという決まりも追加された。流石にこれは頷かざるを得なかったから了承をした。

そして私の学校ではもうすぐ一つの大きなイベントが行われる。

「リエ。どういうつもりだコノヤロー」

教室にて出来る限りの殺意と敵意を込めて友人…いや、悪人を睨みつける。横であたふたとしている概貴くんはとりあえずほかっておくとしよう。

「アハハーなぁにぃー？親友に向かって殺してやると言いたげなその視線はぁー」

そんな私の敵意むき出しの態度とは対照的にケタケタと笑いながら私の肩をバンバンと叩きまくる自称親友さん

「どうして私が今度の劇のメインな役となっているのですかな？是

非納得の行く回答をいただけるとうれしいのですが？」

ひきつった笑いを浮かべながらなんとか爆発寸前で留まりながら問いかける。

「え？何をいまさらぁ、私に任せた時点でこうなるのは予測してたでしょうがぁ♪」

「えぇい！『差し障りの無いの役』という言葉が貴様の耳には入らなかったのかあああああああああああ」

ダメでした。でも決まってしまったものは仕方ない。というのは分かっているし、回りの温かい視線も死ぬほど気になったから気絶程度で済ませてあげた。

ちなみに劇の内容は、いわゆる動物もの、横暴なカエルの王様が自由気ままに生きる小さな池の王国の物語で、王様が王国の一番使われている門に「カエル」という単語が入った言葉をいえないかぎり門を使うことができないという理解不能なルールを敷き、みんなで王様に一泡吹かせる。というもの、それで、私の役はカエルの王様ならぬカエルの女王様だった。

どういう運命の悪戯か、これに似た物語を私は以前小学生だったころに一度劇として経験していた。

「でも、出番が多くてよかったね。家のみんなを呼べるんじゃないかな？」

概貴くんはそんな私のことを少しでもフォローしようとしているのか私が失念しかけていた事を言い出した。

こんな時期だけど、だからこそみんなに対してこういうのも必要な

コミュニケーションなのかな。

「うーん、一応言ってみる。練習って今日からなのかな？」

あの時以来どうにも概貴くんのことを意識してしまうようになっている。んー、世間一般的にコレを恋煩いというのだろうが実際はどうなのだろうか…。

とにもかくにもそんなことより私にはやることがある例えコレがそうだとしても、無視するより他ない。

「今日の5、6時限目が練習って先生が言ってたよ。」

今はお昼休み、とりあえず目の前に起こりうることに集中しないといけないみたい。

SIDE　OUT

――――――――――――――――――――――――――――――――

カータが劇のメインの役に頭を悩ませているその頃。

「へぇ、なかなか面白いじゃない。」

携帯の画面を見て不敵な笑みを浮かべている少女、アリサ・バニングスがいた。開いているのはメール画面、差出人の名前は関原理恵。メール本文にはもちろん学校のイベントについての誘いのメールであった。

「どうしたの？アリサちゃん」

その様子があまりに楽しげだったのか、彼女の友人…なのはとすずかがメール画面を覗き込んできた。
彼女が笑みを浮かべながら無言でその内容を二人に見せた。

「カータってこの前いろんな衣装着て大変だった子だよね、アレ以来会ってないけど」

「そ、だからアイツが私に報告してくれたって訳。」

カータが聞いたら間違いなく怒り出しそうな事だ、だがまあ本人が知らないので全くの無問題なのだが

「そうだ、今度フェイトちゃんこっちに遊びに来るんだよね、なのはちゃん」

すずかが何か思いついたのか両手を叩きながらなのはを見た。

「うん、今は忙しいから落ち着いたら一度こっちに来るって言ってたよ。」

フェイトは母親の件で現在裁判を受けるための準備やなにやらといろいろと忙しい。とは言える筈もなく、なのはは当たり障りの無い回答をすずかに返した。

「それじゃ、フェイトが来たら一緒に連れて行きましょ、アイツらついでに紹介もできるし。」

その提案に三人の誰もがＯＫを出した、もとより否定をする理由もない。更にアリサの提案にこのことは当日まで黙っていようということになった。

運命の歯車は静かに噛み合って行く。

無数に存在する数多の結末の一つを目指して。

第十話　歯車（後書き）

いかがでしたでしょうか。

さて、基本ステータスの件ですが

カータに関する簡易説明、魔力数値、レアスキルに関する簡易説明、
戦闘面に関しての才能、所有デバイスについて

以上の事が主題となります

ネタバレが含まれるので嫌というかたはスルー推奨です

キャラステータス１　八神カータ（前書き）

今回は本編ではなく、カータのプロフィールを乗せました。

彼女のレアスキルについて、本編で語る機会が無さそうなのでここにて解説をいれておきます。

後は、彼女の魔導師としてのスペックを少しばかり載せておきました。

っと、それはさておき、１万ＰＶ突破しました。

読者の皆様ありがとうございます。

これを原動力にまた書き続けていられそうです

キャラステータス1　八神カータ

八神カータ

別世界より転生の輪廻を通過して現れた異常生誕者。転生というより彼女自身が異世界に来たというほうが正しい。
世界と世界を隔てる壁を通り抜けてそのまま彼女自身がはやてたちの居る世界に入り込んだと言う形。

彼女が今のような姿になった理由については、魂の劣化と損傷である。通常、人の身では彼女が起こした行為をするのは過ぎた行為であるために普通の人間である彼女の魂は激しく損傷をし、結果彼女の容姿と人格は崩壊寸前までに劣化する。
が、そんな状態の人間はこの世には存在しないというのもまた事実であるために、世界は異常を異常にて修正する。つまり彼女の容姿は魂の修繕と補正をかけるために子供にまで衰退を行わせ、そしてその世界でありうる形の異端な形を取らせた（異端といっても特徴がある、程度の物…かわいいとか美しいとかが良い例）。

が、人格の劣化を補うことはできなかったらしく、結果。はやてが初期に出遭ったカータそのものとなった。本編にて、彼女の情緒が安定しないのは彼女が現在の自我となってからまだ月日があまり経っていないためもあり、未だ魂の損傷と劣化の悪影響が彼女の奥底に残っているためでもある。

魔力値ＡＡＡ

基本的なステータスは超一流のものではあるが、彼女自身魔法的攻撃能力に関しての才能が皆無であるため実質的な魔法的戦闘能力は通常魔導師より遥かに劣る。

正確には彼女自身の思い込みでもある、自分は相手を吹き飛ばすような高い威力の魔法を扱えるのか？などという自信の無さ、初期段階にて魔法の行使に失敗しているためか、『自分はそういうのには向いてはいない。』と勝手な解釈を行っているせいで自分自身に制限をかけている。

発動自体は可能ではあるが、攻撃成立へのステップと消費魔力が多いことが結果的に大きなネックとなるために基本的には使用はしない。

だが、防御能力に関してはまさに折り紙つきと呼ぶにふさわしい才能を有しており彼女の先天性固有能力もあいまってかその防御力は桁外れに高い

物理的な攻撃能力は彼女が生前…つまり前世と呼べる別世界にて空手の才女で彼女自身、高校を卒業し死亡までの間も続けていたため、彼女自身の物理的な攻撃能力はそこらの戦闘者に全くひけをとらないものとなっている。

とはいっても魔導師の基本は魔法においての戦闘であるがゆえに結果的にいくら打撃能力が高かろうと魔法戦闘においては防御しかできない彼女にアドバンテージは全くといっていいほど無いのが彼女の真実である。

先天性固有能力　クロックアウト、クロックオーバー

彼女が有する先天性固有能力、元々彼女の居る世界にこの世界の魔

法は存在せず異能と呼ばれる才能もほぼ皆無というほど数が少ない世界であったが、世界からの修繕の際に彼女の中に突然変異形のリンカーコアが生成された。一般論として突然変異からのリンカーコアは何らかの特異性を持つことが多く、彼女の場合はその魔力数値と彼女だけの稀有な能力…レアスキルとして現れる。

その能力は大きくすると一つの能力ではあるが、細かく分けると二つに分けられる。

一つは、他者の魔法に触れ、プログラムとして解析し、演算することによってその魔法を上書き変更する能力である。

触れる…という定義は彼女の手足の延長線上、つまり魔法障壁で触れたり、彼女自身が直接触れたりということ。

強力な能力ではあるが、彼女自身が触れるというのが大前提なために彼女自身がリスクを負うという諸刃の能力でもある。

そして、もう一つの能力は彼女自身の演算能力を超える計算をした場合、それに対応した計算能力を保有する能力。作者のイメージ的には、パソコンが機能を超えた使用を行われた際に、予め用意されたスペックより大きな計算能力を行う…と同じ。

演算能力の上昇というからには彼女の能力に限界が無さそうにも感じるが、これにもリスクは当然存在する。

それはパソコンが無理なオーバークロックを行い続ければ、寿命が短くなるの同じで、彼女自身に多大な負荷がかかる。その負荷とは【代償】として支払われる。

所有デバイス　ゲイト

基本的にはなのは達のレイジングハートよろしくのインテリジェンスデバイスで、人格を有し所有者の魔法の補助を全般的に行う。だが、このデバイスにいたってはそれに終わらず、所有者の特定の演算能力を飛躍的に向上させる、文字通りの【第二の頭脳】である。カータの場合所有している先天性固有能力もあいまってか相性は最高とも言えるコンビである。

通常の形態はボクシングのグローブがコンパクト化したような形状、メリケンという解釈のほうがあっているかもしれない。

待機のフォームは銀色の手のひらに収まるほどの十字架のアクセサリー、交わる中心部分に赤い宝石のような物がはめ込まれている。

カートリッジシステムが『何故か』導入されており、ベルカであるのかミッドであるのかは不明。

何はともあれ、概貴が手に入れた経緯といい謎が多い代物ではある。

キャラステータス1　八神カータ（後書き）

いかがでしたでしょうか、まあいかがもなにも
キャラのステータスにいちいち興奮するような人もいませんよねー

ではでは次回投稿にてまたお会いしましょう

第十一話　蒐集（前書き）

最近、更新速度がものすごい勢いで早まってます。

なんかよくわかんないけど。というわけでようやく本編の第一話です。

って話数が既に十一…まずい、閑話を入れすぎた。

まあいっか。現在、『ＷＩＳＨ~ 王女が願う夢~ 』の作者、アーチャーさんとコラボ企画を合作中。

ここにて、作者様に応援と宣伝をさせていただきます。

では本編をどうぞ

第十一話　蒐集

ＳＩＤＥ　ＦＡＴＥ

なのはからビデオメールが届いた。あの日別れて以来、これが楽しみとなっていた。
今はなのはだけじゃなくて、なのはの友達のアリサとすずかともビデオメールをしている。
今度会うときにちゃんと友達に成れるといいけど…

ビデオメールには今度行った時にやることの計画みたいな内容だった。三人の意見が混ざってよくわからない物もあったけど、分かった事は最近できた友達の劇をみんなで見に行こうということだ。

アリサは『また友達が増えるわよぉー』とか言ってたっけ。
日時をこちらと照らし合わせても母さんの事件の裁判が終わって少したったころだし、行ける事は間違い無さそうだ。

「フェイト、何をうれしそうに笑ってるんだい。」

不意に横から声がした。声の方向に振り向くといつの間にかアルフがそこにいた。様子からして、結構前からそこに居たみたい。

「なのは達からビデオメールが来たからみてたんだ。」

アルフがビデオメールの日付を見ると懐かしそうにため息をついた。

「そうか…あの子と会ってからもうそんなに経つんだね…」

母さんの事件が解決してからもう半年くらい経つ、アルフの言葉に私も同意だった。
確かにあっという間な半年だった気がする。

「向こうに戻るときに、また友達ができそうなんだ。」

「ホントかい！？良かったじゃないか。」

ビデオメールをしまいながら一番伝えなきゃならないことをアルフに伝えた。アルフはまるで我がことのように喜んでくれた。本当に私は幸せな人間だとアルフの優しさに触れるたびに思う。

「でも、その前に母さんの裁判を終わらせなきゃね。」

「あぁ、その意気だよフェイト頑張ろう！」

自分の使い魔にコクリと頷いて笑顔を見せる。大丈夫、クロノも無罪は確定に近いって励ましてくれたし、なにより私には皆がいる。大丈夫、きっとうまくいく。

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

休日に私はヴィータと遊びに行くという口実を作り初めての蒐集行為をするために、別世界にてヴィータと移動の最中だった。
魔力が完全に回復し、その後に飛行魔法を会得し、さらに魔力を放出する簡単なベクトル操作の技をなんとか会得できた。どうやら私に魔力放出…つまり攻撃系の魔法は向いていないらしく、扱えるようになるまで随分とかかってしまった。
シグナム姉さんはただの思い込みだとかなんとかいってたけど…

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「なんだよ姉ちゃん、もしかして怖いのか？」

隣に居るヴィータの言葉にふと我に還った。緊張のせいでよそ事を考えていたらしい。

「だ、大丈夫。うん、大丈夫。」

誰に言い聞かせるでもなく、自分を鼓舞するように言葉を吐き出した。ヴィータは小さくため息をつく。どうやら私の考えは筒抜けのようだ。

「安心しろ、姉ちゃんが危なくなったらあたしが死ぬ気で守る。姉ちゃんはあたしのサポートをしてくれればいいんだ。」

ヴィータの笑顔に安心する。こういうところがやはり守護騎士なんだなと痛感した。

早くなっていた鼓動が落ち着いてきた、うん多分ヴィータのおかげ。

そんなことをやってる間に目の前に大きな生き物が現れた。一言で表すならドラゴン。

どこかのＲＰＧに出てきそうな体の色が緑色で背中に大きな翼の生えた強そうな龍だった。

今回のノルマは１５ページ。生き物から魔力を奪うのはあまりいい気分ではないけど人間よりはマシだ

「ヴィータ、行こう！」

「おう！」

その言葉の意味を理解したのか、ドラゴンは私達を敵と認識し、大きな手に生えている鋭い爪を私達めがけて振りぬいて来た。
だけど、みんなと訓練を重ねた私にはそれは単純過ぎて簡単に軌道を読むことができた。油断をせずにそのまま少し後退をしながら爪をやりすごす。
このドラゴンが私の認識のドラゴンと同じならこのドラゴンも炎を吐いてくるはず。それを懸念しての行動。

問題はこの状況下では、私には回避と防御しかできないこと。ドラゴンの意識を私だけに向けるなんてそんな戦い方私はしらないしできない。
だったらせめて、意識をなるべくヴィータに向けないように常に懐にもぐりこもうとすればいい。

幸い防御魔法は得意なようだから、いざとなればゲイトに演算補助をしてもらって防御をすればなんとか防戦は成立する。

…だけど、そんな必要はまるで無かった。

「おおぉぉりゃあああ！」

「グギャアアアアアアアアアアア」

初撃の爪を後退して回避するしかできなかった私と違い、ヴィータは前進と共に爪を回避して、そのままドラゴンの即頭部に鉄槌の強力な一撃をお見舞いしたのだった。

頭はほとんどの生物の核となる場所。そこをいきなり攻撃されたドラゴンは攻撃を続けられるはずも無く大きくよろめいた。その隙を見逃すはずもない、私は魔力放出の加速を利用しそのままドラゴン

の元へ接近し、その加速に生じた速度を利用し拳に全体重をかけさらに拳にも魔力放出を利用し自分の出せる最高速度で最高の力を込めた一撃をもう一度ヴィータが殴った側とは逆の即頭部に叩き込んでやった。

「グオ…オオオオオオ…」

苦悶の雄たけびを上げながら立て続けに受けた頭部のダメージのためにそのままグラリと、横向きに倒れてしまいそのまま動かなくなった。

「おぉ。姉ちゃんやるじゃねえか、初めてにしてはなかなかだぜ。」

ヴィータがうれしそうに私を褒めてくれているが、私が気がかりなのは目の前で倒れているドラゴンのことだった。

「ねえヴィータ、もしかしてアレだけでこの子死んじゃったの?」

「死んじゃいねえけど、これくらいの子供なら気絶は当たり前じゃねえか?ケッコウな攻撃だったしよ。」

ちょっとまて、今なんといった。このサイズで…子供…?

「え?!この子まだ子供なの!?てっきり既に成長しきってるのかと。」

「姉ちゃん、もしコイツが大人だったらあたしらもっと苦戦してると思うぜ?ドラゴンより強い生き物なんてそうそういるもんじゃねえしな」

ヴィータが呆れたように私を見ると小さくため息をついた。

「で、デスヨネー」

「うし、じゃあコイツが気絶してるうちにさっさと蒐集すっか。」

そういうとヴィータは闇の書を取り出し、倒れたドラゴンから蒐集行為を始めた。

ドラゴンのリンカーコアはその体の色と同じ綺麗な緑色。以外にもリンカーコアはとても小さかった。

生き物によってサイズが違うかもしれないけど、このドラゴンの大きさは私が自分のリンカーコアを見た時のサイズとあまり相違なかった。

「3ページか、まあ集まったほうだな。よし、次。」

「うん、じゃあ次も頑張ろう。」

その後は大きなサソリだったり言葉では形容しがたいミミズのような生き物だったりと、とにかく本当に漫画やゲームの中に出てきそうな生き物連中と戦うことになったが、ヴィータはどんな生き物が相手でも強かった。私が完全に足手まといになって、苦戦するんじゃないかってのもあったけどそれも杞憂だったようだ。

大した問題は起こらず、ノルマの１５ページの蒐集を終えて私たちはうちに帰ることにした。

――――――――――――――――――――――――――――――

ページの蒐集は冬が窮まってくるまでほとんど滞りなく進んでいった。私のせいで蒐集のスピードが乗り始めるのが遅くなってしまったけど、姉さん曰く

「お前から蒐集できた魔力は想像以上だったからその点は心配無い」だそうだ。だいたい１２月の終わり…多分クリスマスくらいの時期のことを言ってるんだろう。それくらいには蒐集は終わるとかなんとか。

でも、物事は常にイレギュラーにて邪魔されるらしい。私たちの魔力蒐集も例外ではなかった。
最初に懸念されていた。『じくーかんりきょく』とかいう連中が邪魔をしにきた。

本当に最初のほうは数人程度で、けっこう定期的にそれもけっこう間の空いた時期に襲ってくるという感じだった。
だけど最近は人数こそ増えないものの、だんだん襲ってくる周期が濃くなってきて、最近はけっこうな頻度で『じくーかんりきょく』の魔導師と戦うことも多いらしく

あまり蒐集行為に参加しない私ですら、戦闘をすることだってあった。
まあ、それでも姉さんたちに及ぶような人は出てこないようで、どんなときでもみんなは無事で帰ってきてくれた。

そう、あの１２月の初旬までは…

あの日の早朝、ヴィータは蒐集があると出ていき、シグナム姉さんも、ザフィーラ兄さんも連日の蒐集に結構疲労が溜まっていたので（本人らは全力で否定してたけど）たまには私一人で練習をしようと、一人黙々と型の練習をしていた。

蹴りにての素振りからを始めに、拳にての型撃ち練習。
まあそんなのは最初の数分くらい（っていうかこの練習は今の体に慣れてきた最近ではあまり必要ない。）

今の私のメインの練習は魔力放出の訓練だった。
殴りに関しては両足がついて体勢的にも安定しているから失敗は少ないんだけど、蹴り…主にまわし蹴りの時の不安定感が半端じゃない。酷い時は魔力放出の勢いに負けてそのまま有らぬ方向に飛んでいってしまうこともある。
まあ遠心力とかの問題で仕方ないといえば仕方ないんだけど

「はあっ！」

バンッという音とともに空き缶を叩き壊す。殴りに関してはかなり安定してきた。弱中強と緩急をつけてできるようにもなったけど

『お見事です。』

「ん、ありがと。」

『いかが致します？姉上や兄上や妹様が居ればこのまま蹴り補助の練習に移りますが？』

そう、問題は蹴りなのだ。こっちはいつまでたっても安定どころか日に日に悪くなっていく気がする。
焦りすぎているのが問題なんだろうが、今日で12月。いつまでもこんなことで足踏みしているわけにはいかない。

「ちょっとやってみる。計算補助、よろしく。」

『了解です。』

魔法(プログラム)を組み込む。それをゲイトが私の代わりに計算処理を施すことで私の魔法(まほう)は完成する。

『ベクトル計算完了。準備完了です。』

よし、やってみよう。失敗したら、づっこけるか軽く跳躍するかのどっちかだ。

『マスター。少しばかりお待ちを』

どっちにしたって確実に痛い目を見る。ゴクリと生唾を飲み込み緊張を押し殺す。

『マスター？聞こえていますか？』

手に握る、ターゲットとなる空き缶を見て宙に投げる。

『誰か人が近づいているのですが？よろしいのですか？』

「え？」

ガンッ

ゲイトの言葉を漸く耳に入れる事が出来た私だったが時既に遅し。空き缶は私の脚によって完全に粉砕され原型を留めてはいなかった。これだけならまだ飛び上がって喜んでいただろうなぁ。こう…「よっしゃああ！」って。

まあ今の私はそういう事を言ってはいられないのだ。
なぜなら

「カータ…ちゃん…？」

茶色のお下げの女の子、高町なのはが私の目の前にポカンと口を空けて立っていたからだ。
これは、不味い。何が不味いかって。なのはさんの茫然自失とした表情がだんだん？に変わっていって。そんでもってその顔がだんだん怖い顔になっていくのが彼女を知らない私にだってよくわかったからだ。

（ゲイト、どうするの？）
（知りません、忠告を聞かなかったマスターに問題があるんじゃないんですか？）

くそっ、万事休す？このままでは不味い。何が不味いって分からないけど。とりあえず不味い。

「カータちゃん？」

「は、ハイッ？！な、な、なんでしょう！？」

声が完全に裏返ってる

『声が完全に裏返ってますよ。もう少し落ち着いたらどうですか。』

「うるさい、あんたが喋るとめちゃくちゃになるでしょ。」

と、おもわずやってしまったこのコントが私の致命的ミスとなった。

「それがカータちゃんのデバイス？」

しまったあああああああああああ

「出来たら詳しいお話聞かせて欲しいんだけど。」

なのはさんがズンズンと近寄ってくる。もう笑うしかない。足が自然に後ろに向いて進んでしまう。

「三十六計逃げるに如かず！」

「あ！待って！」

選択肢はもう一つしかなかった。

逃げた。脱兎の如く逃げ出した。もう全速力。

なのはさんもやっぱり追いかけてきたけど、運動が苦手なのか知らないけど足の速さは私のほうが断然速かったから、簡単に撒く事はできた。

丘を完全に下りきって曲がり角を曲がった頃は完全に逃げ切ることはできた。

「はあ…はあ…はあ…」

肩で息をしながらなんとか歩みを進める。

『ちっ…』

「今明らかに舌打ちしなかった？ねえ？」

早朝で誰も居なかったのをいいことに自分の首にかけた十字架に話しかけていた。

『わたしはタダのアクセサリーですので』

「ただのアクセサリーはそういう風に会話しないよね？ねえ？」

『うるさいですね、まあ魔力放出、完成して良かったじゃないですか。』

ゲイトに言われて思い出した。さっきの事で忘れていたけど足蹴りの魔力放出がうまくできていたのだ。

まあさっきの事もあって手放しには喜べないけど、とりあえずは完成を喜ぶべきか

「っていうか、さっきのは明らかに失敗だったなぁ…」

アレでは次になのはさんに会った時に何を言われるか分かった物ではない。アァ…憂鬱。

まあなんとかなると信じよう。

というか、なんとなくだけど見られたのが私一人でよかった気がする。なんとなくだけど。

その謎の直感は結果的に正解だったのだった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――――――――――――――――――――――――

SIDE　HAYATE

最近みんなの様子がおかしい。
ただ、私の前ではいつもどおりにしてくれるから下手に追究できひんから困りもんなんやけど…
危ない事には手を出して欲しくないってのが本心や…

「ただいま。」

そうこう考えているうちにもう夕方。カータが帰ってきた。
今度劇の中心キャラをやるんだとかなんとかで最近は妙に楽しそう、もしかしたら違う要因なのかもしれへんけど。

「お姉ちゃん、今日図書館行くんだっけ?」

カバンを置いて一目散にこちらに来たカータ。無意識かその顔は妙に楽しそうだ。

「せやけど、またなんか借りて来て欲しいんか?」

「ううん、私も一緒に行く!」

私の言葉にカータはふるふると首を横に振って否定すると予想外の言葉を口にした。
一緒に行くなんて随分と久しぶりだ。

「珍しいなぁ、どういう風の吹き回しや?」

そういうのはからかっておかないともったいない。そういうとカータは予想通り頬を膨らませて拗ねた

「むう、違うよ。たまにはそういうのもアリかなって思っただけだよ。」

「分かった、分かった、一緒に行こな。」

妹の頭を久しぶりになでてやる。こういうのも随分と久しぶりな気がする。

ついこの間まで心が無かっただなんて思えへんくらい、しっかり立ち直ってくれた。

看病したかいがあったものだ。

あぁ、シャマルが待ってるんやった。玄関で待ってから急がないと待たせてまう

「あれ?カータちゃんも来るんですか?」

玄関にてシャマルは後ろについてくるカータに驚いていた。そやった、カータがついてこんようになったのは皆が来てから辺りやったからなぁ。

「最近ちょっと現実逃避したくて…はっはっは。」

まあ当の本人は読書をなんと心得とるのかそんな事を言って笑って誤魔化しとる。これは一度しっかり読書について教えとかなあかんな。

「カータちゃん、もう少し年相応の誤魔化しをしたらどうですか?恥ずかしいのは分かりますけど。」

クスクスと笑いながら微笑ましげにシャマルはカータを見ている。

「う…シャマル姉さんにすら見定められてしまった…」

「そ、それってどういうこと!?私ってそういう印象だったの!?」

先ほどまでのお姉ちゃんシャマルはどこに言ったか、今ではカータとやんややんやとコントは始めてしまった。
もう少し見てたいけど、はよせな図書館が閉まってまう。

「はいはい、そこまで。はよ行かんと図書館閉まっちゃうで。」

二人を諌めた後、三人でそのまま図書館へと向かった。カータが私の車椅子を引いてシャマルがその隣を歩く。そんな構図。
なんだか、ホントの姉妹みたいやな。

しばらくして図書館についた。シャマルを入り口に待たせておいて、カータと二人で図書館の中に入っていった。

「カータは今日もファンタジーなのを読むんか?」

「うーん、ちょっと今日は文学にチャレンジしてみようかなって思って。」

車椅子を引かず私の隣を歩いて以外な事を言うカータ。
でもまあ、チャレンジ精神は大事やで。

かくいう私は文学なんて知らへんからアドバイスもできひん、カータもそれを知ってるのか
自分が目当てのあるコーナーを見つけてそのまま銀髪をゆらしなが

ら行ってしまった。
って

「哲学って…カータ…それ子供の読むコーナーじゃあらへんで…」

相変わらず我が妹ながら天然であると痛感した私であった。

「って私も自分の本探さな」

妹の天然ボケに付き合っている暇は無かったのを思い出した。自分も本を借りにきたのだったのを危うく忘れるところだった。

静かな図書館の通路を車椅子で進みながら本を物色する。すると、最近気になりだしている作者が著者になっている本を棚の中に入っているのを見つけた。ちょっと高いけど人間為せば成る！
熱くなるんや私！

と、いっても身長というのはときに残酷な物で後数センチというところで私の手は止まってもうた。
これぱっかりは熱くなってもどうにもならへん。
何度目のチャレンジか分からなくなって来た辺りに、スッと私じゃない誰かがその本を引き抜いた。
こ、この状況で本を奪うなんてなんてドSなんや！なんて馬鹿な事を一人で頭の中でつっこんでいると

「これ、ですか？」

ドSな略奪者と勘違いしてた女の子は救いの女神やった。

「は、はい。ありがとうございます。」

と、まあこの空気でそんな間の抜けた事を言うほど私はＫＹじゃあらへんからそれは心の中にしまっておいた本を受け取って笑顔でお礼を言った。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「そっかあ同い年なんだ。」

「うん、時々ここで見かけてたんよ。あ、同い年くらいの子や、って。」

「じ、実は私も…」

二人で笑いあう、図書館だからあまり大きな声ではしゃべれへんから、なるべく小声で会話をしている。

「えと、私、月村すずか。」

「すずかちゃん…八神はやて言います。」

互いに自己紹介する。やったことないわけじゃあらへんけど。なんや緊張してきた…。

「はやてちゃん。」

「平仮名で、はやて。変な名前やろ？」

「そんなこと無いよ！綺麗な名前だと思う。」

すずかちゃんはあわてて首をふって否定してくれた。うん、ええ子や。

「ありがとう。」

すずかちゃんの褒め言葉は、下手なフォローよりうれしい言葉だった。ほんとにええ子や。

「あれ?」

不意にすずかちゃんが不思議そうな声を上げて席から立ち上がる。その視線の向こうには、本棚を前にして首をかしげながら本の軍勢を睨みつけるカータの姿があった。
まあ、見た目は可愛い外人の子やし目につくのは当然なんやろな…。

っと思ったら、すずかちゃんはそのままカータの元に歩み寄っていった。
気になって私も後に続いていく。すると、更にびっくりする光景を目の当たりにすることになった。

「カータちゃん。」

「あ、すずかさん。ってなんでお姉ちゃんが一緒にいるの?」

ちょい待ちいや。

「なんでカータがすずかちゃんとお知り合いなんや。」

「え?はやてちゃん、カータちゃんとどういう関係?」

む、っとカータを少し睨みつける私と不味いと言わんばかりの焦るカータを戸惑いながら交互に見据えるすずかちゃん。

「私ら姉妹なんよ、本当の姉妹じゃあないんやけど。」

「そうなんだ。はやてちゃんの妹さんだったんだ。」

「せや、すずかちゃんはどうしてカータと知り合いなん?」

私のその言葉で弾かれたようにカータは再起動し、私とすずかちゃんの前に立ち塞がった。

「あーあー、偶然、偶然だよ。偶然この前…えっと…そう、すずかさんが道に迷っててね。うん。」

必死にカータは熱弁しているが、知らない人が見ても分かる。「嘘をついている」と、つまり

「カータはお姉ちゃんに嘘つくような子やったんやな…悲しくなってきたわぁ」

なんて殺し文句を言いながら大げさに両手で顔を覆って泣いているような演技をしてみせた。

「き、汚い…さすがお姉ちゃん汚い。」

観念したカータは本当の事を全部話し始めた。うん、これは凄い威力やなちょくちょく使ってみよう。

少しの間三人で話をした後、私はすずかちゃんに車椅子を引いてもらってカータと三人でシャマルの待っている入り口に向かった。ちょっと長話しすぎたわ…後でシャマルに謝らなあかん。

シャマルは私たちに気がつくと、すずかちゃんの存在に気がついたかニコリと笑って軽く会釈してくれた。

「ありがとすずかちゃん、ここでええよ。お話してくれておおきに、ありがとおな。ほら、カータもお礼くらい言わな」

「じゃあすずかさんまたいつか。」

妹と二人でペコリと頭を下げた。その様子は多分端から見て微笑ましかったんだろう。すずかちゃんはにっこりと笑いながら

「うん、またね。はやてちゃん、かーたちゃん。」

手を振ってまた会おうと、うれしい意味を含んだ言葉を返してくれた。

「ごめんなぁ、シャマル。少し長話になってもうて。」

「いいんですよ。その分手土産を持ち帰ってくれたみたいじゃないですか。」

図書館から出ながら。私はシャマルに謝罪すると同時にさっきすず

かちゃんから聞いたとっておきの土産話をシャマルに話した。カータは終始悶絶してたけどそんなん知らへん。

とそんな事をしていると、図書館から少し離れた駐車場にてシグナムが待っていた。

「あ、姉さん。」

私が名前を呼ぶより前にカータがシグナムに飛びついた。

「どうした、情けない顔をして。」

「うぅ…お姉ちゃんが…お姉ちゃんが…」

演技臭い涙声をあげながら私を指指すが、その瞬間に。

「なんでもあらへんよシグナム、ちょっとからかっただけやから。」

にっこり笑って封殺した。

「そ、そうですか。カータ、主はやてはああ仰ってるが?」

私の顔で小動物のように縮こまってしまったカータはシグナムの後ろに隠れてそのまま震えてしまった。

「そんな事より、みんなは今晩何食べたい?」

これまでの会話の流れを全てぶった切って今晩のおかずの話に切り替えた。

「え、ええ…そうですね。悩みます。」

「今からスーパーにみんなで行きましょうか。」

カータ以外の二人が返事に答えた。まあカータはさっき封殺してからずっと震えたままやしほっておいて問題ないやろ。

「せやな、ほな今からお買い物や。」

っと、さっきまで賑やかだったせいで一人かけていたのを思い出した。

「そういえば、ヴィータは今日もまたお出かけ?」

その言葉で二人と、震えていたカータまで黙り込んでしまった。

「え、えっと…そうみたいですね。」

「またクラブか何かじゃないかな。」

「ええ、最近はクラブの後に外で遊び回っているようですが、ザフィーラがついてます。ご心配なく。」

なんだか三人にうまく言いくるめられた感があるけど、まあええやろ。

「そっか、それじゃ帰ろっか。」

じゃあヴィータが帰ってきたときに、暖かいご飯が待ってるように、今日も頑張ろう。

第十一話　蒐集（後書き）

実は今日、Ａ'ｓの漫画がａｍａｚｏｎから届いたのですが。

蒐集ページがこっちの描写だと多すぎるｗｗｗｗｗ

しくじった。

あと、いろいろと変更しなければならない箇所が増えそうです。

あぁ、買っておいてよかったような悪かったような…

それでは今回はここまで、次回投稿でまたお会いしましょう

第十二話　悪種（前書き）

なんとか復旧できました。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません

第十二話　悪種

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

図書館から帰ってからシグナム姉さんが神妙な顔で私に近づいて来た。

「カータ。」

その顔を見るだけでまず間違いなく良くない事だというのはすぐにわかった。

「どうか、した…？」

「いや、ヴィータから連絡が途絶えてな。少し様子を見て来る。主はやてにはうまく誤魔化しておいてくれ。」

「大丈夫、かな。」

最近すぐに自分の感情が表にでているらしい。姉さんは私の頭を叩いて笑った。

「アレも騎士だ。よほどの事が無い限り敗北は有り得ん。それに、皆主を救いたい気持ちがある。敗北など、有り得ん。」

私を元気づけるのか自身を鼓舞しているのかわからない調子で告げた姉さんが何だかおかしくておもわず笑う。

「そうだね、いってらっしゃい。晩御飯、用意して待ってるね。」

「ああ、行ってくる。」
カタン…と玄関が閉まる音と共にお姉ちゃんが車椅子を回して閉まった扉を見つめた。

「姉さん、出かけるってさ。晩御飯までには帰るって」

「そっか、どこ行くか聞いてる？」

「ヴィータのお迎えだってさ、またクラブのおじいちゃんに捕まったんだって。」

我ながらナイスとも言える言い訳だ。
一番不自然じゃないと思う。下手に道に迷ったって言うよりは…。

「そっか、そいじゃ、みんながあったかいご飯食べられるよう頑張らなあかんな。」

そう言ってキッチンに行くお姉ちゃん。まあ、少し勉強とかしようかなんて考えてたけど

「うん、私も手伝うよ。」

偶には姉と二人で静かに、うん。みんなが来る前みたいに、仲良く、静かに手伝うのも悪くない。

うん、悪く無い。

みんなが心配で無いと言えば嘘になるし、助けにも行きたい。
でも、お姉ちゃんを一人にはしたくないし、絶対足手まといになる。

だったらここで笑顔でみんなを迎えるのも、八神の魔導師としての責務だ。

――――――――――――――――

あれからしばらく経った。時間にして大体２０分くらい。

ふざけたり冗談を言いながら夕飯の支度を済ませている時

♪～♪～♪～♪♪　♪♪♪♪♪～…

着メロが流れた。…私の居るほうだと着うたが主流だったなーなんて考えてると、電話に出たお姉ちゃんは誰かと話してる。

「え、うん。ええのに、そんなの。ん、わかった。じゃあ姉妹仲良く晩御飯作ってるな。はーい。」

内容的にどうやらお使いに出たシャマル姉さんらしい。

「シャマル、ちょっと遅れるって、なんか隣町までオリーブオイル買いに言ってるんやって。」

私の中に良くない予感が一瞬よぎった。

「へ、へぇ…。じゃあもう少しゆっくり用意しようか。」

もしかして、苦戦してる…？…イヤイヤイヤ…みんな強いんだよ…？…そう簡単に負ける訳無いし、だって――――

「カータ?…どうかしたん?」

私の思考はそこでカットされた。

「う、ううん。何でも無い。」

―――――――――――――――――

それからまたしばらくしてから。夕飯の献立…シチューも粗方出来上がって後はルーを入れて煮込むだけ…。くらいな感じ

ゾクン

「!?」

背筋に、嫌な

感触　が　走った。

「カータ?」

私の声にならない小さな悲鳴を聞き取ったお姉ちゃんの顔が覗き込む。

流石にこれは誤魔化し切れない。

「う、うん。ちょっと変な寒気が、ね。風ひいたかな、」

「それを言うなら『風邪』やで。全く…我が妹ながら字誤りなんて遠回しなギャグ使うもんやないで…突っ込み辛いわ。」

「あはは…。」

流石に関西圏な言葉使いなだけあってきちんと拾ってくれた。

…京都って芸人盛んだっけ…？

…それより今感じた悪寒は…？

多分凄く強い魔力なんだと思うけど…私も感じ取れるほど強い魔力…。心配――――

トゥルルル…トゥルルル…トゥルルル…。

またも半端に思考をカットされた。…立て続けって結構イライラするなぁ…。

「私が出るね。…ハイ、八神です。」

リエだったらちょいととっちめてやる。なんと思った私に予想外の声が鼓膜を震わせた。

『もしもし…？カータ…ちゃん？』

声の主は概貴くんだった。

どうしたんだろう。この時間に。明日の宿題、何かあったっけ…？

「どうしたの…？珍しいね。この時間に電話かけてくるなんて。」

『ううん、居るなら、いいんだ。ちょっと悪い予感がして不安になって…。』

…この男の子は自然に女の子に向かって

『君が心配』と告げて来た。

自然とあの時の彼の台詞が反芻する。

【僕は君の――――】

「そ、そうなんだ！じゃ、じゃあ私お姉ちゃんのお手伝いで忙しいから切るね！また明日！」

『え…？カータちゃ――――』

ガチャン。

あの時の言葉を思い出したせいか、顔が熱い…。思い出し笑いならぬ思い出し羞恥…。別に私悪くないのに。

「誰やった？未来の弟くん候補か？」

「まあ…そんなとこ……。イヤイヤイヤイヤ！違うからね！？概貴くんはそんなんじゃないからね！？」

「ガイキくん…。よし、未来の弟チェック完了やな。」

なんかいそいそとバインダーにチェックを入れてるお姉ちゃん…。

…どっから出したし。

やっぱりアレだ。この人にはいつまでも勝てそうにないなあとか改めて思った。

「…みんな遅いなぁ。シチュー冷めてまうで。」

そんな私の気持ちなどほっぽりだしてルーをコトコト煮込むお姉ちゃん。

「もうすぐ帰ってくるんじゃないかな。多分。」

うん、あれだけでかい魔力が動いたって事はそれだけ戦闘も最終局面にぶつかったって事だ。

…大丈夫かな…。

――――――――――――――――――――――――――――――――

みんなが帰って来たのはそれから十分後くらいだった。

「すみません。遅くなりました～！」

パタパタとスリッパを鳴らしながら買い物袋を抱えてシャマル姉さんが入ってくる。

声をかける代わりにニコリと私は笑いかける。

とりあえず、残りのみんなを迎えなくちゃ。

「お帰り。」

「おぅ、姉ちゃん、ただいま。」「ああ。今帰った。」「うむ。すまんなカータ。」

相も変わらず全く統一性の欠片も感じられない挨拶…。まあそれは

それで面白いんだけど。

「ヴィータ、ご飯できてるよ。」

「マジか!?めっちゃ腹減った!はやて〜!飯飯!」

私の言葉を聞くや否や飛ぶように行ってしまった。

―ヴィータ、まずはただいまやろー。―

そうだぞ、そいでもって靴も揃えなさい。

「カータ。」

「え?なに?」

「心配かけたな、ただいま。」

久しぶりに見るシグナム姉さんの優しい顔に少し面食らった。

「うん、おかえり。後でお話、聞かせてね。」

いつまでも面食らってなど居られない。こっちだって負けじと優しく笑いかけた。

――ご飯も済んで一息ついた頃。

「カータちゃん、お風呂、どうします?」

「私は後でいいよ。ヴィータとお姉ちゃんを先入れて。」

とかく私は姉さんから話を聞かないといけないから、こう言わざるを得ない。

「はい。シグナムはどうします？」

「私は今日は遠慮しておこう。」

風呂好きな姉さんにしてはびっくりな発言。

「お風呂好きが珍しいじゃん。」

「たまには、な。そういう時もある。」

良く解らない。私はヴィータと首を傾げるが姉さんはそれ以上口を開かなかった。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「！……姉さん、それ…。」

「お前の鎧を貫いたか。」

兄さんの指摘で姉さんはセーターの裾を捲る。

その下には生々しい何かに斬られたような痣が浮かび上がっていた。

今回風呂を敬遠した理由らしい。

「澄んだ太刀筋だった。良い師に学んだのだろう。」

淡々と語る姉さん、その瞳にはどこか静かに燃える熱があるように見えた。

「……遂に管理局も本腰を入れたか。」

兄さんの呟き。……そうだろうか、本当に彼らが本腰を入れたのなら一対一が成立するとは思えないんだけど。

「……姉さん。姉さん達が戦った魔導師ってどんな人だったの？」

問題はそれだ、特徴さえ掴めば私が相対した時に逃げればいい。

「年端も行かぬ少女だ。お前と変わらぬ。私が対したのは金髪を2つに結わえた赤い瞳の少女、ヴィータと戦ったのが――」

「茶髪を小さくおさげに、してたり……？」

不意に私の中で閃いたある考え。

「…まさか、知り合いか…？魔導師の友人が居るのは初耳だが……。」

「心当たりは、ね。……そんな顔しないで、確信じゃないから、誰かなんて言えないし、何より姉さん何がなんでもその子を探しそうだし」

突き付けられた鋭い視線を受けながら、逆に咎めるつもりでジトっと視線を送る。

「……シグナム、カータにはカータの考えがある。我々を裏切るような事はすまい。」

「……そうだな。この話はここで止めにしよう。そろそろヴィータ達が上がる。」

その言葉と共に、確かに風呂場から声が聞こえる。
まあ、学芸会のお話でもしてたなんて誤魔化せば大丈夫だろう。

「カータ、最後に一つだけ言わせてくれ」

聞こえた声に振り返る。その姉さんの視線は先ほど同様、戦場に居る時の物だった。

「これから戦いは激化する。約束しろ、絶対に無理はするな。本来これは私達の領分だ。お前が出すべきでない余分な行動はしないこと、いいな?」

「……うん、約束する。」

あくまでサポート。その立場を再認識させられる。
その言葉にコクンと頷く。
とりあえずそこで私達の会話は終わりとなった。

――――

数日後、年末の締めとも言える最後のイベント、学芸会。
その本番が訪れた。緊張してるのか、はたまた浮き足立つのか、よく解らない空気が教室を支配している。

そんな中、私はある種別の危機を感じ取っていた。

「カータ、家の誰かが見に来たりするの？」

「ううん、みんな忙しいし、お姉ちゃん今日は定期検診だったし。リエは？」

「ふふふ、面白い客人を呼んでやりましたとも」

その危機への予感というのは、言うまでもなくこの発言である。コイツにとって面白い事が私にとってよろしかった試しが無い。

「リエちゃん、誰を呼んだの？」

「ガイキン、いくら君と言えどそれは教えられないな。後でわかるよ。」

大袈裟に肩をすくめて首を振るリエ。……どや顔うざい。

……まあ、なんとなく予想はつくけど、合ってませんように……。

この世に神も仏も居やしない。

正にそう思った。

リエが呼んだのは予想通りアリサ様々ご一行。

一番会いたくなかった面々に思わず頭を抱えたくなった。

しかも、新しく連れている金髪の女の子。……どこからどう見ても

姉さんから教わった特徴と合致する。

この世に神も仏も居ない……。もし居るなら、そいつはドSなクソヤローだ。

しかも

「リエ！ちょっとお姉ちゃんが頭痛で危篤かもしれない気がするから帰っていいかｎ――――」

「大丈夫、病院に連絡取ってお姉さんに許可はもらった。」

なんて逃げ口上を凄く良い笑顔をされながら親指を立てられた。

万事休す。……ああ、憂鬱だ。絶対なのはさんに後で呼び出されて言及されるに決まってる。

そんな言い訳を考えている間に、金髪の女の子がアリサさんに促されて自己紹介しだした。

「え、えっと……フェイトです。フェイト・テスタロッサ。最近、海鳴に引っ越してきました。よろしく……。」

フェイト…運命、か。

彼女の名前を聞きながら、いい名前、なんて一人呟きながらも彼女は本当に魔導師なのかと、勝手に被害妄想であって欲しい推論が続く。

今度はこっちがわ、リエ、概貴、私。と順番に自身の名を明かす。

それからはなのはさんのお母さんが振る舞う茶菓子を、みんなでつつきながら談笑した。

……時折なのはさんの視線が痛かったけど、見えないように努力はした。

――――――――――――――――――――――――――――――

時刻は夕方17時にそろそろ回る。解散雰囲気が漂う場の空気。
その時だった。

『カータちゃん、ちょっと良いかな？』

来た。思った通り念話でのコンタクト、ふふ、そんな不意討ちに敗れてたら、リエとの抗争で私は敗北必至。全く動じず我聞こえずと無視を決め込む。

『カータ？……なのは、やっぱり聞こえて無いんじゃあ……？』

……解りたくも無い真実。やっぱり姉さん達と戦っていた少女はこの二人。
本当に世間は狭い。
尚更無視を決め込む。

『聞こえて無いなら、カータちゃんがあの日来た衣装の事話しても――――』

『着てません！奇抜な衣装なんて断じ――――――あ。』

ずるい。そのネタを使って条件反射を狙うのはずるい。無視出来る訳が無いじゃない。

「そろそろお暇しない？時間も時間だし」

アリサさんの声、嗚呼それが後３０秒早かったら救いの声になったのに。

「あ、そうだね。そろそろ私達も帰ろうか。」

すずかさんも席を立つ。私も立ち上がりたかったけど、二人の視線がそれを許さない。

「ガイキン、カータ。桃子さんに挨拶して帰ろうかー。」

やつにしては珍しい救いの手！それにすがらない理由無し！

「了解。速やかに挨拶を――――」

「あ、リエ。カータちょっと私達と」

ダメデシター。

「ね？」となのはさんと私に視線を送るフェイトさん。

泣く泣く首を縦に振る。

うぅ……姉さんごめんなさい、八神カータ、この上無いピンチであります。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「じくうかんりきょく……ですか。」

なのはさんの部屋で三人、私は何故か正座で二人の前に座らされている。

話によると、フェイトさんは時空管理局の嘱託魔導師で、正確には局員では無いらしい。

「うん、私はさっき話した嘱託魔導師、なのはは民間協力者なんだ。」

「……そうですか、それで二人は私に何かを聞きたいんですよね。なにを聞きたいんですか？」

ちゃっかり情報を取得した。

……でも、まだ危機は終わってはいない。

「うん、カータちゃんに聞きたい事がいくつかあって」

「カータがどうやって魔法に出会ったのか、カータの知識に闇の書っていう魔導書についての知識があったら、私達に教えて欲しいんだ。」

やっぱりか、前者はともかく、後者は予想通りの質問。だけど、私に闇の書を知らないかって質問でないのは意外だった。

「どうやって、て言われても、本当に突然です。コイツを……ゲイトをある日道で拾ったんです」

『初めまして。』

そう言いながら、服の下で隠すゲイトを首から外しながら二人に見せ、挨拶させる。

「綺麗な首飾りだから、思わず拾っちゃって、そしたらゲイトが突然喋り始めたからびっくりして、そのまま持ち帰った。……てのが始まりなんですけど」

「そっか、ありがとう。じゃあ2つ目、闇の書について、カータは何か知らないかな？」

「ごめんなさい。私、魔法に触れたばかりで、まだ専門的な知識は無いんです。」

フェイトさんにペコリと頭を下げる。

「う、ううん！こっちこそごめんね？カータちゃんをいきなり呼び止めてこんな事聞いちゃって。」

何を焦ったのかなのはさんが慌てて私にフォローしてくれた。

「……カータ、私達に協力、してくれないかな？カータが私達と一緒に戦って……ううん、闇の書探しを出来る範囲で手伝ってくれたら嬉しい。……駄目かな？」

フェイトさんの持ち掛けた提案は、私にとって予想外の展開だった。ここで彼女達を騙せば、私はかなり有益な情報を姉さん達に提供できる。

「ごめんなさい、フェイトさん達の力にはなりたいです。凄く。……でも、私はあくまで魔法は究める為だけに持ちたいし、魔法を日常に持ち込んで、お姉ちゃんに迷惑は掛けたく、ないんです。それに、私は「管理局」ってのが信用出来ません。例えなのはさん達と言えど、局の人間として、私を誘ったなら、尚更。だから……ごめんなさい。」

手伝いたい。これは本心だ。

もし私達の元に闇の書が無ければ、私は喜んで二人に手を貸した。
……でも、私は闇の書側。騙すなんて真似したく無いし、私は器用じゃないから絶対ばれる。

「そっか。……こっちこそごめん。無理なお願いしちゃって。」

「うん、カータちゃんにはカータちゃんの生活がある。その選択は絶対間違って無いよ。」

信用しない。そんな酷いことを言ったのに、二人はまだ私ににこりと笑ってくれる。
漸く私は失言に気がついた。

「あ、別になのはさん達が信用できないとかじゃ無くて、局員としてって意味で、あの――――」
「大丈夫、カータの言いたい事は解ったし、私にもその気持ち解るから。」
「うん、だから安心して、私達にとってもカータちゃんは友達だよ。」

ズキン。

二人の言葉がどこか胸に突き刺さる。
二人は完全に信用してるのだ、こんなたかだか数時間話しただけの小娘を。
だけど私は二人を騙している。嘘偽り用いずして、騙している。
それが心が痛くて、だけど、どうして痛いのか解らない。

「じゃあ、お姉ちゃんが心配するから帰ります。今日はありがとう

ございました。」

「あ、うん。気をつけて（ね）。」

それが後ろめたくて、私は一階に居た桃子さんに挨拶すると、逃げるようになのはさんのうちを飛び出した。

この痛みは私にとって一番脆い部分の一つなんだ。

そう感じる事になるのは、まだ先の話。

第十三話　辛酸（前書き）

はいこんにちわ、今回はスティンガーブレイドエキセキューションｒｙの回です。まあ本編に記述はしませんがねｗｗｗｗｗｗｗ

別にクロノが嫌いなわけじゃないんですが、自分は既に本編で描かれている事よりその時他の場所ではどうなっていたかというのを書いて見たい人なんですねこれが

ではでは、そんな話はおいておいて。本編をどうぞ

第十三話　辛酸

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

私は今究極の状況に置かれている。今までの蒐集行為が明らかに温かった環境だったと思い知らされていた。
戦士というのは不利な状況に置かれてこそ真価を発揮する。そんな言葉を聴いたことがある。

自分を犠牲にするか、ほかの方法を持ち込むか。
そもそもどうしてこうなったんだろうか

っていうか　どうしてこうなった

時間を遡る。そう、その日の夕方まで遡ってみる。

――――――――――――――――――――――――――――――

夕方、この季節の夕暮れはとても早い。油断しているとすぐに真っ暗になってしまう。

「カータ、今日の夕飯何食べたい？」

私がリビングの窓の外をボーッと眺めていると。お姉ちゃんが唐突に尋ねてきた。

「え？何？突然。」

最近は私じゃなくて姉さんやヴィータに聞いていたのに、私に聞い

てくるなんて随分と久しぶりだ。

「今日な、すずかちゃんが遊びに来るんよ。だからご馳走用意せなって思ってな。」

なるほど、どうりでお姉ちゃんの顔が少し明るいわけだ。そういう訳なら真剣に考えないといけない。

「冬のご馳走って行ったら私は鍋がいいと思うな。暖まるし、今なら素材も旬でしょ？」

我ながらナイスなアイディア。最近、蒐集行為が難しくなっているせいでみんな家に居ることが少ない。

八神はやてに寂しい思いはさせていないだろうか？

これは私たち共通の心配であり、悩みの種だ。そんな中、お姉ちゃんの中ですずかさんの存在は大きい。ここで適当な返事をしてしまったら、すずかさんにも失礼に値する。

「おお、ナイスアイディアや。そいだら、今からシャマルとお買い物行くんやけど、カータも来るか？」

「うん、暇だからお手伝いするよ。」

久しぶりの姉の明るい笑顔に私はいつもはついていかない買い物についていくことにした。

思えば、この選択が私のミスだったのかもしれない。

八神カータが『戦場』というものを始めて知ることになった。この

日。

――――――――――――――――――――――――――――――

スーパーに行くと、何者かの陰謀を感じずには居られなかった。
白菜や豆腐は半額だし、豚肉は特別セールで何割か安くなってるしで、まさに鍋をやってください奥様とでもいいたげなサービスっぷりだった

「そやけど、最近みんなおうちにおらんようになってしもうたな」

「「!?」」

やっぱり、お姉ちゃんは確実に『寂しい思い』をしていた。

「ええ…まあその…なんでしょうね…」

「ヴィータもクラブの後に遊び歩いてるみたいだし、私もこの間まで劇の練習があったりでみんな忙しいからね…」

「別に、私は全然ええよ。みんなが外でやりたいことが有るんやったら…それは…別に…。…それに…カータが来る前はもともと一人やったからな。私は。」

そうだ、お姉ちゃんは何でも自分の中で淘汰してしまおうという人だ。だから、今回みたいにたとえ自分が寂しくったって絶対に私たちにそんなことは言わない。

私は何も言い返すことができまかった。

「はやてちゃん…大丈夫です！今は…みんな忙しいかもしれません

けど…その…すぐにまたきっと…」

姉さんの言葉にお姉ちゃんはもちろん、私まで言葉を失って唖然としてしまった。

「そっか、シャマルがそういうなら、そなんやね。…今夜はすずかちゃんも来てくれるし…お肉はいつもより多くかってこな。外は寒いから、カータのナイスアイディアで今夜はあったかお鍋や。」

ようやくお姉ちゃんの顔に笑顔が戻ってきた。

早く、早くもとの生活に戻ろう。早く完成させてみんなと静かに暮らすんだ。

そう心に決心した私であった。

――――――――――――――――――――――――――――――

『ありがとございました。』

もはや定型文となった店員の言葉を背中で受け取りながら暖房の聞いた店内から寒い路上に出た。

吐く息が白くなる。もうこんな季節。ヴィータたちは大丈夫かな…

「お姉ちゃん、すずかちゃんはいつごろ来るのかな?」

私はなんとなく気になって思わずお姉ちゃんに聞いていた。

「うーんまだ時間はあるよ。後一時間と少しくらいやな。どして?」

「ううん、ご飯の準備間に合うかなって思って。」

「そんなの間に合わないよう買い物するわけないやろ?」

ハハハとお姉ちゃんと笑い合うなか

♪~♪~♪~♪♪　♪♪♪~

シャマル姉さんの携帯が着メロを響かせながらコールを告げた。

「はい、うん。…わかったわ。」

電話を切る。誰からだろうか。まあヴィータか、シグナム姉さんって事になるだろうけど

「誰からだったん?」

「シグナムからです。ヴィータちゃんのお迎えに行ったみたいなんですけど。ヴィータちゃんがどこかに行ってしまったらしくて、今居る所を聞いてもどこだか分からないみたいで、道に迷ったそうなんですよ。だからちょっとシグナムの所に行ってきます。カータちゃん、ヴィータちゃんこの場所に居るみたいなんだけど…行ってきてくれるかしら?」

「うん、分かった。…!?」

シャマル姉さんから携帯電話を受け取り、画面にかかれている文章に私は内心かなり驚いた。

『管理局に追い込まれて危ないみたいなの、だから私たちが出ることになったんだけど、大丈夫?』

つまり、これは…

私ニ助ケヲ請ウホド危ナイッテ事ナノ？

意を決してコクリとうなづいて姉さんの目を見る。

「ごめん、手伝えそうになくて。お姉ちゃん行ってくるね。」

「ごめんなさい、すぐに戻りますので。行ってきます。はやてちゃん。」

私たちはお姉ちゃんに一言言うと、そのまま返事を待たずに走り去った。

姉さんの方は知らないけど、私にはお姉ちゃんの顔に落胆の陰が見えたからだ。

「姉さん、３０分。３０分でカタをつけよう。」

「ええ、はやてちゃんのためにも。」

「ゲイト！」「クラールヴィント！」

『了承です、マスター。』『了解いたしました。』

私たちは人気の無い路地裏に飛び込むとそのままデバイスをセットアップさせて冬の夜空に飛び立った。

―――――――――――――――――――――――――――――――

時戻って現在。

姉さんの助言で、私は今。黒いローブに身を包み泣き笑いのような白い仮面をつけてローブについたフードで頭を覆った姿を隠した恰好だ。万が一、敵が私の知り合いでもいいように…という保険だそうだ。

「ハア…はあ…」

膨大な数値を前に私の精神力と体力は徐々に徐々に削られていく。今私は姉さん達を捕まえている強壮型の捕獲結界のプログラムの書き換えをゲイトとクラールヴィントの助けを借りて行っている。離れた位置からクラールヴィントの力を借りて遠隔演算を行って、ゲイトに補助をしてもらっているが、あくまで計算するのは私自身。少しでも超えれば恐らく何かしらの負荷が私の中に生じる。その瀬戸際をさまよいながら私は限界ギリギリの演算を行っていた。

「カータちゃん、大丈夫？」

私の肩を支えながらシャマル姉さんは心配そうに覗き込む。声は発さず笑顔で返す。言葉で返せないこともないけど言葉より表情のほうが伝わると思ったからだ。

『状況は余り良くない。シグナムやヴィータが負けるとは思えんがここは退くべきだ。カータ、お前の演算でどうにかできるか？』

不意に私と姉さんにザフィーラ兄さんから念話が入った。

『できないこともないけど、この結界…セキュリティが半端じゃないから、時間がかかるんだ。もうちょっと頑張って…』

『…シャマル。止むを得ん、あれを使うしかない。』

その言葉の意味を理解したが、言葉を発しようとしたその瞬間。

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで、貴女達を逮捕します。」

『シャマル？カータ？どうした？』

兄さんからの問いかけがあるが、今はそれどころじゃない。

「抵抗しなければ、弁護の機会が貴女がたにはある。同意するならば、武装の解除を。」

黒い魔導師は私たちに杖を向けたまま淡々と語った。
だけど、私はその口調から感じた僅かな有利差を噛み締む心の余裕を見逃さなかった。

「ハアッ」

足を軸にする。そのまま両肩に渾身の力を込めて体全体をまわし重心を全て軸足に集中させる。遠心力が加わった右足に更に魔力によるベクトル加速を乗せてスピードを加速させる。
凄まじい勢いとスピード、それにくわえて不意討ちということもあってか私の後ろに向けて放った回し蹴りは魔導師の肩に直撃し、そのまま魔導師は隣のビルのフェンスまで吹き飛ぶことになった。

『姉さん！こうなったら最後の手段に出る！一芝居打つから、私に付き合って！』

『え！？…分かったわ…』

成功するかは一か八かの賭けであるけど、今は四の五の言っていられない。
どっちにしたって捕獲される一歩前のギリギリなんだ。少しでも可能性に賭けるしかない。

『御機嫌よう…管理局の皆様…？』

この場に居る魔導師全員に伝わるよう念話を辺りに飛ばす。
恐らく、全員が聞こえているだろう。さあ、演算、再開。

『わたくし、今代の闇の書の主…名をエミと申します。お見知りおきを』

クスクスと笑いながら自分では無い誰かを引っ張り出す。まあ要は私の演技なんだけど。

『貴女が闇の書の主さん!?この人たちにどうしてこんなことさせるんですか!?』

予想通りなのはさんが食いついてきた。なんだか電話で言い争いをしているみたいだ。

『何故？…また面白いご質問をなさるのね。そんなの、この書に秘められた絶大な力が欲しいからに決まってるでしょう？これがあればわたくしは最高の存在に成り上がるのだから。』

『そ、そんなことの為に…！』

今度はフェイトさんだ。その言葉にはどこかしら怒りが込められて

いる。
そりゃそうだ、自分のために従者を危険に晒すなんて下衆もいいところだ。

『さて、お話はここでおしまい。私の騎士達をそろそろ返してくださらない？』

私の言葉に息を呑むような静寂が伝わる。といっても念話だから普通に静寂なんだけど

（演算ガ進ム）

だが、その静寂を切り裂いて、先ほど蹴り飛ばした魔導師が私に念話で食いかかってきた。

『それはできない！君らはここで僕らに捕まり罪を償うべきだ。先ほども言ったが、抵抗さえしなければ弁護の機会が君達には――』

『黙りなさい。』

言葉を封殺する。まあもちろんこんな話で済むような連中じゃないって事はよくわかっている。
さあ、ギャンブルの始まりだ。

（私ヲ磨リ減ラス）

『そんなつもりは毛頭ないわ、返してくださらないのなら、ここに居る皆様全員…塵となってもらうだけ。そこの結界もろとも吹き飛ばしてさしあげます。…この闇の書にある膨大な魔力で…ね。』

姉さんからもぎ取った闇の書を抱きしめながらクスクス笑って念話を放つ。もちろんクスクス笑いだって向こうに筒抜けだ。相当不気味…に見えているといいけどなあ…

（アトスコシ）

『そ、そんなことしたら、騎士さんたちは…』

『そんなの所詮プログラム、プログラムなんて後々修復すればいいだけ。手駒に情けをかけるなんてとんだ甘ちゃんなのね、貴女。』

またまた静寂、今私は姉さんたちに酷い事を言ったが今はそれどころじゃない、後で全力で謝ろう。
それより今はこの窮地の脱出。

（間ニ合ッテ）

『貴女…！…それでも人ですか！？』

フェイトさんから遂に怒号が飛び交った。今の言葉で彼女の中で来るものがあったのだろう。

（上書キヲ開始）

『さあ、どちらにするのかしら？無傷で開放？それともみんな仲良く塵になる？』

相手を小馬鹿にするように、見下したように、腹立たしくて汚い言葉を吐き出す。

（書キ換エ、完了）

静寂がまた始まる。恐らく皆葛藤している。黒い魔導師にはなのはさんたちが人質。なのはさんたちには、局の魔導師、そして姉さんたちが人質なのだ。
そう簡単に答えは出まい。

『フフフ。残念。時・間・切・れ♪』

くみ上げたプログラムを強壮結界に叩き込む。

バリンッ

演算を完了しハッキングが完了した結界は所有者が私に入れ替わり、私はその結界を破棄した。
私はそのまま膝をつきそうになるところを姉さんに支えられてそのまま局員が唖然とした瞬間に、離脱した。

――――――――――――――――――――――――

「姉ちゃん、ごめん、大丈夫か？」

帰り道、シャマル姉さんに抱えられて一向に整わない呼吸を必死に整えながら
ヴィータに笑いかけた。

「すまないな、カータ。我らにもう少し力があればお前にここまで無理はさせなかったろうに。」

兄さんも申し訳無さそうに呟いた。違う、アレはどうしようもなか

った。今までの順調がそもそも奇跡だったんだから、ゴールが近づけば守りが激化するのは目に見えていたこと。

「私の方こそ…ごめんね…手駒とか…プログラムだとか…酷いこと、言って…」

そうだ、アイツラを誤魔化して時間を稼ぐためとは言え、私は大事な家族に言ってはならない言葉を吐いたのだ。

「カータ気にするな。私たちの方こそすまない。お前に辛い役回りをさせてしまった。」

私の言葉にシグナム姉さんが当然のように謝ってきた。…やっぱりみんなは優しい、こんな人たちにプログラムだとか言ってしまった自分を殺してやりたい。

でもまあ、何はともあれ、なんとか窮地を脱しえた。まだ時間もそんなに経っていないから、十分約束にも間に合う。

「シャマル姉さん、悪いけど、回復させてくれないかな…？流石にこんな調子じゃすずかさんたちに会わせる顔が無いから。」

抱えてくれるシャマル姉さんに問いかける。

「うん、さっきから継続的にかけてあげてるわ。うちに戻るまでにはある程度回復できてると思うんだけど…」

なるほど、そういわれて見ればさっきより随分呼吸が落ち着いてきてる。

「にしてもさっきの姉ちゃん怖かったな…あたしまで縮こまっちま

った。あんな姉ちゃん初めてみたよ。」

ヴィータが不意に口を開いた。そこまで迫真だったのだろうか？
私が首をかしげてキョトンとしているのに気がついたのか

「普段私たちから見たお前の印象とかけ離れていたからな、さっきのは敵より私たちのほうが効果は有ったかもしれんな。」

シグナム姉さんが補足のように小さく笑いながら答えてくれた。

「じゃあ敵方には効果はなかったのかな。」

だとしたらちょっと残念だ。さきほどのは完全なマグレということになる。

「もしそうだとしたら、今頃私たちは管理局に連行されていただろうな。お前が結界を無効化する前にお前達に迫った局員がお前達を拘束していたはずだ。」

が、それも大きな間違いだったらしい。

「カータ、自分を余り卑下するな。お前は立派に私たちを助けた。コレは事実だ、誇っていい…むしろ誇るべきだ。」

そういい終わると、シグナム姉さんは笑顔で私の頭に手を置いた。

「…へへ…。…シャマル姉さん、ありがとう。もう大丈夫。」

「ほんと？無理してるなら家までこのままでも…」

「大丈夫、随分回復したから、もう歩けるよ。」

私に押されたのか、姉さんは心配そうに私を地面に立たせてくれた。

「ありが…と…？」

体に違和感が走る。なんとなくバランスが取りづらい。上手く歩けない。

オカシイ、別に体力が無いとか疲れきってるとかそういう事は無いのに

左足が上手く動いてくれない。例えるなら、正座のしっぱなしで足の感覚が無くなっちゃった。そんな感じ、全く動かない事もないけど、あまり自由に動かせない。

「どうした、カータ。」

私の異変に気がついたのか、兄さんが僅かに表情を険しくして問いかける。

「ちょっと足をひねっちゃったみたい。大丈夫、うちまでもうすこしだから歩いていけるよ。」

ここで私はようやく気がついた。さきほどの行為が完全に自分の度を越えた演算であったということに。

先ほどの計算量は明らかにあんな短時間に解読できるものではなかった。

無意識のうちに私は自分の度を越えた行為をしていたようだ。いうなれば、これはその代償なんじゃないだろうか…？

「カータちゃん、やっぱり私が背負ったほうがいいですか？」

心配そうなシャマル姉さんが私に駆け寄る。でも、正直背負われるとますます具合が悪くなったみたいで精神衛生上もよろしくない。

「いいよ、ヴィータ、悪いけどちょっと肩貸してくれないかな。さすがに歩きづらいや。」

「あ、ああ。あんまり無茶しないでくれよ？姉ちゃん。」

分かってる。と返しながら私たちはお姉ちゃんが待っている自宅に急いだ。

遅かった。

家は既に誰もいなくて、今のテーブルには鍋の用意をしたまま４人分のお皿が用意されていた。

シャマル姉さんが急いでお姉ちゃんに電話をかけた。必死に謝っている。

しばらく電話をしていたシャマルが私に受話器を向けてきた。

「…私…？」

「うん、代わって欲しいって。」

なんだろう？

別に思い当たる節も無いまま受話器を取って、もしもしと定型文を言ってみた。

SIDE　OUT

SIDE　HAYATE

「もしもし。」

案の定、暗いトーンの声が受話器から響いてきた。

ハハア…随分と落ち込んどるなあ…？

「ご飯食べたか？」

「え…？う、ううん。今から皆で食べるところ…」

受話器越しにも聞こえるように笑い声を上げる。

「気にせんでええからな。心配してくれてありがとうな。」

「…うん、お姉ちゃんも楽しんできてね。お休み。」

ようやく明るくなった妹の声色に少しばかり安心した。

「おおきに、お休み」

「ヴィータに代わるね」

その言葉と共に受話器を動かす音が聞こえた。

「もしもし…はやて…？」

受話器から知らない人間でも分かるくらいに落ち込むヴィータの声が聞こえた。

「どしたん？」

「うん、その…ごめん。」

なんや、今日は本当によく謝られるな。もうさんざん謝られたからもういいんやけど

「…今日は一緒に寝られへんくてごめんな？」

「え…」

随分と予想外な返答だったのか、ヴィータの呆けた沈黙は少し続いた。

「大丈夫だよはやて、あたしは一人で寝られるから。」

「なんや、カータお姉ちゃんと一緒に寝てもらったらどうや？」

クスクスと笑いながらからかってやる。まあヴィータとカータの日ごろの絡みから見て絶対に有り得へん光景やけど

「やだよ、姉ちゃん寝相悪いもん。」

あ、ヴィータ、横にカータが居るんやからそういうことは…

『だあれが寝相悪いってぇ？』

カータの言葉と共にヴィータの悲鳴が聞こえる。ほら言わんこっちゃない、何をされとるのかさっぱりやけど。

「それじゃ明日には帰るからな、火の始末とかしっかりするんやで。」

「うん、お休みはやて。」

通話が切れる。つーつーと独特の機械音が鼓膜を震わす。

「仲いいんだね、はやてちゃんの家族って」

不意にすずかちゃんが話しかけてきた。

びっくりした。今まで彼女は私たちの事を余り突っ込まなかったから、こうして当たり前の言葉にすら驚いてしまった。

「みんなええ子なんよ。今度はすずかちゃんがうちに遊びに来てな。みんなで歓迎したげるから。」

「うん。楽しみにしてるね、はやてちゃん。」

私は久しぶりにできた同年代の友達とこの日の夜遅くまで談話を楽しんだ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

「あの子、エライ事をするんだね。」

「そうね、父様は手出しをしてはならない。って言ってたけど、あ

れは危険分子ね…。」

二人の女性、一人は物腰が落ち着いて茶色の髪の毛を腰あたりまで伸ばした女性、もう一人はミドルヘアーの同じく茶髪、片方と比べると幾分軽そうに見える。それが普通でないと分かるのは彼女らの頭と腰に猫の物だろうか…耳と尻尾がついている。
話しているのはどうやら先ほど起きた事についてのようだ。

「ま、そのおかげであたしがクロすけを蹴り飛ばさずに済んだし、まだ私たちの介入が知られなかったんだけど。」

ニハハと笑いながらミドルヘアーの女性が言った。

「ロッテ、そんなことを言ってる場合じゃないことに気がついてる？」

片方の女性が軽く相手をにらみつけた。だが、ロッテと呼ばれた少女はそんなことは気にもかけていない。

「わかってるって、あの子には悪いけど父様の計画の邪魔になるようなら、早いところリタイアしてもらうしかないってことでしょ？アリア？」

「ええ、少し心が痛むけど、仕方ないわ。あの子がもう少し嫌な子だったら、もっと躊躇なくできるんだろうけど。」

もう片方の女性はアリアというらしい、誰の事を話しているのか未だ明言はしてないが、よからぬことだというのは端から見ていれば一目瞭然であった。

「そうだねえ…父様の手紙に書いてあった内容から絶対良い子なんだけどな…」

だが、二人とも悪人ではないようだ。これから狙うであろうターゲットに二人とも心を痛めているようにも見える。

「ロッテ、手心なんて今の私たちには無関係なのよ、どんなのが相手でも、決して私たちは失敗してはならないんだから。」

「うん、わかってるって。私がそんなヘマをするように見える？」

そうね。とアリアは小さく笑う。

事件は思いもよらぬ方向に進んでいるようだ。

第十三話　辛酸（後書き）

今回、カータの活躍のために仮面の男が出なかったので、アリアとロッテを登場させました。
最初は??にしようかと思ったのですが、本編でどうせ皆さん知ってらっしゃるので

どうせ伏せたって「ハイハイどうせロッテ、アリアでしょ」ってなると思ったので（実際作者は失礼ながら他の作者様の二次創作を読んでる最中そう思ってしまってる糞野郎なので）敢えて名前は伏せずにしました。

で、今回ようやくカータの能力の代償を出すことが出来ました。

ちなみに今回の代償は

『クロック・オーバーの軽度の使用の為』に生じた『足の筋力の一時的な低下』です。まあ一日経てば治るいわば状態異常みたいなもんですね。
これがもっと酷いレベルになると…まあ言わずとも分かりますよね

ではでは、次回投稿でまたお会いしましょう

第十四話　価値　前編（前書き）

こんばんは、Ｇ－Ｃです。今回は一話を三部構成にいたしました
というわけで前編です

あ、物語の中で「なにコレ、イミフ」なところがありましたら臆せずして作者にメッセージなり感想なりでお聞きください。

では本編をどうぞ

第十四話　価値　前編

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

なのは達はハラオウン家となっているマンションの部屋にて、エイミィからカートリッジシステムの説明を受けていた。

二人のデバイスが二人の為に危険を冒してまで強くなってくれたこと、デバイスに新たに加わったモード全部で三つであるということ。レイジングハートは中距離射撃のアクセル、砲撃のバスター、フルドライブのエクセリオンモード。バルディッシュは汎用のアサルト、鎌のハーケン、フルドライブはザンバーフォーム。フルドライブについての危険性。なのはは特にエイミィから強く注意を受けた。フレームの強化が行われていない為に破損の可能性が更に大きいという理由からだ。

もっとも、彼女の日ごろの無茶な訓練などからなのはが無茶に走ると思っての進言だろう。

そして、今代の闇の書についての異常性とこれからの方針について話し合っていた。

「転移頻度から見ても主がこの辺りに居るところは間違い無い。案外、主が先に捕まるかもしれない…。」

「ああ、そりゃ分かりやすくていいねぇ。」

「だね、闇の書の完成前なら持ち主も普通の魔導師だろうし。」

だが、そんな楽天的なアルフとエイミィとは対照的になのはとフェイトの表情は少し暗かった。

「どうした、なのは、フェイト。」

そんな二人の表情の暗さに気がついたのか、クロノがいち早く二人に問いかけた。

「うん、さっきの闇の書の主さんの事を思い出してて…」

「あの人…自分に仕えてくれている守護騎士達を『ただの駒』って言い切った…。」

なのははただ暗くなっていただけだが、フェイトはさきほど対峙した主に完全に敵意を剥き出しにしている。

「フェイト…」

その意味を誰よりも理解しているアルフ。自身もあの主のように自分の事を顧みてくれない人間だったならばどうなっていたのだろうか。と考えてしまう。

「…ああ、だが驚くべきことは今代の主の年齢の低さだ。僕が主に詰め寄ったとき姿をローブで覆っていたが、明らかに幼かった。」

フェイト達とは別の意味あいで表情を重くするクロノ。

「それにすごかったよね、クロノ君が不意討ちとはいえ思いっきり蹴り飛ばされちゃったんだもん。」

「そして最後の結界破壊。アレは明らかに魔法じゃなくて何らかの特異能力よね…。」

リンディの呟きで全員が、先ほどの結界が破られた事を思い出す。
あそこまで大掛かりな強壮結界をなんの魔法行使も無く無効化した存在。

「稀少技能（レアスキル）…なんて厄介な…」

クロノが忌々しげに表情をゆがめながら呟く、だがそんなクロノ達を余所に

「「うーん…」」

なのはとフェイトは何か考え事のようにうなっていた。

「なのは（フェイト）、どうしたの？（どうしたんだい？）」

ユーノとアルフがそれぞれ問いかける。だが、なのはとフェイトはお互い視線を合わせるとまるでそれで意思疎通ができたかのように首を横に振った。
それで意味を理解したのか、二人ともそれ以上言及しようとはしなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

帰り道、なのははユーノを肩に乗せながら念話にて会話をしていた。

『ねえユーノくん、闇の書ってどうやって主を決めてるの？』

『闇の書は自分を扱う資質を持つ人を、ランダムに転生先に選ぶみたいだから…』

『そっか…。…じゃあ私みたいにたまたまリンカーコアを持ってる子が、たまたま闇の書に選ばれちゃうって事も…あるのかな…？』

なのはの具体性を持った疑問にユーノは一瞬怪訝そうな顔をする。が、すぐにその疑問に答えた。

『うん、可能性としてはゼロじゃない。というか、今回の闇の書の主は正にそれに該当するかもしれないんだ。だから、場合によってはもしかしたらなのはが闇の書の転生先に選ばれてたかもしれないんだよ。』

『……。』

『なのは、もしかして誰か心当たりでもあるの？』

意味深ななのはの沈黙にユーノは先ほどから持っていた疑念を思わずなのはに投げかけてしまった。

『ううん、そうじゃない、そうじゃないんだけど…。』

なのはの言葉にユーノは答えを返さず、それ以上は遂に言及することはなかった。

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

夢を、見た。

「また会うことになったな。カータよ。」

真っ暗な空間の中。恐らくここは私の深層心理の中だろう。そこに彼女の欠片は残ってるんだから。

「今日は、きちんとしゃべれるよ。姉さん。」

私の『姉さん』という言葉に彼女は目を丸くして驚いた。

「だって、姉さんもシグナム姉さん達と同列の存在なんでしょ？だったら、貴女も私の姉さんだよ。」

にっこりと自分の中で最高の笑みを持って返事をした。

「そうか、お前らしい。だが、お前の姉…我が主を苦しめているのもまた私自身だ。」

…どうもこの人はマイナス思考が多いようだ、せっかく私がうれしくなる発言をしたのにすぐそういう展開に持って行こうとする。

「そんなの、姉さんの意思じゃないんでしょ？だったらそんなのどうでもいい。姉さんは私の姉さんだよ。」

「ああ、そうだな。」

姉さんはそれきり何もしゃべらなくなった。私も特に話しかけることがあるわけでも無いから、黙る。
お互いに少しばかりの沈黙が続いた。

「昨夜の…」

「え？」

姉さんの突然の呟きに私は思わずさえぎってしまった。

「昨夜のお前のあの行動。全くお前は無茶ばかりするな。」

フッと小さく笑いながら続けた。…また、怒ってるんだろうか…

「ああ、怒っている。だが、それと同時に感謝もしている。将達を助けた事もな。」

思わず少し安心した。それと共にちょっと気恥ずかしかった。褒められるってのはうれしいんだけど。

「でも、酷い事も言っちゃったから、五分五分だよ。そんなに褒められることじゃない。」

「…そうか。」

うれしげな呟きと共にまた沈黙が訪れた。あ、そうだ。あの事を聞いてみよう。

「姉さん。」

「なんだ。」

「姉さんの名前ってなんていうの…？」

いつぞやに問うたあの問いをもう一度だけ繰り返した。姉さんは数秒間を置くと予想通りの答えを返してきた。

「以前も言っただろう？私は闇の書そのものだと。」

この人は大きな勘違いをしている。私が聞いているのはそういう事じゃない。

「それは違うよ。私が聞いてるのは貴女自身が『名乗る名前の事』。」

そう、この人はあくまで『世間が自分を呼ぶ名』を私に教えただけ。それはつまり他者からつけられた異名で自己紹介をしているような物だ。

「……。」

姉さんは答えなかった。いや、答えられないんだろうか。

「そうだよね、姉さんはそれに答えられない。だって」

貴女は

遥か昔に

壊れちゃったんだから。

「どうして、分かった？お前がベルカの時世に詳しかったとは思わないが…？」

姉さんは鋭い視線を私に浴びせる。だけど、そんなのに怯んでる場合じゃない。

「私もデバイス…ゲイトと一緒に戦うまで気がつけなかった。私たちのデバイスとは違った特殊な方法で起動させる特殊なデバイスで気がつかなかったけど、姉さんはお姉ちゃんのデバイスなんでしょ？デバイスはそもそも所有者に補助を与えるように作られてる。決して所有者の肉体を蝕む…なんてことはしない。

なのに、姉さん自身は姉さんの意思を無視してお姉ちゃんの体を侵食している。どう考えたっておかしい。それに、シグナム姉さんから聞いた。闇の書は所有者をランダムで選ぶって…そもそもこれがおかしいと思ったの。そもそもこういうものを作るということは、なんらかの研究か、もしくは別の目的があるか、それなのにランダムで選んでいたら意味が無い。だとしたら、もう貴女自身がどこか異常が有ってどうかしてる

としか考えられない。…でも確信がもてなかった。いくら確信に近い推論ができても所詮は推論。予想でしかない。…だから、姉さんに聞きたかったんだ。私の考えが正しかったのかどうか…。」

ひとしきり話し終えると、姉さんは黙ってしまった。
私も一気にぶっつづけで喋って疲れてしまったので、黙る。

「…ああ、お前の言うとおりだ。」

しばらくの沈黙の後に姉さんは口を開いた。

「私は自身の名も忘れた壊れた魔導書なのだよ。他者から魔力を蒐集することによって起動し、そしてその力は破壊と殺戮にしか使えない。破綻した魔導書だ。」

「…どうして、黙っていたの…？」

「話しても事態は変わらぬし、何よりもお前に知られたくは無かったからだ。お前の前では、せめてただの魔導書であろうと。汚い私の側面を見せたくはなかった。」

小さく語る姉さんの声音には明らかに悲しみが満ちていた。
こんな辛い気持ちをこの人はずっと一人で背負ってきたんだろうか。
だとしたら、それも間違いだ。姉さんはせめて私にはそういう辛いところを分けたって罰は当たらない。
…ううん、そんな罰を与える神様がもし居るんだったら私がぶん殴ってやる。

「そっか。でも――――」

言葉を紡ごうとすると、視界が薄くなってきた。意識も遠のく。どうやら夢が終わるようだ。

姉さんは姉さんだよ。

そうやって心の中で呟くと、姉さんはうつむいた。前髪で見えないその顔は泣いているようにも、見えた。

目が覚めた。時計を見てみると、朝の６時。
…これじゃ早朝のトレーニングはできそうにない。まあ昨日あれだけの無茶をしたんだ。
いつもどおりの朝が迎えられたらそれこそ贅沢というものなんだろう。

「おは、よう。」

一階の居間。ソファに座るシグナム姉さんと横に居るザフィーラ兄さんに寝ぼけ眼をこすりながら挨拶をした。

「ああ、おはよう。」

「カータ、足の具合はどうだ？」

「え？」

ザフィーラ兄さんに言われてようやく思い出した。昨日まで上手く動かなかった左足に違和感が全く無い。

「大事は無いようだが、あまり無茶はするな。お前には日常生活もあるのだからな。ゲイト、お前がカータのストッパーにならねばならんのだぞ」

『はい、心得ております。兄上殿』

胸に掛かった十字架の赤い宝石が光る。なんだか私が無茶をするよ

うな人間みたい…いや、実際はけっこう無茶してるってのは分かってるんだけど。
すると、扉が開くと共にシャマル姉さんが入ってきた。
「二人とも、はやてちゃんもうじき帰ってくるそうよ。」
「そっか、ちゃんとお礼言っておかないとね。」
「そうね。」
シャマル姉さんはそのままキッチンに向かった。
「ヴィータちゃんは、まだ…？」
冷蔵庫を開けながらシグナム姉さんにそう聞いた。寝てたんじゃなかったのか、ヴィータ…
「かなり遠出らしい、夕方には戻るそうだ。」
「貴女はシグナム？」
シャマル姉さんは隣で冷蔵庫を覗くシグナム姉さんに心配そうに聞いた。
「何が？」
「大丈夫？大分魔力が消耗してるみたいだから。」
その言葉に小さく笑って烈火の将は答えた。

「お前達の将はそう軟弱にはできていない。大丈夫だ。」

そういいながらペットボトルのミネラルウォーターを手に取り私の隣に座った。

私からも送っていた心配そうな視線を察してか黙って私の頭に姉さんは手を置いた。

「貴女も随分と変わったわよね…昔は、そんな風には笑わなかったわ。」

「そうだったか?」

「貴女だけじゃない、私たち全員、随分と変わったわ。みんなはやてちゃんがマスターになって、はやてちゃんとカータちゃんが私たちの家族になった日からよね…。」

そういえば、みんなが来てからもう随分たった、半年くらいだろうか。

「あの時は本当にびっくりしたわ、はやてちゃんは気絶しちゃうしカータちゃんはシグナムと睨みあっちゃったしで。」

シャマル姉さんは実に楽しそうに私に笑いかける。だけど私はと言えば、あの時の事を思い出して若干むずかゆいようなそんな感覚を感じていた。

「そうだな、あの時はお互い血が上ってまともな会話になっていなかったそうじゃないか。」

「全くだ、お前とカータ。すぐにでも殺し合いをしてやらんとする

勢いだったぞ？」

兄さんまでため息をついている。うーん、確かにあの時は訳の分からない暴走状態だったからなあ。

「本当に…いろいろあったわよね…」

そう、そして、お姉ちゃんの異変に気がついたのもみんなが来てからだった。

そして今、私たちは闇の書の完成を目指している。その先に何があるのかは分からないけど…うん…？

なにか、致命的な事を忘れているような…

「姉さん、話が…あるの。」

だが、そんなことより、私は昨夜考えていたことを姉さんに話す事にした。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＶＩＴＡ

砂漠、見渡す限りの砂漠の世界。そこであたしは一人魔法生物を倒して魔力の蒐集をしていた。

「糞…はやてからもらった騎士服をこんなにグチャボロにしやがって…」

思わず愚痴がこぼれる。それにしても今回の奴らは中々に手ごわか

った。姉ちゃんが居たらもうちっとどうにかなったかもしんねえけど、あんな消耗した姉ちゃんなんてもう見たくねえ。

「まあ騎士服は治るし、そこそこページも稼げたしいいけどよ…！？」

蹲く、熱い砂の中に顔が埋もれる。…体中が悲鳴を上げてるのが分かる。ダメージに体が悲鳴を上げてる。

「痛く…ない！…痛くない…こんなのちっとも痛くない！」

そうだ、昔と違う。

「帰ったら、暖かいお風呂とはやてのご飯が待ってる、優しいはやてと、姉ちゃんがうちで待ってる…。そうだよ…あたしは…すっげえ幸せなんだ…！」

だから！

砂丘の中から巨大な魔法生物が姿を現した。あたしを敵と一瞬で認識したのか、でっけえ口を開けてあたしにとびかかってくる

こんなの全然痛くねえ！

「だあああああああああああああああ！！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

今日、カータちゃんが学校をお休みした。
どうやら風邪を引いたらしい、最近寒くなってきたからこじらせちゃったのかな…
心配じゃないといえば、嘘になるけど僕は風邪ではない別の理由以外に彼女が休んだ理由が考えられなかった。

…カータちゃんも僕に秘密を打ち明けてくれたんだから、僕も彼女に…言うべきなんだろうか…

駄目だ、歪んだ存在は結果的に物事を歪んだ結末に導いてしまう。
それが良い結果だろうと、悪い結果だろうと…

まだ話す訳にはいかない。

きっと然るべきタイミングが僕の元に訪れるはずだ。その時に、その時までに彼女の本当の味方になるために。
僕の力を…

「へいガイキン、いかがした。」

「へ?あ、ごめんボーッとしてて…どうしたの?」

考え事をしていたせいでリエちゃんへの反応に遅れてしまった。
いつもはそこに居るが今日は留守である主の椅子に座りながら僕の顔を覗き込みながら彼女は続けた。

「いやはや、我らがアイドルが今日は珍しくお休みじゃないか。だからね、アタシらでお見舞いでも如何かとおもってねー」

毎度毎度思うんだけど、この子の口調はけっこう頻繁的にコロコロ

変わる気がする…

「うーん、でも風邪引いてるなら言ってもカータちゃんの迷惑じゃないかな。僕は電話に留めておくよ。」

「ふむ？じゃあアタシは少し顔を出してみようかな。アタシは肉声。君は電話声。ん、完璧じゃないか！さすがガイキン！」

相変わらず僕の理解の及ばない発言をするリエちゃん。というか、女の子同士だし、僕がいたら話せない事もあるだろうしね。

「うん、じゃあよろしく言っておいて、僕も後で電話するねって。」

「あいよぉ、このリエ様にまっかせなさぁい！ノアの箱舟にでも乗ったつもりでいるがいい！」

なんか凄いことを言いながら胸を張るリエちゃん。…それはさすがにスケールでかすぎない…？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＬＩＥ

さてさて、アタシは今我らがお姫様のご自宅前に居るのです。こんなこともあろうかと、予め自宅の位置を調べておいたのさ！

え？どこから得たかって？情報源を洩らさないのがプロってモンですよ旦那…。

てててててーてーてててててー

どこぞのコンビニに行けば聞こえてきそうなチャイムを鳴らしてアタシは返答を待った。

『はい、どちらさまですか?』

インターフォンから女の人の声が…お姉さんかな?

「カータの同級生です。風邪を引いたって聞いて、心配でお見舞いに来ました。」

『そ、そうですか。ちょっと待っててくださいね』

それと共にインターフォンが切れた。それから数分くらい経ってから中から金髪の優しそうなお姉さんから中から出てきた。

「今部屋で寝てます。今起きたので…お見舞いありがとうございます。」

「いえいえ、アタシたち親友ですから」

キリッっと括弧で括っていいくらいの言葉でアタシはお姉さんであろう人物に返した。

案内されるままに部屋に入ると、少しやつれ気味のカータがそこにはいた。

「やあ親友、具合はいかがかい?」

ベッドで起き上がりながら私に引きつった笑顔を浮かべた。美少女が病気で弱るとは反則ですね。わかります。

「…どうだろう、明日にはなんとかなるかもだけど。」

だが、アタシにはカータが別の何かで苦しんでるようにしか見えなかった。

「…何かあった?その顔、風邪以外に何かあるように見えるんだけど?」

アタシの言葉にカータは一切表情を変えずに見つめ返してきた。

「…やっぱりアンタには分かっちゃうんだ。変に鋭いもんね…。」

変とは心外だ、アタシは常日ごろ特殊な訓練を…ってそうじゃない。こんな顔で苦しんでる（精神的な意味で）友人をほっておくほどアタシは捻じ曲がってはいない。

「一応お節介をやいておくけど、何かあったの?」

どうせ、話してはくれないだろうが聞いておくのと諦めて聞かないでおくのでは天と地の差がある。

だけど、思いのほかそれが功を奏したようだ。

「…リエはさ、自分の存在について考えた事がある…?」

「え…?」

訳の分からない言葉にアタシは柄にも無い素っ頓狂（すっとんきょう）な声を上げてしまった。

「私はさ、ちょっと普通とは違う人生を歩いてて、ちょっと前からちょくちょくそういうことを考えてたんだ。」

カータは続けた。
それは今までコイツが話してくれなかった初めての本音という物だった。

「それでさ、ある奴にいわれた。『お前は何をしている?』そう聞かれた。そんでもって同時にこういわれた『お前の存在が足かせとなっているんだ。邪魔なんだよお前は』って…。そしたらさ、目の前が真っ暗になって、体中から力っていう力が抜けてさ、立ち上がることもできなくなっちゃった。もう何にも考えられなくなっちゃって、リエや概貴くんと遊んでた時とかお姉ちゃんと馬鹿やって時、どんな思いをしてたか、どんな顔してたか、どうやって笑顔を作るのか、そもそもなんで私は生きてたんだっけ?…駄目だって分かってる。それでも頭が…私自身が私にその問いをしつづけるんだ…もうどうしていいか判らなかった…。どうしたらこの問いに答えが出るんだろうって…でもさ…考える度に…私が…否定されてく…みたい…で…」

そこまで言うとカータはベッドの上でうずくまり、布団に顔をうずめて何も言わなくなった。
肩を震わせて自身を抱きしめる親友は確かに『泣いていた』。

「どこの、どいつ…?」

もうそんな言葉しかできなかった。

「え…?」

涙をポロポロ流しながらアタシを見つめるカータ。

…許せない。コイツをこんなになるまでのことを言いやがったどこかの糞野郎が許せない。

…許せない。なによりこんなになるまで苦しんだ親友に何もしてやれない自分が許せない。

「カータにそんな事言ったやつ。アタシが地獄のそこまで追い詰めてあげる。アタシの親友にそこまで言いやがったクズ野郎を…。」

「リ…エ…」

際限なく止まること無い涙を蒼い宝石のような瞳からぽろぽろ流す親友に近寄る

「大丈夫、カータはアタシ達の大事な友達だよ。何考えながら過ごせばいいなら、そんな考え忘れるくらいアタシがいじり倒してあげる。どうやって笑えばいいのか分からないなら、アタシがその笑顔を作り直してあげる。もしカータがこの世から否定されたら、アタシ達がカータを死ぬ気で肯定してあげる。だから、そんな顔しないで。」

優しく親友を抱きしめた。触れて初めて分かった。こんなに、震えている。こんな良い奴をここまでしたんだ。そいつには絶対罰が落ちる。ま、神なんてのが居たら、って話だけど。

「うん…うん…！」

そのまま、カータの震えが止まるまでアタシはカータをずっと抱き

しめていた。
端から見たら、絶対変な目で見えるだろうけどねー

―――――――――――――――――――――――――――――

「へい、落ち着いたかアンテナ。」

「はいな、おかげさまで。」

まだ目が赤くはれ上がっているが、カータの表情はどこか明るかった。

「それじゃあアタシは帰るかねー、あ、アンタの愛しのガイキンが電話くれるってさー」

と、ここで最近気になっていた事があったのでついでにカマをかけてみた。

「ちょっ…別にそういうのじゃ…」

ん、結果は大当たり。顔を赤くして顔を逸らす。全く、アニメのキャラかっての。

「はいはい、分かった分かった。そんじゃねー。」

棒読みともいえる言葉を吐きながら背を向けたまま手をひらひら振って部屋から出ようとしたら

「リエ。」

後ろから声が聞こえた。まだ何かあるのかとカータに向かずに止まった。

「ありがとう。私、頑張るよ。」

今日で一番明るい親友の声が背中の方から聞こえてきた。うん、手間かけさせおって。

「あいなーじゃあまた明日ー」

そのまま親友の言葉を待たずアタシは部屋を出て、出迎えてくれた金髪のお姉さんに頭を下げると、何故か笑顔で頭を下げられた。

え…？まさか、見られてたんでしょうか…？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第十四話　価値　前編（後書き）

いかがでしたか？ちょっとイミフな構成にしてあります。

文句がありましたら是非ともいってください、なんだこれはもっとわかりやすくしろコノヤロー。みたいな感じでまあ答えられれは出来ません。だってこれが俺の本気（泣）

ではでは、次回投稿にてまたお会いしましょう

所有魔法　八神カータ（前書き）

二日連続投稿。お許しください！

誰もわからないネタで始まった前書き。
随分ザルな感じだけど気にしないでくれるとうれしかったり飛び跳ねたりらじばんだり

所有魔法　八神カータ

基本的な飛行能力。
空戦魔導師はけっこうな稀少戦力なのだが今の彼女はぶっちゃけ知る由も無い。

魔力による加速魔法
魔力を任意の向きに放出することで自身の体ないし攻撃を加速する事が可能。
原理的にはソニックムーブと同じようなものだがあんな速度まで加速なんて今のカータにはできません。

唯一の砲撃魔法「気功波動（タートル・バースト）」
ゲイトとシュミレーションの結果編み出した彼女が持つ唯一の砲撃魔法。
自身の魔力を圧縮に圧縮して両手を突き出すと同時に放つ砲撃魔法。
別名「かめ○め波」カータが生前に知っていたとある漫画の一番印象の強い必殺技から引用した。
彼女曰く「気力が魔力に変わるとこうなる。けっこう簡単だから誰にでも出来ると思うんだけど…」とのこと。
特性としてはチャージが足りないと極端に威力が低下する。
例えば本来のチャージに１０秒の時間が要るとして、半分の５秒という５割の時間に短縮すると威力は本来のチャージの２５％程度のダメージ数値になる
逆に多くチャージすればチャージするほど威力が上がる数値はどんどん上がっていく。
もう一つの特徴として、いくらチャージを短縮しても使用する魔力は変わらない。つまり１０秒チャージしても５秒チャージしても消費する魔力数値はなんら変化は無い。ただし、上乗せチャージはそ

の分だけ魔力を消費する。

障壁魔法「最強の盾（ウォール・イージス）」

自身の演算能力によるプログラミングで組み上げた。現在彼女が考える中での最強の障壁魔法。

もちろん彼女の中での…という話なのでこれが絶対に破れない性能を持つというわけではない。

だが、その堅固さは文字通りの折り紙つき。スターライト・ブレイカーをなんとか防ぎきれるレベルのチートレベル。

もちろん発動レベルというのが存在し、過程をカットすればカットするほどその精度は落ちていき、自然防御力も低下する。前述のスターライト・ブレイカーを防ぎきるレベルは結構な演算時間が必要となるため結局は逃げたほうがいいんでねえの？って話になってくる。

反射魔法「鏡の盾（ミラージュ・ゴルゴン）」

自身の演算能力を利用しての反射魔法。形式的には障壁魔法となんら変わりないが、その障壁に特殊能力が付随したもの。

接触した攻撃魔法が、ベクトルを全く反対の方向に上書きする。というプログラムが付随されておりこの障壁に触れた遠距離魔法をその魔法が保有するダメージ数値に対応した魔力を消費して跳ね返す。

もちろんその対象の魔法によって影響は変わってくる。

例えば砲撃魔法と収束砲撃魔法ではその威力は随分と変わってくるため消費する魔力も大きく変わってくる。例えばディバイン・バスターに消費する魔力量が仮に１０だとしてスターライト・ブレイカーはその倍の２０といった感じ。

イージスと違って消費する魔力、という事なので幾分か使い勝手はいいものの消耗が物凄く激しいためあまり多用しない。

所有魔法　八神カータ（後書き）

やべえ流石にザルすぎた。まあいっか。

これ以外にカータが魔法を使用することは多分無いです。

っていうかＳｔＳの構成を既に頭で作ってる自分がいるんだけどなんなの？馬鹿なの？死ぬの？

だいいちこんな誰とｋ（ｒｙで続編つくってもｒｙ

ではでは次回投稿でまたお会いしましょう

第十四話　価値　中編（前書き）

我慢しきれねえええええ

こんばんは、バイト帰りで妙なテンションの作者です

外伝進めたかったけど

外伝進まねー↓本編書くか↓よし、外伝書くぞー↓進まねー↓本編の続きを…↓そ、そろそろ外伝書くぞ…↓進まねー↓し、し、仕方ないよね、本編書くぞー↓ほ、本編話数…さ、三話分…？↓今ここ

第十四話　価値　中編

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

「学校を休んで私たちと行動を共に…だと…？」

私の申し出を受けた姉さんたちは予想通り怖い顔をして、そんな返答をした。

「私だけ日常に甘んじてるわけには行かない。この数週間で大分私もまともになってきたし、みんなのサポートくらいはできる。」

私の眼差しがそんなに強いのか、はたまた、私の言葉が正論なのか

「しかし…」

シグナム姉さんの言葉は柄にもなく煮え切らないものだった。

「お願い…。」

その言葉で私の意志の強さが分かったのか、姉さんは

「…分かった。」

「シグナム…！」

とうとう折れてくれた、それに反論するように兄さんがすぐさま姉さんに詰め寄る。

「待て、ザフィーラ、私の答えはまだ終わってない。…カータ、お前の言い分は聞こう。だが、平日におけるお前の蒐集行為の回数に制限をつける。…週1までだ。」

姉さんは私に向けて、いつもの優しい視線でなく騎士の鋭い視線で私に告げた。

当然といえば当然だ。私もそんなに出るつもりは無いし、さすがにそれ以上はお姉ちゃんを誤魔化しきることはできない。

「うん、もう少ししたら冬休みだし、大丈夫。それくらいの言いつけは守るよ。」

「なら、問題ない。」

「シグナム…！」

まだ食い下がってくる兄さん、私が無茶な発言をするとき、兄さんはいつも私の身を案じて反対意見を推してくれる。だけど、今はそれじゃ多分間に合わない。

「ザフィーラ、カータも今や普通の魔導師だ。あの時、カータは我々守護騎士を救った。マグレであったとしても、これは無視できぬ功績だろう？」

「…しかし…！」

「兄さん、私なら大丈夫。危なくなったらなんとか逃げるし、極力サポートに徹するから。」

「…致し方あるまい。他ならぬ我らが将の決定だ。」

私の言葉を聞いてくれたのか、兄さんはおとなしくさがってくれた。

「カータ、それで、お前は今日はどうするのだ？もし今日出るつもりでいるのなら、主が帰ってくるまでに出かけねばなるまい。次の蒐集は私の番だからな。無いとは思うが、万一の事があろうとお前を守ってやれる。」

姉さんの言葉は確かに一理ある。なるべく安全なときに私としても出て行きたい。

まあ、ヴィータが安全じゃないとは言わないけど。

なにはともあれ、姉さんが居るなら万一のことがあっても多分どうにかなるだろう。後は、私の心意気一つだ。

「よし、シャマル。頼んだぞ。」

「はい。はやてちゃんは任せておいてください。」

今回私と姉さんが赴いた世界は、人が居ない世界ではあるけど、自然と緑に溢れた綺麗な世界だった。

今回の蒐集対象はここにいる野生の魔法生物らしい。

「ねえ、姉さん、姉さんってもしかしたら炎を扱う能力とか、あったりするのかな。」

目的地に向かって飛行しながら私は横に並んで飛行する姉さんにな

んとなく疑問に思ってた事を尋ねた。

「ああ、確かに私は魔力を炎に変換できる資質を持っているが…何故それを…？」

「え…？うーんと、姉さんの剣…レヴァンティンって名前に良く似たレーヴァテインっていう炎の剣を思い出して…どっかの本に出てた魔法の剣だったから、もしかしたら…って思って。」

私の回答に姉さんは一瞬怪訝そうな顔をするがすぐに笑顔を見せて小さく声を上げて笑った。

「なるほど、ちょっとした偶然か。お前らしい推測だ。」

どういう意味か分からなかったけど。私が首を傾げて問いかけようとすると

「無駄話はこのくらいにしておこう。蒐集を始める。」

その言葉と共に私たちの前に図鑑でしか見たことがないような巨大な恐竜のような生き物が現れた。

何度かこういう生物とは戦ったことがあるけど、私が前の世界で図鑑で見たことあるような古代の生き物のような物と戦うのはこれが初めてだ。

「カータ、私が前で戦う。隙ができたところで攻撃を叩き込め。」

「うん、わかった。」

その言葉と共に姉さんは凄まじいスピードで恐竜に肉迫する。サポ

ートに徹するとは言ったが攻撃するのは変わらない、ただ決定的な隙以外は動かないという決まりだ
恐竜は予想外の敵の速さに反応がコンマ数秒のレベルで遅れる。だけど、その一瞬の判断遅れが姉さん相手には致命的となる。

「ハッ！」

右手に持ったレヴァンティンを相手の脳天めがけて叩きこむ。その刀身には魔力がこめられ、障壁がつくられていて刃でなく障壁で殴るという形になっているから、殺傷には至らないだろう。
頭蓋に強烈な一撃をいきなり浴びてしまった恐竜はよろめく、私はその隙を見逃さなかった。
空中を蹴るように脚を蹴飛ばして一気に加速をくわえる。以前、ヴィータと共にドラゴンを倒した時のように、加速に加速を更にかけて恐竜の額に最高の一撃を叩き込む。連続の攻撃に恐竜はその場に倒れこむ。

「姉さん、後の攻撃は任せる！」

「ああ、下がれ！」

急いで、後方に下がる。恐竜の攻撃の範囲外の位置。
予想通り先ほどの攻撃程度では気絶もしてくれない。

ここは姉さんに任せておきたいけど、いつ管理局とぶつかることになるか分からない姉さんにあまり消耗はさせたくはない。

「…ゲイト、アレをやりたいんだけど、補助計算…できる…？」

『可能です。貴女の発動と同時に補助演算に入ります。』

よし、なんとかなりそうだ。

『姉さん。ちょっと時間を稼いで…私がその子をなんとかする。』

『…分かった。任せよう、準備が出来たら合図をくれ。』

その言葉を聞くと同時に両手を前に突き出す。右手を上に、左手を下に構え。その二つの手のひらを向かい合わせるようにしながらゆっくりと腰まで引き寄せる。

自分の魔力を圧縮する計算。スフィアとして留めておく計算。トリガーと共に発射する計算。

その全ての計算式を魔法（プログラム）としてゲイトに作成してもらう。

だが、あくまで魔法を作り上げ、体現するのは私自身。手のひらと手のひらの間に魔力が溜まっていくのが分かる。溜まった魔力は銀の光となって球体状に少しずつ少しずつ肥大化していく。

プログラム通りに魔法を作り上げていく。これが難しい…防御魔法とはまた違った感覚だからだ。

一歩間違えれば自分の元で暴発しかねない、自身の制御ができる制御可能下で力をとどめなくてはならない。

指の間から後光のように光が漏れる。キュイーンという音と共に魔力スフィアの完成が直感的に分かる。

『姉さん、退いて！』

合図を出すと同時に姉さんが退くのが視界に移る。

その瞬間に手のひらを最初の構えのようにつきだして

「タートル・バースト！」

その言葉と共に魔力スフィアに圧縮された銀色の魔力を一気に恐竜向けて放出した。

避ける間も無く、銀の奔流に何の抵抗も無く恐竜は飲み込まれていった。

タートル・バースト

前の世界で私が知っているとある漫画に登場する必殺技からまんまのぱくり技。違いは体の気の力ではなく、魔力を使ったということと、名前を多少いじくった。

見た目の割りにはなのはさんの砲撃ほどダメージは与えられないけどこの恐竜を気絶じゃないにしろ、ダウンさせるには十分なダメージのはず。

「グオオォォォォォ…」

予想通り銀の奔流から現れた恐竜はそのまま地面に向かって倒れてしまった。

「はあ…はあ…」

こいつの欠点はチャージを短縮すると有り得ないくらい威力が低下することと、いくら加減調節をしても魔力の消費量は一定、そして私自身が適合してないのかびっくりするくらい疲労する…という点だ。まあ二つ目に関して言えば可能なだけ威力をいくら上げても魔力消費は変わらない…ていう見方もあるんだけど。

「カータ…お前、いつの間に砲撃魔法を…？」

「へへ…授業中にゲイトとシュミレーションで何度か練習してたんだ。実際に魔法として体現させたのは初めてなんだけど…。」

倒れた恐竜の元へと近寄る。このとき、私の中で初めての攻撃魔法成立か、それとも初めて自分の中でのまともな勝利の実感を得たからか、どちらにしろこの時の気の緩みが最悪のミスとなった。

「カータ！避けろ！」

「え？」

その瞬間自分の体が誰かに押された。言うまでもない、姉さんだ。

そして私がこの瞬間まで居た場所に巨大な尻尾が通過する。

それはさきほどの一撃で倒しきれていなかった恐竜の尻尾であった。

「ガハッ…！」

そのまま姉さんは尻尾の強烈な一撃で地面まで凄い勢いで叩きつけられた。

「姉さん！…コ…イ……ツ…！」

この後の事は良く覚えていない。気がつくと私は恐竜を完全に沈静化させていた。

ゲイトが大分血にまみれてるということは相当殴ったんだろう、そんでもって私は有り得ないくらい疲労を感じて壊れたポンプのよう

に呼吸が乱れていた。

「そうだ、姉さん…」

姉が自分をかばってダメージを受けてくれたという事実を思い出す。
吹き飛んだほうの地面に視線を向けたその時だった。

「無様だな」

「!?」

男の人の声と共に私に強烈なバインドが架せられる。
…駄目だ…計算できるほど演算能力にまわすほどの気力が、今の私には残ってない。

ドスッ

「く…は…っ…」

何かがお腹に食い込む。その一撃に、私は肺の中の溜まった空気と私自身の意識を残らず吐き出した。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

――――――――――――――――――――――――――――――

ＳＩＤＥ　ＬＯＴＴＥ

見つけた。守護騎士と例の子。
隣に居る守護騎士が一緒に居るのがネック。なんとかしてあの守護騎士を引き剥がさないといけない。

だが、私がわざわざ手を下すまでもなかった。
そう、それは正に天が私に与えた幸運としか考えられなかった。
あの子の油断、それによってあの生物の攻撃が迫るが、それを守護騎士が身代わりに受けた。
ここで、あの子を捕らえれば――――
「!?」
その時のあの子の顔と殺気は正直計り知れなかった。
蒼い視線からは生気が感じられず瞳が見開いているせいで、鬼のような形相に見える。
「アアアアアアアアアアアアアアア！」
獣のような雄たけびで巨大生物に肉迫する。
一撃。
「ウガアアア！！！！」
その頭部への一撃でまず生物がのけぞる。
ニ撃。
目玉を穿たれる。
三撃。
腹部に凄まじいブローが決まる。

四撃…五撃…六撃…七撃…八撃…九撃…

最初の三つの攻撃でもはや抵抗の意志は生物からは見られなかった。いや、その前に初撃の時点でもうあの生物はあの子に逆らう気なんてなかったろうに、あの子の攻撃は容赦という言葉が介入する余地など全く無かった。

力任せに生物の顔面や頭部に立て続けに攻撃がお見舞いされる。

「ガアアアアアアア！」

その雄たけびと共に最後の一撃が額にクリーンヒットした。

「――――――――――」

もはや悲鳴すらあげられないか、巨大生物は何も喋らず、ただそこに沈むように倒れてそのまま気絶してしまった。

「なんて…子…」

一体何者なの…？あの子…完全に怒ったとかそういうレベルの話じゃない。もっとこう、理性そのものが無くなったかのような、そんな攻撃。

生物が倒れて我に還ったのか、あの子は自分の手を困惑しているように見つめている。なにはともあれ、今が一番のチャンスだ…。ここを逃しては次は無い。

「無様だな。」

そうやって、言葉を投げかけながら私はデバイスを用いて簡易バインドをかけ、そのままあの子の腹に向かってキッツイ一撃を入れてやる。
その一撃で事足りたか、そのまま体重が私の腕にかかる。

「さて、あの守護騎士から一旦離れるとしよう。」

私の視界に剣を杖にしてゆっくりと立ち上がる剣の将が映った。早く離れないと不味い。
どうやらまだ事の異変には気づいてないようだからね。

森の中、乱暴にあの子大樹の幹に叩きつける。

「ウ…グ…」

小さくうめきながら、叩きつけられた衝撃で意識を取り戻したのか。弱弱しい視線で私を睨みつけてきた。

「だ…れ…？」

「お前に答える必要はない。少しばかりあの守護騎士の邪魔になっている羽虫に説教をしてやろうと思ってな。」

冷たい仮面の男の口調で冷淡に言葉を叩きつける。あの子は文字通り表情を険しくさせた。

「どういう…こと…？」

あの子はあの能力を使ったのか、簡易バインドを引きちぎって、ゆっくりと立ち上がって私と対峙する。

「言葉どおりだ。お前はあの４人の足手まといにしかなってない。お前は一体何をしている？デバイスを手に入れ、魔法少女ごっこを覚えた小娘がいっぱしの魔導師にでもなったつもりか？」

「なんですって…？」

「事実だろう？蒐集に関してもお前が役にたったのは今回だけ、その今回ですらも一撃が当たっただけで油断し、守護騎士にダメージを負わせた。近いうちにまた管理局の魔導師と戦闘があるだろう剣の将にな。ページの蒐集に関してもだ。お前の存在は奴らの蒐集スピードを落としている足枷にすぎん。」

この子を監視していた私から考えた結論。この子はどこか自分が守護騎士の足を引っ張っていること少なからず悩んでいたはずだ。かなり無理があるとは思うけど幼い割りに大人びている子にはこういう言葉は以外と効く物だ。

「！？……そ、そんなこと…」

先ほどまで強気だった視線はとたんに弱くなる。心なしかこの子から感じる気配も遠ざかってるようにも感じた。

「邪魔なんだよお前の存在は。おとなしく日々を過ごしているか、ここで生物の餌食にでもなるほうが蒐集完了のためだ。それでもお前はなおあの守護騎士達と共に行動できるのか？まあその表情はおまえ自身も理解しているのだろう？存在が邪魔だと自覚しているの

だろう？」

「……」

その言葉がトドメだったのか、もう言葉は還ってくることはなく、あの子はそのまま崩れるように座り込んだ。

チョロイね。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

Ｉｎｔａｒｌｕｄｅ

カータの意識は遠のくばかりだった。男の言葉は確か正論ではあったが、彼女に反論の余地が全く無いかといえばそうではない。そうではないんだが、彼女の体は言葉を発するどころかまともな思考すら危うかった。

立ち上がることなどできない。体はカタカタカタカタと震えている。瞳には既に自分を見失っているとしか思えない光の無さ。

文字通りカータは仮面の男に「否定された」。

「あ…アア…」

いつぞやの自分のように、獣のうめきにしか聞こえぬ声を上げる。

カータは、自分の中身がひび割れて崩れているのを確かに感じていた。

仮面の男も流石にここまでのダメージの受けように驚いている。彼…いや、彼女としては多少精神的傷を負ってもらって一時的な戦闘不能になってくれればそれでよかったからだ。だが、目の前の少女は明らかに再起不能と見てもなんらおかしくは無い状態。

正に精神死とも見て取れる。

「カータ！貴様ァ…我が妹に何をした！！」

上空から烈火のごとく怒りを帯びたシグナムが仮面の男に向かって剣を振り下ろす。

が、いつもの冷静さを欠いた彼女の一撃は簡単にバックステップをするだけで回避される。

「今回はここまでだ、こちらの用は済んだのでな。ここで失礼させてもらおう。」

シグナムの言葉には答えずに、男はククと楽しげに笑いながら、いつもならば絶対に見せない激情を顕わにしたシグナムに言い放ち、男はその場から消えた。

「待て！……カータ！しっかりしろ！」

シグナムがカータの肩に触れるとその体は驚くほど震えていた。まるで、カータの座るところだけが極寒の大地だとでも言うように。

「ハッ…はっ…あ…ウ…」

相手が義姉だという事も分からないのか、視線を合わせてもおかしなテンポの呼吸をしたまま反応すらできていない。

シグナムは戦いしかしらない。そのために目の前で苦しんでいる義妹にどうしてやっていいか判らず、戸惑い、そしてあの仮面の男と…自分に激しい怒りが沸いてくる。

思わずカタカタと震える義妹の体を優しく抱きしめる。

「また私は、無力だ…」

自身の腕の中で震える義妹に何もしてやれない自分を戒めるようにそう呟いた。その、呟きすら、今のカータに届く事は無かった。
こんなところで立ち往生をしてるわけにもいかず、仕方なくシグナムはシャマルに連絡をいれる。

『シグナム？どうかした？』

『少しばかり不味いことになった。ちょっとこちらまで向かえに来て欲しい。』

『不味いこと…？カータちゃんが怪我でもした？』

シャマルの言葉にシグナムは悔しそうに歯噛みする。

『それだけならまだマシだったな…とにかく、頼む。』

『…分かったわ。』

――――――――――――――――――――――――――――――――

落ち合うポイントにシャマルが来たのはそれから１０分前後経過しての事だった。
いまだにシグナムの腕の中でまるで恐怖におびえる小動物のようになっているカータを見てシャマルは血相を変えた。

「カータちゃん！？シグナム、一体なにが！？」

「済まない、私の力不足だ。」

シグナムは事の顛末を話した。自身の油断でダメージを負い、その隙にカータが連れ去られ、謎の男が妹をこんな状態にさせた。

ということを

「そう…こんなに震えて…」

シャマルの言葉と共にカータがようやく口を開いた。

「あれ…？ねえ、さん？どう、し、て？」

「カータ、無理に喋るな。まずは落ち着け。」

カタカタと震え続けながら言葉を紡ぐカータにシグナムは諭す。

「私…今、まで、どうし、て…ッ！？」

その言葉と共にフラッシュバックでも起こしたのか、突然壊れたポンプのように呼吸を乱し始めた。

「カータ！？シャマル！」

「うん、クラールヴィント！」

『了解。』

シャマルの治癒魔法によりカータの乱れた呼吸は徐々に落ち着く。

「これでは何があったのか聞くのは酷だな。」

「一体何をされたのかしら…魔法攻撃を受けた痕跡は無いようだし…」

シャマルの言葉で二人とも考えるように黙り込む。が、答えは出ない。出るはずもない。

「わからん、とにかくカータを落ち着かせることが大事だ。」

近くの木陰でカータを寝かせる。僅かに開かれた瞳からは生気という物が感じられなかった。

「ごめん…なさい…」

苦しげなカータは口を開く。まるで無理に体から声を絞りだしているようにも見える

「気にするな。お前を連れて行く事はこうなると覚悟していた。今回は私の不注意だ、済まない。」

「違う…全部…私のせい…私が弱い…から…一人で戦える…強さが…無い…から…だから…みんなの…邪魔を…」

掠れた声。そこには目の前の二人と話しているより自分自身を卑下し、そして責めているような言葉。

「そんなことをあの男に吹き込まれたのか？お前が私たちの足枷に

なってると、そう吹き込まれたのか？」

静かなシグナムの言葉。だがその口調の中には明らかな怒りが秘められていた。

「私が首さえ突っ込まなければ…こんな…無駄な時間過ごすことも…無かっ――――」

「それ以上言うな。」

シグナムの言葉でカータの言葉は完全に遮られた。カータの目にようやく明かりが灯る。それが今のシグナムの言葉からか、それともただの時間経過からなのかは分からない。

だが、その蒼い瞳には涙が溜まっていた。ゆっくりと起き上がる。

…元々身体的なダメージは負っていなかったため彼女の意思が回復しさえすればいつでも動けるような体だったからだ。

「…姉さん、帰ろう。まだそんな時間は経ってないでしょ？お姉ちゃんがおかしいと思う前に帰ろう。一応病院に行ってることになってるんだから。」

開いた口から出てきた言葉は機械的な無感情な口調だった。意思の篭ってない簡素な口調。

「…大丈夫なのか…？」

「みんなの前は普通に過ごすから大丈夫。」

相変わらず感情の篭らない声だったが、体が震えているところを見ると、感情を込めないからこそ今の状態が保てるんだろう。

「そうか、分かった。」

シグナムの言葉で三人はその世界からうちに帰る道をたどり始めた。

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

リエが来る少し前の話。私の状況は一言で言えば酷かった。

お姉ちゃんが何度か私の様子を見に来てくれたときは、ただの風邪を装わなければならなかったし、お姉ちゃんが部屋から出て行ったときに自分の中で開放するいろんなもののおかげで出したくなる悲鳴を抑えなければならないしで、本当に死ぬかと思った。

肉体的な意味じゃなくて精神的な意味で。

何かが私の存在を肯定する。でもその次の瞬間、またその何かが私の存在を否定する。

止めて、止めて、止めて…そんな矛盾のせめぎ合いの影響を受けるのは私。肯定された後に否定されるんだ。その時に私にかかる物理的ではない別の痛みは凄まじい物。心が引き裂かれそうになる。

ついに私は起き上がれなくなった。今までは誰かが来てもすぐに視線を向けれるようにベッドの上で布団を足にかけながら座っていたけど、私は崩れ落ちるようにベッドの上に倒れた

「ハッ――――アッ――――――――ハッ――――」

永遠に整わない呼吸を戻そうともがき苦しむ。

私もとことん間が悪い人間らしい、その光景を様子見に来たらしいシャマル姉さんに見られていたようだ。

「!?…カータちゃん!?」

なんとか起き上がろうとしたけど駄目だった。いくら力を入れても私の体は言うことを聞いてはくれなかった。肺は壊れたポンプみたいに空気を受け付けてはくれない。別に体に異常は無い。強いていうなら精神的な物、『病は気から』とは本当に良く言ったものだと思う。

「ど、どうしよう…物理的な物じゃないから私じゃどうにもならない…」

言葉が聞こえるが何を言っているのかさっぱり、もう雑音にしか聞こえない。
自分でも分かるくらい弱弱しい視線を投げる。

「だい…じょ…」

整わない呼吸の中なんとか意識を保ちながらまるで、寿命僅かの重病患者のように震える手で姉さんの悔しさ滲む顔に手を添える
そうやっているうちに大分落ち着いてきた。
あれほど力の入らなかった体もなんとか起き上がれるようにはなった。会話もこなせるようにはなった。
相も変わらずよくわからない状態であるのは変わらなかったけど。

そんな頃だった。私を救うリエの来訪を告げる家のチャイムが鳴り響いたのは

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

第十四話　価値　中編（後書き）

いかがでしたか？

え？

そんな3部構成で大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない。

なに？

Ｅｄｇｅ　ｏｆ　Ａｖｅｎｇｅｒを放置だが大丈夫か？

大丈夫じゃない、問題だ。

エルシャダイやってみてぇ

ではでは次回投稿でお会いしましょう

第十四話　価値　後編（前書き）

連続投稿本当にありがとうございます。

作者です。実はもう第十六話がほとんど完成しておる状態なのですが、あんまりタッタカ、タッタカ投稿するのもどうかと思ってもう十日近く放置して続きをのんびり執筆しています。

というわけで本編をどうぞ

第十四話　価値　後編

時戻って現在。
なのははフェイト達が仮住まいにしているマンションの前にて立っていた。

待ち合わせをしているのか、一向に動く気配がない。だがその視線は漸く動き始める。どうやら待ち合わせ相手が来たようだ。

「なのは。」

金色の髪を揺らしながらフェイトが駆け寄る。
どうやらどちらが呼び出したでもないようで、二人で落ち合おうと決めていたらしく話が早速始まった。

「闇の書の主さんの話なんだけど…」

「うん、私もなのはに言おうと思ってた。」

二人して考えている事が一緒だったあたり、この二人はやっぱり気が合う友人だと思う。

「もしかしてフェイトちゃんも？」

「うん、そうなんだ。」

二人は互いの思った事を話し合った。

「あの声、やっぱりカータちゃんかな？って思ったのは私だけじゃ

なかったんだね。」

「うん、でも、私はアレがカータだなんて認めたくは、無いかな…」

フェイトは悲しそうに呟く。もしアレがカータだとしよう、ならば自分たちと話をした少女は一体なんだったのか、ただの仮面なのか、それとも…

「うん、それにあの人、自分のこと『エミ』って名乗ってた。」

二人の希望をつなぎとめているのはここ、アレは『八神カータ』ではないという最後の希望。

それが偽名であるという可能性もあるが、今の二人はそんな可能性は瑣末な問題だった。

「それに、カータは言ってたしね『私は何も知らない』って。」

そしてこれが一番大きい。彼女たちには友人というものがいかに大きなものであるのかはよくわかっている。なのははもちろん、フェイトの場合は身に染みてわかっているからだ。

だから、彼女達はカータの言葉を信用している。

そこがなによりも、大きいのだろう。

「まだ、結論を出すには早いよね…」

「うん、だから、クロノたちには話せない、カータを巻き込むわけにはいかない。」

二人の気持ちは全くもってして同じだった。

そのあとしばらく、守護騎士たちの本当の目的や、闇の書、そして

謎の主について二人で話し合ったが、答えなぞ見つかるはずもなく、二人はそのまま別れることになった

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

ご飯を食べ終わった時間、俗にゴールデンタイムと呼ばれる時間帯にて僕は一人、受話器を前にして考えていた。

内容はもちろんのことカータちゃんにかける電話の事。

お見舞いとは言ったものの一体何を告げるべきなのかわからない。特筆して話す事など僕には無いからだ。

でもだからと言ってこのまま電話しない訳にもいかない。多分リエちゃんが僕の事を教えているからだ。

困った…そんな風に受話器を前に止まる事数分後。

「概貴や、どうかしたのかい？そんな所にいると風邪をひくよ。」

おじいちゃんが僕に向かって話しかけてきた。顔色を見るに心配をかけていたようだ。

「うん、友達が風邪で休んだからお見舞いに電話しようと思って。」

「ふむ、このまえ来たあの外国人の女の子かね？」

その言葉に僕は不思議と驚いていた。まあ確かにリエちゃんが風邪をひくようには思えないしおじいちゃんの発言はもっともな気がするけど、どうしてだか僕はなんとなく疑問として口に出してしまっ

た。

「そうだけど…どうしてそう思ったの?」

「うん、あの子はどこか危なげな感じがしたからの、何が…と言われればわしにもわからないのじゃが、そうだねどこか生気が感じられないんじゃあの子からは、もちろん全くではじゃあない。どこかすっぽり抜け落ちている。そんな感じじゃよ。概貴にもわかりやすく言うなら…目に見えて元気が無い。そんなところかの…」

おじいちゃんは自分の顎を撫でながらゆっくり僕に説明した。言葉の濁りからどうもおじいちゃんの中でもはっきりしてないみたいだ。確かにカータちゃんはどこか不安定だ。何かの拍子ですぐにくずれそうな…そう、パーティーアイテムの崩れかかったジェンガみたいに。

「ふむ、それはともかく、概貴はなにを迷っているのかな?」

おじいちゃんの言葉で思考を中断させられた。そうだ、何を話すべきなのだろうか、僕は。

「うん、だから何を話そうかなって思ってる。」

「おかしなことを言う。特別な話題は必要無いぞ?概貴や、お見舞いに行くのに概貴はわざわざ言葉を選んでから行くのかい?違うだろう?それと一緒じゃよ。」

どうも含みのあるおじいちゃんの言葉、でも僕には半分くらいしか理解できなかった。

「えっと、僕は電話するだけ…それだけでもいいの？」

「もちろんじゃよ、特別に気張る必要も無い。ただいつもどおりに接してやるんじゃ、むしろそんなことをしたら相手が気を使ってしまうじゃろ？」

おじいちゃんはこんなとき、僕にいつも良い言葉をくれる気がする。関心して言葉を失っていると温かい手が僕の頭を撫でた。

「そんな事はな、わしらみたいな年寄りや大人が気を回すこと。概貴やそういう考えは決して間違いじゃない。でもなお前はまだ小さいんじゃからまだそんなことを考えずに、自分が思うとおりに行動しなさい。大丈夫、何かあったらわしかばあさんがしっかり守ってあげよう。」

「うん、ありがとうおじいちゃん。」

最後の言葉はよくわからなかったが、要するに僕はいつもの僕で電話をかければよかったんだ。
受話器を取るとおじいちゃんは笑いながら部屋に戻っていった。

メモを見ながら番号をプッシュする。受話器からトゥルルルルと独特の電子音が響いてきた。
数秒のコールの後、女の子の声が僕の耳に届いた。

「もしもし、八神です。」

独特の発音だった、えっと確か…関西弁…だったっけ？（概貴の勘違い、正しくは京都弁）

「もしもし、えっとカータちゃんの同級生の概貴っていいます。」

「あぁ、カータからよく聞いてるよ。お見舞い電話ありがとうなぁ、ちょっと待ってなぁ」

カータちゃんを呼ぶ声が小さく聞こえるとともに保留の音楽が流れ始める。

音楽が切れて彼女が電話に出るのはそう遅くは無かった。

「もしもし、代わったよ。」

「こんばんは、風邪、大丈夫?」

何気ない挨拶。おじいちゃんの言ったとおりだった

「うん、ゆっくり寝たら熱もひいたから。多分明日には顔出せるよ」

カータちゃんの声が心なしか喜んでいるように聞こえたから。

なにはともあれもう大丈夫そうだ。

「うん、なら良かった。」

数秒の沈黙。今日の出来事でも話そうかななんて考えがよぎったとき

「ねえ、概貴くん。もし私が、誰かの否定でこの世から消えそうになったら、どうする?」

質問の意味がわからなかった。言葉的な意味じゃなくて、どうしてそういう事を聞いてきたのかが

「うーん、どうするか、なんてわかんないけど。僕はどんなことがあってもカータちゃんの味方だよ。」

「そっか、そうだよね、だって私だけの主人公（ヒーロー）とか言ってくれちゃったもんね。」

僕の答えは正解だったのかカータちゃんの笑い声がクスクスと聞こえる。随分と機嫌がいいみたいだ。この間は僕がそれを言ったら突然立ち上がって帰っちゃったのに、どうしてだろう。

「うん、そうだよ。『今はまだ』できないけど、きっと僕も力になれるから。」

とりあえず、調子に乗らせたままでは面白くない、だから

「え？それってどういう…？」

ちょっとばかり謎をばらまいて電話を一方的に切った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

ツー、ツー…

受話器が私に電話が切れたことを教えている。だというのに、私は受話器から耳を離せないでいた。

彼の言ったことがいまだに耳に残っている。

「どうして…君に一体なにができるの…？」

思わずそう呟くと私はふと何かが盗み見しているのに気がついた。

赤い髪が僅かに見えている。うん、アレが忘れたころにお仕置きしておこう

夕食の後も私はあの件からようやく落ち着いた頭でゆっくり考えてみたが、難題すぎたのか一向に答えは見つからなかった。

「ねえゲイト、どうせ聞いてたんでしょ？」

『さあ、私にはさっぱり。知るのは本人だけでしょうね。そもそも解るような答えだったら最初から洩らすような人ではないと思います。』

なるほど、ゲイトの言葉はもっともだ解るような問題だったなら概貴くんは私にこんな解りやすい言葉で教えはしないだろう。

「そうだよね、どうせ聞いても答えてはくれないだろうししばらくは保留にしておこう。」

『はい、願わくばあまり悪い結果ではないことを』

心配性のデバイスに軽く笑いかけながら私は机から参考書を引っ張り出す。居間で談笑する気にもなれないから少しばかり勉強しようとパラパラめくりはしたが、集中なんてこれっぽっちも出来なかった

第十四話　価値　後編（後書き）

やっと十四話が終わりました。
後編は自分の無計画っぷりが祟ってみごとに文字数が少ないです。

４０００未満って…

次の十五話もちょっとばかり少なめです。とはいっても今回よりは多いですがねｗｗｗ

では次回投稿にてお会いしましょう

第十五話　漏洩（前書き）

どうもこんばんは、作者です。

どういうことだ！いつの間にか初期の考えとは全く違う展開に物語が進んでる気が…いやなんでもないそんなことはない。これは予定調和だ。うんそうだ

それでは本編をどうぞ

第十五話　漏洩

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

カータがロッテからの言葉での攻撃を受けて回復してから翌日
カータは今度は本物の熱を出して倒れた。

なのはのようにまともな訓練も受けずに頻繁な魔力消費は彼女の体には毒でしかなかった。
それでも随分と自重して行動した結果がこれだったのだから、シグナムたちがカータを動かそうとしなかったのはある意味正解だったといえるだろう。

「酷い熱やねえ…なんや夜更かしでもしてたんか？治ったからって調子乗ったらあかんって言うたやろ。」

はやてはシャマルと一緒にカータの部屋にてベッドに寝込むカータを見て笑っている。
まあ、蒐集行為が体に祟ったなどと知る由も無い彼女にはこのような答えが妥当なんだろうが…

「ご、ごめんなさい。」

「とにかく、今日はゆっくり寝てるんやで？学校には連絡入れとくから。」

こくりと何も言わずにうなずくカータ。素直なのはこういう事で義姉に逆らうとどうなるかよくわかっているからだ。まあ、それも時と場合によりけりなんだが

「ん、よろしい。シャマル申し訳ないんやけどちょっとカータの面倒見ててくれる？学校に連絡入れてくるから。」

その態度で安心したのかはやてはシャマルにそう言うと、空っぽの水がさきほどまで入っていたペットボトルとコップを持って部屋から出て行った。

いつもならシャマルは『私がやりますから』というが、今回ばかりは違った。理由は

「しばらくカータちゃんはお休みですね」

コレを告知するためだ。

「で、でも…」

「でもじゃありません。カータちゃんのその体調不良はどう考えても魔法や戦闘で抜けなかった疲れが出てるのよ？しばらく休んでなさい。いいわね？」

いつもでは考えられないシャマルの強い言葉にカータはうっ…と黙り込んでしまった。

はやては定期健診ということで病院に行かねばならなかった当然ながら、一つ下の寝込む妹を一人で残す、というわけには行かず一応医療の心得があるシャマルが残るのが妥当であり、ヴィータとシグナムは用事（無論蒐集行為）があるという。必然的にザフィーラがはやての付添い人という事で出て行ってしまった。

カータは部屋のベッドの中で天井を見つめながら考えていた。

自分に何ができるか

どうすればみんなの足をひっぱらずに済むのか

もし、万が一義姉にばれてしまったらなんと言えばいいのか

考えれば考えるほど思考はよからぬ方向に進んでいくことに気がつく。

ブンブンと頭を振って全く眠気が来ないため諦めて窓を眺める。空はこれ以上無いってほどの青天

冬の寒空にポツポツと雲が流れる。

「何やってんだろう、私。」

不意にそんな言葉を呟いたとき部屋の扉が開いた。

「姉ちゃん、大丈夫か?」

入ってきたのはヴィータ。その顔はいつもの彼女らしくない不安気な表情だった

「うん、気分だけなら大丈夫。」

「おぉ、そっか。」

ヴィータはそのままベッドの縁に座る。

「どうかした？」

意味深なカータの質問、かれこれ半年近く一緒に暮らしているせいかなんとなく様子がおかしいヴィータに気がついた。

「別になんでもねえんだけど、ただ行く前に姉ちゃんの顔見てこうかなって…」

自分でもらしくないと思ってるのかカータの顔を見もせずにヴィータは答えた。当然、その顔が赤くなってるのに気がつかないカータではないが、あえて触れないでおいた。

「そっか、頑張ってね。油断しちゃ駄目だよ。」

「おう、姉ちゃんも無理すんなよ。」

お互い牽制しあうように言葉を言い合い、おかしくなったのか二人で笑いあったあと

「じゃあ行ってくる。」

と、背を向けて扉を出て行こうとしたそのとき

ゾクんッ

とカータの背中に何かが走った。義妹の背中が何か不吉なもののように見えたのだ。

「待――――――」

言葉は遅かった。ヴィータは既に部屋から出て行ってしまったから。仕方が無いから、彼女はただの杞憂だと自分を無理やり納得させた。

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

それからしばらくしてからシャマル姉さんが入ってきた。姉さんによると二人ともうとっくに行ったという。

「どうかしたの？」

「ううん、なんでもない。」

そうだ、今の自分に何ができるんだろうか。そう、今の自分に…

『二人とも、聞こえているか？』

「「！？」」

突然の念話に意識が止まる。いやな予感は確実に事実に向かおうとしている。

『シグナム！？どうかしたの？』

『ああ、テスタロッサに捉まった。奴のほうが速いからな、交戦は避けられそうも無い。』

『ね、姉さん。ヴィータ…は…？』

思わず聞いてしまう。自身のいやな予感が事実になってしまっているのか

『ヴィータはまだ大丈夫だ。だが、すぐにでも…すまんな二人とも話していられそうも無い。』

その言葉と共に姉さんからの念話はぷっつりと切れてしまった。鼓動が高鳴る。

自然に体に力が入る。もうこの時点で私はまともな思考を回すことは出来なくなっていた。

「カータちゃん!?駄目!今はゆっくり休まないと――――」

姉さんが私を抱くように引きとめようとする。だが、私は思わずそれを振り払った

「やだ!早くしないと…ヴィータが…」

無理やり体に力を入れる。いつもどおりの動きをさせようと休まる体に鞭を入れる。

寝ていれば楽だったのに、立ち上がった瞬間。猛烈な眩暈と頭痛が私を苛ませた、どうやら私は予想以上に体調が良くないらしい

「とにかく駄目!心配なのはわかるけど、今のカータちゃんじゃ出来ることは無いわ!」

姉さんが何か言っているがもう私にはまわりの声は聞こえなかった。

私は姉さんの言葉を完全に無視して言い放った。

「姉さん、ヴィータのところへ…お願い。」

その時の私はどんな顔をしていたんだろう。後になって思い返して

みれば、あの時の姉さんは凄く驚いているようにも見えた。

――――――――――――――――――――――――――――

『マスター、無理をしたところで今の貴女の演算能力は正直お話にならないほど低下してます。』

ゲイトにバリアジャケットの展開を言ったところで私はこう返された。

そんな事解っている。自分の体のことだ、能力が低下してることくら分かりきっている。

『解っていませんね。演算がまともに使えないということはマスターの戦闘能力は極端に低下することになります。今までマスターが演算をしてやっと行えた魔法は恐らく使い物にならないでしょうし、無意識下で行っている飛行魔法もできるかどうか怪しい物です。』

「そうよ、考え直して。今の貴女は運動もできないくらい凄い熱なのよ？お願いだから…」

一人と一体のお説教が頭に頭痛と共にガンガンと響き渡る。だが、今の私にそんなものを判別できる判断力などない。聞こえる声も響く頭痛も全て同じ雑音にしかならない。

「黙って！私は、バリアジャケットを、出せって、言ったの！」

その怒声で全ての雑音は止まった。自分でも驚いた。ここまで怒鳴れる物なんだな…と。

きっと熱で頭がどうかしちゃってるんだ。

『了承です。マスター』

観念したのか、ゲイトはようやくバリアジャケットを展開してくれた。
続いて姉さんに視線を送る。何をおびえているのか、姉さんは私と目が合うとビクリと体を震わせた

「姉さん、転送、お願い、できる？」

自分でも人間らしくないと思えるほどの機械的な口調。姉さんは答えずに無言で視線を逸らし、クラールヴィントを出す。
三角形の魔方陣が私の足元に現れる。

「気をつけて…」

転送される最中、私は姉さんが向けてきた視線にこめられた感情に漸く気がついた。
あれは、恐怖だった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＳＨＡＭＡＬ
はっきり言うと、今目の前に居る女の子が本当に私の知るカータちゃんかどうか疑問だった。
殺気とか気迫とかそういう次元の話じゃない。人間さが感じられない口調と表情、そして視線。
今まで私がみてきた「八神カータ」っていう女の子の名残はそこには欠片も感じられなかった。

「姉さん、？、早く…」

そう、だから私は今目の前に居る女の子と視線を合わせられなかった。
目の前に居るのは確かに義妹（カータちゃん）なのに私は恐怖で目をあわせられなかった。

「クラールヴィント。」

『よろしいのですか？』

指に光る宝石は確認するように私に聞いてきた。…良い訳ないじゃない…。

「お願い…。」

だけどそんな思いとは裏腹に私はそう答えてしまった

『了解しました。』

転送魔法を発動する。ベルカの三角形の魔方陣が彼女を転送しようとする。

「気をつけて…。」

意を決して僅かに視線を向けてそれだけを言った。
もう一度見たおかげでようやくこの思考にたどり着けた。
アレは一体誰だったんだろうって…。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＶＩＴＡ

こっちに来てから結構な時間が経った。

姉ちゃん、家でちゃんと休んでんのかな…そんな考えがあたしの中でよぎる。

駄目だ駄目だ、今のアタシは鉄槌の騎士。余分なことを考えず、ただひたすら蒐集するだけだ。

『ヴィータちゃん』

不意にシャマルから念話が入る。心なしかちょっと元気がねえけどなんかあったのか？

『どうかした？シャマル？』

『うん、砂漠でテスタロッサちゃんと、その守護獣の子と交戦になっちゃったみたい後…』

シャマルの言葉が濁る、嫌な予感しかしねえ…だけど聞くわけにもいかねえから一応聞き返す

『後…なに？』

『カータちゃんがそっちに向かってるの、引き止めたんだけど、聞いてくれなくて』

！？

言葉が出なかった。…なにやってんだよ！ちゃんと寝てろって言ったのに…！

『シグナム達の手助けにいきてえけど…姉ちゃんを置いていくわけ

には…』

『ごめんなさい、私が不甲斐ないせいで…』

シャマルに元気が無い理由がわかった。だけど納得いかねえ、姉ちゃんは確かに無茶ばっかするけど自分にできねえ範囲の物には手をださねえ筈なのに…

『とにかく話は後、まずはこっちで拾って…！？』

目の前にあの白いのが出てきた。…クソッ今はそれどころじゃねえのに…！？

『ヴィータちゃん？』

『こっちにも来た。例の白服…』

「高町なんとか！」

とりあえず頭ん中から引っ張りだしてきた名前であろう文章を引っ張りだす。

「なのはだよー！な・の・は。」

どうやら間違ってたみてえだ、なんか騒いでるけど今はそんなことどうでもいい早くコイツをなんとかして姉ちゃんを拾わねえと…

「ヴィータちゃん、やっぱりお話聞かせてもらう訳にはいかない？もしかしたらだけど、手伝える事とか、有るかもしれないよ？」

その姿がどうしてだかはやてと重なる。なんだかムカついてきた…
どうしてこんなのとはやてが重なるんだよ…

「うるせえぇ！管理局の言う事なんか、信用できるかァ！」

思わず取り乱す。姉ちゃんならどう言い返したんだろうな。クソッ
自分のガキっぷりに腹が立つ

「私管理局の人じゃないもの、民間協力者。」

話がなんか続いてるけど、今はそんなのに鎌ってられねえ…こいつ
からはもう蒐集できねえし、姉ちゃんを捕まえねえとどうなるかわ
からねえ…姉ちゃんがもしアッチに捕まったら…

「ヴィータちゃん…。」

「ぶっ倒すのは、また今度だ！…吼えろ！グラーフアイゼン！」

『アイアン・ハウル』

魔力を籠めに籠めた鉄球を叩き割る。行き場をなくした魔力は爆音
と光になって周囲にほとばしる
ようするに煙幕みたいなモン。高町なんとかが止まってる間に離脱
する！

「よし、ここまで離れれば…広域検索…」

魔方陣を展開し周囲にある魔力を探し始めようとしたその時だった。
あのなんとかがこっちに杖を向けている。

嘘だろ…？いくらなんでもこの距離で撃つのか？

「ありえねえ…あんな距離から…？」

ハッタリなんかじゃねえ、もうすでに魔方陣が展開されて魔力スフィアが形成されていく

…デタラメだ…何が民間協力者だ…民間人にそんな魔法、扱えるわけねえだろ…。

「ディバイン…バスターーーーーーーーー！！！」

桃色の閃光が凄まじい速さでこっちに近づく。もう障壁も間にあわねえ、クソ…ここまでか…

ズガアアアアアアアン！！！！！！

「…え？」

確かに直撃した。だけど、アタシに届いたのは僅かな衝撃とあたしを庇うようにして抱きしめる、姉ちゃんがそこにいた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

「ヴィー…タ…」

あの悪寒は絶対悪い事に繋がってる…体は一秒だって動いていられないとでも言うように頭痛で訴える。

体は高熱を出してるのに、寒いと訴え続ける。

まあ完全にただの風邪なだけなんだけど今の私がしようとしてる事にはこの上ない邪魔な存在だった。

絶対この近くにいるはず。早く見つけないと…

『マスター、妹様を発見しました。この方角におよそこの百数メートルほど先に、それと、高町なのはさんも近くに居られます。今は隙をついて離れたようですが』

よりにもよってあの反則砲撃主が近くに居るなんて。遠くに居たらそれこそ恰好の獲物になる。
急ごうと速度を上げようとすると逆に制御を失いかけた。

「わっ…っと…」

『言ったはずです。今の貴女はそれが限界だと』

「うるさい！」

デバイスの制止を完全に無視して飛行を続ける。
失いかけただけで制御できないわけじゃない。
とにかく、なのはさんがこのままヴィータを狙い撃ちするのは目に見えている。

「間に…あって…！」

もうヴィータの後姿が見えている。もちろんその先に光る桃色の丸い光も

あと…少し…

砲撃が発射されるのと私がヴィータの隣に到達したのは同時だった。

…普段の私ならまだわからないけど、今の私にこんな砲撃を防げる盾なんて作れっこない。でもこのままだとふたりとも巻き込んで撃墜。

そんなのは駄目だ。私がここに来た意味がない。

『お前はあの４人の…』

脳内であの糞野郎の言葉が数十回と反芻した。

やってやろうじゃない、脳内で得意気にせせら笑うあの仮面野郎にしたり顔で言ってやる。

盾なんて作る必要ない。もう既にここに在るんだから。

砲撃が到達するのと、私がヴィータを守るように抱きしめるのは全く同時だった。

守る術はバリアジャケットのみ。

体から出せるだけの魔力で防御数値を強化するけどなのはさんの砲撃のまえでは全くの無意味だった。

才能の塊め…

体に意識が粉々に砕かれてもいいくらいの衝撃が走る。多分、爆弾が零距離で破裂したらこんな衝撃なんだろうなって感じの勢いだった。

カモフラージュのためのローブなんか防御力も糞もないただの布切

れみたいなもんだから簡単にはじけ飛ぶ。強化したはずのバリアジャケットもこれでもかってくらいぼろぼろになった。
あんなに丈夫そうだった防弾ジョッキのような立派なベストは虫食いにやられたかのように穴だらけ、その下のタイツみたいな真っ白な服もそれに負けないくらい生地がぼろぼろになった。さすがに穴は開かなかったけど、あんなに綺麗だった白は今は見る影もないくらいくすんでしまっている。

ローブが吹き飛んだって事は文字通り私の正体も筒抜けになったも同義な訳だ。

「どう、お姉ちゃん、の、服は、丈夫、で、しょ？」

ヴィータの顔を体中に残った気力とか魔力とか超力とかガッツとかいろんなもの総動員して見つめる。
幸いダメージは通ってないようだ、まあこれだけダメージ受けて意味無かったら目も当てられないけど…

「姉…ちゃん…？」

ようやく私だということに気がついたのか呆けた顔で私の顔を見返す。なんとか笑いかけるも、私の意識はそこで混濁しはじめ、そのままずるりと私から抜け落ちた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＮＡＮＯＨＡ

直撃した。久々だからちょっと不安だったけどレイジングハートの協力もあってなんとかヴィータちゃんに当てられた。

『直撃ですね。』

「ちょっと…やりすぎた…？」

『いいんじゃないでしょうか』

私の呟きにレイジングハートが答える。…流石にそれはちょっと酷いんじゃないかな…レイジングハート…？

煙が晴れる。これでちゃんとお話が聞けると思うんだけど…

「！？」

煙が晴れてから私は目を疑った。

確かにディバイン・バスターは直撃した。それは間違いない。事実もそうだ。きちんと直撃はした。

なのに、私は目の前の光景に罪悪感を覚えずにはいられなかった。

「カータ…ちゃん…？」

ヴィータちゃんの代わりにディバイン・バスターの直撃を受けたのか今まであの子を隠していたローブは砕け散り、特徴の長い銀の髪が残った爆風に揺られて煌いていた。

もう訳がわからなくなった。なんでここに居るの？とかどうして貴女が闇の書の主なの？とかどうして、私たちに嘘をついたの？とかどうして私は友達を撃ち落としたんだろう

とか

いろんな疑問が私の中でぐちゃぐちゃになってしまった。

でも唯一解ってることは

「友達を、撃っ…ちゃっ…た…」

その事実だけで私は目の前でヴィータちゃんに支えられて意識を失ったカータちゃんの後姿を見ながら力なくレイジングハートを下ろしてしまった。

第十五話　漏洩（後書き）

いかがでしたか。だんだん原作構成から外していきます。
そして次の次では…は…ハハハハハハ！

ではでは皆様次回投稿で！

第十六話　発覚（前書き）

どうもこんにちは、みなさま活動報告に目は通していただけたでしょうか？

Ｅｄｇｅ　ｏｆ　Ａｖｅｎｇｅｒ関連の報告なのですが、このサイト活動報告が何人に見られているか、という記載がないので読まれているのか非常に不安です。

最近はバイトの最中に物語の構成を立てているのですが、マルチタスクなんてできるもんじゃありませんので
永遠に同じ構成をひたすら作っています。つまり、全く進展しないということです。

同時にＥｄｇｅ　ｏｆ　Ａｖｅｎｇｅｒも更新しないといけないわでけっこう頭がこんがらがりそうになってます。

ではではそんなこんなで本編をどうぞ。

第十六話　発覚

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

仮面の男に変身してからアリアはヴィータの援護をせんとカータと同じようにヴィータの元に向かっていた。

「あの白い子、間違いなく砲撃で狙い撃ちするつもりね…」

そんなことを呟きながら接近すること数秒後、アリアの予想通りなのははレイジングハートを構えて凄まじい砲撃を構える。あんな距離からしかもあそこまで強力な砲撃を撃てるような魔導師など管理局にもそうは居まい。

「っ…間に合うか…？急がないと…！？」

砲撃が放たれたと同時にロッテが行動不能にさせた筈の八神カータがヴィータの隣に現れたからだ。

ロッテが何をしたか彼女に知る由は無いが、少なくとも今後騎士たちと行動を共にすることは有りえないと一目見てわかるほど彼女は重症だったから。

「ッ…距離を離さないと…！」

だが、今はそんなことを考えている場合ではない。砲撃が届く前に自身がダメージを負わぬよう余波に備えて障壁を張る。

ヴィータに届くはずだったディバイン・バスターはカータが庇うことによってほとんどのダメージをカータが負うこととなる。

状況が完全に明るみになると、なのはは戦意を完全に消失したのか

目に見えるほど自信を喪失していた。
完全ににげだせる状況なのにも関わらず、ヴィータのほうは

「姉ちゃん！しっかりしろ！姉ちゃん！」

と、完全にそのことを見失っている。

「チッ…あの子…本当に私たちの邪魔しかしないのね…」

アリアはらしくない舌打ちと悪態をつく。いろいろと整理しなければならないがそんなことは後回し、ここで騎士を捕縛させるわけにはいかなかった。

「仕方ないわね…」

ここで自身の姿を晒してクロノ達を混乱させるのも悪くは無いだろうと、アリアはこの数秒でこの結論に至った。流石はクロノの指導者…といったところだろうか。

ヴィータとカータのまえにまるで守るかのようにアリアは仮面の男としてなのはの前に立ち塞がる。

「「！？」」

予想外の登場になのはは失いかけた自身の戦意を。ヴィータは自身が今何をすべきなのかを

思い出した。

「アンタ…シグナムが言ってた…」

そしてソレと共にヴィータはシグナムに教わった義姉を精神的にズタズタにした男の特徴と、目の前に居る男と合致させる。

その視線に怒りが強まる。相手が襲い掛かってくるのならいつでも応戦して叩き潰す。そんな気迫さえ感じられた。

「行け…。闇の書を完成させるのだろう?それにそんなボロ雑巾を背負ったままでは、アレと戦闘はできまい。」

「なんだ…と…?」

男の氷のような冷たい口調が響く。離脱のチャンスを与えられたがヴィータは男の最後の発言がどうしても聞き逃せない。

「フンッ…義姉を侮辱されたのがそこまで気に障るか、まあいい。とにかく行け…アレはこちらがなんとかしよう。」

「ッ……アンタ…次に会うときはぶっ潰す…」

ヴィータはそれだけを呟きカータを抱えたまま、転送魔法の準備を始める。

「ディバイン…」

だがそれを見逃すなのはでもない、すかさず次の砲撃を用意しすぐにチャージを完了する。…が

『マスター!』

レイジングハートが一瞬気づくのが遅れた。アリアの放った多重バインドがなのはを捕らえると同時にディバイン・バスターを完全に無力化させる。

「そんな…あんな距離から…一瞬で…？」

なのはは驚くと共にバインドを引きちぎろうと魔力を滾らせるが、これが中々解除できない。…というより距離に関しては彼女も人の事をいえないような気もしないでもないが…

ともかく、そんなてこずる時間が命とりとなる。その間にヴィータは転送を完了し、アリアもその隙に戦線区域を完全に離脱してしまう。

『申し訳ありません、マスター。見失いました。』

「ううん、私の油断だよ。」

一人残されるなのはは誰も居なくなった虚空を見つめる。

「カータちゃん…」

そんな中彼女が考えるのは自分がさきほど打ち落としてしまった銀の長い髪をした少女の事だけであった。

――

ヴィータは転送が完了するや否や急いでシャマルに念話を飛ばした。

『シャマル！治療を！姉ちゃんが…！』

『ごめんなさい、ちょっと今ここから動けないの、うちに戻ってきてもらって大丈夫…？』

だが、対するシャマルはどこか様子がおかしい。いつもなら治療と言われれば飛んでくるのだが今回に限ってシャマルはそれを渋った。

『そんな悠長な事言ってられるかよ！やばいんだよ…』

そんなシャマルの態度にヴィータはあわてているのか、口調が激しくなったりオロオロしたりとあわただしい。

『ごめんなさい、はやてちゃんにカータちゃんが居ないのを見つかっちゃって…全部…話しちゃった…。』

その言葉でヴィータは全て理解した。同時に煮えたぎった思考回路も完全に冷えて落ち着きを取り戻す。

つまりシャマルは今現在はやてに監視されていて全く動けず、自分とカータ、シグナムは彼女のお説教…で済むかどうか解らない運命を待っていたのであった。

『ッ…わかった。すぐ戻る。』

速度を上げてヴィータは帰路を急ぐ。自身の腕の中で弱弱しく息をする義姉を落とさぬよう強く抱きながら。

――――――――――――――――――――――――――――

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

うちに帰ってきたからおかしいと思った。

シャマルは私がカータの居る部屋に行こうとするとどうしてだかそれを阻もうとしていた。

最初は寝てるんやろうな、などと考えていたがシャマルはまるで私を監視でもしてるみたいに不自然についてくる。

どう考えてもおかしい。

「シャマル、なんでカータに会わせてくれへんの？」

「え！？そ、その…い、今眠ってるんです。だから、その…折角眠れたのに起こしたら可哀想、だなって…」

嘘がつけへんシャマルに誤魔化しは向いてないってのはみんなと生活してよく解ったことやから、もうシャマルが嘘をついてるってのはすぐわかった。

「あ、せや。あの子がすぐおきて水飲めるように水いれとこか。シャマル、私が行くとアレなんやから、ペットボトル。持ってきてくれる？」

「あ、ハイ。わかりました。ちょっと待っててくださいね。」

シャマルは安心したように急いで二階に上がっていく。パタパタと足音を立てて、眠ってる病人が居るというのにそんな音を立てて動けばそんなことを信用するほうがおかしい。

私は少しあとに音をなるべくたてないようにシャマルのあとを追いかける。

シャマルは中々降りてこないはずだ。なぜならペットボトルは私が今朝下ろしてきたんやから。
だからシャマルは性格的に、どこかしら?などとあわてながら今頃部屋の中を慌てて探してるに違いない。
音を立てずにゆっくり扉をひらく、シャマルは私に気がついてない。オロオロと部屋の中を見渡している。

「シャマル?なにしてるん?」

満面の笑みを浮かべながらシャマルを見る。そしてベッドには案の定誰も居なかった。

「シャマル、カータはどこいったん?あんなド風邪ひいて外出なんてありえへんと思うんやけど?」

シャマルは目を泳がせたまま私と視線をあわせようとせえへんいい加減こっちにも我慢の限界というのがある。

「シャマル!主が聞いてるんやで!カータはどこいったんや!」

柄にも無く怒鳴るなんて真似をしてしまった。でも、当然と言えば当然や。私の中で義妹(カータ)はそれくらいの存在になってるんやから。

「はやて…ちゃん…。」

シャマルもついに観念したかようやく私と目を合わせてくれた。でも、ここまで来て何も解らへん私でもない。

「もしかして、みんな。闇の書の蒐集で出かけてたんちゃうか?」

そう、答えはたった一つしかなかったはずや。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

意識が混濁したまま覚醒した私は、自分を大事そうに抱えてくれているヴィータがまず視界に入った。

「ヴィ…た…？」

「喋るなよ、すぐシャマルに治療してもらうから。そんな傷、すぐ治してやるから。」

ヴィータはまるで私ではなく自分に言い聞かせるように呟く。

「ねえ…ヴィータは…強さって…なんだと…思う…？」

思わずそんな問いかけが口から出た。歴戦の猛者と言ってもおかしくないヴォルケンリッターならその答えが返ってくるんじゃないか。そんな期待を込めた言葉でもあった。

「……。」

でもヴィータは黙ったまま答えてくれない。どうして？ヴィータは物凄く強い。だからこんな問いの答えなんてすぐ出せるんじゃないの？

「あたしにも…わかんねえ…。」

「え…？」

「あたしにもわかんねえよ。今だってすげえ悔しいんだ。もっとあたしが強かったら姉ちゃんにこんな怪我させてねえし、闇の書の蒐集だってもっとてっとり早く終わってたかもしんねえ。」

「……。」

「そんな疑問持ってるのは姉ちゃんだけじゃねえ、シャマルも、ザフィーラも、あたしも、シグナムだってそうだ。むしろそんな疑問持ってない奴なんか騎士とは呼ばねえ、あたしが呼ばせねえ。」

驚いた。あれだけ強いのに私と同じ疑問をヴィータも持ってるということに

「それにさ、姉ちゃんは自分が思ってるほど弱かねえよ。」

「？…。」

私が弱くない？そんなの嘘だ。私はいつもみんなから気遣いをさせて足をひっぱってる言わばお荷物。

別にあの糞仮面に指摘された事を引きずってるわけじゃないけど、忘れてるわけでもない。

「だってさ、姉ちゃんは何度もあたしらを助けてくれたじゃねえか、初めてあたしと蒐集に行った時も、シグナムとあたしが管理局に追い込まれた時も、今回だってあたしの代わりにこんなにボロボロになってくれたしよ…。」

そうやって言葉を紡ぐ赤い騎士は鉄槌の騎士ではなく、いつも私と

馬鹿をやってお姉ちゃんに怒られる妹の言葉だった。

「もし姉ちゃんのことを雑魚呼ばわりする奴がいるなら。あたしらが許さねえ、ヴォルケンリッターの誇りにかけても訂正させてやる。」

そこに嘘も偽りも塗りたくられる箇所はどこにも無かった。

「そっか……ありがとう。」

「い、いいからもう喋んな！もうすぐ家だからよ。シャマルに治させっから！」

さっきまでの落ち着いた調子はどこにいったのか、私の言葉で顔を真っ赤にして照れる鉄槌の騎士はそれ以上言葉を発さなかった。

家に帰ってすぐに私はシャマル姉さんの治療を受けた。
ダメージの時に消耗した魔力の補充、受けた体の傷の治癒、痛みの緩和と様々な治癒魔法で姉さんは私を治療した。
ついでにその治癒の影響で風邪までが全快になった。…っていうか最初からこうすればよかったんじゃ…

「魔法はあんまり多用するものじゃないの、治りが早いだけそのぶん体に悪影響はもちろんでるから、カータちゃんがひいた風邪みたいにゆっくり寝てれば治るものに使ってもいい事はないの。」

だそうだ。つまり、自然治癒のほうが体もその分次に抵抗できるよ

う強く修復される。魔法で無理矢理治せばそれだけ弱い修復になってしまうんだそうだ。

って今はそんなことを話してる場合じゃない。
私たちは随分ご立腹になった、滅多に見られないお姉ちゃんの前で今に正座させられて状況説明を要求されていた。
粗方の状況説明はシグナム姉さんがほとんどしてくれた。闇の書の蒐集のこと、完成しなければお姉ちゃんの命が危ないということ、今私たち5人が置かれている状況下のこと

「…これで全てです。」

「ほんまやな?これ以上隠してることがあったら許さへんで?」

お姉ちゃんの言葉に姉さんは静かにうなずく。元々私たちがお姉ちゃん相手に嘘なんかつききれる性格でない面々だったんだ。こうなることは遅かれ早かれ起こったんだろうなぁ…

「みんなの気持ちはようわかった。私のために体を張ってくれたのは凄くうれしい。…せやけど…こんなん間違ってる。」

怒った顔から一転、お姉ちゃんの顔は酷く悲しそうに私たち5人を見つめる。その視線が余りに今の私には痛かった。だから、私は目を合わせることができない。

「私は人様に迷惑をかけてまで助かりたいと思わんし、なによりみんなが悪い事してるんは辛い…。…シグナム。」

「…はい。」

「私、シグナムと約束したやないか…。現マスター八神はやては闇の書に何も望み無い。私がマスターでいる間は闇の書のことは忘れてて。みんなのお仕事はうちで一緒に仲良く暮らすこと、それだけって…。シグナムの…ヴォルケンリッターの将の剣はそんな簡単な約束も守れへんほど安っぽい物だったん…？」

その言葉に姉さんの顔色は変わった。それはいくらなんでも言いすぎだ…！

「お姉ちゃん！姉さんはお姉ちゃんの――――」

だけど、その言葉は姉さんの手に遮られた。

「はい。貴女の為ならば、私の剣などいくらでも折りましょう。」

その視線は真っ直ぐ、堂々とお姉ちゃんの目に向いていた。

「大切な主の命の為ならば…我が剣の価値がいくら堕ちようと、ヴォルケンリッターの誇りが薄汚くなろうと、私はどんなことをしてでも貴女を救います。その覚悟を持って、私は貴女との誓いを破りました。最初で最後の…反抗をしました。」

「……。」

その言葉にお姉ちゃんは沈黙したまま姉さんと真っ直ぐ視線を交える。

たった数秒の出来事だったけど、その長さは永遠にさえ感じられるほど永く感じた。

「ダメや。」

重々しく開いた口はやはり否定だった。
そうだ。そうとしか有りえない。この人はそういう人…例え自分がどんな目に会っても誰かを糧として生きるのを良しとしない。とんでもなく良い人なんだから。
「みんながそのつもりなら私は全力でみんなを止めるで、みんなにこれ以上罪なんか重ねさせへん、できるんやったら私が時空管理局ってとこに自首…ッ!?――――」
そこまで言い終えたところでお姉ちゃんは胸を突然苦しげに押さえて車椅子から倒れてしまった。
「はやて!」「お姉ちゃん!?」「「主!?」」「はやてちゃん!?」
心臓発作を思わせるようなそのしぐさ…私たちの声も聞こえていないのか、苦しむばかりでこちらに反応を全く示さない。
「ヴィータ!救急車!早く!」
私は咄嗟に電話の近くに居たヴィータに怒鳴りつけるように言い放った。我に還ったヴィータも急いで受話器のボタンを手早く叩いて病院につなげた。
――――――――――――――――――――
――――――――
…結果的に言えば、何とも無かった。
石田先生が、検査のためと、用心ということで入院することになっ

たお姉ちゃん。
それはつまり八神家の家事に対する戦力のほとんどを失ったということになる。

掃除洗濯は私がどうにかできると思う。一人暮らし直前に死んだってことで前世?でそれなりに予行演習はこなしてきた。
ただ…

「みんなのご飯は誰が作るんや?」

私たちの前に立ちはだかるそんな問題。

「そ、それはまあ…なんとかします。」

「そ、そうですよ。大丈夫です。多分…」

シャマル姉さん、貴女は一番その台詞を吐いてはいけません。台所に貴女だけは私が命に替えても立たせません。

「私がどうにかするよ。お姉ちゃんみたいな立派な料理はできないけど、その場凌ぎにはどうにかしてみせるから。」

「毎日会いに行くよ。だから、大丈夫。」

そんな私たちが微笑ましかったのかお姉ちゃんは小さく笑った。

「ヴィータはええ子やな…。毎日じゃなくてええよ。やる事無いし、ヴィータ退屈や。
ほいだら私は、三食昼寝つきの休暇をのんびり過ごすわ。カータ、みんなのお世話頼むで?……私が居らんからって、人様に迷惑かけ

たらあかんで？」

ゆったりとした口調からちょっとだけ、ほんのちょっとだけ鋭い言葉に変わった。

「それにうなずくことはできません。貴女を救うためなら、いくらでも汚れると昨夜も申し上げたはずです。」

シグナム姉さんはそれだけ言い放つと、病室から出て行ってしまった。

「ちょっ、ちょっとシグナム！？じゃ、じゃあはやてちゃんゆっくり休んでくださいね？」

それに追いかけるようにシャマル姉さんも出て行ってしまった。

「じゃあ私たちも行こうか、ヴィータ。」

「うん。はやて、またね。」

ヴィータに呼びかけて私は二人に続いて帰ろうとしたその時後ろでお姉ちゃんが忘れていたように言い出した。

「あかん！すずかちゃんがメールくれるかもしれへん。カータ、悪いけど連絡しといてくれへん？」

「わかった、任せて。」

そう返しながらお姉ちゃんの顔を見る。その時私にはお姉ちゃんの…八神はやてという女の子が凄く寂しそうな顔をしているような気

がした。

「…姉ちゃん、どうした?」

「ううん、なんでもない。じゃあまたねお姉ちゃん。」

それ以上そんな顔を見ていたくなかった私は逃げるようにして病室から飛び出した。

――――――――――――――――――――――――――――――――

帰り道、私はどうしてもあの時のお姉ちゃんの顔が忘れられなかった。どう考えたって私の勝手な妄想だってのは解ってる。だってお姉ちゃんは私なんかに心配事を悟られるような事は絶対にしないから。

これはあくまで私の勝手な直感。

「シグナム姉さん。」

「どうした。」

「ちょっと忘れ物してきちゃった。先にうちに帰っててくれる?」

姉さんの答えを待たずに私は元来た道を戻った。もうすぐ面会時間が終わるはずだ、だから早くしないと。

――――――病院に戻るのにさほど時間は掛からなかった。まあ、ちょっと戻っただけだし走ってたから半分以下の時間で戻れたんだけど。

時間が時間なだけに待合室に人はほとんどいなくなっている。通りかかった看護婦さんが「もうすぐ面会時間は終わりだからね。」と注意してきた。

まあ5分もあれば事足りるから問題は無い。
これから多分、戦いが終わるまでお姉ちゃんはここで一人で不安と闘うことになる。置き土産の一つ置いていかないで何が妹だ。

「お姉ちゃん！」

ガラリと、病室のドアをスライドさせて乱れる呼吸を整えながら病室に入る。

「なんや、シグナム達と帰ったんちゃうんか？」

あんまり急いでたもんだから、いつもの調子で返されて必死になってたこっちがなんだか恥ずかしくなった。

「あ、いや…なんていうか、その…」

「もうすぐ面会時間も終わりやで？それとも何か用事？」

言葉が中々でない。そういえばそんなもの用意してなかった。
勢いだけ良いだけじゃかっこ悪い。

「うん、ちょっと言っておきたいことがあって。」

「？」

あれだけ乱れてた呼吸がすぐに戻った。うん、日ごろの特訓の成果

が出てる。…じゃなくて。

「お姉ちゃん、頑張ってね。死んだら嫌だよ？私、頑張るから、みんなを傷つけず、だれも死なずに絶対お姉ちゃんを助けてあげるから。毎日来るのは無理かもしれないけど、なるべくお見舞いにも来るから、寂しくなったらいつでも電話してね。それから――――」

「もうええよ。それだけで十分や。カータもみんなのお世話頑張ってな、お姉ちゃんも頑張るからな。みんなに無茶させたらあかんで？」

そうやって笑いながら私の頭を撫でてきた。本当に、この人は私と一つ違いな義姉なんだろかと時折疑問に思う。

「うん…それじゃあね。それだけ言いたかっただけだから。」

それだけ言って私は病室の扉を開く。自己満足に浸りながら扉を開けたもんだから

「もう――な――の――――――やね。」

そんな彼女の感傷に浸る言葉を聞き取ることはできなかった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第十六話　発覚（後書き）

第十六話、Ａ'ｓも終盤に後半戦にさしかかりました。

今回はゲストをお呼びしました。月姫からシエル…ではなく、ＢＡＤＥＮＤお助けキャラの知恵留先生です。

知恵留：こんにちはみなさん、ところで作者さん、一つ質問いいですか？

え？なんですか？

知恵留：どうして私なんです？もっと他にいたでしょう。こうゲスト！って人が、ほら例えばこの作品の主人公のカータちゃんとか。

あぁ、それは俺のシュミです。別に本編からでもよかったけど、ここは解説するみたいな場所にしてるから、だったらどうせ型月みたいな描写真似しようとしてんだから型月の解説キャラを…ってなだけです。

知恵留：なるほど、では今回は何を説明すればいいんですか？

えっとですね、ザッとカータがロッテからの悪口だけでなぜああなったのかってのを

知恵留：わかりました。えっとですね。あれはカータちゃんの生まれ方に原因があります。彼女はもともとこちらの住人ではなく所謂現実世界。画面の向こうの読者の皆様と同じ世界から来た…という設定なんです。ちなみに本編は知らない女の子だったみたいですねー

まあそれがいろいろと助かったりもしてたりしてなかったり。

知恵留：本編の世界は元々イレギュラーを許さない。っていうのが第一原則なんです。ですからカータちゃんの存在自体が、かなりあやふやな状態で彼女は生を保っているんです。ですから彼女自身が自身を否定したくなるような、つまり存在自体を否定されるようなことを言われたり、そういう刺激を受けたりすると世界が「やはり不必要」と判断しかけてしまいます。そして彼女の存在そのものを削除しにかかるんですね。本編でカータちゃんの様子がおかしくなっていたのは世界が、まずは物理的な消滅を図ろうとしたからなんです。

ところがいくらイレギュラーといっても、既にこの世に「在る」彼女の体を消滅することはいくら世界の力でも難しかったんでしょうね。

ですが彼女はかなり危険な状態にまで体を蝕まれたはずです。それだけ世界というのは強い存在なんですね。遠野くんの直死の魔眼ほどの能力があれば彼女は一瞬でこの世から消し去られてしまったでしょうが、幸いそんな反則能力は彼くらいしかありませんし。

これで読者に伝わったかどうかは不明ですが…とまあこんなかんじです

まあ作者の自己満足なんで理解できないかもしれませんね。

では次回投稿にてまたお会いしましょう

第十七話　捕縛（前書き）

どうもこんばんは、Ｇ－Ｃです。

特に書くことはないので本編に向かいます。

第十七話　捕縛

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

朝、朝食前の八神家の居間。八神はやてが居ない今そこにいる住人は彼女を気兼ねすることなく、蒐集関連の話をすることができた。

「ページも残り僅かだ。完成も近い。」

闇の書を開きページを確認しながらシグナムが小さく呟いた。

「完成が先か、はやてちゃんが…危なくなるのが先か…」

「どちらにしろ急がねばなるまい。」

シャマルもザフィーラも、完成が近いというのに余り良い面持ちではない。自身の主があなったのだから、そうなるのは当然と言えば当然なんだが

「うん、そうだね。私の体も全快になったし。ラストスパートと…どうしたの？ヴィータ？」

小さくガッツポーズを取るカータは先ほどから黙りこくっているヴィータの顔を覗き込む。

「え…？うん、闇の書が完成したら…はやては幸せになるのかな…」

そんないつもの彼女らしくない弱気な発言。

「わかんないよそんなの。でも今は進むしかない。確かに停止して

いればリスクは無いけど、それは何も生み出してはくれない。だから私達は見知らぬ前に進むしかないんだよ。」

「そうだ、カータの言うとおりだヴィータお前らしくもない。」

カータのシグナムが言う。だがそれでも彼女の顔は暗いままで晴れる見込みが見られない。

「でもよ！なんか忘れてる気がすんだ…なんか大事なこと…」

ヴィータの意味深な言葉。だがそれは今の空気ではどう考えても杞憂としか見られないような発言だった。

「大事なこと…？大丈夫。そんな今更言う大事なことなんて…」

フラグとはこういうことを言うのだろうか。そう口走りかけたカータの表情は何かを思い出したかのように凍りつく。

「どうしたカータ。何か思い出す事でもあるのか？」

ザフィーラの問いかけにカータは戸惑った表情で頷く。

「どうしてこんなこと忘れてたんだろ…」

他の面々が見るなかカータは静かに口を開いた。そう、今まで忘れていた…いや、忘れさせられていた自身の深層意識の中に残っている、闇の書の管制人格（マスタープログラム）の残滓との対話の事を。

管制人格（マスタープログラム）が彼女のなかで記憶にロックをかけておいたからというのがある。

その理由は単純に報せないようにするだけではない。
もし安易にその記憶がこちらで引き出されるようなことがあれば彼女自身混乱するだろうし、あまりに早い段階では誤った判断を下す恐れがあると管制人格（マスタープログラム）が危惧した結果の処置であった。

そしてロックが外れかかり彼女が記憶を今の弾みで引き出した…そういうわけだ。

つまり、それは彼女の中の残滓が消えかかっているという事に他ならない

「…ッ！」

カータはひったくるようにシグナムの手から闇の書を取ると頭の中を整理する。自身の中に眠るもう一つの人格のような物だから、異物を探すような感覚に近いのかもしれない。

見つけた異物…つまり残滓を特定し、闇の書の中に転送した。

「姉さん…」

それは余りに小さくなっていた。まあ残滓なのだからよくもここまで残っていられたものだと感心するほどだから、残っていたのが奇跡のような物だ。

「接続…特定データを抽出し、コレを複製。対象を闇の書に追加上書き。」

複製したバックアップデータを闇の書の中に入れる。後は闇の書が処理すると考えたのか、カータはそれで処理を止めてしまった。と

もかく、これで彼女の中の義姉が消えることはない。

「カータ、何をした？」

「私の中に残った闇の書の残った物を返しただけだよ。」

いぶかしげにたずねるシグナムに、カータは優しく笑って答えた。

「…どういうことだ？その言い方では今までお前の中に闇の書の一部が入っていた。としか聞こえないが…？」

「え？そう言ったつもりだったんだけど…？」

「「「「！？」」」」

ザフィーラの問いかけにカータは当たり前のように返事を返す。それが余りにも衝撃的だったのか、ヴォルケンリッターの全員がそれに驚愕の反応を示した。

「カータ。説明しろ。お前が今まで忘れかけていた事も全てだ。」

「うん。そのつもり。」

「なるほど。粗方の事情は理解した。」

カータは全てを話した。闇の書に以前触れたときに闇の書の中に意識を無意識に送り込んでしまったときのこと。それがきっかけで闇の書の一部を自身の中に持ってきてしまったこと。そして闇の書と

の対話で、闇の書が既に崩壊し、破綻した魔導書であるということに気がついたということ。

事実が明らかになるたびに４人は驚いた。その中でも最後の項目には全員が絶句せざるを得ない内容だったのは言うまでも無い。

「つまり、我々がやっているのは無意味。主を救うのは…不可能だったと…お前はそう言いたい訳か…？」

シグナムは唇を噛む。それこそ血がにじむほどに。当たり前だ。救う事ができないとわかっていたのならば、こんな無駄な悪あがきなどしない。残された主の最後の時間を大事に有意義に過ごすことを優先できたのだから。

「違うよ。これから私が続ける事は皆が助かる方法。お姉ちゃんも、闇の書も。姉さん達も。」

それをカータは否定した。

「待て、既に魔導書が壊れているのだ。異常の中では異常が正常。つまり魔導書が正常に働いた結果今の主の現状が存在している。そういうことではないのか？」

ザフィーラが食いつくように言い出す。彼の発言は最もだ、壊れたものに正しく作用しろと言うのは不可能な話。
足が不自由な人間に自分の足で立って歩け。
と言い放つようなもの

「そう、だから私が闇の書の全てを修復する。私の能力は魔導の全てを書き換えることができる。それが大きかれ小さかれ、例外は、

無い。」

全員が驚愕するなか彼女は続ける。

「闇の書がどれだけ膨大なスペックで動いているかはわからないけど。私に処理しきれない物はない。私には計算する能力と、計算力を上昇させる能力がついてるし、なにより、ゲイトがいる。」

「そうか！カータちゃんの能力があれば闇の書を一から作り直すことだって…」

シャマルの喜びに満ちた呟きとは対照的にシグナムは思い至ったようにカータに問いかける。

「待てカータ。以前から思っていたが、お前のその能力は本当に能力を向上させるだけなのか？
確かに稀少能力というのは、その者だけの能力ということもあって貴重で価値の高いものだ。だが、なんのリスクも無しに無限の能力を引き出すことのできる都合のいい能力など、この世のどこにも存在しない。」

「…。」

沈黙するカータにシグナムは立ち上がって歩み寄っていく。

「カータ。答えろ。お前がその能力を使ったとき。お前には何の副作用も代償も無いと。私の目を見て誓っていえるか？それが偽りなら私はお前と縁を切る。それでもお前は私の問いかけに頷けるか？」

その言葉に怖気ついたのか、カータは目を合わせようとしない。

誰がどうみても彼女が嘘をついているというのはわかり切った態度だった。

「そうだろうな、強壮結界を破ったときもお前は片足が動かないと。そう言った。あれはくじいたでも怪我をしたでもない。お前自身の能力の代償だった。違うか？」

シグナムの言葉にカータは小さく頷いた。

「そんなのダメだ！もし…もしその能力の副作用みたいなので姉ちゃんが死んだりしたら…」

ヴィータの言葉にザフィーラもシャマルも頷く。カータが大事に思っているように、４人もカータには傷ついてほしくないというのが本音だから。

「大丈夫。自分から命を差し出すような真似なんかしないよ。私だって自分の命が惜しいから。」

だが、その言葉を信じられるような行動を彼女はしていなかった。ド風邪をひいたまま妹を助けにいったり、そのまま超強力な砲撃に打ち落とされたりとぶっちゃけた話、無茶しかしてない。

「ゲイト。」

『はい、なんでしょう義姉上様』

シグナムが不意に思い当たったかのように彼女の胸元にある十字架に話しかける。

「あぁ、お前がカータの能力にプロテクトをかけることはできないか？せめて私達がカータが無理に能力を引き上げようとしているのがわかるくらい、でもいい」

「ちょっと！姉さん！そんな必要――――」

『なるほど、了解しました。私もマスターに無理をして亡くなられては困りますので』

カータの言葉を封殺するように女性電子音が響き渡る。予想外のデバイスの反応にカータはすぐには反応できなかった。

「ゲイト！」

『義姉上様のご判断は的確です。今後貴女がクロック・オーバーに制限をかけます。今までは貴女が無意識下での発動を許可していましたが、今後はパスコードを通しての起動とさせてもらいます。』

完全にヒートアップしているマスターとは対照的にゲイトは相変わらずの一定の口調で（っていっても機械だから当たり前だが）続けた。

「…解った。パスコードは？」

『はい、あまり長いのでは戦闘にも支障をきたすかもしれません。ですので一言言っていただければ【クロック・アップ】と。』

「うん。解った。」

ピリリッピリリッ

カータの返事と共にはやてから預かった携帯が鳴り響いた。

携帯電話を開く。着信はメールによるものだった。内容はすずかからだった。

『おはよう、カータちゃん。昨日はメール返せなくてごめんね。はやてちゃんが入院したと聞いてみんなとメールや電話で相談しました。それでアリサちゃんに、なのはちゃん、フェイトちゃん。それで差し支えなかったら理恵ちゃんや概貴くんも一緒にお見舞いに行こうと思うんだけど、大丈夫かな?』

…しまった。うかつだった。すずかさんはなのはさんとフェイトさんにも繋がってる。だから、こうなるのは予想できたはずなのに…しくじった…。

カータの内心での舌打ちしていると共にシグナムが問いかける。

「カータ、どうした。例のご友人か?」

「あ…その…これ…」

カータはメールの本文をみんなに見せた。全員がその内容で愕然としたのは言うまでもない。

――

場所変わって、ここアースラ艦内。

「ついに目標の主様の顔が拝めたってわけね。」

画面に映し出された映像にロッテが楽しげに呟く。
映像にはなのはのディバイン・バスターの直撃でヴィータの代わりに撃墜されたカータの姿が映し出されていた。

「あぁ、これで捜査は間違いなく核心に近づける。だが、僕が不安なのはこの男だ。」

対するクロノの声は余り明るい物ではなかった。その視線は別のパネルに映し出された仮面の男にある。

「そうだね、あの距離からなのはちゃんにあっさりバインドを決めてさらには9分後、フェイトちゃんから気づかれることなく背後から一撃…」

「どう考えてもやり手の男って感じだね。」

先ほどまでの楽しげな口調から一変、小さくため息までついてロッテも忌々しげにパネルを見据える。

「ロッテはどうだ?あの男の立ち回り、君でも模倣することはできるか?僕には無理だが」

「あたしは無理無理、長距離魔法とか苦手だし」

手をひらひらと苦笑いを浮かべながらロッテは答え、エイミィが補足するようにそれに続いた。

「アリアは魔法担当。ロッテはフィジカル担当で、きっちり役割分担してるしね。」

「そうそう♪」

「昔はそれで、酷い目にあったもんだ。」

「その分強くなったろ！感謝しろっつうの！」

そんなコントを繰り広げるなか、だれも気づかない。仮面の男が二人一役であるということに。

そして、その二人一役に適任の人物の二人が今正に会話に参加していた人物であるということにも…。

「それに、私が気になるのはあの日のなのはちゃんの様子がおかしかった事が凄く気になるんだよね。」

エイミィが、キーボードを叩く手を止めてクロノを見上げる。

「あぁ、それは僕も思っていた。本人はなんでもないと言っていたが、アレは間違いなくこの子について何か知っている。」

「なのはってあの白いバリアジャケットの子だよね。あの子は確か管理外世界の人間だから、あの子が知ってるって事は、この子は管理外世界の人間。ってことになる。」

ロッテの言葉に二人は頷く。三人の考えは推測ではなく確信。それもなのはの知り合いなのだから海鳴市内に限定される。

もう闇の書の主はとっつかまってしまったようなものだった。

――――――――――――――――――――

――――

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

時刻は夕方。学校が終わった私は、逃げるように教室から廊下に飛び出した。

「どこに行こうというのかね。」

「グエッ」

が、襟首を捕まれて私の首根っこは服に激しく圧迫され、逃走を封じられる。

どこぞの王様にでもなったつもりなのか、リエは高笑いをしながらこんなことを言い出した。ってかこっちにもあのシリーズの映画ってあるのかな。

「言い訳かな。三分間待ってやろう。」

「では大佐、私は先に帰らせてもらいます。」

シュタッと片手を上げて玄関に向かおうとするところを再び襟首を捕まれる

「ウギャッ」

「跪け、命乞いをしろ、さっさと君のお姉ちゃんのお見舞いについて来い。」

「やだ。絶対嫌。」

今あの二人に会うわけには行かない。どう考えたって顔を見られた私は闇の書の主って事でとッ捕まってしまうのは目に見えた展開だ。

っていうか、ゲームの選択肢的に言うと

・リエに従う

・絶対に拒否する

こんな感じ。どうやって考えたって上は展開が読めている。

エライ人は言ってたよ!?人、それをフラグという。って!

「リエちゃん。別に無理に連れていかなくったって――――」

「ガイキン、甘い、ハイチュウのストロベリー味以上に甘い。」

「僕的にはストロベリーよりオレンジのが甘いと思うけどなぁ」

リエの訳の判らん異次元発言に概貴くんも異次元発言で言い返す。

思ってきたんだけど、最近概貴くんいろんな意味でたくましくなってるような…このまま毒されて欲しくないなぁ、私は今の概貴くんが…ってそうじゃない!

「というわけで、私は帰ります!大佐、後の事はお任せしました。」

某天空のお城の王様気取りのコントをして隙だらけなのをいいことに私は全力でダッシュして逃走した。

――

なんとか二人（正確にはリエ）を振り切って一人帰路をたどる。

「全く…あんなどうしようも無いくらい展開が読める選択肢、誰が落とし穴を選択するんだっての…」

誰に言うでもなく、独り言を愚痴る。だけど、私は選択肢を完全に間違えたみたいです。

『マスター、封鎖結界の発動が確認されました。』

「え…？」

デバイスの言葉はミスなんかではない、もちろん偽りでもない。その瞬間、私は封鎖結界の中に閉じ込められた。

「時空管理局、クロノ・ハラオウン執務官だ。一級品ロストロギア、闇の書についての最重要参考人として、貴女を拘束する。」

空中から現れたあの黒い魔導師。ぶっちゃけた話、私に勝てる相手なんかじゃない。そりゃ稀少能力なんて物を持ってるが私には荷が勝ちすぎてる代物だし、なにより実戦経験も才能も違いすぎる。

「抵抗しなければ攻撃はしない。おとなしく僕についてきてもらおうか。」

できない。ここで私が捕まったら何もかも終わったような物だ。

どうする？

いつも私の隣についてくれる鉄槌の騎士も、烈火の将も、湖の騎士も、盾の守護獣も居ない。

私だけの力で目の前に居る強敵を退けないといけない。

「…冗談…！貴方を叩きのめせば、済む問題でしょ！ゲイト！」

『了解。』

黒い魔導師に不敵に笑いかけながら、ゲイトに呼びかけてバリアジャケットを展開する。

「そうか、なら仕方ない。悪いがここで倒れてもらう。」

黒い魔導師は小さくため息をついて私に向かって杖を向ける。その瞬間小さな青い光が見えた。

「！？」

ほぼ反射的に横っ飛びする。先ほどまで私が居た場所に数本の光の針のような物（実際には違うかもだけど、一瞬しか見なかった私にはそうとしか見えなかった）が凄まじいスピードで通過した。

「なかなかの反応だ。だが、次は無い。僕も暇ではないからな、早々にケリをつけさせてもらう。」

そういいながら再び私に向かって杖が向けられる。再び小さな光が収束する。恐らく一秒もたたないうちに私に向かってさらに沢山の先ほどの攻撃を撃ってくるだろう。

だけど

「調子に…」

やらせるつもりもない。

「乗るな！」

地面を蹴る。狙うはあの黒い魔導師の懐、姉さんたちが居ない今、私は一人で、一人の魔導師としてコイツとやりあわないといけない。

「スティンガーレイ。」

それがあの高速の光の魔法名なのか、その言葉とともに私を射抜かんと光が高速で私に襲い掛かる。

「二度同じ物は」

だけどそれの脅威は初見だからこそ

「ご法度！」

両手を振り子に肩をぐるりと回転させてそのまま胴体を軸に体を回転させる。それによって光を回避、戦いにおいて同じ物の連発ほど回避にたやすいものはない。

そのまま魔力を後ろに放出する。ジェット噴射に似たその魔力は私に前方に凄まじい加速を与える。

狙うはあいつの体。加速したスピードでに更に拳に加速をかけて二重加速の最大攻撃を浴びせてやる。

「その行動を僕が読まないとでも思ったか！」

が、戦いはそんなに甘くはなかった。私の最大出力で加速したはずのスピードは目の前の魔導師にあっさり見極められていたのかつきだした拳をあっさりその手に受け止められる。

「な…！？」

「スティンガースナイプ。」

私の胸元に杖が突きつけられる。まるで死刑宣告のように魔導師の言葉が私に突き刺さる。

『イージス』

その魔法の発動と同時にゲイトが予め用意しておいた防御魔法（プログラム）を発動させてくれた。…が

ガキンッ

「ガ…は…」

零距離というのが無理があったのか、はたまた魔法にそもそも防御貫通能力があるのか、私の唯一の防御魔法はダメージ数値を僅かに軽減させただけで、私の胸元には激痛と共に凄まじい衝撃がほとばしり、後方に吹き飛ばされる。

…レベルが違いすぎる…。こんなの相手に倒せなんて無理な話だ。

レベル５の勇者が魔王を倒せってなもんだ。

…そこまで異次元な差だと思いたくないけど。

「まだ…まだあ！」

再び魔力を逆噴射させて体制を立て直す。こめかみにはさきほどの激痛からか嫌な脂汗が大量に噴出してくる。対する魔導師は汗どころか表情ひとつ変えてない。

「あれを防ぐか、中々の防御能力だ」

そうアイツは呟くと私に向かって杖を再び向ける。最初に撃ってきた光の弾丸が無数に展開される。

「だが、こいつはそう易々とは防げない。」

弾丸は恐らく剣だろう。目標は明らかに私だ。…防ぐしかない。目の前の相手に向かって左手を突き出す。

「演算開始。防御対象を反射。対象の持つベクトルを全てマイナスに切り替え。使用魔力最大出力。有効範囲最大展開。デバイス補助演算追加。」

『ゴルゴン。出せます。』

突き出した自分の左肩から左手の指先までありったけの魔力をたぎらせる。

「スティンガーブレイド・エクスキューションシフト！」

「鏡の盾（ミラージュ・ゴルゴン）！」

私と魔導師が魔法を展開するのは全くの同時だった。

ガガガガガガガガガガガガ！！！！

私に向かって飛来する無数の魔弾がことごとく鏡の盾に突き刺さる。
有効範囲は左右広がって１２，３メートルくらい。突き刺さった魔力の塊はその悉くが向きを変えてそれを放った術者…つまり魔導師に向かって跳ね返されていく。

「なに！？」

その驚愕はなんなのか、私が自慢の魔法を防御したからか、それとも反射なんて意味不明なことをしでかしたからか。

１００を優に超えているその魔弾を全演算を持って防ぐと同時に相手に向かって跳ね返す。
演算どころでまわりの状況に思考を回せるほど余裕が無い。クロック・オーバーさえ使えれば状況判断もできるけど、こんなところで使うわけにも行かない。
なんとか助けが来るまで持ちこたえないと…

ガガガガガガガ…キン！

最後の一発を跳ね返しなんとかダメージを負わずに済んだ。全てアイツに跳ね返してやった。
あれだけ弾き返したんだ、向こうだってタダで済んでは――――――

「驚いた。君はかなり優秀なようだな」

「！？」

その言葉と共に私の体に魔力の鎖が私の体に絡みつく。

「だが実践経験が足りなさ過ぎる。才能だけでは魔法での戦闘は超えられない。」

もがけばもがくほど私に鎖は絡み付いていく。

ッ…こんな鎖…

直ぐに千切ってしまえば…

魔力をたぎらせて鎖に演算をかける。

こういうバインドは攻撃魔法と違って意外と脆い。

だけど

「そんな暇は与えない。」

後少しでバインドを消せそうなその時、私のお腹に衝撃が走った。

「く…ハ…？」

胃液混じりの唾液を口から垂らしながら自分の意識が刈り取られていくのが分かる。

「お…ね…え…」

自分でもよく解らない呟きをして私は意識を失った。

「しかし、本当にこの子が闇の書の主なのか…？」

そんな魔導師の呟きを私は聞く事は無かった。

第十七話　捕縛（後書き）

いかがでしたか？

最近こんな風に思います。

知恵留「感想が欲しいんですか？」

そうそう…って…うお！？

知恵留「どうしたんですか？レギュラーにしたのは貴方でしょう？」

あぁ、そうだったね（別にレギュラーにした覚えはないけど。）

知恵留「今何か聞こえた気がしましたけど。」

気のせいです、ところで先生。今日の解説は？

知恵留「そうですね、では今回はカータちゃんがどうしてあそこまでボロ負けしちゃったかについて話しましょうか。」

ういっす。

知恵留「今回はクロノさんとの戦闘でしたね、惜しくもなくボッコボコにされてしまったカータちゃんですが、決して彼女が弱いわけじゃありません。」

そうですね、確かにそこまで弱くしたつもりは無いです。

知恵留「ですが、戦いにおいていくら能力が高くても実戦経験を多く積んだ人にはすべからく勝てない場合があるのです。もちろん、圧倒的な力の差の前にはそんなもの瑣末な差でしかありませんが、今回のように能力が僅差…というよりむしろカータちゃんが弱い傾向にあった今回の戦いでは、このようになるのは完全に目に見えていたんですね。」

なるほど、実戦経験も戦闘能力も劣っていたと、でも先生。一つ質問が。

知恵留「はい、なんでしょう。」

戦いの中で奇策というのがあるじゃないですか、今回は正にその一つだったと思います。

知恵留「ふむ、確かにそうですね。でもそこもやはり実戦経験の差、というやつです。優れた戦闘者というのはどんな予想外のことでも動じない物です。例え動揺してしまったとしても今回のように落ち着いて、自身の積んだ経験から得た、所謂『勘』というやつです。」

ふむふむ、なるほどなるほど。

知恵留「こんな感じでしょうか、随分やっつけな感じがしますが、原因の大半は貴方のせいですよ?」

さ、サーセン…なんていうか最近自分の頭を整理できなくて、考えを文章にまとめられないんです。

知恵留「落ち着いてからゆっくり書けばいいんじゃないですか?」

だが、断る！

知恵留「……。（呆れ顔で大きなため息）」

…で、では！次回投稿でまたお会いしましょう！

第十八話　交渉（前書き）

最近ポケモンと、パワプロと、ニコニコ動画、小説執筆、何をしようか非常にまよっています。どうもこんばんは、みなさんの心のアイドル。Ｇ－Ｃです。

今回から完全に路線が外れて参ります。さて、どこまで自分の能力が通じるのか、限界突破の再構成です。

では、本編を、どうぞ

第十八話　交渉

ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

時刻は夕方からもうすぐ夜となる夕闇に沈む時刻。
人気の無い八神宅にて、金髪の女性が一人心配そうにおろおろしている。

もちろんシャマルである。いつもならとっくに帰宅していてもおかしくない義妹が帰ってこないのだから、心配性の彼女なら当然の反応である。

そして彼女達が置かれている状況下というのもある。よくよく考えてみればカータは既に顔が割れている。そんな状況で彼女を学校などに行かせるなどは言語道断だったはずだが、後数日で冬休みだという事で、数日程度ならば、という油断もあった。

『カータはまだ帰っていないのか？』

念話でシグナムがシャマルに問いかける。不安に耐えかねてシャマルがシグナムに念話で連絡を入れてから念話をずっとつなげている。

『うん、昨日の今日な話だし…心配で…』

『やはり行かせるのは不味かったか…家の都合と言って休ませるのが妥当な判断だったな。』

二人とも口には出さないが、既にカータは敵の手に落ちている。と考えた上での発言をしている。

まあ二人の考えとおり、彼女は既にクロノ・ハラオウンによって拘束され連れて行かれたのだが…。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

場所変わり、ここアースラ艦内

「それにしてもこんな子がねえ…」

拘束されているカータを見ながらリンディは呆れているのか嘆いているのかよくわからない調子でため息をつく。

魔法による拘束バインドではなく、ワイヤーによって両腕と胴体を簀巻きのようにくくられている。普通のバインドでは彼女の【クロック・アウト】によって壊されてしまうと解っていての対応である。

「艦長、年齢や見た目で判断してはいけません。事実、なのはに撃ち落とされたのは確かに彼女なんですから」

「わかってるわ、カータさん…だったかしら、なのはさんの言葉じゃないけど…お話、聞かせてもらえないかしら？」

リンディはカータの視線にあわせるように屈みながら小首をかしげる。

「貴女たちに話せる事はありません。どうせ一ミリだって信用してはくれないんでしょう？」

だがカータはきっぱりと拒絶の言葉を言い放つ。既に彼女の中で管

理局というのは信用に値する存在ではなくなっているし、なにより今の彼女は犯罪者、彼女自身、精神的に追い詰められてもいた。精神年齢がいくら大人に近いといっても、こんな経験はしたこと無い彼女は今かなりの緊張状態でもある。

「艦長、ちょっと時間を置きましょう。じきになのは達が来ます。彼女たちのほうが年も近いですし、なにより関係がありそうです。彼女らに任せたほうが僕は妥当だと思います。」

カータの様子を見るに見かねたクロノはリンディの横に立ってそういった。クロノの判断は正解であった。緊張から無理に聞き出して錯乱させられてはクロノ達としても困る事であるし、なにより多少大人びているように見えても相手は小さな女の子なのだ。こんな訳の解らないところに連行されてどうかしないわけがない。

「そうね。この子を部屋に連れていってあげて。くれぐれも監視を怠らぬようにね。」

そばにいる局員にリンディが言い放つ。キレの良い返事と共に局員がカータを近くの部屋に連れて行く。

「艦長。」

局員がカータを部屋に連れて行ったのを見届けたのを見計らってクロノが呟く。

「なに？クロノ。」

「彼女は本当に闇の書の主なんでしょうか。」

クロノはカータとの戦いを終えてからの疑問をクロノはいつの間にか投げかけていた。

「それはどういう意味？」

「いえ、彼女との戦闘…レアスキルなど、確かに才能は見られました。…ですが主にしては明らかに実戦経験にかけた魔導師です。」

「仕方ないわ、あれだけ幼いんですもの。むしろ貴方と戦闘が成立しただけでも大したものよ。」

クロノの言葉はリンディにはあまり通用しなかった。リンディの対応は悪くいえば楽観的すぎるがむしろこの場合はクロノが用心すぎる…と言ってしまえばそれまで。

誰でも数年続いた事件が終焉に近づけば盲目にもなりうる。

リンディは今そこに居るようにも見えるが

「でもクロノ。貴方の考えは確かに一理あるわ。引き続き捜査をよろしくね、彼女の後ろに居る何かを突き止めて頂戴。」

それもありえなかった。

「はい。艦長。」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――

そんなこんなで時間が過ぎ、アースラになのはとフェイト、ユーノにアルフが到着した。

「来たか。彼女は今別室で監視されている。君達ならばある程度心

も開くだろう、任せてかまわないか？」

「「…はい。」」

クロノの問いかけになのはとフェイトは小さく頷く。そのままクロノは二人をカータを監視してある部屋に案内した。

「……。」

扉が開いた向こうにカータは居た。クロノは無言で中に二人を促す、自分が居ては…と彼なりの配慮なのだろうか。二人もその意を汲んでコクリと頷くと中に入っていった。

「…今度は貴方たち…？」

「ア…その…」

「そう…だね。」

小さくため息つきカータは立ち上がってなのはたちに歩み寄る。その視線は二人が知る八神カータではなかった。
生気がないだとか、暗いだとか、そういうものではなく。もっと別の自身らより年上の女性のような。そんな視線。

「いいよ。世間話くらいならつきあってあげる。」

「…違うよ。私達は、カータの事が知りたいんだ。」

クスリと少女は笑うといつの間にかその表情は二人が知るカータの物だった。それに安堵したのかそれとも元々覚悟を決めていたのか

フェイトは口を開く。

「フェイトちゃん、待って。」

だが、何故かなのはは遮った。予想外の言葉にフェイトは不思議そうになのはに視線を返すことしかできなかった。

「あの…カータちゃん…ごめんね…？」

数歩前に進むとなのははペコリとカータに頭を下げた。

「え…！？えと…な、何がですか…？」

当然ながらカータは訳がわからないと言いたげに、先ほどの余裕はどこに消えたかわたわたと頭を下げた相手に申し訳なさげに視線を送る。

「私の砲撃でカータちゃんを落しちゃって…。あれから謝りたかったの。」

なのはの言葉にカータは一瞬呆けた顔になってから、小さく笑ってこう返した。

「あれは戦闘です。なのはさんは管理局、私は犯罪者、撃墜されるのは当然です。謝る必要なんて、無いです。」

ニコリと笑うカータに、なのはは耐え切れなかったのか小さく涙を流す。この様子だと随分と思い悩んだに違いない。どうすればいいのかと、たった一人で。

―――――――――――

「ねえ、カータ。どうして…君があんなことしてたのかな。カータは言ったよね、自分は何も知らない。魔法を自分の生活に関わらせたくないって…。」

なのはが落ち着いてからフェイトはようやく口を開いた。

「フェイトさん、私はこう答えましたよね『いくらなのはさんたちでも信用はしません』って」

カータはそんなフェイトに真っ直ぐ視線をおくりながら小さく息を吐くかのように答えた。

「え…うん。それが…なに…？」

カータの表情はどんどん変わっていく。そう、最初に部屋に入るときに二人が見た【誰かの顔】。

「こうは考えなかったんですか『私は貴女たちを信用できないから、ここまでの話は嘘八百です。』って。」

「「！？」」

二人の表情は驚きで硬直する。話されていたフェイトはもちろん、聞いていたなのはもその事実は衝撃的だったのだろう。

「でも、あの時の言葉に私の本心が無かった訳じゃありません。ただ、私が『闇の書と無関係』ということ意外は。」

カータの静かな語りの内容はどこか二人に安堵をもたらす物だった。
それは『このコは私達を友達と見てれてない』というのを少しだけ否定したからだ。

「じゃ、じゃあ。カータちゃんが闇の書の主なの!?」

「その質問に私が答えると思ってるんですか?まあそうですね。ハイ、とでも答えておきます。といっても、今闇の書は私が所持してはいません。騎士達が私のために一生懸命完成を目指してますから。」

「そんなのダメ!闇の書の完成は――」

「そんな反論はお話になりません。嗚呼、もしかして闇の書の完成は破壊と殺戮しか生まない…なんて瑣末な事で私が止まるとでも思ってました?」

刃物のような鋭い言葉のキレで、フェイトは思わず黙ってしまう。
そんなフェイトのことなど気にもしてないとでも言うようにカータはクスクスと笑って小首をかしげる。

「え…どうして…だったら…!」

訳がわからないとフェイトは食いさがる。目の前の少女がそんなことを望んでいるような壊れた存在と思いたく無いのか、それとも何か別の思いがあったのか。

「こんな二度目の命…そんなふうに使っても罰は当たらないでしょ?どうせ死ぬときは死ぬ。みんなのそんな運命をすこーしだけ、早めるだけ。」

「二度…目って…カータ…ちゃん…？」

もうカータが何を言ってるのかもわからないと二人は困惑した顔で、楽しそうに笑みを浮かべるカータをただただ見るだけ。

三人の間に思い沈黙が流れた。それは数秒だったのか数分に及んだのか、ともかくなのはとフェイトには限りなく長い時間に感じた。

「プッ…アッハハ！ハハハハハ！二人とも真に受けすぎですよ！ハハハハハ！」

その間、カータは必死で笑いを堪えていたのか、がまんしきれないとでも言うように楽しそうに大笑いしだした。もちろん二人はキョトンである。

「えと…カータ…？それじゃあ、さっきのは…冗…談…？」

フェイトは訳がわからないとでも言うように頭に「？」を浮かべたまま恐る恐る問いかける。

「む、冗談に決まってます。それともアレですか？二人は私が、そんなことを常日頃思っている痛い子だと思ってたんですか？だとしたらちょっとショックです…。」

二人の反応が不満なのかカータは口を少しとがらせて呆れたようにため息をついた。

ぶっちゃけため息をつきたいのは二人のほうのはずなんだが…

「だって…あんな雰囲気出されたら誰だって信じちゃうよ！ね、フ

エイトちゃん。」

「そうだよ。私も本気にしちゃったんだから、意地が悪いよ！」

なあんて本気で二人が怒ったように返すものだから、カータはさきほどのふざけた調子から気まずそうな表情になる。…が

「む…だって…だって、突然結界に閉じ込められて、突然戦闘に持ち込まれて、訳も解らないままぼっこぼこにされて捕まって、こんな訳の解らない場所に連れてこられて…私だって大変だったんですからね！？…まあ確かにちょっと度が過ぎたかもしれませんけど、なのはさんたちの仲間がやったこととこれでお相子ですからね！」

こんな風に逆ギレされてはさすがの彼女たちも黙らざるを得なかった。

「…と、ともかく…さっきのは…冗談…ってことでいいのかな…？」

このままでは埒が明かない。そうフェイトが判断しなさったか、無理矢理話にオチをつけた。

「…そうです、冗談です。本当はここから先、なのはさんたち…ううん、管理局の皆さんに聞いてもらいたいことがあります。」

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

「…なあんて、冗談です。本当はここから先、なのはさんたち…ううん、管理局の皆さんに聞いてもらいたいことがあります。」

ちょっと憂さ晴らしに二人を脅かしてやった。脅し文句の中に思わ

ず私の出生の秘密的なのが流出したけど、多分冗談と流してくれるだろう。
なんか、二人から猛烈に怒られたけど、私からしたら小学校二年生の女の子をこんなところに突然拉致監禁するほうがどうかしてると思うんだけど。…まあ犯罪者だから当たり前か…。

もうこうなったからには賭けに出よう。そうだ、今までピンチになったときも高いリスクを払って、高いリターンで払い戻しされてきた。今回もそれで行くしかない。

二人にこの捜査での責任者を呼んでほしいと願い出ると、さきほどの緑色の髪をした女の人と私を拘束したあの黒い魔導師が入ってきた。

「それで、話したい事ってなにかしら?」

うさんくさい笑顔を浮かべたその女の人。さっきはリンディとか名乗っていたっけ?
で、確かあの魔導師の名前は…

「クロノだ。クロノ・ハラオウン。」

なんだコイツ。読心術でも会得してるのか?

「それだけ不思議そうに顔を見ていれば誰だってわかる。話を続けてくれ。」

なんかコイツよくわからないけどうざい…まあいいか。

「これは話というか交渉です。闇の書…正式名称はわかりませんけけ

ど、皆さんはもう調べているんでしょう？」

「君こそ、闇の書が本来の名前でない事を知っているみたいだな。」

クロノ（なんかうざいからここではさん付けしたくない）は私の質問に流暢に答えた。この調子だと知ってるみたいだ。

「気づいてる方もいらっしゃると思いますが、私は闇の書の主じゃありません。」

私は意を決して口を開いた。その言葉に驚いたり納得したりといろいろな顔を見れて面白かった。

「やはりか、君が捕縛されれば騎士たちは直ぐに行動を起こすはずだ。それが無いということは、君は主ではない。」

「でも、カータさんが闇の書の主じゃない…ということは、一体誰が？」

「それは…」

私は二人の言葉で初めて動揺し始めた。ここから先は失敗したら多分全てが終わる。お姉ちゃんが見つかるのは時間の問題だし、なにより私が人質みたいになったら間違いなくみんなの足枷になる。どう考えても私一人が決断するには明らかに荷が勝ちすぎているきがする。

この人たちが私の交渉で協力関係になってくれるとは正直考えづらい、だから…いざとなったら、もう強行突破でここを脱出するしかない…最後の手段は作っておかないと…。

「君のお姉さんだよねー？」

「「「「「！？」」」」」

不意に開いた扉がその事実を暴露しやがった。

「ロッテ！？アリア！？なぜ、君達がそれを！？」

扉の向こうには二人の…えっと使い魔だったっけ、猫の耳がついてるから猫が元なのかな。

「ごめんなさいクロノ。私達、闇の書の主が誰なのか、どこに居るか。全部知っていたの。」

片方の落ち着いた感じがする使い魔が信じられない事を言い始める。訳がわからない、もしそれが事実だとしたら、私達の行動は管理局に全部筒抜けだったことになる。

「アリア！どうしてそれを僕らに言わなかった！君らは僕が言うまで捜査をしていなかったはずじゃないのか！？」

だけど、それは違ったらしい、どうやらあの二人が独自に私達の足を掴んでいただけのようだ。

「それは後で話すよ、そんなことよりクロすけ。この子、話の途中なんじゃないの？続けなよ。」

アリアじゃないほう…確かロッテだったかな、気さくな感じのその人は私の頭を叩きながら続きを促した。

ゾクッ

どうしてだか、そのフレンドリーなしぐさは私の体に悪寒を走らせた。なんかこう…古傷をえぐられるような…。っていうかどこかで会ったような…

「そうだな、続けてくれ。君が僕らにこの事実を伝えたということは、それなりの意味があってのことなんだろう？」

クロノの言葉で我に還る。そうだ、今はそんな瑣末ごとに付き合ってる暇は無い。

「…私にはとある特殊能力があります。えっと…稀少能力でしたっけ？便宜上の名前は【クロック・アト】、【クロック・オーバー】前者はみなさんが一度は見たことがあるとおり、他者の魔法や魔法関連のものに演算で割り込みをすることが出来る能力で、後者は私自身の演算能力を高める事ができます。」

淡々と語る。私の能力を聞いた各々は驚いたり、納得したり、中には全く動じない者もいた。

「今私の姉が所持してる闇の書は破綻しています。確かに完成すれば闇の書の主は凄まじい力を手に入れられます。これは私の推測なんですけど、完成すれば、待つのは、破滅だと思います。」

「その考えは間違ってはない。むしろ正解だ。あの書は完成させてはいけない危険な代物…まあ完成前に君を捕縛できたわけだが…。」

クロノが頭を抱えたくなるような事実を叩きつけてきた。でもまあそんなことに気を取られている場合じゃない。

「闇の書は完成する前は内部の核に感傷するのは難しいんだそうです。って、これはどうせみんな知ってると思うから省略。」

私の言葉に全員が納得するように無言で返した。多分コレに関しては事前に誰かが既に調べ終えてるんだろう。

「ですが完成後は別です。起動さえしてしまえばどんなプロテクトを施したプログラムでもそれをクラックしてしまえばプロテクトを壊す事はできます。」

「!?…まさか…!?」

私の言葉の意味を理解してくれたのかクロノは驚きの声を上げる。だが、他の者は理解できていないのかクロノが驚いた理由がよくわからない。

「君は…魔法でなく、『デバイスそのものを組み替える』っていうのか!?」

「「「「「「「!?」」」」」」」

クロノの言葉と更にコクンとうなずく私の態度で初めてそこにいる者らは驚きを示した。

「デバイスも魔力を管理できる存在です。ですから、私が魔力を逆流させてそのまま私の意識を魔力を通してデータ化させます。そこから直接、闇の書を改竄…非常に危険でハイリスクな行為ですけど、得られる物は多いです。」

私の言葉は彼らには衝撃的なものだったろう。もしそれが本当だとしたら、私が成長し魔導師として一人前の存在となれば文字通り【無敵】となれるから。どんな魔導師でもデバイスを無力化させられれば戦闘能力は大きく低下する。私はデバイスそのものを攻撃し、無力化させることが可能だというのだから。

「無茶苦茶だ…！」

クロノは表情を苦くしたまま吐き捨てるように呟いた。こいつの発言は間違いではない。そもそも魔法そのものに関与すること事態が異常らしい、まあ姉さんから聞いた話なんだけど。

「だから、あと少し…あと少しなんです…闇の書が完成するまで…待ってくれませんか…？なんなら私達を監視するのも構いま――」

「それはできないねぇ。」

私の言葉を遮るようにロッテと呼ばれる女性が口を開く。その口調とは対照的に顔は私をまるで親の仇だとでも言うように敵意に満ちていた。

「話をさせるとは言ったけど、信じてあげるだなんて言ってないからね。君はここでほとぼりが冷めるまで拘留、濡れ衣でもなんでも…ね。」

ロッテの言葉は妥協など一切無い断定に近い拒絶の言葉だった。

「…そうですか。」

それじゃあ

「仕方ないですね。」

「「「「「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」」」」」

話の最中に少しずつ組み上げてきた魔法（プログラム）の起動させる。組み上げたのは【タートル・バースト】。時間だけは嫌ってほど稼げたから完成度はなかなかだ。これでゲイトが居たらもっと完璧だったけど両手を引いて腰を落す。このよく解らない建物を破壊できるかどうかなんてわかんないけど、威嚇には十分だ。

両手の間に少しずつ魔力スフィアが形成されていく。すぐに行動を起こすと思ったのにどうしてだか驚きを隠せないのか、そもそも私のこの程度の威圧に気おされてるのか、誰も私を取り押さえようとしない。

なにはともあれ、脅迫するなら今だ。

「どうします？今この手のひらの上には家屋一軒なんて楽々吹き飛ばせるくらいのエネルギーが蓄積されてますけど、みなさん仲良くこのまま吹き飛びます？私としてはどっちでもいいです。みなさんが私を信用しないまま吹き飛んでも、きっと姉さんたちが助けにきてくれるでしょうし」

手のひらの魔力スフィアがうねりをあげる。必要十分の魔力が溜まりきったサインだ。でも念には念をで更に魔力をチャージする。こいつの練度が上がれば上がるほど目の前の人たちには脅威になる。ちなみにいつでも強制終了できるよう、きちんとキャンセルコードは用意してある。

「…解った。しばらく君らの事は観察ということにしよう。」

「「クロノ!?」」

クロノの言葉に二人のネコミミ使い魔は驚きの声を上げる。

「このままあれを放たれるよりはベターな選択だよ。それに、僕は彼女の言うことが嘘だとは思えない、追い詰められた人間が言うハッタリにしては真実味を帯びているし、なにより今は彼女に従うよりほかない、見ろ誰も彼女の攻撃に対応できるような状態じゃない。」

私はスフィアに魔力をチャージしたままクロノの言葉とおりにまわりを見渡す。今喋ったクロノとあの二人の使い魔はもちろん、リンディって人やさらには私なんかより上の実力者のはずのなのはさんやフェイトさんやその二人の付き添いの人もなぜか何も行動できてない。

「そういうわけだ八神カータ。僕らの負けだよ、だからその物騒な物を早く止めてくれ、こんな話を持ちかけるんだから当然解除の準備も整っているんだろう?」

クロノの言葉に私は何も返さずにタートル・バーストにキャンセルコードを入力した。

「…まんまと魔法を解除しましたよ。それで、私はバインドで拘束ですか?それともこの部屋での監禁を継続ですか?」

私の皮肉たっぷりの返しにクロノは盛大なため息をついた。…けど、その表情はどこか笑っている。

「そう邪険にしないでくれ、確かに君らの行動全てを認めたわけではないが、少なくとも僕個人は君の言葉は信じよう。事実、君は局員が総出で張った強壮捕縛結界をたったひとりで完全破壊してのけた。なのはのように強力な砲撃を使った訳でも無いのに、ただ魔力で介入するそのレアスキルだけで破壊したんだ。信用できる素材は十分ある。」

「……。」

私は予想外の優しげな口調と、更に予想外の言葉に完全に絶句した。

「ク、クロノ…それってつまり…」

漸く口を開けたフェイトさんが恐る恐るクロノに尋ねる。っていうか呼び捨て…？クロノって貴女より年上なんじゃ…推測だけど。

「あぁ、一時的な協力関係だ。正直今すぐ彼女を捕縛するのはたやすい、だが一度あの騎士たちとキチンと話をするのも悪くはないだろう？彼女が居ればそれも可能だ。君らとしても、友人といつまでも敵であるのも辛いだろうしな。かまいませんよね？艦長。」

「えぇそうね、私としても彼女を拘束し続けるのはちょっと気が引けてたの。私は大丈夫よ。よろしくね、カータさん。」

こいつ…良い奴かも…

なんて思った私がちょっと間違いだった、なんだかんだいって、大人って…汚い…

なんて思っている私も、必要とされている事がちょっと嬉しかったりなかったり。

そんなことを考えると、なのはさんとフェイトさんが嬉しそうに笑顔を浮かべて近づいてきた。

「よかった…。これでカータちゃんと戦わなくて済むんだね。」

「なのは…」

そんなことを言いながらなのはさんは本気で泣きながら安心している。横でなだめるフェイトさんもだけど、この二人たいがいにお人よしな気がする…。

「そういうわけだ、ロッテ、アリア。この事件の最高責任者の決断だ。文句は無いだろう?何かあればすぐにでも八神カータを武器にすればいい。とりあえず騎士たちとの交渉までの仮協力だ。」

クロノが二人のネコミミに言う。彼の言うことはもっともだ。いざとなれば私を武器にして脅すなりなんなりすればいい。

クロノの言葉に二人は黙り込んだ。認めてくれたのか、そもそも返せる言葉がないのか。まあ恐らく後者だろうなぁ、だって時折二人から恐ろしい敵意で私を見てくるだし
なにはともあれ…

「ふぅ…助かったぁ…」

気がつくとそんな事を言っていた。全身の力が抜ける。ペタリと床に座りこんでしまう。

「安心しているところ申し訳ないが、時間はあまり残されていない。僕らとしても早めに騎士達と話をつけたい。」

達成感に浸りながらため息をついているところに水を挿すクロノ。

…絶対こいつＫＹだ。

「…解りました。行きましょう、私の家まで。」

さあて、ここからが本当の正念場だ…。私達八神の人間が、本当の意味で幸せになるために…なんとしてもここは賭けに勝って大きく前進しとかないと。

第十八話　交渉（後書き）

これで書きダメストックは全て使い切りました。

知恵留「今回はなんかいろいろと凄いですね…もちろん悪い意味で。」

言わんといてください、これでも無い才能絞って書いたんですから。

知恵留「それはともかくとして、いよいよ物語も終盤ですねぇ。」

そうですねぇ、個人的に早くリイン姐さんを出したいです。あぁ早くまともな戦闘シーンが書きてえ！

知恵留「大した表現力も無いくせに…」

グハッ…それを言わんといてください、せんせぇ…。でも早く書きたい。戦闘描写って書くの楽しいんだよなぁ。

知恵留「とかいって…この間呼んだ二次創作の最終決戦の描写が綺麗なのに感化されて書きたくなってるだけなんじゃないんですか？」

ば、ばれた…ハイ、そうですとある小説がクライマックスで、俺のテンションもクライマックスでそんなクライマックステンションでこの話を仕上げました。

知恵留「……。」

なんか侮蔑の視線を感じるが、気を取り直して…

Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏもついに終盤戦に入りました。ここからはアニメから随分逸脱した再構成になってしまうとおもいます。自分の能力がどれだけ通用するか、どれだけオリジナルにして物語が破綻しないようにできるか、ここからが勝負です。
え？もう破綻しかけてる？

ソ、ソンナコトナイヨ？

と、とにかく！自身の限界を目指して、再構成の限界の突破を目指して、そしてなによりこの物語の完結を目指して。

ここで気合を入れなおそうと思います。
読者の皆様。本当にありがとうございます。
３万ＰＶ。嬉しかったです。この嬉しさを糧に、Ａ－ｓの終わりを目指そうと思います！

では、次回投稿で！

第十九話　疑念（前書き）

やはり切れの良いボケは無理だったよ。私にはギャグセンスが無いからな

第十九話　疑念

Ｉｎｔｅｒｒｕｄｅ

時刻は２０時前。シャマルはもちろん。シグナムとザフィーラは一段落した蒐集を終えて一度帰宅し、ヴィータは心配のあまり一度帰宅してきた。

「さて、どうカータを助けるかだ…。」

ソファで腕組みをし、気難しい顔をしたシグナムがそう切り出した。

「…！？、まだ姉ちゃんが捕まったって訳じゃねえだろ！」

そんなシグナムにヴィータは立ち上がり詰め寄る。

「だがヴィータ、カータがこの時刻までいないのは明らかにおかしい。シグナムの意見は妥当だ。」

ザフィーラの言葉に薄々そう感じていたためかヴィータは黙り込んでしまう。

と、まあそんな中だった。

『ただいま。』

そんな彼らの空気をぶち壊すカータの一声が聞こえてきたのは。

―――――

玄関前、カータはドアに手をかけたまま硬直した。

（…姉さんたちになんていえばいいんだろ…）

確かにここまでは彼女の作戦の通りといったようなものだが、いざその場に立ってみるといろいろと考えがあやふやになってしまうもの。

（うん、どうにかしよう。悩むのはここを開けてからだ。）

カータがこの決断を後悔したのはこれから数秒後のことである。

結論を言うと、今八神家のリビングにはいつ爆発してもおかしくないような、険悪なムードが立ち込めている。

シャマルはどうすべきか解らず視線を泳がせ、シグナムとザフィーラは語る口無しと言わんばかりの仏頂面、ヴィータにいたっては吼える直前の猛犬のように敵意剥き出しに招かれざる（まあこの４人にとっては）客…なのはにフェイト、ユーノ、アルフ、クロノ、リンディを睨んでいる。

「カータの話は解った。だが、はいそうですかとこのまま認めるわけにも…いかんだろう。」

さきほどまで黙り込んでいたシグナムがようやく口を開く。

「で、でも。限界だよ、正直ここまで上手くいってたのだって奇跡みたいなもんじゃない。…そりゃ、私がいろいろ足枷になってたせ

いかもしれないけどさ…」

カータは必死に食い下がるがシグナムはいまだに動こうとはしない。かれこれ数分が経過するも、一向にカータの仲介あっても話が前に進まない、局員側からの意見は無駄だとわかり切っているのかクロノ達はカータに任せ、一切口答えをしていない。。…流石のカータもこのヴォルケンリッターたちの態度にはプツンとなにかがキレた。

「ふ…フフふ…」

吹っ切れたように銀の前髪に表情を隠し口元を歪曲させて不気味に笑いはじめる。
不気味…というより、もはややっつけな感じだが。

「解った、姉さんたちの言いたいことはよおぉく解った。可愛い妹分が決死の交渉でなんとかここまでの状況に持ってきたのにそれを無碍にするんだ…？
いいよ？面白いじゃない？だったら私にもカンガエガアルンダケド？」

顔を上げて４人ににっこりと真っ黒な笑み（局員サイドの皆さんには見えておりません）を浮かべる。

「え…えと…カータ…？」
「お…落ち着いて…？もうすこしゆっくり話し合おうよ…？ね…？」

本能でこれはやばいと感じたか、カータの近くに居たなのはとフェイト（しつこいようですが、今のカータの表情は見えていない）が宥めるように近寄るが

「いえ、『大丈夫ですよ?』」

「「!?は、はいぃ!?」」

カータの何を見たのか、まるでお化けでも見たかのように二人は固まってしまった。
そんな二人にお構い無しかカータは更に続ける。

「さあて、４人に問題です。お姉ちゃんが入院中の今。誰がみんなのご飯を作っているのでしょおかぁ?」

その一言で全てを理解し、戦慄したか。４人はそれぞれ思い思いのリアクションを取った。
シグナム、ヴィータ、ザフィーラは表情が凍りつき、何故かシャマルは嬉しそうに見えなくも無い。

「ま、待て。落ち着けカータ――――」
「そ、そうだぞ姉ちゃん。短気は損気って言葉が――――」

シグナムとヴィータが慌てたように弁明しだすももう遅い。

「言いたいことはそれだけですか?」

カータはだまらっしゃいと二人の言葉を封殺する。烈火の将と鉄槌の騎士はキレた妹（姉）の前に小さく縮こまる。それでいいのかヴォルケンリッター

「このままじゃあみんなの朝、昼、晩。全部ボークラーメンふりかけになっちゃうなぁ…嗚呼かわいそうに…」

その声色からちっとも同情なんて感じさせない棒読みっぷりでカータは楽しそうにクスクスと笑い続ける。
ちなみにポークラーメンとは、味付けされたインスタント麺にお湯をかければすぐできあがりのインスタントラーメン。まあ所謂チキンラー○ンなのだが。
ちなみにこのラーメン。普通に食すなら問題ないのだが、かけるとなると非常にごはんと相性が悪いとかなんとか。

「みなさん何か返す言葉は？」

その言葉で
４人の局員サイドに対する態度が多少友好的に変わったのは言うまでもない。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「現在の頁数は５８０だ。のこり８８ページといったところか。」

闇の書を捲るシグナムが言う数値になのはたちは驚いた。もう１００頁を切っていたという事実に。
先ほどまでおよそコミカルな空気になっていたというのに、既に場は真剣な空気となっている。ここらあたりは流石といったところか。

「テスタロッサから蒐集した魔力で大分稼げたからな。数日にはスピードを上げて完成させるつもりだった。本来なら、まだ蒐集を続けている時間だが…。」

パタリと闇の書を閉じて淡々と語るシグナム。カータはバツが悪そうに目を逸らす。

「この不測の事態に中断せざるを得なかった…」

その言葉に続けたのはクロノだった。彼は闇の書の完成度に何を思っているのか。

「そういうことだ。…だが。」

「だが…？」

「ここでお前達と一時的な協力を結んでおくのも悪くはない。監視下ではあるが一応の完成までは見送りさせてくれるのだろう？」

シグナムは両目を静かに閉じながら僅かに笑みを浮かべてそう答えた。さきほどの少しばかりヒートアップしていた頭が、カータとのやりとりのおかげで冷えたのだろうか、先ほどとは打って変わった答えてであった。

「あぁ…だがもし君らの主がそれで暴走を起こしたとき、そのときは…」

クロノが言う最悪の事態。それは闇の書がはやてをとりこみ暴走をしたときのことだ。

「我々が全力で主を止めよう。」

「そして私が闇の書を書き換える」

カータが小さく呟く。この作戦のキーは彼女の稀少能力（レアスキル）。まだ謎が多いが、デバイスに干渉できることはカータが自身のなかに残留し

た闇の書の欠片をロードし、セーブさせた事で実証済みである。
まあ、これは騎士達の証言からだが

「あまりに簡易な作戦だが、先があまりに不確定な今はこれが最善か。なにはともあれ、守護騎士たちこの話を受けてくれるか？」

クロノの言葉に４人はしばらく黙り、シグナムが答える。

「ああ、よろしく頼む。主の命を救うため、力を貸して欲しい。」

「決まり…だな。だがまずは君らが持っている闇の書を完成させねば話は始まらない。」

クロノがいう事も最もだ。この作戦（？）はカータが闇の書に強制アクセスをかけたときに初めて始まるから。

「でもクロノ。大分ページも埋まってるみたいだし、はやてがどうにかなる前になんとかなりそうだよね。」

「あぁ、それは恐らくはな。ただ…闇の書が主を侵食する速さが上がっているというのなら、急がなければ手遅れになる。」

『手遅れ』その言葉がヴォルケンリッターの面々、そしてなによりカータに重くのしかかった。
もしはやてが完全に闇の書に侵食され還らぬ人になったときは、カータは義姉（はやて）だけでなく、家族全員を失うことになるからだ。

「大丈夫、クロノさん。私たちが絶対そんなことにはしない。」

いち早く答えたカータのその言葉には、全員を勇気付けるというよ

りは彼女が自分自身を鼓舞するようにも聞こえた。

話も一通り終わり、局員サイドの人間が帰るまで少し時間をとり、各々一応親睦的なのを深めておいたほうがいい、というクロノの意見で少しだけ八神宅にお邪魔することになった。

なのは、フェイトはカータとヴィータと。アルフにユーノはザフィーラ。リンディはシャマルと（決してあまった二人という訳ではない）それぞれ今後のことを話していた。

「烈火の将。話がある。少しいいだろうか？」

そんななかクロノはいち早くシグナムを捕まえた。

「ハラオウン執務官だったか、その口ぶりではあまり良い話ではなさそうだな。」

「ああ、少し…彼女について話したいことがある。」

クロノは目線を僅かにヴィータを叱りながらちゃんとなのは、フェイトに話をさせようとするカータに向けた。

「そうか、なら一度外に出よう。聞かれては不味いのだろう？」

コクリとクロノはその言葉に静かに頷いた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

そんなわけで今二人は決して優しくはない冬の寒空の下、白い息を吐き出しながらたっているのだった。

「それで、ハラオウン執務官。何故私を相手に選んだ？」

「貴女はヴォルケンリッターの将なのだろう？ならこの話は貴女に話すのが妥当だと判断したからだ。…八神カータのことについて。」

「そうか、それでその内容は？」

クロノは数秒の沈黙を置く。言葉を吟味しているのか、それとも話す事自体をためらっているのか。

「私の気を遣うのは無用だ。あの子に関する事なら聞いておかねばそのほうが後々気に病んでしまう。」

そんなクロノのことを後者と読んだのかシグナムは僅かに笑いながらそう返した。

どうやらそれは正解だったようで、クロノはようやく沈黙を破って口を開いた。

「…僕が彼女と対峙したときから少し彼女に違和感を感じていた。彼女の戦闘センスもそうだが、彼女自身が使う魔法そのものに僕は疑問を感じていた。そして彼女が僕らに交渉を持ちかけてきたとき、その疑問はほぼ確信に近い思いに変わった。」

「その違和感の正体とは…？」

「僕らの魔法は自然摂理、物理作用をプログラムに組み替えて、それを魔力を通して顕現し力を使役する。これは僕らのミッドチルダ式もそちらが使う古代ベルカ式も同様だ。そのプログラム構築は決して簡単じゃあない、キチンと理論に通じていなければその時点で

魔力はキチンと力を発揮せずに効率が極端に低下するか、その場で霧散してしまうかのどちらかだ。…だが、彼女の扱う魔法は僕にはそこに合致していないよう感じるんだ。」

「…私たちが扱うものでも、お前たちが扱うものでもない別の物…そう言いたいのか？」

シグナムの言葉にクロノは頷く、シグナムもそうだが話しているクロノ自身でさえ信じられない事を話していると感じていた。

「彼女は僕との戦闘の際、僕が放った【スティンガーブレイド・エクスキューションシフト】を防御と同時に全く正反対の方向…つまり術者である僕に向かってその全てを跳ね返してきた。それだけでも驚愕に値するが、彼女が強壮結界を完全破壊した件もある。これだけならまだ僕らに無いその稀少能力（レアスキル）でどうにかしたと考えてもいい。だが…」

クロノは一旦そこで言葉を切った。恐らくためらっているのだろう、彼自身もあまり信じたくはない結論に至るためか…と、シグナムは勝手に横で話す少年の内心を想像しながら次の言葉を待った。

「アレは明らかに常軌を逸している。そもそも彼女の提案が決裂しかけたとき、デバイスを没収されたはずの彼女がデバイスの介入無しに僕らに向けて凄まじい砲撃魔法を用意してきた。」

「ッ！？…」

「魔法を使う存在ならこの言葉の意味が解るだろう？つまり彼女は自分のみの力で魔法を組み上げたんだ。」

通常、魔導師はデバイス無しでは魔法を使うのは困難とされている。何故なら魔法を扱う際、魔力制御、軌道修正、反動補正、角度計算、其の他諸々の細かな精密な計算が必要となってくる。デバイスの介入さえあればコンピューターの精密な計算が人間のスペックを遥かに超える演算を補助するのだ。故に魔導師はデバイスが無ければほぼ無力と言っても過言ではない。それだからこそ、クロノはあの時彼女の砲撃魔法が余りに予想外だったために、全く対応が取れなかった。

クロノだけではない、あの時あの場に居た全員にあんなことが予想できただろうか？

答えは否。

デバイス無しで魔法を容易く作り上げるなど、どんなに優秀な魔導師でもそんな境地にたどり着く事はできない。いやそもそもそんな必要は無い。

それはデバイスがどうにかすることであり、術者は自身の出来る分野を伸ばすよう精進すればいいだけのこと。そんな境地に至る必要などそもそも無いのだ。

だがソレをカータはやってのけた。なのはやフェイトよりも年下な彼女がだ（まあ実際はクロノよりも年上なのだが）。

「彼女の魔法は異端だ。…それが彼女の所有する稀少能力（レアスキル）から生じる物であるならなおさらに…」

最初こそ驚くシグナムであったが、その表情は既にすっかり落ち着いている。さすがヴォルケンリッターの将といったところか。

「烈火の将。彼女は一体何者なんだ？もし、何か知っている事があるならできるだけ包み隠さず教えていただきたい。断っておくが、コレを知った事実に彼女を実験台に使用などと言うつもりは一切ないし、彼女を人外呼ばわりして毛嫌いするつもりもない。」

クロノの視線にシグナムは軽く一瞥し、記憶を掘り起こす。その中に

「ひとつだけ――――」

彼女に思い当たる事があった。

ＳＩＤＥ　ＳＩＧＮＵＭ

アレは主がご入院なさってから私が最初に見舞いに行ったときだった。

一通り話す世間話は語り終え、私も主も話す事もなくただ空を見上げ時間を手持ち無沙汰にしていた時、ふと思いついた事を話した時だった。

「主、少しよろしいでしょうか？」

「？…どしたん？」

「いえ…大した事ではないのですが、その、こちらの世界に伝説の剣や…杖の話は沢山あるのでしょうか？」

そんなことを聞いたのは以前カータが私の剣、レヴァンティンについて聞いてきたときの話を思い出したからだ。

カータの性格からそういう知識に詳しいとは考えづらい。となると、

あの子が話していた【レーヴァテイン】という炎の剣…たまたま知ってしまうくらい有名な話。となる。

私としても自身の剣に似通ったものがどういうものか知ってみたいというのもあった

「あるよ?そやねえ、引き抜くと王様になれる剣だとか、海を割って道を作れる凄い杖だとか、こっちにだって伝説の一つや二ついっぱいあるんよ?今話したのは遠くのお国の伝説やけど、今私らが住んでる日本で言うんやったら、草薙の剣ってのが確か有名やったと思うよ?私もあんま知らないんやけど」

私の話題に興味をお持ちになったのか、話しをしている主の口調はどこか乗り気に聞こえた。

私としても楽しんでいただけるのは嬉しいが、主が話す伝説の中にあの子が言っていた炎に関する魔法の剣の話は無かった。

「でも突然どしたん?シグナムってそういうん興味無い思ってたんやけど。」

「いえ、ちょっとカータが私の剣…レヴァンティンについて気になる事を言ってたもので。」

「シグナムの…?…どんなお話なん?」

私の剣ということで、主も興味を示しになった。つまり、主は【レーヴァテイン】という剣の伝説についてご存知無いということだ。

「あ…いえレーヴァテインという名前の魔法の剣らしいのですが、

私もあの子に名前を聞いただけなので…」

「そっか…私もちょっと調べてみるな。…って私今入院してる最中やったな。こういうときこそ妹分を使うもんや。」

恐らくカータのことだろうな。またパシリに遣われるようだ。

「そんな大した事ではありませんので、あまりおきになさらず。…できればこの話、カータには伏せておいて欲しいのですが…よろしいでしょうか…？」

「？…ええけど、どして？」

「なんとなく、です。突然話して驚かせるのも面白いと思いまして。」

もちろんコレは嘘だ。別に何か特別な考えがあった訳ではない。ただ、コレを口外するのは私の感が許そうとしなかったし、なにより万が一というのもある、もしコレがカータに不利といえる情報であったら、あの子はまた一人で抱えてしまうだろう。そんな思いからだ。

「そっか、ならうまくごまかさなあかんな。」

楽しそうにクスクスと主は笑う。…この笑顔を守るためなら、烈火の将。悪魔にも鬼にも成り果てよう。
そうあらてめて誓える日でもあった。

…だが、話はそこでは終わらなかった。私自身もそんなことを話したという事実も忘れかけたころ。私が二度目（正確にはこれで最後

になっているが）に主の見舞いに伺った時

「シグナム、ごめんなぁ。」

と、不意に主が私に謝られた。もちろん主が私に粗相をするなど有りえないし、主の行為が私にとって粗相になることなど有りえないのだから、なおさらその謝罪の意を汲めなかった。

「…主、なんのことでしょうか？」

「シグナムに言われてからいろんな本を読んだんやけど、シグナムが言ってた【レーヴァテイン】って剣、見つからなかったんよ。とりあえずすずかちゃんにも協力してもらったんやけど、すずかちゃんもダメやったみたいで。」

「…そうですか、そう気に病まないでください。私自身今の今までその事を忘れていました。まさかそこまでご熱心になれるとは思いませんでしたので。」

口調こそなんとか平静を保てられたが、内心かなり驚いた。
主の優しさもあるが、それ以上に、私はあの子がどうやって【レーヴァテイン】という剣を知ったのか。
ということについてだ。
あの方がギブアップするほどだ、恐らくかなりお調べになられたのだろう。ご友人にも依頼して…
にもかかわらず見つからなかった。

ここまでくると、疑問を超えて疑惑になってしまう。
…だがこのとき私にとっては、闇の書に関する事以外ほとんどが瑣末な事になってしまっていた。確かに気になる事ではあったが、そ

の程度で揺らぐような薄っぺらい感情を持ってはいない。
私は姉で、あの子は妹なのだ。姉と慕ってくれている。それをこんなことで疑うほど、浅はかな絆ではない。

そんなわけで私自身も【どこかで得たマイナーな知識だったのだろう】と、片付けてしまった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

シグナムが語り終える。余り長いとは言いがたい話だったが、それでもクロノにとっては良い収穫になるものだった。

「単なる偶然かもしれん、あの子の知る知識が、たまたま主が手を伸ばしになられた箇所になかっただけかもしれんしな。」

「だが貴女の話したことが関係する可能性は有り得る。…これは僕の推察なんだが…彼女は…」

もしかしたらこの世界以外から来た人間じゃないだろうか？

「…それはお前達同様、他の次元世界から…という意味か？」

「それも多いにあり得ることだな、そもそも伝説というのは眉唾物な話から発展するものだ。この第９７管理外世界にたまたま現れた他の次元世界からの来訪者の魔法なり能力なりを見てそれが言い伝えられた。というのもありえる。」

「だが、カータは魔法を知らなかった。その戦は有りえない。」

「なら、僕らが知る世界とは別の世界…次元世界でもなんでもない

所謂異世界…つまり八神カータは、僕らが知らない未知の世界からの来訪者では?…という話にも十分なり得る話だ。…信じがたいがな。」

その言葉に二人の間に沈黙が流れたが、数秒の間を置いて再びクロノが口を開く。

「現時点ではまだ推論に過ぎない。それもかなり憶測の多い、今判断するには早急かと思うが。一応、だ。」

「なるほど、つまりはそのような推論で全員を混乱させたくはない、と。」

「ただでさえ僕らの平均年齢は低いからな。君らはともかく、カータは年齢的には一番幼い。」

そう言うクロノの視線は部屋の中のカータに向けられた。

「確かにあの子はメンタル面の強さは無いな。むしろ、脆弱すぎると言ってもいい。」

クロノの視線の先の少女。カータに以前起きたあの事を思い出しながらシグナムは呟くように答える。

「まあなんにせよだ。闇の書が完成した後にどうなるかは完全に未知の領域だ。…これだけは覚えておいてくれ、万一…もし万一に、僕らが敗北になりそうになった場合…僕らとしても非常事態を取らせてもらう。」

クロノの言葉はつまり、万が一とは闇の書をカータ処理することに

失敗し暴走した闇の書に対し為す術が無くなったときの場合、である。
その言葉にシグナムは僅かに表情を動かす。彼女としては否定したいところだが言葉を返さない、いや返せないのだ。クロノの言葉はあまりにも正論。少女一人の命とこれからの未来に増え続ける犠牲者、天秤がどちらに傾くかは目に見えているからだ。
だからこそシグナムは返す言葉がない。

「何をコソコソ話してるかと思ったら…そんな万一なんて有りえないよ。」

そんな二人の間に声が割って入る。声の主は呆れた表情でため息をつくカータがそこにいた。

「カータ…いつからそこに居た…？」

先ほどまで話していた内容が内容なだけにシグナムの言葉が僅かに鋭くなる。

「え…いつって…クロノさんが…非常事態って所から…」

シグナムに威圧されたかカータは視線を泳がせおずおずと言い辛そうに答える。
その言葉に安心したか小さくシグナムは息を吐き出し、小さく笑う。

「そうか、済まない。先ほどまでちょっと込み入って話をしていてな。」

「別にいいよ。盗み聞きしたのは私だしね。」

「…カータ。君の気持ちはわかる。だが…」

「もしもの保険。でしょ?…そんな気概じゃできることもできなくなるよ?それに、私は何があっても絶対諦めない。…第一気に食わない。お姉ちゃんを他の人と天秤にかけようとするその考え方が、誰かの価値は天秤にかけられるようなものじゃないでしょ…?私は、貴方のその考え方は絶対認めない。」

「…わかった。僕が悪かった。だが頭には入れておいてくれ、起こり得る最悪の事態のシチュエーションくらいは。」

あまりにも真剣さと怒りを含んだ視線にクロノはこれ以上は不毛と判断したのか片手で制止するよう促しながら話を切り上げた。

カータはその言葉に返事をすることなく、そのまま何も答えずに部屋に戻っていった

「済まない、カータの非礼は詫びよう。アレもあの子なりに考えた結論だ。あまり深く言及しないでやってくれ。」

「気にはしてない。もともと僕の発言が元だからな。」

話はそれで終わりだった。まあもとより彼らはつい先日まで敵同士だったのだ。これ以上の会話を求める事自体がおかしいというもの。それから間もなく局員サイドの人間は八神邸を後にした。それぞれが新たな決意と思いを胸に秘めながら。

決戦の日は近づく、そして少女にとって最悪と言える結末が、待とうとしていた…。

第十九話　疑念（後書き）

こんばんは

カータ「こんにちわでしょうが馬鹿作者」

と、いうわけで作者と主人公がお相手させていただきます。

カータ「あれ？あの先生はどこに…？」

みなさま、今回の話いかがでしたでしょうか？

カータ「聞けよ」

実はこの次は自分にとって大変なシレンが待っておりまして。…あ、風来じゃあありませんよ？

カータ「え…？もう決戦！？早くない？」

まあ決戦間近なのは間違い無いんだが、そこはいいんだ。もうラストは勢いでかける気がする！

カータ「あぁ、ダメだこの人。…で、何が問題なの？」

俺は気がついた、君と概貴の関係を放ｔ…おっほん、停滞させていたことに

カータ「意味は変わりません！」

あだっ！…ってことで、次はさ、砂糖成分を投入…し、し、しようかな…って…あああああああああ。構成考えるだけでサブいぼ走るわ！

カータ「え?ちょっとまってよ。こっちだってね、色々準備があるんだよ。ほら、心とか精神とか脳内とか…」

全部同じじゃん

カータ「と、と、と、とにかく。ね。そういうのはさ、決戦終わってからで…」

いや、普通にここに入れる予定だったから無理。ふっふっふ。もうとことんまで逝ったるでえ…

カータ「字がおかしい…」

ではでは、次回投稿にて自分がお亡くなりになっていなかったらまたお会いしましょう

カータ「ここまでお付き合いしてくれてありがとう！」

第二十話　油断（前書き）

皆様２ヶ月ぶりです。

私は帰って参りました。

いや、どこにも行ってないけどさ

あとがきにも書きますが活動報告に今後のＯＨＨの展開に関する重要なアンケートを用意しました。

ま、うだうだ言わずに本編をどうぞ

第二十話　油断

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

二学期が終わった。あわただしくて長い二学期だったけど振り返って見れば随分と短かったような気もした。

二学期が終わったということは同時にこの冬最大のイベント。クリスマスが近づいているということも意味していた。終業式が終わり二学期最後のＨＲの時間までの自由時間。私達三人はそのことについて話していた。

「いやね、やっぱりこの冬もカータがサンタさんにコスプレするのが一番だとアタシはおもうんだよ。」

「「いや、全然意味解らないんだけど。」」

ほとんど同時にコンマ数秒の狂いもなく同時に概貴くんと突っ込んでやった。ってかこの冬もって、アンタと知り合ったの今年の春じゃん。

「…と、お約束はここまでにして、一応のプランは現状二つあるのよこれが。」

「…へえ、言ってみてよ。聞いててあげるから。」

珍しくコントを切り上げるリエのプランとやらに興味が沸いた。まあここからまたギャグに持ってかれそうなきもしないでもないけど。

「おっけい。一つは、みんなでカータの入院中のお姉さんに押しか

けて迷惑にならない程度に楽しく騒ごうかなってのと。もう一つは、三人でまあ適当に散策をだね…っても買い物が主になるのかなー。まあそこはその時決めればいいや。」

などと、全くもってしてコイツらしくもない真面目な…っても内容は適当だったけど。そんな発言だった。そんなふうに感心してると隣の概貴くんは不思議そうに首をかしげた。

「ん？ねえ、リエちゃん。一つ目のみんなってのと二つ目の三人ってのはどう違うの…？」

確かにそうだ。これじゃあ私達以外にも誰かいるみたい。でも私達以外の人なんて…あ、居た。

「おぉ、流石ガイキン。横でポカンとしてる誰かさんとは大違いだねぇ。」

「大きなお世話だこんちきしょう。」

「ガイキンのお察しの通り、前者の提案はアリサが出した物で、こっちに呼びかけがかかったわけですハイ。」

「で、どうする？まあアタシとしてはどっちでもいいんだよ。」

私としても迷う。正直こっちに来てからのクリスマスは初めてだから、初めてのクリスマスはこっちの姉と過ごしたいってのも心情だし、この学校の数少ない親しい友達とだけ過ごすというのも捨てがたいってのが今の私の葛藤。

すると概貴くんが私達に助け舟をよこしてくれた。

「じゃあ、三人で遊ぼうよ。」

いつかの夏の時のように彼は三人で何かしようと言い出した。別に私としてはどちらでもいい。

この間みたいになのはさんやフェイトさんに会いづらい状況ではなくなったし、あの人たちを拒む理由もない。

だから、彼が希望を出すのならそれに沿うまでだ。

「おー、なるほど、ガイキン的にはハーレムより両手に華状態がお好みなわけで…ほうほう。」

例によって親友(このばか)はよくわからない解釈をしながら満足気に頷いている。

「で、マヌケアンテナはどう?ガイキンはこう仰ってるけど?」

「それでいいよ。で、いい加減私への呼称を一つに絞ってくんない?一瞬『え?…あ、あぁ、私の事ね』ってなるでしょ。」

「ごめんごめん、OKカータ。よし、遊びに行くのに計画なんて立てるのだるいから、行き当たりばったりでいこうじゃまいか!」

「せめて集合場所くらい決めようか。私も概貴くんもアンタと違ってどこかしら常に電波を受信してるわけじゃないからね」

「むしろ電波受信できねえのカータだけじゃね?ガイキンは受信できるんだぜ?ねえガイキン。」

「アンタと概貴くんを一緒に――――「え?カータちゃんはできないの?」そうきたか…。」

そんなこんなで談笑をしつつ、ちゃっかり時刻と場所は決定する。
その時、私はリエの顔に悪戯心からではない何かたくらむようにニタニタ笑っていることに気づかなかった。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「ほう、高町達がか…？」

家に帰ってとりあえずは姉さん達に一応ドッキリの事を伝えておいた。明日はクリスマスだということもあってみんな（私除外）はお姉ちゃんのお見舞いに行くと言ったからだ。
…いやぁ…ホント、一時的だけど和解してよかった…

「うん。なんかドッキリかけるんだって。」

「じゃあ私達は皆さんが来たら退散するのがよさそうですね。」

「うーん、ごめんね。」

「気にすんなよ姉ちゃん。あたしらもまだアイツ等とそんなに仲良くしてるわけじゃねえんだし。」

まあつまり、みんなが来るから姉さん達はどっか行っててくれって事。シグナム姉さんやヴィータはともかくシャマル姉さんとかなのはさん相手の初見の振りするとか絶対ボロ零しそうだもん…

「…でも姉さん。」

「なんだ？」

「私だけ明日蒐集に参加しないけど…ホントにいいのかな…？」

「元はヴォルケンリッターである我らの仕事だ。明日位は羽を伸ばして来い。ページも残りわずか、急がずとも二日あれば十分だ。」

姉さんはそう言うと私の頭に手を置いてやさしく撫でた。段々姉さんも「姉」が板について来たな…なんて私は考えながらその優しさに笑顔で答えた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

１２月２４日、つまりクリスマスイブ。学校は終業式と大掃除、ホームルームだけの半日で終わった。

集合は１５時をリエが指定してきた。外を見る限りあんまり良い天気とは言いがたかった。

朝の天気予報は曇りのち雪だったっけ。悪天候だけど、今日に限っては良い天気だと言えるなぁ

集合場所はなんともまあアバウトで。この場所に来れば解るとかで簡易な地図を渡された。

確かに解りやすいけどココには本当に何も無い。目印みたいな像があるわけでも有名な店があるわけでも広場があるわけでもない。

「まあ、行けば解るか。」

一人そんな事を呟きながら財布の中にある程度貯めてあったお金を詰め込み、耳当てと手袋をつけて部屋を飛び出した。

「姉さん行ってきます。」

「はい、行ってらっしゃい。気をつけてね。」

コクリと頷いて居間に居るシャマル姉さんに手を振りながら私は玄関を飛び出す。

集合場所に行くまでにそう時間は掛からなかった。なるほど、確かにどこに集まるのかはよく解った。

明らかに鯛焼きか、たこ焼きでも売っていそうな無精髭を生やして頭にタオルを巻いたオジさんがクレープの屋台なんてやってればそりゃ嫌でも目立つ。

別に何の考えも無しに屋台のすぐ近くのベンチに座って二人を待つことにした。時間的には１０分も早かったみたいだ。腕時計を見ながらようやく気がついた。

「銀髪の女の子…八神カータは譲ちゃんのことかい？」

不意に屋台のオジさんに声を掛けられた。

「…そうですけど、誰ですか？」

余りの不意討ちに思いっきり不審な視線を投げかけながら声を掛けてきた屋台のオジサンに言葉を返す。

「なあに、リエに聞いたんでね。ここに二人銀髪の子と黒い髪の男の子が来るってな、言伝を頼まれたんだ。」

「リエと知り合いなんですか？」

「おおよ、あの子はちょっとした常連なんだ。俺のロマンを解ってくれんのはあの子くらいなもんだ。」

なんだか勝手に一人で男泣きを始めたオジさん。でもアレと友達ってことは悪い人では無さそうだ。

「ふーん…あ、概貴くん。」

と、そこで概貴くんが到着し私を見つけて小走りで近寄ってきた。

「ごめんね、こんなに早く来てるなんて思わなくて…」

「いいよー、私は暇だから早く出ちゃっただけだし。」

来て早々謝る男の子に私はクスクスと笑いながらいつも彼がやるように頭をくしゃくしゃと撫でてあげた。

「ほぉ、リエの言ったとおりお似合いじゃねえか。若いのはいいねぇ」

オジさんの茶々に顔が熱くなるのを感じながら思いっきり睨みつけてやった。

まあ、こんな少女の睨みなんか年を重ねた人間には可愛い物らしく微笑ましげにオジさんは笑うばかり。

「まあ、そう怒るな。ほら俺からの餞別だ、コレ食って元気に遊んで来い。」

屋台から出ながら両手に紙包みを持ったオジさんは私と概貴くんにそれぞれ持たせた。出来たてのそれはおいしそうな甘い匂いを漂わ

せるクレープだった。

「わあ、ありがとうオジさん。いただきます。」

と、概貴くんはなんの迷いも無くかじりついた。…純粋っていいなぁ。

ここまで人が居ないクレープ屋さんのクレープをそんなに勢いよく私は食べれない。

「どうだ、坊主。美味いか?」

「うん、美味しいよ。カータちゃんも食べてみなよ、凄く美味しいよ!」

なんて、演技だとは思えない笑顔で言ってくるもんだから。

「おっかなびっくり」

正にそれに近い挙動で私は恐る恐るその「美味しいクレープ」とやらを口にした。

「オジさん…」

「どうした。」

「なんで美味しいの?」

私はそんな超失礼な質問を得意げにどや顔をしているおじさんに言ってやった。

だってそうでしょ?こんな屋台でたい焼きか、たこ焼きを作ってそうなおじさんがクレープを作る。

こんな不釣合いは他に見るのも珍しい。

「俺のロマンを解ってくれんのはリエくらいなもんだってことだ。オジさんはかなしいねぇ。」

…つまり、こういうことだ。

確かにクレープは美味しい。生地はやわらかくてしっとりしてて、生クリームだって甘いけど全然しつこい甘ったるさじゃない。まともな屋台だったら人気スポットになってもおかしくないくらいに…

それでもなおこの客足の悪さ、このオジさんは決定的にやる店の種類を間違えた人間だった。

「オジさんの言いたい事なんとなく解った気がする…そういえば言伝ってなに？何か聞いてるの？」

「おぉ、忘れてた。リエな、今日は急用（あそぶよう）があるらしくてな。二人で遊んで（デートでもして）こい死ねね。って伝えとけって言われてな。」

「ははは…リエちゃんらしい。」

「あいつどういうつもりなんだろう。」

本当にあいつの考える事はよくわからない。

…ちょっと待ってよ？…ということは…

「どうしたのカータちゃん、真っ赤だよ？」

こ、この子は…わざとなのか…？それともただ純粋だけなのか…？

「なんでもない！行こ！オジさん、クレープご馳走さま。」

「ワッ！ちょ、ちょっと…」

もうこうなったら行くとこまで行くしかない。概貴君の手を引きクレープ男に手を振り逃げるように私は彼を引っ張った。その時オジさんの口が「がんばれよ」と動いていた気がした。

―――――――――――――――――――――――――――――――

私は概貴君と一緒にクリスマスで彩られたイルミネーション張り巡らされている（まあ夜中にならないと意味を為さないだろうけど）街中を歩いていた。

特に何か予定が有った訳では無い。どうせリエが用意するだろう、なんてタカを括っていたから。

と、不意に隣で歩く概貴君がじっと私をみている事に気がついた。

…正確には、私の首にかかっているゲイトを見ている事に。

そしてゆっくりと口を開いた。

「…カータちゃんの力に…なってる…？」

「うん、大切な相棒だよ。」

コクリと頷いて精一杯の笑顔で答えた。今も私の首にかかって上着の下で一緒に居てくれてる。

…そうだ。

「私そういうえば、概貴くんに何もあげれてないなぁ。」

そう、私は助けて貰った彼に何も返しては居なかった。そりゃ彼の中ではいろいろと精算されてるのかもしれないけど、それと私の意識では話は別だ。

「僕はいい「ダメ、それじゃ私の気が晴れない。」…ならいいんだけど」

「よし決まりっ。さあさ、私の小遣いの許す限りの物を勝ってあげようじゃない。」

そのまま手を掴み引きずるように引っ張ってそのまま走り出す。もう恥ずかしいだとかそんな事はどうでもいい、せっかくクリスマスに姉さんに遊んで来いと言われたのだ。遊ばなきゃそれこそ罪に値する。

「ま、待ってよ。カータちゃん。買う物決まってるの？」

「勿論、ゲイトと同じようなロザリオをあげる。」

私は思わず綻んだ表情で彼に振り返りながらそう答えた。

SIDE OUT

Interlude

数分後、カータと概貴は小さなアクセサリーショップに着いた。

店自体は小さいがどこか欧州の趣が感じられる木造の建物でドアノ

ブが円形に歪んでおり、それがまたお洒落な感じを引き立たせている。

「…こんなお店どこで知ったの…？」

一呼吸置いた概貴がカータに語りかける。

「本に書いてあったんだ。ほら、早く！」

以前読んだ雑誌の片隅の広告に書いてあったらしい。

と、カータは急かすように概貴の手を引いて店の扉を開く。

ドアにかかった鐘がカランカランと乾いた音を店内に響かせる。

「いらっしゃい。」

店の主であろう、口元に髭を生やし見た目中年の痩せた男が二人に感情を乗せてない声音で二人に言うが、表情は心から歓迎してるのがよく解る笑顔を浮かべている。

「おじさん、このアクセサリーに似た物が欲しいんだけど…。」

「ん、綺麗なロザリオだ。おじさんのところにそんな上品な物は無いけど……少し探してみようか。」

そう言って店主はレジカウンターから席を立ち小さな店を案内するかのように二人を先導する。

カータと概貴は視界に映るアクセサリーの数々を物珍しげに眺め回す。

店主の言う通り、高級な物は売っている様子は無いのだが、値段は良心的な物ばかりでそれでいて決して安っぽくは無い品々。

二人が受けた印象は共にそんな感じであった。

「ふむ…こんなのはどうかな？」

二人が店を眺め回している間に店主がようやく自身のイメージの物を見つけたのか二人に少し大きめのロザリオを見せた。

全体が金色。恐らくメッキだろう、色とゲイトのコアの存在を除けば、カータの持つ物と酷似した代物だった。

「君のロザリオにそっくりだし、この男の子へのプレゼントってなら、サービスするよ？」

そう言って店主は柔らかい笑みを浮かべてイタズラっぽくウインクして見せた。

恐らくメッキだろう色とゲイトのコアの存在を除けば、カータの持つ物と酷似した代物だった。

「君のロザリオにそっくりだし、この男の子へのプレゼントってなら、サービスするよ？」

そう言って店主は柔らかい笑みを浮かべてイタズラっぽくウインクして見せた。

ついている値段のタグも決して高い物ではない。

「…肝心のサービスはどのくらい？」
そのウインクにクスクスとカータは笑い、店主を見上げて問いかける。

「２５％オフ…って言いたいけど、せっかくのイブだからね、半額で譲ってあげるよ。」

そう言うと彼は、胸元につけたボールペンでタグに書かれた値段を半額に書き換えた。

「じゃあそれ一つ。」

結構な時間を過ごしていたのか、はたまた冬の太陽はお急ぎ気味なのか
空は夕闇に沈みかけていた。

公園のベンチ。

そこには男の子…概貴が貰ったばかりのロザリオを、自身の頭上に掲げながら見上げる。夕日に反射して銀色がキラキラ輝く。
その色と同じ銀の髪を風に踊らせながら、嬉しそうにその様子眺める女の子…カータ。

「ありがとう。カータちゃん。」

概貴はロザリオを自身の首にかけて、ニコリと屈託の無い笑顔を浮かべる。

「喜んでくれて嬉しいな…大事にしてね。」

青い瞳を細めてカータも笑顔で返す。

沈黙。

が、決して気まずいソレではなく、むしろ時間帯の割に静かなこの空間を楽しんでいるようにも見える。

時間が止まっているような錯覚にカータは捕らわれていた。

よく、「このまま時間が止まればいいのに」と思えるような瞬間がある。カータには、正にそれが現実になっているように感じていた。

だからだろう。

異常事態に対しての反応が遅れてしまったのは

「楽しい時間は、終わりだ。」

突如結界が張られ、現れたあの仮面の男に概貴を簡単に捕まえられてしまったのも、そんな隙をつかれた故だろう

第二十話　油断（後書き）

いかがでしたか？

まあ、デート（？）回でした。

次はアニメで言う

悪魔でいいよ…

の回なんですが

アニメ見直して思い出しました。

…手を組んでるからできねえじゃん！

考える事数分間、まあ打開策は完璧（？）です。

まあ見ててください。

次回は前書きあとがきを少し本編に使わせていただきます。

あ、活動報告に重要なＯＨＨに関する重要アンケートが有ります、

是非とも作者のご協力を

ではでは皆様、次回投稿でお会いしましょう

第二十一話　覚醒（前書き）

ＳＩＤＥ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ　Ｍａｇｉｃ　Ｂｏｏｋｓ…

我は闇の書。数多の魔導師の魔力を糧とし、その魔導を自身の物に組み込む呪われた魔導書。

数百年…我は数多くの犠牲と共に覚醒し、自身の主を取り込んで多くの物を壊し、殺し、踏み躙った。

やがてソレを呪う事も忘れ、不幸を受け入れ、思考すら停止しかけた時。

あの八神の姉妹に出会う。

あの姉妹は違った。これまでの何人ものマスターたちとは決定的に何かが違った。

ヴォルケンリッターの将達と我を家族として、姉として受け入れた。

最初は戸惑った。こんな優しい思いを与えられる事など、今まで無かった故に。

次第に将を筆頭に我々は変わった。もちろん「私」も今まで抱く事ができなかった「家族への愛情」を抱く事ができた。

もしかしたら、初めて自身が誕生した事に感謝したのかも知れない。

…だが、我に科せられた呪いの運命は、それすらも踏み躙る。

嗚呼…神よ、もし貴方がこの世に存在し、たった一度だけ「私」に権利を与えるのだとしたら…

「私」は貴方を恨むぞ…愛
たお
すべき妹
てき
を用意したことに…

第二十一話　覚醒

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

八神はやてへのサプライズパーティーは何の問題もなく終了した。
守護騎士達は主の心底楽しそうな笑顔を見て、同時に自身らも幸せな気分になりながらサプライズパーティーを企画してくれた小さな来客を見送った。

「…久しぶりに見たな、主はやての楽しそうな顔は」

「えぇ、そうね。…早く全部片付けちゃって、取り戻さないと…ね。」

病院のロビーの入り口で見送りをするシグナムとシャマルは刻々と沈む夕日を見つめながら言い合う。
残りの頁は本当に後僅か。
二人は今夜にでも完成させてしまおうと病室ではやてと共に居るヴィータを迎えに行った。

「残り…３６ページ…。」

センター街の一際高いビルの屋上、ザフィーラを除く守護騎士と監視人としてなのはとフェイトが今回は、シグナムとヴィータが別々に蒐集を行うということで二人の監視人というわけだ。
いつも通り闇の書の残り頁をシャマルが呟いて確認する。

「…あと少しですね。」

シグナムの隣でフェイトが不安げに呟く。

「あぁ、完成までにカータに来てもらわなければな。」

その言葉にシグナムも珍しく声音に覇気を宿さぬ返事をする。
その理由はカータの所在が解らないというのに有る。

いくら思念通話で呼びかけても全く反応が無いのだ。

ヴォルケンリッターの面々が一同、義妹の捜索に動こうとするがクロノがそれを止めた。

『僕が彼女を探そう。少し雑務も有るからね。君ら頁の蒐集を進めてくれ。その方がいい。君らの主に、そう時間は残されては無いだろう?』

クロノにこう言いくるめられてしまってヴォルケンリッターらはせめて一人はとクロノと話しザフィーラをクロノに付き添わせたのだった。

「…終わったらいつも通りここに戻って来る。いいなよ?」

「あぁ。ヴィータ、高町、気をつけてな。」

「みんな、気をつけてね」

シグナムはフェイトと、ヴィータはなのはと。それぞれ背を向け、

シャマルが声をかけたその時だった。

「その必要は無い。」

あの男の声が響くと同時に全員の体に簡易的なバインドがかけられた。

「「「「「バインド!?」」」」」

現れたのは気絶した銀髪の少女を抱えた仮面の男だった。

「カータ!?…貴様…カータに何をした…!」

真っ先に怒号を上げたのはシグナム。すぐにでも切りかかりに行く勢いだが彼女を縛るバインドがなかなか外れない。

「…大事な妹を救いたいか…?ヴォルケンリッター?」

「…何が目的だ。」

仮面の男の言葉にシグナムが反応するが、そこに居る面々すべてがそんな事をせずとも察していた。

「闇の書完成まで後僅か…妹の無事を望むなら、貴様ら自身を闇の書に捧げろ。」

全員の予想通りとも言える言葉と共に、シャマルが持っていた筈の闇の書が彼の手に現れる。

「あ!…いつの間に!?」

シャマルが盗られた事に驚くがもう遅い。
仮面の男は闇の書を開いて口を開く。

「選ばせてやる。妹か、闇の書か。」

男の言葉に全員が固まる。
既にほとんどがバインドを引きちぎれはできるだろう。だが、そんなことをすればカータの身に何が起こるか分かった物ではない。
故に全員が、ただ選択肢を選ばざるを得ない状況に追い込まれていた。

「…分かったよ。好きにしろ。」

「ヴィータちゃん!?」

「…それで、カータが助かるなら致し方ない。使え、我らの身を」

「シグナム!?」
「そうね…私たちの大事な…家族だもの。」

「シャマルさんまで!」
ヴィータを筆頭にシグナムとシャマルが重々しく口を開く。
その重い口調は決して躊躇いでは無く、敵の言うことを聞かざるを得ない屈辱感からだ。

「交渉成立…さあ、奪え。」

『蒐集』

闇の書の機械的な発音と共に、三人の胸元からリンカーコアが引きずり出される。

「さて、もうこいつは用済みだ。ほら、返してやろう。」

まるでゴミでも扱うかのように、男は5人の居る所にカータを放り投げ、シグナムの前に落ちる。

「ッ…。」

その衝撃に瞼を震わせ、カータはゆっくりと目を覚ました。

「無事か…？カータ。」

「姉さん…？…。…！？」

朧気だった視界がはっきりとしたのか、引きずり出されたリンカーコアを見て驚愕の表情を浮かべるが、その視線をすぐに仮面の男に向ける。

「…止めて！…止めてよ！」

「もう、遅い。」

必死の懇願が届く事は無く闇の書がヴィータから魔力を奪い始める。

「ねえちゃん…はやてを…頼んだよ…。」

「ヴィータ…！！」

苦痛から僅かに表情を歪ませるも、穏やかに笑い、カータの悲痛な叫び虚しく足から徐々に霧のように消えてしまう。

「大丈夫、貴女は強いわ。しっかりね。」

「シャマル姉さん！」

同じく響く言葉は虚空に震え、湖の騎士は柔らかい笑みを浮かべて消去された。

残されたのは烈火の将。

「シグナム…姉さん…。」

恐怖と不安で震えるカータに、シグナムは気遣う事無く、いつも通り口を開いた。

「カータ。これで闇の書は完成する…お前が、アレを在るべく形に…救え。」

逆にそんなシグナムの態度が、カータの救いになった。何かに気づかされたように表情を変え、コクリと頷く。

そんなカータに安心したか、烈火の将は静かに瞳を閉じ安らかに消滅を受け入れた。

「「……。」」

なのはとフェイトはただただ傍観することしか出来ず、三人の消滅と同時にバインドを引きちぎり、ようやく我に帰り仮面の男を睨む

もそれはとある殺気に中断させられる。

「返して。」

淡々と響くその声音はカータが仮面の男に放つ絶対零度の言葉。

「姉さんを、返して。」

「……。」

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

私のせいだ。私があの時気を緩みさえしなければ、こうはならなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

あの時、結界を張られたときは目の前の異変を理解し、容認し、対応しようと、頭が回るまでしばらくかかった。

具体的な時間にして約3秒。

その間に大事な人をバインドで捕まえられて、奪われてしまった。

姉さん達に通信は間違いなく届かない。

そのための結界だと思う。

なんとかするしか無い。なんとかしないと脳裏に浮かぶ最悪の事態が現実に起こる事になる。

「さあ、八神カータ。我々と共に来て貰う。」

「断る…って言ったら…？」

「なんて事は無い。この少年が代わり犠牲になるだけだ。」

「ッ…！」

無意識に拳が握られる。頭の中で必死に打開策を模索する。

距離はだいたい5メートル。

その気になれば加速してアイツの脳天に踵を叩き込む事も出来る。

…でも相手は遠距離バインドも近距離のクロスレンジもお手の物な奴と来た…。

私の不意打ちが通用するのも考え辛い。

「カータちゃん、僕はいいから…早くコイツをやっつけちゃ――うぁっ…」

「少し黙っていてくれないか…？」

概貴君の首がアイツに片手で締められる。

苦しむ彼の表情に。

私は、キレた。

「ハアアァァァ！」

出しうる最高の速さを魔力を背中と足から無理矢理噴射して出力して一秒に満たない時間で接近する。

「！？」

仮面の男が反応して、障壁を用意するつもりか手を翳すが、遅い。
私の拳がアイツの仮面に食い込み叩き割ると同時に後方に吹き飛ばす方がコンマ一秒早かった。

「彼を傷つけるのは許さない…！
…立ってよ、完膚無きまでに叩き潰してあげる。」

…後ろに居る彼に、大丈夫と視線で笑いかけながら、立ち上がりかけるアイツに追撃をかけようと肉迫する…。が

「……え…！？」

割れた仮面からは見覚えのある顔が現れた。
…そう、私がクロノに捕まった時に私の協力要請を拒否した猫の使い魔…。

「ッ…ハアッ！」

「ウグッ…！」

躊躇う訳には行かない。立ち止まる訳には行かない。
真っ直ぐ鳩尾に向けて渾身の一撃を加速させた拳で叩き込む。
一撃は見事にクリーンヒット。

体重がこちらにかかった時に、私は不意に気がついた。

この使い魔…アリアって言ったっけ…待って…確か、もう一人猫の使い魔が――――

「フンッ」

「!?…グゥッ…」

唐突に右脇腹に激痛が走る。それと同時に空中から突撃と同時に蹴りとばされたと理解する。

そのまま公園の地面を転がる羽目になった。

「カータちゃん!」

概貴君が叫ぶが、近寄る前に私は再び目線で訴えた。『来ちゃ駄目。』と。

「大丈夫か、アリア。」

「えぇ、あれ以上やられたら危なかった。有難うロッテ。」

そう、仮面の男は二人居た。

殴りかかる前にそれに気づけばきっと今の一撃も直撃は避ける事ができた。

…なんで考えつかなかったんだろう…。

私の一撃一撃を、あんなにあっさりとあの仮面の男が受けるのはおかしいという事実に。

「しかし…これで完了だな、手間をかけさせる…。」

そう言いながら再び仮面の男2…アリアは倒れた私のお腹に向けて追い討ちをかける。

「ア…ゥ…。」

睨みつけようにも視界が霞む。

このぉ…小学校二年生に本気で蹴飛ばしやがってぇ…

そう内心考えると同時に私の視界は狭くなり、そのままフェードアウトした。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

仮面の男は動かない。カータも二言目を紡いでからは全く動かない。双方の敵意は火花が見えるのではないかというほど剥き出し。

「本気で出来ると思っているのか?今まで誰もできることがなかった、この呪われた魔導書に。」

「それ以上言うと、本気で殺すよ?貴女がたとえ肉弾戦に優れていたとしても、だけどロッテさん?」

「!?カータちゃん!今なんてい言ったの?」

カータの口にした名前になのはが食いつくように問い掛けた。

「こいつは、あの猫の使い魔が擬態した姿です。…あ、油断しちゃダメですよ。どうせもう一人が二人を捕まえようと目論んでるでしょうから。」

そう答えながらカータは右上方向けて手のひらを翳す。

「ゲイト、気功波動（タートル・バースト）・バレッドシフト…演算補助、次いで私のバリアジャケットをよろしく」

『了解。』

翳された手のひらに拳程の魔力スフィアが形成されていき、それを

「炙り出してあげる」

虚空に向けて弾けさせた。

虚空目掛け散弾銃のように散らばった魔力の弾丸が襲いかかり

「チィッ」

隠れたもう一人の男を引きずり出した。

威力自体大した物ではなく、出された障壁に簡単にふせがれる。だが、姿を見るや否やカータは床を蹴り飛ばし空に翔た。

「…隠れていたって事は私に弱い方、だ…！」

「ガッ…？」

障壁を出した後の僅かな硬直をカータは見逃さない。

飛び上がりながら勢いに身を任せ加速してアリアの脇腹に鋭い回し蹴りを放つ。

これまでは、ただ「戦い」を知らなかっただけで、彼女自身の肉弾による戦闘能力のセンスはかなり高い。それこそフェイトやシグナムにも負けぬほどに…

ただ、義姉（あね）の励ましも重なり、彼女自身がこの土壇場にこれまでの成果を引き出した、というのもある。

「このままあなたを盾に取る。」

「そうはさせんよ。」

「!?──はや…」

アリアを庇うようにはねのけロッテが入れ替わりに拳を放つ。が、攻撃の反動から知覚こそできるもののカータの防御が間に合わず、そのまま攻撃は彼女を射抜く

「ハァッ!」

ことはなく、フェイトのバルディッシュが放つプロテクションに拳が受け止められ

「シュート!」

なのはの放つアクセルシューターが仮面の男に突き刺さらんと矢のように襲い掛かる。

「チィッ！」

襲い掛かる光の矢尻を障壁で振り払い二人からアリアを引っ張り距離を離す

「フェイトさん、ありがとう。ちょっと頭に血が上ってた」

「うん、それより、今はあの二人を…。」

「了解。予備演算（プログラミング）、開始。」

「民間人への魔力行使、及び傷害未遂…公務執行妨害で、貴女達を拘束します。抵抗しなければ、これ以上の戦闘は行いませんが？」

ハーケンのバルディッシュを構え、仮面の男の姿をしたロッテ、アリアをフェイトは睨みつけ言い放つ。

『公務執行妨害』その単語でカータは少し驚いた表情をするが、直ぐにその表情は明るくなる。「本当に私の味方になってくれた。」表情では見せないが、そう心の中で彼女は涙を流したからだ。

「闇の蒐集行為を公務と名乗るなんて、管理局員失格だね。」

「本当、拘束されるべきは貴女達ね。」

これ以上無意味な変身魔法を続ける必要無しと判断したか、仮面の男の姿から少女の姿に戻る二人はあざ笑うかのように三人に侮蔑の視線を投げる。

「なるほど、これで僕らの疑問全てが解消された訳だ。」

不意に響く聞き覚えのある少年の言葉と共に二人に青い魔力の枷が両手両足に絡みつく。

「「!?」」

現れたのはカータ捜索に出向いていたクロノとザフィーラ。現れた正体不明の結界とカータ達の魔力を感じて駆けつけて来たのだ。

「優れたクロスレンジと魔法技術。確かに君達二人が二人一役をすれば実現しないことも無い。加えて管理局のシステムをいきなりダウンさせる。内部の者ならばコレも可能な事。そして君らの目的は…」

「主はやてを闇の書もろとも永久に凍結すること。」

クロノとザフィーラの言葉にカータは青い瞳を丸くし、同時に再び怒りの灯る青の視線で捕らえられた二人を睨む。

「!?……。どこまでも…私を怒らせる人達…!」

「クロノ…!どこでソレを…」

「グレアム提督が全てを話してくれたよ。…少し前から僕は君達に疑惑を抱いていた。確かに君らのスケジュールは新人達への教育メニューでギッシリと埋まっていたよ。…度々ある自主メニュー以外は…それも突然の出張という謎の失踪。少しばかり管理局から転送される履歴を粗方エイミィに調べてもらった。流石の君らでも管理局が集める履歴を全て消去するのはできなかったみたいだな。おかげで君らが管理外世界に何度も転移していることが解ったよ。それ

も、守護騎士たちが現れている所々に、な。」

「…だが、あのご老人、確かに自身のやってきた事は認めたが、我々に折れるつもりは無いようだ。どちらにしても賭けであることに変わりはないからな。貴様らが持っているという凍結デバイスとやらもアレに通用するかはかなり怪しいらしい。我々が行動を完遂するか、貴様らが行動を完遂するか、先に為し得たものが闇の書に然るべき処置を施せ。とも言っていた。」

二人の言葉にロッテとアリアは表情を驚かせたり悔しがったりと目まぐるしく変化したが、最後のザフィーラの言葉で我を取り戻すように、表情を引き締める。

「つまりお父様は私達に為すべき事」

「しろと言ったんだね。」

「だが、君らはここでゲームオーバーだ。闇の書は僕らが止める。完成したアレが暴走を起こす前――闇の書はどこに…まさか！？」

向けたデバイスの先に居る二人が持たない闇の書にクロノが気がつき取り乱すが、二人は表情を邪悪に歪める。

「もう、主の下に」

「ついたんじゃないかな？」

その言葉と共に二人はバインドを引きちぎりそこに居る全員に見えるように映像を見せて

「ロッテ、結界の準備は？」

「大丈夫よアリア、じゃあねみんな。私達は一足早くあの子にちょっとお芝居を見せてくるから。」

夜の闇に溶けるように転移した。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

夜、みんなと騒いだ疲れもあってか、私は本を読む事も無く、少し早く眠りについていた。

眠ってからちょっと経った頃だろうか、一際大きく高鳴る鼓動と張り裂けるような激痛に覚醒を余儀なくされた。

「ッ…ァ…ハ…」

呼吸すらままならない、暗闇であるのもあってかナースコールを押そうにもどこにあるか解らないし、なにより手を伸ばす事は愚か、お箸を持つ程の力すら出そうになかった。

「ア…ゥ…。カー…タ…」

死ぬのなんて怖くは無かった。こうなるのはなんとなく解っていたから、でもあの子が来てからは違った。みんなが来てからは違った。

「みん…な…」

私が幸せにしてあげないといけない、笑顔を知らなかった騎士達にはもっと笑顔を知って欲しい。主である私にはその義務がある。

「ハッ…く…」

ここで死にたくは無い、生まれて始めてそう思えるようになった。

…神様が居るとしたら、きっと相当にドSに違いない。なんとも思ってない時に行動を起こさず、私が変わってから漸く重い腰を上げなさった。
せめて最後にあの子の笑顔が見たかった、もうダメだ。そう思ったその時。

「ダメだよお姉ちゃん。貴女には、まだやってもらわなくちゃならない事が、有るから」

不意に義妹の声が聞こえた。

「ぇ…？」

顔を上げると見たこともない恰好をした妹がそこに居た。見たこともない酷薄な笑みを浮かべて。
一番会いたかった義妹は、どこかの誰かのように感じた。

「カー…タ…？…何で…？」

「お姉ちゃん、苦しいの…？…そうだよね、闇の書に食べられてるんだから、無事な訳無いよね。」

ベッドの脇に座りながら楽しそうにクスクスと笑って私を見つめる…。

「ッ……。」

カータの言葉が刃のように私の心に突き刺さる。

「苦しいのをずぅっと私達に隠して…元気だって、私達を騙してた

んだよね？…私達が信用できないだよね。血が繋がって無い偽物の姉妹だもんね。」

「それはちゃう…！私は――」

「違わないでしょ？
隠すのは疚しいと思ってるからでしょ？
私達に「迷惑」掛けてるって自覚が在るから。」

「それ…は…！」

そう、心のどこかでは解ってた。
私はたまにみんなの邪魔をしているんだと、でも私はみんながいつも優しく笑ってくれるから、それをずっと誤魔化し続けてきた。

「でもね、いいの。そんなお姉ちゃんを許してあげる。…だって」

私も貴女なんて信じてなかったから。

「え……？」

耳を、疑った。

「お互い信用せずに今まで家族ごっこをやってたんだよ？最高でしょ？愚かで滑稽で最っ高に、哀れな人…。」

「ァ…あ…。」

もうカータが…目の前の悪魔のように笑う少女が何を言っているのか、私にはほとんど聞こえなかった。

「ヴォルケンリッターのおかげで、私は強くなった。…もう私は守られる必要なんて、無い。貴女なんて…」

止めて…それ以上を口にするのは…

「要らない。」

その言葉で、私の中の何かが弾けた。

…何もかもどうでも良くなった。

全て、嘘になってしまえ。

そう願ったその時。

『では、夢を見せましょう。お眠り下さい。主はやて。』

そんな言葉が、聞こえた気がした。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

あの屑猫共が消えてから、私は真っ先に病院に飛んだ。文字通り、空間を飛んだ。
何てことは無い。頭にシャマル姉さんが私を転送してくれた時のことをトレースしてそれを魔法(プログラム)に起こしただけ。
連続転移。短い距離への跳躍を一瞬にして演算を完了させて、その作業工程を目的地まで繰り返す。

「お姉ちゃん…。」

奴らが転移してから7、8分。
漸く病院に辿り着いた私を待っていたのはあのロッテだった。

「お姉ちゃん思いだねー、私感動しちゃったよ。」
下卑た笑い声をけたたと上げながら私を煽るつもりなのか、やけに苛つく言葉。

「死ぬ覚悟は、出来てるよね?」

「小娘(クソガキ)が、私達の…お父様の悲願を…お前程度に潰される訳には行かないだよ!」
「黙れ!大の為に小を切り捨てるやり方…私は大っ嫌いなの…。だから、貴女達みたいな卑怯な大人は嫌い。私なら、全部救える。お姉ちゃんも、闇の書…姉さんも…!」

「カータの、言うとおり。だよ。」

不意に後ろから声が聞こえた。

「フェイトさん…？」

「カータ…速いね。ちょっと、追いつけなかった、かな。」

相当飛ばして来てくれたのか少し呼吸が乱れていた。

「落ち着いて。焦ってたら…見える物も、見えないから。」

そう言って私に笑いかける。

…ここに来て私は二度この人に頭を冷やされた。

「…はい。まずは、そこの屑を、片付けましょう…！」

「うん、二人なら…どうにかなるよ…！」

二人して目の前の敵（ロッテ）に構えて臨戦態勢を取る。

だけど、ロッテは楽しそうに笑うばかりで戦う素振りすら見せない。

「…茶番ご馳走さま。残念だけど、私が戦うまでも無いかな、だって…もう私達の勝ちだから。」

その言葉と共に病院のとある病室から真っ黒い光が溢れんばかりにほとばしった。

あの病室は…

「お姉ちゃ――――」

空を駆け出すその時

『嗚呼…この主も私に苦渋の命を強いるのか。』

「「！？」」

聞き覚えのある儚げな声が私達の後ろから聞こえた。

「その声は…」

『嗚呼…久しぶりだなカータ。』

振り向いた先には、最初に会った時に纏う真黒のインナーではなく、バリアジャケットと思しき漆黒のローブを纏った…

「だが、こんな再開はしたくはなかった。倒すべき我が敵よ。」

闇の書と名乗る悲しい表情をした、まだ名も知らない姉さんだった。

第二十一話　覚醒（後書き）

少女は願った。力が欲しいと。

否応無しに押し付けられる絶望的な力の差に、力足らぬ自身を呪いながら。

その時、一つの光が少女を引き上げる。

そう…彼女の英雄（ヒーロー）は、居たのだ。

次回　魔法少女リリカルなのは　Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ

「光」

思いが重なったとき、奇跡が芽生える。

第二十二話　英雄（前編）（前書き）

皆様お久しぶりです。

１２話を削除してしまい、なんとか記憶から掘り起こしながら複製中のＧＩＣです。

ふと見てみたらなんか最新話完成してんじゃん

仕上げをして急いで投稿に至りました。

では、２２話…どうぞ

第二十二話　英雄（前編）

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

まず結論を言おう。闇の書はとてつもなく強大な力を持っていた。
それこそ、フェイトとカータの二人ですら歯が立たないとでも言っていいほどに。

「近距離は勝てない…中距離も向こうのが速い…」

「ど、どうしたら…」

なのは達が到着するまで今しばらく時間がかかる。というより、闇の書が現れてから実に5分程度しか経過はしていない。それほどまで実力差は顕著だった。

覚醒の起因となった二人の使い魔に眼も暮れず、闇の書は真っ先にカータへと襲いかかった。
悲痛な妹の叫びを姉は全く聞き入れず、ただただ主の願いを叶えるため牙を向く。

その間に二人の使い魔はどこかに逃げてしまった。

「カータ、管理局員。諦めろ、私の中でおとなしく眠れ。」

「だ、誰が…！」

「そうだよ、姉さんは止める。なんとしても…」

言葉そのものは強気ではあるが、誰の目から見てもその言葉が虚勢

であるのは明らかであった。それもそうだ、二人の十八番は近距離によるクロスレンジ。フェイトは多少中遠距離による魔法の行使は可能だが、なのはに比べれば大きく足らない物がある。カータに至っては自らの得意分野を完全に封殺されたようなものだ。

「そうか、では力づくでしか、無いようだな。」

闇の書はそう呟きながら右手を空に掲げる。バチバチと迸る黒い魔力からは濃密なスフィアが形成されていく。

「遠き地にて、闇に沈め…」

皆まで魔法を見なくても、二人には如何に目の前の黒い魔力スフィアが凶悪な威力を保有しているかが直ぐに理解できた。

「!?…。ゲイト!イージス用意!」

『了解、予備演算ご用意致しました。』

カータはその場で高速演算を開始する。自身のスペックを凌駕しクロック・オーバーが発動しない程度に自身のスペックを引き上げて最速で最強の盾の魔法(プログラム)を組み上げる

「デアボリック・エミッション」
「最強の盾(ウォール・イージス)!」

カータが防御魔法を形成完了するのと闇の書が巨大なスフィアを爆裂させたのはほぼ同時だった。

ズガアアアアアアアアアン

「ぅ…ァ…」

凄まじい衝撃、思わず彼女は自身が以前トラックにはねられたときに覚えた一瞬の衝撃を思い出した。言葉にならない苦悶の声を上げながら何とか攻撃を防ぎきる。

巨大なスフィアによる広範囲に敵を殲滅する空間攻撃。デアボリック・エミッション、爆発の衝撃に似たエネルギーの波動は触れた全ての者、物を純粋魔力で破壊しようとする。

余りの衝撃にカータは完全な防御の上だったにも関わらず大きく魔力を削られ一瞬だけ硬直する。その隙が目の前の敵には致命的な隙だとフェイトは一瞬で判断した。

『Ｂｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ』

自身の高速移動魔法を発動させながら魔法の反動で動けないカータ抱きかかえその場から一瞬で退避する。
その時にまみれた魔力による爆煙がちょうど煙幕となったこともあり闇の書は攻撃目標を見失う事になった。

「…隠れた、か。」

「ハァ…ハァ…」

「カータ、大丈夫？」

腕の中で息を切らすカータにフェイトは少し罪悪感にかられながら語りかける。

「いつものことです。それよりフェイトさんこそ大丈夫ですか？そのバリアジャケット、防御力を削った諸刃の刃なんでしょ？」

「うん、カータのおかげで…。あの子…カータのお姉さん…広域攻撃型だね。回避は難しいかな。バルディッシュ。」

『了解、ライトニングフォーム』

カータの防御が教訓になったか、フェイトは自身の戦闘スタイルを近距離重視から中遠距離重視へと切り替える。

「接触…接触さえできれば…！」

そう、接触さえできればカータの稀少能力（レアスキル）で闇の書にアクセスさえすればいくら主を吸収し、転移する暴走したプログラムがあろうとそれをかいくぐってなんとかシステム中枢に潜り込む事ができる。

が、現状はクロス、ミドル、ロング。全てに於いて闇の書が握っていると言っても過言ではない。

「フェイトちゃん！カータちゃん！」

二人が途方に暮れる中、なのは達が一足、二足遅れて到着した。

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

「はっ…はっ…はっ…！」

走る。

「確か…こっち…。」

走る走る。

走る走る走る走る走る。

彼女の許に駆けつける為に。

…僕に力があったら、こんな展開にはならなかった。

何がヒーローだ。

何が力になれるだ。

結局僕は何も出来ずに彼女の足手まといになっただけ…。

「ッ…。」

今すぐにでも休息を求める体に鞭を振るってひたすら走り続けた。

「む…?ガイキンだ、いかがしたかな?」

聞き覚えのある声が耳に届いた。

いつも聞き慣れた声音に足が自然に止まってしまう。

「リ…エ…ちゃん…?」

「そうです、君とカータの心のアイドル。関原理恵とは私の事です。」

「私達も居るけどね」そこには、リエちゃんとアリサさんにすずかさん、カータちゃんのお姉さんのお見舞いに行った三人が居た。
いつもなら何かしら反応をするし、したいけど、生憎と今僕は追い詰められて心身共に余裕が無い状態だった。

「ごめん、僕ちょっと急いでるんだ。後――」

「カータはどうしたの、ガイキン。」

ドクンッ

予想外の問いかけ…いや、予想するのを否定していた問いかけが僕を襲った。

「聞こえなかった？カータは、どうしたの？」

「カータ…ちゃん、は…。」

いつも僕らを笑わせる彼女の笑顔は消え、どこか鋭い視線を感じさせる表情。

その時だった、僕らの周りを可笑しな空気が閉じ込めたのは。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

「…結界。」

突如張られた強壮捕縛結界。

多分姉さんが私達を逃がさない為に展開したんだと思う。

「みんな、行こう。ここで隠れて居ても埒があかない。」

「そうですね、姉さんも直に私達を…私を見つけて襲いかかってきます。」

フェイトさんと私の言葉でそこに居る私を含めた6人全員が頷く。

クロノは解決策を練るだとか言って何かをしてくれてるらしい。

つまり、私、なのはさん、フェイトさん、ユーノさん、アルフさん、兄さん。この6人で現状打破に挑むしか無い。

覚悟を決めたその時だった。

「逃げるのは、もうやめか？」

「…待ってて、姉さん。今、朝日を見せてあげるから」

SIDE OUT

Interlude

結界が張られる少し前、クロノはなのは達と別れチャンスを伺った。

あの使い魔を捕まえる為に。

そのチャンスは直ぐに来た。離れたビルの上で覚醒した闇の書を眺

め凍結の機会を伺う使い魔達の姿。先ほどの戦いで消耗した彼女らを捕縛するのはそう難い事ではなかった。

彼女らをそのままグレアムのところにクロノは連行した。使い魔をグレアムに突きつければ、彼も折れてくれる。そう考えたのだ。

「…提督。もう止めにしましょう。例え…例え貴方の思惑通り、闇の書を次元の硲に閉じ込めたとしても、封印された強大な力は、いずれ善からぬ者が手に入れようとする。」

「……私は、悲劇を繰り返したくは無かった。君の父をあの日死なせてしまった時、私は誓ったのだ。二度と同じ過ちは繰り返すまいと…」

「今回の主、八神はやて。天涯孤独の少女ならば悲しむ人間は少ない、封印されても、悲しむ人間は少ない。そう考えたんですね。」

「嗚呼…その通りだ。だが、想わぬイレギュラーが現れた。八神カータ…彼女の存在だ。」

八神カータ、その名前が出た時にクロノは静かだった表情を僅かに変える。

「彼女は何者ですか…？提督、貴方はご存知なんでしょう？」

「それが、あの子を監視し続けていた私もよく解らないんだ。」

予想外の返しに僅かに変えた疑惑の表情を更にクロノは濃くする。

「よく…解らない…？」
グレアムの代わりにアリアとロッテが口を開いた。
「八神カータは、降って湧いたみたいに突然現れたんだ。次元干渉をしたでも無く、突然…。」
「他の次元世界から現れれば何かしらの足跡は確実に残るんだ。自分で痕跡を消さない限り、だけどあの子は、足跡を『全く点けず』に第９７管理外世界に出現した。」
有り得ない二人の言葉、だがクロノも彼女が異常なのは僅かながら感じ取っている。だからこそ頭ごなしに否定ができなかった。
「どうやってカータ君がはやて君の元にたどり着いたのかは解らない。だが、私にとって彼女は非常に不都合な存在だった。天涯孤独の筈の彼女に義理とは言え妹ができてしまった。また私は誰かから家族を奪う立場になった訳だ。」
グレアムの哀愁感のある表情は悲痛な物へと変わった。
一体彼はどれほど悩んだのだろうか。
一人の少女から姉を奪っていいのか、それともこの千載一遇の闇の書を封印する機会を逃していいのか…。
「それでも父様は封印を選んだ。どっちにしたって闇の書の主になった時点で残りの人生は限られてる。だったら、せめて幸せに残りの人生を…ってね。」
「だが、もう私に出来る事は無い。二人は連れ戻され、カードを失

った…。私の考えは法的に間違っているし倫理的にも間違っている。…クロノの言うとおり、人間の負の欲望が闇の書をまた使おうとするやもしれない。…アリア、デュランダルを彼に。」

「「父様！」」

「私達にもうチャンスは無い。持っていては役に立たん。」

二人は歯噛みするが、グレアムの言うことは彼女は何より心の底では理解していた。

ゆっくりとクロノにトランプ大のカードを渡す。

「どう使うかは、君に任せよう――『氷結の杖デュランダル』だ。」

闇の書とカータ達の戦いは熾烈を極めた。

フェイトとカータが肉薄し、なのはがその間合いの外から撃ち、ユーノ達がバックアップを施す。

1対6なのにも関わらず、闇の書は全く引けを取らない。

「ハッ」「ッ」「セイッ」

ユーノの鎖が闇の書の脚を括る。それに合わせアルフのバインドが右手を、ザフィーラのバインドが左手を絡め取る。

が

「砕け」

『ｂｒａｋｅｒ』

まるで飴細工を砕くように容易に其れを千切り砕く。

『Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

「ファイア！」

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｅｘｔｅｎｓｉｏｎ』

「シュート！」

『Ｂｏｏｓｔ　Ｃｌｏｃｋ』

「気功波動（タートル・バースト）！」

フェイト、なのは、カータの三方向からの同時砲撃。

「盾」

『Ｔａｎｋ　Ｓｈｉｅｌｄ』

が、駄目。現れた三枚の三角形のシールドに容易く砲撃を受け止められる。

「刃を以て、血に染めよ。」

『Ｂｌｏｏｄｙ　Ｄａｇｇｅｒ』

防御の最中であるにも関わらず、闇の書は淡々と次の攻撃ステップ

へと進んで行く。

「「「!?」」」

「穿て、ブラッディダガー。」

彼女の周りに無数の血の如き真紅の刃が現れる。
発動と共に術者を狙う砲撃主に向けて容赦なくそれは襲いかかる。

三人は攻撃の中断を余儀無くされ一度体制を立て直す。
が、それすら彼女の前では大きな隙となる。

「咎人達に、滅びの光を…」

翳す手のひらには全員に見覚え桃色の円環に空気中の魔力が徐々に集束されていく。

「まさか…」
「あれは…」
「結界を打ち砕いた、アレ…か…」

ユーノ達三人の言葉をよそに詠唱は次々と進んでいく。

「星よ集え…全てを打ち抜く光となれ。」

「スターライト…ブレイカ…?」

なのはが驚愕の眼差しで桃色の星光を見据える。

当然と言えば当然。自身が扱う必殺の一撃を、他者まるで手足のごとく扱う姿を見れば驚くのは当然。
だがそんな悠長にそれを眺めている場合で無いのもまた事実だった。
向けられた銃口の弾丸に当たれば戦闘不能は確実な一撃をむざむざ受けるのは愚の骨頂。
そんな中、カータは自身の思考速度（クロックスピード）を高め、ゲイトと意志疎通を繋げた

『ゲイト、姉さんの魔法と同じプログラム…複製できる…？』

『理論上は可能です。ただし、私が組み上げ貴女が演算をする形となりますが。』

『オーケー、いつもの逆…だね。』

高速思考による高速思念通話を終え、カータは全意識を相機から叩きつけられる演算に集中させる。

『姉上殿に僅かに遅れるため多少練度を下げて高速作成をします。なので威力は減衰しますが、目的は相殺ですので、ご勘弁を』

カータは答えない。いや、答えられない。
与えられる演算に自身の演算能力…右脳から、果ては左脳までイメージによる演算から事実上起こり得るシュミレートまでひたすら計算するためだ。

…クロノの言葉通り、確かにその光景は異常であった。本来演算すべき計算式を所有者（マスター）が紐解き、構築すべき魔法を機体（デバイス）が組み上げる。

ザフィーラは兎も角も、他の全員は、あのカータが捕縛された時、単独で気功波動（タートル・バースト）を構えた時とほぼ同じ反応を繰り返した。

『偽りの星光よ、果てに集いて其れを為し貫け…』

空気中の魔力素をかき集める。集められた魔力は収束し銀の光となり丸く集う。

闇の書とカータ、お互いが魔力素をかき集めるため…自然互いが収束できる魔力は少ないなる。…お互いの威力は半減する。という事…いや、どちらかがより多くの魔力を収束できるか、だ。

これがカータが一歩遅れてなお相殺させようと考えた理由。

『皆さん、マスターがあの収束砲撃を相殺させます…衝撃対策を。』

2つの星光…桃と銀の光が相対する中、各々起こり得る衝撃に備える。

なのははフェイトをユーノとアルフはそれぞれの身を、ザフィーラは義妹の後ろにていつでも彼女を受け止められるよう構えを取る。

そして2つの光は徐々に破壊の閃光として形を成していく。

片方は全てを撃ち貫く為、片方は皆を守り抜く為。

それが互いに、義妹（いもうと）と微笑み、義姉（ねえさん）と慕う二人が撃ち合うのは何の冗談か。

「『スターライト・ブレイカー。』」

二つの声が重なったその時、星光が炸裂し爆音と閃光を轟かせその場に居た全員の視界を奪い去った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第二十二話　英雄（前編）（後書き）

さて、急いで後編を書き綴ります

御精読有り難うございました。

第二十二話　英雄（中編）（前書き）

どうも、クライマックス話の中編です。

最近、なんだか以前に比べて筆がよくすすむような気がします。

スランプ脱却しかけてるのかな

第二十二話　英雄（中編）

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＫＩ

可笑しな空気に包まれてから数分。僕らはビルの隙間に隠れるように入り込んだ。

「いやしかし参ったね。携帯繋がらないし一体どうなってんの？アリサ？」

「その質問に答えられたらこうして皆仲良く頭なんて抱えて無いわよ。」

リエちゃんの言葉を起因に、僕を除いた全員がため息に近い息を吐き出す。

僕はと言えば、カータちゃんが気になってしょうがないけど、無闇に動いてもしょうが無いという事で此処で皆と揃って頭を抱えて居る始末。

ゾクッ

いつか感じたあの強烈な悪寒。

「ガイキン、どしたん？」

「ううん、ちょっと嫌な予感が…。…あれ…なんだろう…？」

路地からふと見上げると桃色の光と銀色の光が向かい合うように浮かんでいる。

「…もう少し遠くに行った方が良いんじゃない？なんか、危なげだし。」

アリサさんが不安と虚勢（何て言ったらきっとひっぱたかれるんだろうなぁ）を混じらせた複雑な表情で呟く。
勿論それが懸命だと思う。
僕も、本能が『アレはヤバい』って伝えてるのが解る。

「…カータ…？」

リエちゃんの言葉で悪寒の正体が解った。
勿論彼女だって本気では思って無いと思う。ただ前に視力は有るなんて話、聞いた事が有るから、それで思わず呟いたんだと思う。

「あんた、何言ってんのよ。あの子があんなとこに居る訳無いでしょ？空中なのよ？魔法少女じゃあるまいし。」

「とにかく、もう少し遠くに行こうか。もしかしたら、私達と同じような状況の人が他にも居るかも。」

アリサさんとすずかさんの言葉は僕の耳に殆ど入らなかった。
ただひたすら2つの光を見つめる…。

――と、2つの光が少し鋭く瞬くように、見えた。

「！？…みんな伏せて！！！」

その瞬間にとてつもない轟音と突風が僕らを襲った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

私の目論見は何とか成功した。
姉さんの星の光を私の偽の光で相殺しきる事は出来た。

が、問題はそこからだ。まともな衝撃対策が取れてなかった私は、僅かに競り負けた反動をまともに受け、兄さんの補助が有るにも関わらず大きく後方に吹き飛ばされ、そのままビルの中につっこむ形となり、窓ガラスを突き破ってまるで映画のワンシーンみたいなアクションをする事になった。
それでもダメージが少なかったのは兄さんが私をしっかり受け止めてくれたからだと思う。

「カータ、怪我は無いか？」

「うん、大丈夫。ありがとう兄さん。」

オフィスビルだったのか中にあった綺麗に並ぶオフィスデスクを滅茶苦茶にした中から私は立ち上がる。

「厄介だな、我ら総出でこの様か。」

「でも幸いなのは、姉さんの狙いはあくまで私って言う事、何でか解らないけど…とにかく――――」

と言いかけた時、拳に着いた宝石…ゲイトが明滅する。

『お待ちを、民間人です。位置はここから約６００ｍ…理由は解り

ませんが、どうやら結界内に取り残されたようです。』

ゲイトからの余り嬉しいとは言えない報告。どうやら私達の作戦は前途多難みたい…。

『皆さん、聞こえますか?…民間の人が取り残されてるってゲイトから…』

『うん…知ってる。こっちもバルディッシュと、レイジングハートが感知したから。』

『カータちゃん、私たちが何とか闇の書さんとお話をしてみるから、その間にザフィーラさんと一緒にその人たちを安全な場所まで…。』

『いえ、なのはさん。私たちじゃあ管理局みたく外に飛ばしたりは出来ませんし、姉さんは私が狙いです。民間の人を危険に晒す訳にはいかないでしょう?私が戻りますのでなのはさん、フェイトさん。どちらかがお願いします。』

なのはさん達の言葉はもっともだけど、今の姉さんと民間の人を近づける訳には行かない。『私の中で眠れ』なんて物騒極まりない台詞吐いてたし

『…フェイトちゃん、私が行くよ。カータちゃんと二人で闇の書さんと戦ってて、私とユーノで、救助に行くよ。それで良い?カータちゃん?』

『はい。直ぐ戻ります。』

念話を切った。兄さんに視線を送ると小さく頷いてくれた。

二人で同時にオフィスビルを飛び出し、再び戦闘区域に戻った。

――――――――――――――――――――――――

吹き飛ばされたと言っても数キロという距離では無かったから、戻るのは一瞬だった。

戻るなり、フェイトさんは姉さんと刃と障壁で競り合いをしてる最中。…勿論なのはさんも小さな光弾を操って援護している。

さっきの念話もスターライト何とかの反動が有ったからこそだろう。

「なのはさん！大丈夫ですか！？」

「私は大丈夫、だけど…フェイトちゃんが…。」

視線は金の刃を振るう少女に向けられる。

「…じゃあお願いします。姉さんは、任せて下さい。」

「うん。ユーノ君！」

「解った、カータ、無茶はしないで。ザフィーラさん、よろしくお願いします。」

私たちが頷くと共に二人は反応の有った方角に飛び去った。

「兄さん、フェイトさん達を！…私はここから一発牽制を叩き込む。」

「心得た。タイミングは任せる。」

その言葉と共に兄さんはフェイトさんの加勢に赴く。

掌を上下に構えゆっくりと弓の弦を引き絞るように腰元に引く。

「ゲイト。」

『了解。演算速度のブーストに加え補強演算に徹底します。使用プログラム、「気功波動（タートル・バースト）」行けます。』

重ね、向かい合わせた掌に魔力を集中させる。少しずつ凝縮される銀の光。標的を視界に入れたまま更に魔力を織り込む。
弾けそうな魔力を何とか球体として留め狙いを定める。
これが難しい。標的に意識を傾け過ぎても、手元で溜まった魔力が弾けて、自分がダメージを負う羽目になる。もちろん手元に溜まる魔力だけを見つめていてもしょうがない。

どんな事にも言える事だけど、アベレージ。一つの事だけ出来ます…ではなく、やっぱりどれもそつなく伸ばす。

閑話休題。

チャージするバーストのスフィアのチャージが完了するまで残り数秒。

5
まだ早い。

4
三人で保ってくれるか不安だ。

3
雑念を捨てる。

2
狙いを、姉さんに
1
チャージ、完了。

『みんな！行くよ！』

私の念話による合図と同時に、姉さんを押し留めてくれた兄さん達が離れる。

「気功（タートル）…波動（バースト）！！！」

アニメ漫画のキャラクターヨロシク、技名を猛ると共にスフィアを纏う掌を上下に構えてつきだす。
その瞬間にスフィアを留める魔力を爆発させ、力のベクトルを標的に全力で向けて撃ち放つ。

上手く言った…！

そう思えた。…そうとしか思えない。幾ら姉さんでも多少は怯んでくれる。

「カータ、まだ甘いぞ…！」

彼女の唇がそう動くのを確認するまでは。

その瞬間に姉さんはあろうことか、私が放った一撃目掛け突進して

きた。

「え…？」

そのまま砲撃と真っ正面から激突…することは無く、突き出した掌にベルカを表す三角の障壁を携えながら僅かに減速しながら私の所に迫る。

「…！？」

急いで体内から魔力を更に放出するが、間に合わない。

そうだ、「気功波動（タートル・バースト）」そもそも三方向からの砲撃を易々と受け止めた内の一つ…。そんなのが牽制に使えると判断することが間違いだった。

結局姉さんのゼロ距離への接近を許し、放った私の唯一の攻撃魔法を、障壁で切り払う形で掻き消される。

「はぁぁぁぁっ！」

だけどゼロ距離で有利なのは姉さんだけじゃない。宙に浮いたまま重心を左足に掛け独楽のように回りながら、渾身の力を込め回し蹴りを打ち込む。

「僅かに足らんな。」

が、其れが通じないのは先刻はっきりしたばかり、私の一撃は片手で簡単に掴まれた。

「詰みだ。我が妹よ…主と共に眠るがいい――――」

「…ッ！」

頭を掴まれた。…その瞬間、背筋に嫌な高揚感がゾワリと走る。
こう、ジェットコースターで下った時に似た感覚。

姉さんと共に在る闇の書が私を取り込もうと中に入り込んで来ている、と直ぐに解った。

慌てて押し留める。ハックのやり合いだ。
闇の書は私の中に潜り込もうとし、私はそのソフトウェアをブロックする。簡単に言えばスパイウェアとアンチウィルス。

「無駄な足掻きを…苦しむ時間を増やすのか…？」

だけど、優れたウィルスがプロテクトを抜けるのは当然だ。

幾らゲイトが補助をしてくれても、相手はあのロストロギア。
次第に私は侵入を赦して行く。

強制的に気絶（シャットダウン）させられそうになったその時だ。

「うおおおお！」

猛々しい叫びと共に誰かが姉さんに拳を放つ。

「…良い拳だ。その拳、衰えてはおらんな、ザフィーラ。」

「当然だ、守るべき者の為なら、我らは例えお前が相手でも容赦はせん。」

意識がその誰かに向けられているせいか、私への介入は止まる。だけどそれを振り払うだけの演算権限が既に私には残っていない。

「そうか、ならばザフィーラ。お前を我が内で、眠れ。」

『吸収。』

「ッ！？」

闇の書が光ったその刹那。私は誰かに体を引っ張られた。姉さんの手から離れたからか、私の意識は直ぐに平常通り働き始める。それと同時に兄さんが闇の書に取り込まれる瞬間がはっきりと目に焼き付いた。

「兄さん！！！」

声は届かない。私の声が夜の闇に響き渡った時には既に兄さんは闇の書に取り込まれていた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

なのははユーノ達と共に彼女のデバイスらが伝えた反応を追っていた。

向こうは徒歩だったのだろう。反応を示した民間人らしき人影は直ぐに発見された。

「あの！すみません！ここは危ないですので、直ぐ避難して下さい！」

なのはが叫ぶように四人の人影を呼び止めた。その時ようやく彼女はその人影に見覚えがある事に気がついた。

「「え？」」

向こうの四人のうちの二人もそう感じたらしい。

…向こうの場合は視覚的な意味ではなく、聴覚的な意味で、だが。

「「なの…は…（ちゃん）？」」

振り返った四人…アリサとすずか、リエ、概貴達になのはとユーノは言葉を失った。

振り返った人物達は二人が知る人物だったから（とは言ってもユーノは一方的、且つアリサ、すずかの二人しか知らないが）である。

当然ながら四人は驚きの表情を見せていた。…内一人はあまり驚いては居なかったが。

「あんた…そんなの持って…何してんのよ…？」

「あ…え…っと…。」

「詳しい話は後で！此処は危ないですから早く安全な場所に――――」

「あんたは黙ってなさい！」

「は…はい…。」

なのはをフォローするつもりだったか、アリサとの間に割って入るも正に一喝。一瞬で沈黙させられるユーノであった。

「なのは、答えなさい。『何してんのよ』。」

「……。」

「黙ってたら解らないでしょ。」

「アリサちゃん。」

静かな威圧を込めて言葉のみでなのはに詰め寄るアリサにすずかがやんわり入り込む。

「先ずは、あの人の言うとおり避難しよう？やっぱり此処は危ないみたいだから、なのはちゃんにお話を聞くのは、後でいいじゃない。」

「で、でも…すずか！」

「此処に私達が居たら、なのはちゃん達に迷惑掛かっちゃう。…事情はまだ解らないけどそうなんでしょ？なのはちゃん。」

「う、うん。…ごめんね…後で…ちゃんと、話すから。」

なのはの言葉にすずかは笑顔で頷くと、ユーノに視線を移した。

「あの、ごめんなさい。その…安全な場所まで案内して貰えますか？」

「あ、はい。じゃあ少し待って下さい。今から転送の準備をしますので――」

「あ、あの！」

ユーノの言葉が終わると共に無言だった概貴が声を上げた。その視線はなのはに向いている。

「カータちゃんの所に行くなら、僕も連れてって下さい。お願いします。」

「だ、駄目だよ。確かにカータちゃんの所に行くけど、概貴くんは連れて行けない。危ない所に…」

「僕は普通じゃない。…何者なのかは解らないけど、信用出来ないなら…。」

そう言いながら概貴は近くの街灯を支える鉄棒に近寄る、そして意を決するかのように目を瞑り手を伸ばした。

「「「「「！？」」」」」

「なのはさん、僕はカータちゃんの力に為らないといけないんです。…お願いします。僕を、あの子の所へ…。」

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

兄さんが取り込まれてから数分、私とフェイトさん、アルフさんはひたすら、着かず離れずの戦いを続けていた。
徐々に息が上がるこちらに対する姉さんは全く息を乱しては居なかった。むしろ汗の一筋すらかいては居ない。

「フェイトさん、アルフさん。なんとか、姉さんに一撃与えられませんか…？」

「…プラズマスマッシャーなら可能だけど、私はなのはみたいに遠くから強い攻撃をするの、余り得意じゃないから。難しい、かな。」

「私は無理だね、なのはやフェイトが通じない相手なら、私はよくてさっきみたく補助が手一杯さ。」

歯噛みする。実力の足らぬ自分が悔しい。
接触さえ出来れば…と考えて居た私が愚かだった。
姉さんにあんな魔法が有ったなんて…。

「…逃げるのは終わりか？…私もそろそろ時間が無い。終わらせて貰うぞ。」

『Ｂｌｉｔｚ　Ｒｕｓｈ』

その瞬間、姉さんの姿が私たちの視界から消えた。
いや、私達の予想を遥かに凌駕する…そう。さっきフェイトさんが私を引っ張ってくれた時のそのままの速さで私達の背後を取った。

「ッ！」「ぅあッ！」

狙われのは、フェイトさんとアルフさん。直ぐ援護しようと構えを取った。…けど

「使い魔共々、眠れ。」

その瞬間、淡い黄色の光が二人を包み込んで

『吸収』

闇の書に取り込まれた。

「フェイトさん！アルフさん！」

当然ながら私が響かせた声は虚空を震わせるのみ、二人に届く事は無かった。

「さて、カータ次はお前だ。私がまだ姉である内に、お前を眠らそう…。」

姉さんがこちらに振り向く。

赤い眼に私を映しながら。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

第二十二話　英雄（中編）（後書き）

閲覧お疲れ様です。いかがでしたか？

自分としては前編をもう少し長くしてこの話数で書き上げたかったのですが、過ぎた事を言っても始まらないので次に生かします。

では、また次話に。

…感想まってます（ボソッ）

第二十二話　英雄（後編）（前書き）

お待たせしました。ようやく２４話が片付きました。更新頻度を上げようと努力はしてるんですが、中々にどうして進まないんですねこれが

では、２２話、英雄。どうぞ

楽しんでいただけたら幸いです

第二十二話　英雄（後編）

「どうしたの？姉サン？遅くなってない？」

「……。」

加速続け拳を打ち合う2つの光は闇の書と…カータ。
攻撃がぶつかる度に互いの間に強烈な衝撃波が迸る。

「す、凄い…。」

「なのは、ボサッとしてないで援護して頂戴これでも手一杯なのよ？」

「ふぇっ？…あ、はい。」

感嘆の息を吐き出し、二人の戦いを見据えるなのはに叱咤の声が届く。
いつもと違うカータの視線と口調になのははまだ戸惑いを隠せない。
あれほど戦況は絶望的だったのにも関わらず、今はそれが嘘のよう。
カータはまるであしらうよう…否、遊ぶかのように闇の書と戦う。
銀の髪では無く、闇のように真黒の髪を靡かせながら。

魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ
第二十二話：英雄

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

赤い視線がカータを捉える。金の戦士とその使い魔を取り込まれ、カータを守るものはもう居ない。
なのは達もいつ戻って来るか分からないカータに今の状況は、はっきり言って「終わっていた」。

演算能力は当然ながら闇の書が上であるのが分かっている今、カータに残された手段は闇の書を一度倒す必要が有った。が、それも出来ない。実力の差が明確であるのは先刻なのは達との連携での戦闘で既に分かりきっている。
カータに出来るのはなのは達が戻るまでの時間稼ぎしかなかった。
だが、速さも実力も劣るカータが闇の書から逃げるのは荷が勝ち過ぎていた。

「はぁ…はぁ…。」

「なかなかやるな。よくここまで逃げ切れた物だ。」

呼吸を乱し、額に汗を流すカータと対照的に全く疲弊の様子を見せて居ない闇の書。この後どうなるかは火を見るより明らかであった。

不意に、闇の書が構えを解き。カータに問い掛けた。

「何故抗う？お前が私を倒せぬのは、お前自身が分かって居る事だ。私が思考を持って居られる内に我が内で眠れば、お前は永遠の安らぎを得られる。それが不満か…？」

「ふざけないで。」

感情が解らぬ声音でバッサリと、姉の言葉を否定する。
それには明らかな拒絶の意思があった。

「そんなのを本当にお姉ちゃんが望んでるって言うの？本当に、貴女のマスター、八神はやてが望んでるって言うの？姉さんは、それを良しとするの？」

「愚問だ…この意思は私の意思でなく、我が主の物。私には愛する主の命を否定する事はできん。主が初めて私を頼った願いだ…。だから私は――――」

「それがふざけてるって言うの！お姉ちゃんの願い？意思？いつも私達に優しく笑うお姉ちゃんが、世界の終わりを望む？愛する主の命に背く理由は無い？違うでしょ！？お姉ちゃんが大事なら、本当にお姉ちゃんと私達を家族と思ってくれてるなら…逸れを否定して、諭すのが、貴女の役目なんじゃないの！？」

「…黙れ。」

図星なのか、それとも自身を否定するカータの言葉が辛いのか、闇の書は銀の髪で表情を隠しながら小さく呟く。だが、カータは止まらない。

「呪われた魔導書だかなんだか知らないけど、貴女はどうにも成らぬ現実から逃げてるだけ…。お姉ちゃんを救えない、私を倒すしか無い現実を直視しない為に、全部…お姉ちゃんが思ってしまった意思のせいにして…。」

「黙れ…！」

「自分の無力を、主の命令でひた隠して、自分の罪をお姉ちゃんに全部押し付けてるだけだよ。」

「黙れ！お前に何が解る…！強大な力を…愛する者を護るのでなく、破壊しかできぬこの悲しみが…初めて慕う事が出来る主をこの手で死なせねばならない痛みが、お前に解るのか！カータ！」

カータの最後の言葉に静かだった闇の書が遂に激昂した。
今まで読めなかった本当の感情が溢れ出る。本当の気持ちが溢れ出る。

「解らないよ！姉さんの気持ちなんて…全部押し込んで吐き出してくれない姉さんの気持ちなんて…解るわけ…ないよ。」

「！？」

だがカータも止まらない。その言葉に闇の書も何か思い至ったか、僅かに赤い瞳を見開く。
そう、カータは知りたかった。闇の書が何に悩み、何に苦しんで居たか。

「でも、解った。やっぱり、姉さんは、優しいって事が、やっぱり、姉さんだって私達と一緒に笑って暮らしたいって事が…。」

カータは再び構える。腰を落としかつて神谷恵美という名だった自身が使って居た、無銘の流派の構え。その拳と瞳に、先ほどまであった迷いと戸惑いは消えて居た。

「だから、私が止める。ゲイト！レアスキル、リミットリリース、オープン…クロックオーバー！」

『了解、拘束を解禁。マスターの望む付加の代償は左目の視力となります。如何しましょう？』

「目でも腕でも脚でも持ってけ！行くよ…姉さん…！」

――――――――――――――――――――――――――――――――

カータの希少能力（レアスキル）、クロックオーバー。

自身の演算能力の底上げ、ないし特化をする能力は対価が必要。
得られる能力に比例し、支払う対価は増していく。
カータは自身の演算を普段の2、3倍に強化を施した。
ゲイトの管理と補助が無ければもっと対価は肥大してたかもしれない。
事実上三倍増しのスペルスピードと思考スピードを得たカータだが、それだけでは敵に勝てぬのはカータ自身が一番よく解りきっていた。
勝てないが、渡り合う為に十分な刃でもある。

「…カータ、もう一度だけ言おう。そのスキルを解除し、私の中で眠ってくれ。せめて、私の意思が及ぶ間に、お前を我が内で眠らせれば、お前を助ける事はできる。」

「…ごめん、それはできない。私はみんなで笑って終わりを迎えたい。だから、姉さんは倒す。倒して夜明けを作ってみせる。」

カータの言葉が予想の通りだったか、もう闇の書は何も言わずに構

えを取る。そして、カータも用意し得る最大の数の予備演算を用意する。例えるならカータという拳銃に魔法（プログラム）という名の弾丸のマガジンを無数に用意する感じ。

最初に弾けたのは闇の書だった。もはや先ほどまで合ったカータを吸収するという意思は微塵も感じられない勢いを乗せた拳を胸元向けて撃ち放つ。当然ながらそんな実直過ぎる一撃は今のカータには通用せず、ガードする間でも無いか左手で受け止めそのまま自身の脇へと攻撃の向きを逸らし、そのままカウンター気味に闇の書の頬へと右手にて一撃をストレートで叩き込む。そのまま闇の書が吹き飛ぶという事は無く、頬で攻撃を受け止める。カータの能力を見るために一撃を甘んじて受けるつもりだったか、もしくはただカウンターに対応し切れなかったかは定かではないが、ただ一ついえることは致命的なダメージには程遠いということ。その時に出来た僅かではあるが確実に生じた隙をカータは見逃さない。そのまま闇の書の顎へと狙いを定め空中にて跳躍する。体のバネを総動員させ思いっきり逸らし、体を縦に一回転させる。伸びた脚が先ほど狙った顎…人体であれば急所の一つに向けて襲い掛かる。今度は闇の書の右手が襲い掛かる一撃を受け止める。掴んだ箇所は足首、攻撃の態勢上カータはどうしても宙吊りにならざるを得ない状況に一瞬持ち込まれる。形勢逆転、優勢だったカータは転じてピンチに持ち込まれる。が、カータは脚を捕まえられたまま体を大きく捻りそのまま反動をつけると自由な脚を回し蹴りの要領で闇の書の頭に向けて撃ち放つ。

一撃を受けた闇の書は衝撃でカータの脚を離し一旦距離を置いた。

「「……。」」

ほんの数秒、今のほんの数秒で二人の接近戦による攻防はほぼ互角ということが解る。両者が本気を出していれば、の話だが。

「！」

再びカータが闇の書目掛け宙を駆ける。魔力により体を加速させるフェイトほどの加速は無いが、常人なら消えたといっても過言でない加速でカータは闇の書の頭上を取る。そのまま踵を大きく振り上げ全体重を掛けた一撃を鉄槌の如く振り下ろす。当たれば大ダメージは免れない一撃だが、そんな攻撃を何もせず与えられる筈も無く、半歩下がる形で紙一重で攻撃を回避される。「全体重を乗せた一撃」を外したカータは当然ながら致命的な隙を敵に見せてしまう。闇の書は拳をノータイムで構えるとそのまま腹部に重いブローを叩き込む。

「ッ…ハ…。」

声にならない悲鳴を上げ、腹部から全身を貫く痛みを噛みしめる。

「！」

同時にカータはニタリと、不敵な笑みを銀の前髪で表情を隠しながら浮かべた。

「捕まえ、た。」

その言葉と共に右手を闇の書の胸元に添える。その右手には既に強大とは言えずとも至近距離で受けるには恐ろしい魔力が収縮されていた。

「気功波動（タートルバースト）…炸裂（シフトゼロ）…！」

防御の障壁は間に合わない。カータの呟く魔法名と同時に右手の魔力が炸裂弾の如く弾ける。タートルバーストの名前とは名ばかりの全く別の魔法。とはいっても、カータが先ほど予備演算を用意した際に思いつきで用意した即興の攻撃魔法。バーストの攻撃エネルギーを至近距離の爆発に集中させ、クロスレンジでなければ真価を発揮できぬものの、直撃さえ成立すれば爆弾を抱えさせながら爆発させるのと同義、つまりは即ノックダウンに繋がるほどの威力。もちろん放つ本人も無傷とまでは行かないが、攻撃そのものは自分の魔力。標的ほどダメージを受けることはありえない。悲鳴すら上げずに闇の書は与えられた攻撃を直撃し、爆煙の中に包まれてしまい姿が消える。

「今のである程度ダメージを受けてくれればいいけど…。」

そう言いつつ煙より離脱し相手のダメージの様子を伺う。完全な不意討ちな上にこの威力の攻撃を以ってすらカータは全く安心できていない。相手は危険指定のロストロギア、現存する伝説である。この慎重さは間違ってはいないだろう。

そしてその危惧は間違ってはいなかった。爆煙から現れた闇の書はある程度どころか、ダメージを受けているのかそもそも怪しいほど余裕を持っているように見えた。

「……今のは中々に危なかった。だが、隠し玉は二度は通用せんぞ、カータ。」

「ふふ、むしろ今ので終わらなくて助かったよ。まだまだ動き足りないから。」

対するカータの言葉はどう見ても虚勢に見えるが、今までのカータ

の行動の一部を見てきた闇の書にはその虚勢がそもそも勝機に繋がっているのでは無いかと考える。が、現状フェイトは闇の書に取り込まれ、なのは達もいつ戻るか解らない。
彼女に何か決定的な策略があるとはやはり思えない。そこまでいたってやはり無策、ただの時間稼ぎという結論に行き着く。

「では、次はこちらの番だ。…行くぞ。」
「!?」

闇の書は言葉を紡ぐと共に先ほどカータ自身がやったのと同じように超加速で目の前に移動する。そのままノーモーションで拳を顔面目掛けうちはなつ。
ほぼ、カータは条件反射で両手を重ねることで受け止めるがそのまま後方に吹き飛ばされる。

「ゲイト！衝撃対策！」
『了承、対衝撃体制整えます。』

凄まじい衝撃音と共にカータはオフィスビルの窓ガラスに背中から突っ込む。当然ガラスは粉々に砕け散り、中に並べられていたオフィスディスクはぐちゃぐちゃになる。…筈だった。

「…間に合った…。」

カータが窓ガラスに直撃するその瞬間、見覚えのある白いバリアジャケットを纏う少女がカータを抱えながら安堵のため息をつく。

「なのは…さん…？」
「ごめんね、遅くなって。」

気づけばなのはの他にユーノと、もう一人ユーノが抱える見覚えのある少年がいた。

「概…貴…君…？」

「ごめん、カータ。彼が君の力になるって聞かなくて…」

カータの問いかけに概貴の代わりにユーノが答える。

「ユーノさん、僕はホントに彼女に力になれます。確かに戦う事はできないけど、僕自身がカータちゃんの力になれる。」

「なのはさん、少しの間姉さんの足止め、お願いします。概貴君が言う、力になるの意味、聞いてみたいんです。」

ユーノの反論を制してカータが代わりに概貴を抱えながらなのはに言う。いつまでもここで長話を許すほど敵も悠長ではないと踏んだ上での発言。

「うん、任せて。…カータちゃん、フェイトちゃんは…？」

「…姉さんの…闇の書の中に取り込まれちゃいました…。」

「「「！？」」」

驚くなか、表情を不敵な笑みに帰る少年がいた。

「だったら尚更…！カータちゃん、フェイトさんを助けよう。」

信じてと、概貴は視線で訴える。恐らくその自信に根拠は無い。カータはなんとなくそう感じた。

だけど、彼はこれまで何度か（とは言っても本当に数えるほどだが

彼女にとってはどれも大きいものだから）助けてくれた。だから今度も、そう彼女の心が感じた。故にその言葉に答えようとしたが、彼女の言葉の前にユーノが口を開く

「カータ、なのはと僕がなんとか彼女の足止めをする。だから早く彼の話を。もしかしたら、本当にどうにかなるかも。」

ユーノの口ぶりから、カータは自分と同じものを感じている。そう思った。故に二人に向けてコクンと頷く。なのは自信の愛杖を構えなおす。
既に敵は4人の直ぐ近くまで迫っていた。

「話し合いは、終わったか？」

無機質に問いかける声になのはとユーノは二人の前に阻むように構える。その意を汲み取り、カータは概貴を抱えたまま夜の闇に飛び立った。

SIDE　CATA

姉さんを二人に任せ、私と概貴くんは少し離れたビルの屋上にたどり着いた。

「概貴くん、どうすればいい？どうすれば、姉さんに勝てる…？」

「カータちゃんは何もしなくて良い。僕に任せてくれれば。」
意味深な言葉に私は理解が及ばなかった。その様子を察知したかどうかは解らないけど、概貴くんは続けた。

「僕にはちょっとした力があるんだ。見てて。」

そういうと、彼は自分のコートを脱ぎ私の前に吊るすように掲げた。
そしておもむろに腕を伸ばすと、その手は

コートを通過した。

まるで立体映像のように、でも彼の持っているコートは明らかに本物だ。
私が少し困惑していると、また彼は続ける。

「これは、僕の力が働いているんだ。でもこれは所謂バグ。ちゃんとした方法じゃないから、きちんと力を出せなくて、こんな風になっちゃう。」

「……つまり概貴くん。どういう事？その何かを通過する力で、私を助けてくれ、るの？」

もう彼がなにを言いたいのかよくわからなかった。混乱してる訳じゃない。けど、珍しく遠回しな表現をする彼にいい加減焦れったくなったからだ。

「違うよ。でもこれだけははっきり言える。君は強くなれる。さぁ、手を出して。文字通り、君の力になるよ。体も心も、君の力に」

遠回しな言葉を続ける概貴くん。もしかして彼自身もよく解って無いのかもしれない。

でも、私は差し出した彼の手に無意識に応じ握り返す。

「対象確認。コード……２００ＧＨ４ＳＡ６。登録……波長同調、完了。融合機起動（フュージョナー）。」

足元に魔法陣が広がる。三角形の魔法陣。見たことのある記号の羅列。ベルカの……魔法陣……？

「概貴……くん…貴方一体……？」

思わず問いかけてしまった質問が無粋だと気づいたのはすぐにだった。

「言ったでしょ？……君の、君の為だけの、ヒーローになるって。」

そして次の瞬間。私は誰かとひとつに成った。

さあ、反撃開始だ。

Ｇｏ　Ｔｏ　Ｎｅｘｔ　Ｃｈａｐｔｅｒ……

第二十二話　英雄（後編）（後書き）

遂に概貴くんの本領発揮です。
遂にカータが主人公覚醒です。
さて、一周年越えたので次は番外編でも綴ろうと思います。
もしかしたら本編もあげるかもですが
ではでは、皆さん次回投稿でお会いしましょう

第二十三話　無銘（前書き）

カータがついに総ての強化フラグを回収し無双します。

今回ちょっと調子に乗って描きすぎちゃいました。読者の皆様が飽きなければ良いのですが・・・。

ではでは、本編をどうぞ

第二十三話　無銘

カータが概貴と話す間、なのはは闇の書と戦いを続けた。

舞台はいつの間にか街から海へと移動している。なのはの思惑、少しでも時間を稼ぐ為なんとか街から遠ざけたのだ。

状況は、やはり劣勢。ミドルからロングレンジを主体とするなのはにクロスからロングを完璧にこなす敵を倒すのは無理があった。

バスターの形態では正直無理がある。なのはが一番それを理解していた。が、フルドライブのエクセリオンモードは愛杖の基本フレームを破壊しかね無い。彼女はそれだけは避けたかった。避けたかったが、そのような甘言を抱えたまま倒せぬ相手であるのは解りきっている。

もう使うしかないか、そう考えた時に聞き覚えのある声が響く。

「なのは、退きなさい。私がやるから。」

凛とした張りのある声の主は

「カータ……ちゃん……？」

カータだった、正確にはカータに良く似た誰か。そうだ、彼女の髪は銀色、今なのはの後ろで不敵な笑みを浮かべる少女は真黒の長髪だった。

「聞こえなかった？退きなさい。あのお馬鹿さんにお仕置きするんだから。」

「あ、は、はいっ」

顔立ちもバリアジャケットも間違いなくカータだ。違うのは髪、瞳の色と雰囲気。

この数分で何があったのか知らない彼女は困惑するばかり。

カータはそんななのはに目も暮れず敵(闇の書)に向かって微笑む。

「姉さん、さっきのお返しに来たわ。完膚無きまでボッコボコにしてあげるから、覚悟なさい。」

「……何者だ、お前は。」

闇の書の言葉にカータはきょとんと黒の瞳を丸くさせ小首を傾げる。

本当に目の前の女性が何を言いたいのかよく解って無いらしい。

「可愛い妹の顔を数分会って無いだけで忘れるなんて、酷い。泣いちゃいそう。」

「はぐらかすな。お前は一体何者だ。」

大袈裟に顔を覆い、オヨヨと泣き真似をするカータ。あくまでふざけた態度で誤魔化す様子に闇の書が再び尋ねる。

カータの、先ほどまでのおちゃらけた雰囲気がコロリと消え、視線に敵意が宿る。

「誰かしら?まだ名乗る名前も決まって無いから困っちゃう。でも、そうね……こうは言っておくわ。貴女を倒す美少女って。」

言葉こそ未だにふざけて居るが、既に構えは戦闘の其れ。
カータの言葉に何も返さず闇の書はいきなり腕に魔力を纏わせカータの顔面目掛け拳を撃ち放った。

当然の如くカータはその一撃を片手でいなし軌道を逸らして回避する。同時に闇の書の懐に潜り込むと愉しげにクスクスと笑った。

「全然ダメ。姉さんは正直な良い人なんだから、不意撃ちは似合わない。こうやってやるのよ。」

「…ッハ……。」

拳が鳩尾に突き刺さる。肺の空気を絞り出され声に鳴らぬ悲鳴をあげる。
当然其れだけに終わらない。
大きく怯む闇の書の目の前で手のひらを重ねて魔力スフィアを凝縮させるカータが既に居た。

「ゆっくり味わいなさい。……気功波動（タートルバースト）」

起伏の無い口調で言葉が紡がれるのとスフィアが手のひらで押し出されるのはほぼ同時だった。
至近距離のゼロ距離砲撃。それも本来の威力を低下させる事無く放たれた一撃は文句無しの会心の一撃と言っていいだろう。
が、カータはそんな事実より心底つまらなさそうにため息をついていた。

「落第点も良いところだわ、ちょっと本気になったらこれだもの。嫌になっちゃう。」

闇夜の中、月光に濡れ艶やかな光を放つ黒い前髪をかき上げ盛大なため息をつく。
魔力による爆風にさらされながらも、平然とする様はやはり異常。
煙晴れ現れた闇の書は、明らかにダメージを負っていた。そう、6人がかりですら追い詰める事が出来なかった強大な敵に、傷を着けたのだ。…たった一人で。

「少し手加減してあげる。そうね、今から両手を使わずに戦ってあげるわ。私をがっかりさせないでね、姉サン？」

その事実に喜ぶ事は無い。今の彼女には当然の結果だと、鼻で笑うレベルなのだろう。でなければ倒すべき相手にそんな事を口走る訳がない。

「……。」

浮かび上がるいくつ物魔力スフィア。
彼女に足りなかったのは魔力を運用する能力と、演算能力だ。だからこそ、これまで魔力をふんだんに使う戦闘は行わなかった。……それがまた彼女の不運な所。有り余る魔力容量の資質を最大限に活かしきれて居なかった。それが、今解禁されつつある。
彼女の周りに浮かぶスフィアは五つ。丁寧に正五角形を描き空中にて静止している。
その五つにかなりの魔力が圧縮され練り込まれて居た。

もちろん闇の書も気づいている。
自身とカータとの間に存在していた溝が埋まり既にカータが目と鼻の先に立ちはだかっていることに。
だからこそ、無言。余計なお喋りに気を回しては勝てない。……今

の彼女は余裕では無いのだ。カータの一存で自分は直ぐに撃墜される。そう踏んでいるから。

闇の書は再びカータへと弾けた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――

SIDE　CATA

意識が曖昧だ。確か、私はビルの上で……何があったんだっけ……？最後に聞こえたのは、彼の頼もしい言葉。

そこから意識が曖昧。今私は何をしてるんだ。とか、何処にいるんだ。とか全く解らない。

「……タちゃん。」

意識が曖昧な割にすっきりしているから眠れない。だからこんな終着に行き着く事無い思考をぐるぐる回っている

「カ……ちゃん！」

誰かが、呼んでる。聞き覚えが……

「カータちゃん！」

漸く聞こえた自身を呼ぶ声に私は意識をはっきりさせる事が出来た。何もない真っ白な空間、そこで私は倒れるように眠っていたらしい。

「カータちゃん、大丈夫？」

「う、ん。とりあえずは……。」

体に外傷は無い。痛みも無い。
心配そうに顔を曇らす概貴くんににこりと笑う。

「ここ、どこ……？」

先ず第一の疑問。ファンタジーな世界によくある、真っ白い空間。
私と概貴くんが何をしたのか解らないけど、少なくともここに移動したのは間違いないみたい。

「ここは、多分僕の精神世界。僕と融合（フュージョン）した人の精神を入れてあげるスペース。…なんだと思う……。」

詳しいような曖昧なような微妙な表現だ。
でも確かに、今彼の口から『フュージョン』という単語を聞いた。
という事は私の体は今、概貴くんでも私でも無い誰かが使っているのかな？

「ううん、それは違うよ。」

まるで私の心を読んだかのように私の疑問に答える。
精神世界、というのもあながち間違いじゃないみたい。

「今カータちゃんの中に入っている人格は間違いなくカータちゃん。ただ、いつもよりちょっと強気なだけ。僕と融合（フュージョン）した人はそういう所を引き出されるんだ。……多分。」

さっきから彼の発言が、変だ。解っているように聞こえて、誰かに

聞いたかのような意思の曖昧さ。まあ、いいか。

「じゃあ私は？今八神カータの肉体に『カータの人格』が在るなら、私はなに？」

「今のカータちゃんは、融合騎である僕とお話するための存在。でも、君自身も間違いなくカータちゃんだから安心して。」

彼の言葉に安心した。とにかく、今私は姉さんと戦っている事は間違いないみたいだ。

「うん、強いよ。今のカータちゃんは、あのお姉さんに遊んで戦ってるくらい。意識が戻っているなら、カータちゃんにも見える筈だよ。」

そういうと、彼は指先を私の額に添えた。

なるほど、今の私がなんとなく解る。姉さんと互角どころかハンデまでつけて遊ぶ私の姿が。

「……ねぇ槻貴くん。」

「なに？」

「面白いくらい痛い子に見えるのは気のせいかなー。」

「？……僕はかっこいいと思うよ！」

「……。」

なんというか、脳裏（意識？）に刻まれる私自身の行動はすこぶる痛々しかった。
ああ、その昔同じようにフュージョンした主人公達がかっこいいとか思ったけど……。
年を取るって嫌だなぁ。
……何はともあれ。
「これなら、勝てる。」
みんなを、救える。
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
どういう事だ……？
闇の書、否、夜天の魔導書がまず感じた感情はそれだった。
疑問。つい数分前まで自身の動きに追い付くので手一杯だった妹が、たったの数分で自身に追い付くどころか、完全に自身を凌駕する存在となったのだ。
疑問に思わない筈はない。様々な可能性を考慮した。
デバイスによる強化。デバイスによっては使用者の性能そのものを底上げするモードも勿論存在する。が、彼女のデバイスにそんな様子は見られない。
そもそも全力ではなかった。もっともあり得ない可能性だ。この戦いはそもそも自分と彼女ためだけの物ではない。負ければ彼女はあらゆる意味で全てを失う。
自身は勿論、守護騎士達、加えて自身の主でもある八神はやて。

そんな中余力を惜しんで戦う理由は無い筈。
最後に残った可能性。

ユニゾン…か。

新たなデバイス。ユニゾンデバイスの追加。
そう考えて一番自然な流れは、あの少年。あれがデバイスと考えるのが妥当。が……。

あの子からは魔力が感じられた。

勿論自身のようにデバイスその物が魔力を用いる場合もある。だがそれは主である使用者から魔力を借り入れた場合だ。自分の場合は八神はやてのリンカーコアを犯して手にいれたイレギュラーな魔力だが。彼から感じた魔力はカータのそれでは無かった。

……考えても仕方ない、か。

そこで彼女は思考を停止させ一度カータから離れる。
驚くべき事は彼女は一連の思考を回しながら八神カータとの格闘戦を行っていたということだ。勿論カータは手加減をし遊びながら戦って居るのだが、それは夜天の魔導書自身解りきった事だ。

「どうしたの？姉サン？遅くなってない？」

「……。」

加速する戦いの中、カータは楽しそうに笑いかける。

どこか鼻につくようなこの嫌味な口調もユニゾンか何かの影響だろう。
さしたる相手にする事も無く夜天の魔導書は拳を返す。ぶつかり合った彼女の拳とカータの脚からは次第に強まる衝撃波が次々と迸る。

カータの言葉は半ば正解であった。
少しずつだが、夜天の魔導書はカータの動きを捉えられなくなっている。が、決して遅くなっている訳ではない。彼女が保有できる最大出力に至った訳ではないが、これ以上のスピードを出力出来なくなった。その為加速を続けるカータにはさも目の前の敵が遅くなっているように見えているのだ。

加えて、夜天の魔導書は先ほどカータに手痛い一撃を受けている。動きに差が出るのは自明の理であった。

「なんだかツマンナイ。少し趣向を変えようかしら。」

そう言うと、カータは拳を下げ直ぐ様距離を離す。それも尋常では無いスピードで。
その様をのんびり観察している暇は無い。なぜならそのままカータは片手を彼女に無造作に向ければ

「さあ、精々逃げ回ってね。姉サン？」

魔力の塊をそのまま吐き出すかの如く銀のビームを掌より吐き出した。
それも一本や二本では無く文字通り弾幕と呼ぶにふさわしい形で連射してくるのだ。

「ッ……！」

連射したのが魔力弾ならば時折防ぐ事は可能だ。
だが相手は魔力の塊とも言える威力の物だ。おいそれと防いでしまえばその途端生じた反動に動きを止められ全ての攻撃を耐えるしか無い。
流石の彼女も不可能ではないが、難しい事に変わりは無い。故に回避という選択を取らざるを得ない。
それを見越しての攻撃なのだろうが、彼女にはこの攻撃手段がよく理解出来なかった。
足留めならば魔力弾をそれこそ機関銃なように撃てばいい。
落とすつもりならば、こんな半端な魔力の塊を徒(いたずら)に放出せずとも最高の一撃を用意し此方に叩き込めば良い。
まあ後者の場合は生じる隙をどのように無くすかが問題で、それを考慮したうえでこの手段を選んだと言えなくも無いがいくらなんでもこれは魔力の無駄遣いだ。

が、それ以上の思考に至る事は出来なかった。如何せん攻撃の波が強すぎる。それこそ網の目を掻い潜るかの如く飛行し回避でもしなければ終わる。一撃でも食らってしまえば、そのまま連鎖的に攻撃を受け、墜とされる。
と、まああそこまで思考に耽れるほどな実力を持つ彼女も大概なのだが……。

ッ…埒が明かないな。そろそろ反撃に転じねば此方も……む!?

その刹那だった。
降り注ぐ銀の閃光の雨を切り裂くかの如く、一筋の桃色の閃光が貫く。

「な……！？……くぅっ！」

寸での所で回避方を変更し体を大きく捻る。両腕を振り子の如く回転させてそのまま回転し強引に飛行方向を変更しなんとか紙一重で回避する。

なるほど……。

致命的では無い物の当たればそれなりに深手を負うような魔力の雨。その中に本命の一撃を織り混ぜる事で完成するこの陣形。

これならば、あの局員のチャージの要る砲撃も意味を為してくる。…あの無数の攻撃ならば、私も局員に手は出せない。……が。この戦法は決定的な欠陥がある。

カータとなのはの連携攻撃の中、夜天の魔導書は静かに期を待った……。

ＳＩＤＥ　ＦＵＳＩＯＮ　ＣＡＴＡ

私となのはの合わせ攻撃を正に針の穴に糸を入れるかの精密さで回避していく。

そう来なくちゃ面白くない。そうでなければ私がツマラナクて死んじゃう。せっかく彼と一つになったのだから、もっと楽しまなきゃ。

「ほらほら！避けてばっかりじゃ勝てないわよ！それとも私の弱点でも見つけた！？」

声高らかに、普段の私じゃ出せないような口調、態度、表情で敵（姉サン）を挑発する。概貴の力なのか。概貴と一つになった事で奇跡なんて陳腐な物が起きたのか。当然前者でしょうけど。私は力を得た。でも、物足りない……。さっきも言ったけど、私の中に燻る力を全部吐き

出してしまいたい。だからさっきから馬鹿みたいに魔力を吐き出している。…訳じゃない。
これにだって明確な目的がある。……姉サンは多分気がついている、何かある。って、まあの様子じゃ何が在るか具体的な内容までは、思い至ってないようだけど。

そう、この戦い方、一見私が優勢に見えるけど、攻撃が全く当たって居ない時点で、私の負けはほぼ確定している。
何故か、単純明快。魔力が無くなるに決まっている。
だから姉サンは私の弾丸が尽きるまで回避を続けてる。……だけど、私の目的はその先。
魔力を全て吐き出す事に、意味がある。

（なのは、もう少しで無くなっちゃいそう。頃合い見て貴女の全力叩き込みなさい。）

（え？わ、解ったよ。カータちゃん…一体何を――）

（御託は要らないの。返事はハイかイエス、もしくはラジャー。いい？）

なのはの問いかけを封殺し、ため息をつく。…頭は良いのだから、もう少しスマートに考えられないのかしら。
まあ、いいわ。それだけ姉サンに気付かれてる可能性も低いって事でしょうし。

（は、はい……。ゆ、ユーノ君。そう言う訳だから、援護よろしくね…？）

（うん、解った。二人とも、いくら優勢でも油断しちゃ駄目だよ？）

（解ってるわよ。）（うん、ありがとう。）

念話の回線をここで切断する。そろそろ本当に魔力が枯渇する。
多分私の攻撃が僅かでも緩む気配を感じればあの人は間違いなく私――――いや、向こうで砲撃をチャージするなのはを狙って攻撃する。

ふふ、でもそんな事させない。魔力が枯渇した筈の私が蘇る……さながら不死鳥のように。
攻撃の手が緩む。それは私が意図的に緩めたのではなく、消費できる魔力が枯渇しかけたからだ。嫌な高揚感と脱力感がゾクリと体を襲う。でも、まあこれはこれで気分がいい。俗な言い方をすれば快楽というやつだろうか。

「ッ…！」

閑話休題。私の攻撃の手が弱まったこの瞬間、姉サンは一気に弾けた。予想通り私へ、ではなく現在一番厄介なのは目掛けて襲い掛かる。

「…が、駄目。」

「な…！？」

そうでも言ってしまいたいくらい、私は鮮やかに姉サンの動きを封じた。当然、肉体的ではなく、魔法的な意味で姉サンの動きを封殺する。どこにそんな魔力があったか？そんなの決まっている。
私が今まで散々攻撃して撒き散らした魔力がそこら辺に飛散しているのだ。それをかき集めて魔法として形にし、バインドで姉サンを

縛りつけた。両手、両足、胴体、それらを空中に縛り付ける。ここからだ、ここからが私の一番やりたかったこと。

「証明開始（プログラムスタート）」

「く…！」

何かを直感的に感じたのか、姉サンは急いでバインドを引き剥がそうともがく。

そんな程度で抜け出せちゃうような柔なプログラムなんて組んで無い。それこそ、そいつを全部壊そう物なら一分。ううん、もっとかかるでしょうね。いくら、ロストロギアである魔導書が解析したって。

「空気中の魔力素の位置、並びに濃度を把握。ゲイト、仕事なさい。」

『了解、変数をいくつか用意。提示された数値を代入いたします。』

両の掌に装着されたデバイスのコアが明滅し、私の問いかけに答える。口数が少ないのが珠に傷だけど、仕事はキチンとこなす。それが私の相棒。

「さっさと代入なさい。スフィア形成個数、スフィア固定座標、魔力圧縮率、射線角度、…後は適当に数値を指定なさい。」

『…タイミングの設定、爆風対策、代入完了致しました。』

「いい子ね、行くわよ。」

相変わらずの出来ぶりに思わず口許が綻ぶ。通常デバイスと使用者の関係は、使用者が計算を提示し、それをデバイスが演算処理をする。

だが、事此処に至っては話が変わる。プログラムを提示するだけの存在だった使用者である…つまり私が、演算を施す。通常、人間の演算速度はマシンであるデバイスのソレよりはるかに劣る。だけど今の私には関係無い。概貴との融合（フュージョン）で私の演算能力はこれでもかってほど強化されている。だからこそさっきの馬鹿みたいな魔力の塊の連射が可能だった。いつもの私にはあんな真似到底できない。瞳を閉じる。全神経を集中させて魔力の制御を行う。

「我が掌にて集え、頂点たる力。」

自分がばら撒いた魔力の残滓の位置…座標を総て把握する。スフィアの形成個数、スフィア固定座標、其の他諸々ゲイトが代入した変数の通りにプログラムを組み上げる。ゲイトは完全に補助に回り、計算領域の補強を施す。

「力よ、その刃を以ってして眼前たる敵を薙ぎ払え。」

掌を姉さんへ向ける。動けぬ彼女の周りにはいくつもの魔力スフィアが取り囲む。その数６つ、前後左右上下と十字架を刻むかのように完全とはいえないけど半ば包囲網状態を作り上げる。

「それを完遂することで、最強（ソレ）を証明せよ。」

向けた掌に力が自然に篭り、指を折りそのまま拳を作る。それがプログラムの段階での作用か、はたまた私自身の意思なのか。…瑣末な事ね。

拳に魔力が宿る。所謂トリガー、この魔力をスフィアに叩きつける

ことで魔法（プログラム）はき動する。

「Ｑ　Ｅ　Ｄ－証明完了－」

その名と共に拳から人差し指を立てそのまま姉サンへと突き立てる。
宿った魔力は私の動きを待っていたかのように弾け飛び六つのスフィアへと目にも留まらぬ速さで飛び交い衝突する。その瞬間だった。
総ての魔力が爆裂し爆音と共に姉サンを貫いたのは。

文字通り私の「全力にて最強」の一撃を撃ち放った。

第二十三話　無銘（後書き）

最強の刃を手に入れた少女は一時の、ほんの僅かな、彼女にとっては緩みですらない油断を抱く。
それが致命傷となる。深い闇に沈む、致命的な原因となる。

魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ
第二十四話　虚夢

第二十四話　虚夢　前編（前書き）

ふってーが、ふってーが、すすむくん。

すみませんなんでもありません。

気がついたらこんな深夜になってた。後悔も反省もしてない。
更新できるときに更新する。
では本編をどうぞ
恐らく二部構成になると思います

第二十四話　虚夢　前編

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

凄まじい閃光と爆音。彼女の技を最初に見たものはまずソレを思うだろう。原理はそう、高町なのはのすターライトブレイカーと全く同じ。収束砲撃のジャンルにカテゴライズされる代物だ。
大気中には魔力の残滓のような物、魔力素が存在する。通常魔導師はリンカーコアに魔力を貯蓄し、失った魔力を回復する際はその魔力素をリンカーコアが大気から取り込みコア内の魔力を回復させるのだ。
収束砲撃はその大気中にある魔力素をかき集めそれを収束させ砲撃として撃ち放つ魔法。自身の魔力以上の力を撃ち放てる魔法だが、その使用者は少ない。何故ならその収束砲撃魔法自体が内包する難易度は尋常では無いからだ。
なのは自身この魔法を体得するのにレイジングハートと幾度のシュミレートを重ねて漸く体得できた魔法。が、彼女が使ったのはこの魔力素を収束するスフィアを複数用意したことである。理論上、自身の体の総ての魔力を一度に体外に放出し、それをなおかつ魔法として形にし攻撃とするのは様々なデメリットが存在する。

一つ、単純に魔力の運用に時間がかかる。二つ、そも魔力とは一般人でいう体力に似た物があり、当然ながら一度に放出すれば人体に何かしらの影響が現れるのだ。三つ、前述の影響下にて放出した魔力を魔法として形にするのは中々難しい。以上のデメリットだ、今のカータならば一つ目、の課題はクリア可能だが、残り二つに関しては彼女も人間である。そのためクリアするのはまた難しい。
そこで彼女が考えたのは魔力を予め自身の体からその殆どを吐き出

した状態。すなわち大気中の魔力素の中に自身の総ての魔力が存在するならばまず第一の問題は解決する。第二の問題も、急激な魔力の消費を起こす事無く、意識を危うげにするなどの影響も少ない。第三の問題も当然ながら第二の問題が起こらなければ生じることは無い。

が、この彼女が用いた解決策も並大抵ならぬ演算能力があってこそのこと、通常の魔導師がデバイスのみの演算でこれと同じように魔法を用いようとすれば当然ながら一から自身のリンカーコアより魔力を少しずつ放出してくのとなんら変わりない時間がかかり、結果的に魔力を放出する手間を考えると通常の攻撃の倍以上の時間と手間が掛かる。そう考えればやはりこの攻撃方法は彼女だけの物。と考えられる。

「ハア…はあ…」

ほぼ総ての魔力を体外に吐き出したカータに最早戦う力は残ってはいない。さきほどまで在った余裕の態度は完全に消え、ただただ押し寄せる疲労に対し呼吸を乱し肩で息をする。が、表情には勝ち誇りの笑みが存在していた。

「な、なんて無茶苦茶な魔法だ…。」

「す、凄い…。」

言葉はユーノとなのはから、驚愕の理由は先ほど述べた通りだろう。ここに来て冷静な感想を述べることが出来るユーノも流石というべきか。

誰もがカータの勝利を疑わなかった。当然だ、そもあの強烈という言葉ですら形容しがたい威力を完全に直撃したのだ。あれで倒せなければどうやって倒せるというのだろうか。

「僅かに届かなかったな、カータ。」
「!?――――ッ…ハ…!」

爆煙より響いたのは倒したはずの敵の声、ソレが晴れるより先に闇の書の手がカータの首筋を捕らえた。
カータにそれを回避するだけの体力と気力は残っていない。為す術もなくカータは闇の書の腕に捉えれる。変化してから初めて見せた驚愕の表情を浮かべながら苦しげに敵の腕(かいな)から離れようともがくが、力の総てを吐き出した彼女にそんな力は残っていない。年相応の少女のそれに戻ってしまった彼女に為す術は、無い。

「終わりだ。我が内で眠れ。」
「!?」
ドクン
彼女の中で気味の悪い何かが脈動する。…さきほどカータが闇の書によって取り込まれかけた時と全く同じ感覚。
(ここまで、ね…。)
耐えようと思えば耐えられるだろうが、その選択をしなかった。なぜなら
「なのは。」
「カ、カータちゃん…。」
「後は任せるわ。きちんと助けなさいよね。」

既に刃を託せる友が彼女の目には映って居たからだ。

『吸収』

「ッ…。」

カータの意識は闇の書が携えるデバイスの電子音を最後に、そこで途切れた。

ＳＩＤＥ　ＮＡＮＯＨＡ

倒した。私達がみんなで戦っても勝てなかった、あの闇の書さんにたった一人で勝った。

そう思った。

あんな凄い攻撃を当てられたら誰だって思う。「勝った」って、だからさっきのカータちゃんを責められる人間なんて誰も居ないと思う。

『後は任せるわ。きちんと助けなさいよね。』

あの子の言葉が脳内で反芻する。

「うん、任せて。」

伝える為でなく、鼓舞の為に呟く。

「管理局員……いや、嘱託魔導師。残るはお前だけだ……。」

闇の書さんの赤い瞳が私を射抜く。どこかその表情は、泣きそうな女の子のそれだった。

「……闇の書さん……ううん、魔導書さん。貴女の名前は、なんて言うんですか？」

「……。」

「答えて、貴女が本当に全てに於いて狂った魔導書なら、答えられる筈だよ、闇の書だって。」

「……これ以上の問答は無用だ。私は唯一味方である妹すら、取り込んだ、今更誰の言葉を聞き入れる資格もつもりも無い。来い、お前を眠らし、私は全てを破滅に導く。」

迷いを、悲しみを振り払うように、彼女は私に敵意を向ける。答えたくない。そんな無意味な敵意に答えたくない。けど……。

「きちんと、救わないとね、カータちゃん！
ユーノ君、レイジングハート、行くよ……！全力、全開で！」

「うん！」『無論です。』

握り締めた愛機を向ける。泣いている魔導書を救う為に。
最後の決戦に、臨む為に！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

漆黒の空間。何も無い真っ暗闇の中八神はやては深いまどろみの中に居た。

（眠い…。）

浮かび上がるのはその感情だけ。僅かに視界に移る義妹の髪に似た銀の光が視界にゆれるまでは。

「カ…た…？」

その名を口にした途端、大事な義妹に総てを否定されたあの瞬間を思い出す。信じたくない。その感情だけが徐々に彼女の思考を支配していく。

「ならば、お眠りください。そうすれば、貴女は何も失わず。ただ安らかな夢を見ることができます。」

銀の髪を揺らす女性ははやてをまるで惑わすかのように呟く。…それは間違いだ、彼女ははやてを惑わすつもりは微塵も無い。ただ主が傷つかぬ為、彼女が最善だと思う手段を取っているだけだ。

「夢…？」

「そうです、貴女を否定したカータなんて居ない。安らかな夢の中へ、いつもの幸せな日常へ、夢の中へなら導く事ができます。」

それは夢、彼女には解っていた、そんな物見ても仕方がない。でも、あのカータから受けた得も知れぬ絶望感が彼女を再び襲う。こんな絶望がある現実なら…せめて…夢のほうが…。そう思ってしまう。

「…なら、もう少し寝ててもええ？後ちょっとだけ、見させて？夢を」

「はい。少しといわず…永遠に…お眠りください。我が主。」

永遠。それも悪く無いかなと、彼女らしくない思考が脳裏を過ぎるが、その思考が過ぎるコロには彼女は再び夢の中へ、温かい夢の中へ潜ってしまっていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

SIDE　CA…t…

目覚まし時計が鳴り響く。思わずソレを掌で引っぱたくように叩きそれを黙らせる。…すると今度は第二陣、枕元で充電ケーブルに繋がれた、最近買いなおしたスマートフォンのアプリがうるさいギターをかき鳴らす。目覚まし時計のように引っぱたいて叩き割るわけには行かないので、私を起こしに来たお姉ちゃんに引き渡した。

漸く、安眠が訪れる。もう一度眠りにつこうと布団を被り直そうと思ったその矢先

「わぁっ！！！」

耳元で先ほど携帯が鳴らした以上の音量が私の『耳元』で響き渡った。

「ふっふっふ、敵に刃を渡すなんてまだまだ甘いでぇ、カータ。」

寝ぼけ眼を擦りながら見上げた先には、どや顔でアラームが鳴らされ続ける携帯を持つお姉ちゃん事、神谷はやてが其処に居た。

「あ…うん、おはよ…。」

彼女が居てはもう私の要塞
ベッド
が陥落するのも時間の問題だ。仕方なく私は起き上がり時間を確認する。いつも通り7時、決して遅くは無い時刻だ。二度寝だって可能な時間だけどもう眠くないし何より相手がお姉ちゃんだ、彼女がいつまでも私をベッドに居座らせてくれることはない。

「早く降りてくるんやで、折角お母さんが朝ごはん作ってくれたんやから。」

はーい。と、生返事。私こと神谷カータは現在高校三年生。受験生な真っ只中である。現在寝ぼけ眼な理由も夜遅くまでペンをせかせかと動かしていた訳ではなく、単に私が朝に弱いというだけ。…勘違いしないで欲しいのは別に勉強をしてないわけでなく、単に夜遅くまでしてないというだけで…って誰に言い訳してるのやら

「おはよ…。」

「相変わらずね、あなたは、ほら早く座って食べなさい」

「うん…。」

降りてみれば変わらぬ風景。母さんは私をせかし、お姉ちゃんは黙々とご飯を食べ、父さんは朝早くに仕事に出かけているから、朝は

女だけの朝食だ。お姉ちゃんは既に椅子に座ってご飯を食べている。…はて、どうしてだろう。普通に座るお姉ちゃんの姿にどこか違和感を感じるのは。こう…なんか難病少女ですよー、な恰好でないとお姉ちゃんじゃな――いやいや、それこそ在り得ない。なんとかはほにゃにならないと言うじゃないか。

「……。」

「人の心を勝手に読んだくせに、笑顔で殺気送るの止めてくれない？」

「バカやってないで、ほら。ご飯冷めるよ？」

…うん、問題無い。いつも通りだ。誰でも偶にあるアレだ。いつも通りの日常が不意に違和感を感じるアレだ。うん、きっとそうだ。

「「いってきます。」」

「いってらっしゃい。」

朝食にかける時間２０分身だしなみに３０分。髪が長いだけにそれだけ朝は酷い事があるから多めに時間は用意してある。正直お姉ちゃんにそんなに時間はイラねえだろとか考えなくもないけどそんな事言ったらあることないこと既成事実を作られてなのはさんやフェイトさんに怖い目に合わされたらたまったもんじゃないから口が裂けても言わない。

と、まあそんなこんなで姉妹そろって行って来ますの挨拶。出発は同時だが方向は正反対だからそのまま私達は判れる。

「じゃあお姉ちゃん、気をつけて。」
「カータもな、ほな。」

…ずっと思ってたけどなんでお姉ちゃん京都弁なんだろうか。
お父さんはイギリス人だし、お母さんは関東出身。私の髪の色は特異体質のせいで銀なんだけど…

…なんだか今朝はよくわからない違和感を感じる日だ。
学校に到着する。時刻は8時20分。いつも通りだ。

「あ、カータおはよう。」
「うん、おはよう。それと後ろからセクハラしようとしてるそこの糞猫。それ以上近づいたら容赦なく裏拳を叩き込む。」

クラスメートの挨拶に答えながら後ろから近づく邪な気配に気づいて警告を出す。

「ほっほっほ、ばれちゃあ、仕方ない。その男を惑わす兵器を駆逐してやろうと思ったのに…」
「うるさいこのセクハラ女警察に突き出すぞ」
「相変わらずだねー」

セクハラ女…リエと攻防の展開に友達は楽しそうに笑う。…当たり前だ、そう何度もクラスの男達前に胸揉まれちゃたまったもんじゃない。
ただでさえ目立つ髪の視線に気になってんのに…。本人は私が恥ずかしがる様を楽しんでるようだけど…。

「ていうかアンタは隣のクラスでしょうが。」

「細かいことを気にしたら胸がしぼむと思う。」
「それじゃあ喜んで気にさせてもらいます。」

…やっぱり変わらない。学校では朝感じた違和感は全く感じられなか…ううん、なんか、なんか物足りなかった。別に特別な非日常が足りないとかそういうものじゃなくて、いつも在るはずの何かが欠けていた…気がする。けど、それもやっぱり杞憂だ。欠けてるはずの『者』なんて存在するはずないし、ここで親友が居なかったら、もっと混乱してたんだろうけど、やっぱり最近の受験勉強でどこか疲れてるだきっと。柄にもなく気張り過ぎたみたい。

キーンコーンカーンコーン
学校が終わる。みんな塾やら、課外授業やらそれぞれ受験勉強へと身支度をしだす。私はといえば、別に塾になんか行かなくたって勉強は出来るし、わざわざアベレージにあわせた授業スピードで展開される学校の延長で勉強する意味はない。要するに自宅勉強。そんな私が何をしてるかって言うと

「ヘイ、マイハニー！一緒に帰ろ――――じゅえる！？」

この馬鹿猫が来るのを待って居た訳だ。案の定出会い頭にセクハラまがいに飛びついて来たから、普通に回避した結果奴が壁に激突しただけだ…普通に美人なのに…勿体無い。

「馬鹿やってないで、さっさと帰るよ。」
「この世に神も仏も無いのか…いいじゃないか…少しくらい女体の神秘に触れたって…。」
「アンタが男だったら、その台詞に対して少しは気の利いた突っ込みもいれたかもね。」

およよと泣きまねをするリエを尻目にさっさと駐輪場へと向かう。
もうすぐ夏休み、三年生に成り立ての浮き足立ったみんなの雰囲気は消えて、殆どの生徒は完全に受験モードに入った。
こんなリエでも一応学年で上から数える位の学力でもある。…ほんと、この世に神も仏も無いと思う…。
まあ、良い目標が身近に居て私的には嬉しい事なんだけど。

「リエ期末どうだったよ。」
「9割安定余裕でした。ハッハッハ」
「相変わらずだね、私はぼちぼちかなー」

三年になってから私が親友の彼女に振れる話題は殆どが受験関連だ。
正直ほかの事に目を向ける余裕なんて無い。余裕なんて無いのに今日感じる違和感。ホントに迷惑だ、さっさと振り払えない物か。

「で、そんなカータはどんなお悩みをお持ちなのかなー？」
「…。」

そう、こんな風に他人を気遣う余裕なんて、私には無いのに。

「いつから気づいてた？」

「今朝私に一方的な脅しを掛けたとき。」

「一方的は余分だけど、どうして？」

「どこか安心してたように感じたから。」

恐ろしい位凄い奴。どんなときでもコイツは追い詰められる…なんてことは無いんじゃないだろうか。

「そっか…。」
「そうですよ。いつもなら、こう…般若の如くだね――」
「おっけい、じゃあ今度は閻魔くらいにでも変身してみるよ。」
「あ…あれで手加減してた…だと…？」

うーん、加減してたのがいけなかったのか、次は本気でこう…殺気辺りでも出してみようかな…？
自転車を進めながらそんな事を考える。

「で、何に困ってるの？お金以外だったら力になるけど。」

ふと、リエの声音が真剣になる。こうなった時の彼女に嘘偽りは通じない。
一度誤魔化したことがある。その時の顔は忘れられない。…あれ…どんな顔…だっけ…？思い…出せない…？

「どうかした？」

どうも不自然に呆けてたらしい、信号に止まったと共にじっと私を見つめてきた。

「ううん…じゃあ、聞いてもらおうかな。…今朝から感じてる変な違和感の事。」

私は話した。朝感じた朝食の光景の違和感。リエと馬鹿やってたときにも感じた違和感。ほんの僅かな違和感だけど、どれも私にとって一番大事な日常が歪んでいるように見えてしまったこと。
いつぞやのように泣いたりはしなかったけど、ひとしきり話し終えて少し楽になった。

「うーん、ごめん。折角話して貰ったのに、力になれそうにないなぁ…。」

「だから言ったでしょ、聞いてもらおうかなって。そうやって聞いてくれるだけで私は楽になるの。」

「うーん、ここで恩を着せておけば後々有効なカードになると思ったのに…。」

「その台詞さえなかったら本当に有効なカードになったのにね。」

お互いその言葉でケラケラ馬鹿みたいに笑って自転車を漕いだ。

「でもさ、その感覚って夢見てるみたいだよね。」

「夢？」

「夢ってさ、日常を再現されるんだけど、やっぱり自分の脳内の情報だけで作られてるから、やっぱり綻びが起きてくるじゃない？だから、どっかおかしいってのは解るんだけど、起きて後で思い直すまでは絶対に思いつかないんだよね、その違和感って。」

なるほど。

夕闇の空を眺めながら私は彼女の言葉にどこか納得していた。確かに夢なら、こういう感覚に陥ることは良くある事だ。

「…でも、今私と話してるリエは、現実のリエでしょ？」

「カータにとって、私が…この現実が本物じゃ、なかったら？」

「え…？」

彼女の言葉に思わずブレーキをかける。それに合わせて彼女も止まる。何秒止まり、何秒お互い沈黙したか解らない。絶句する私にリエは耐え切れなくなったかのように噴き出した。

「いやいや、ここ突っ込むところだから！相当参ってるみたいね、頑張りすぎたんじゃない？駄目だって、人間やりすぎは良くない良くない。私みたいに嫌なもんは適当に頑張るのが一番だって。」

「…そ、そうだよね。うん…。」

「まあ、疲れって自分じゃ解らないから、少しの間休んでみたら？私も変な事言って悪かったけど。」

変な事。そうで在って欲しいと願う自分と、そうで在っていいのか？と自問する自分が私の中に確かに存在した。

その後は、リエがなんとか馬鹿話に持ち込んでくれたおかげで、私はどうにか呆けることなく家に帰ることが出来た。とりあえず、この夢か現かよく解らない状態に陥ることは無かった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…？

第二十四話　虚夢　後編（前書き）

はっはぁ、もう二十五話もかきあがっちまったぜー。

俺の指先八本の動きがとまらねーついでに脳内再生される音楽もとまらねー。

ってわけで第二十四話。どうぞ

第二十四話　虚夢　後編

ＳＩＤＥ　ＦＡＴＥ

夢を見ていた。温かくて私がずっと欲しかった、遠い、文字通り夢幻のような時間。

リニスが居て、アルフが居て、アリシア、そして母さんがみんなが笑って暮らしている温かい時間。

でも、やっぱりコレは夢だ。現実はなのはやカータが闇の書の…あの女性と戦っている。

私とアルフだけがここで優しい夢を見てるわけには行かない。

夢は覚めるからこそ、夢なんだ。

「ねえ、アリシア。これは…夢、なんだよね…？」

この答えにたどり着けたからこそ、この問いを、夢の住民である彼女に問いただす事が出来た。

「そう…だね…。」

「母さんも、私には、あんなに優しく…してはくれなかった。」

「フェイト…。」

アルフが心配そうに見つめる。大丈夫と出来るだけ精一杯の笑みを送る。

「優しい人だったんだよ。優しかったから、壊れちゃったんだ。死

んじゃった私を、生き返らせる為に。」

アリシアの言葉に私は反論しない。だって、彼女は私の記憶の中にあるアリシアだから。

彼女が感じたことは、私も感じたことがある。だから、彼女の言葉が事実であることに異論は無い。

「でもさアリシア、アイツはなんだって、実の娘の生き写しに、あんな真似が出来たんだい？優しいなら…もっと…フェイトに…。」

「…そうだね…。でも、母さんは…フェイトを守ろうとしてたんじゃないかな…？」

予想外のアリシアの言葉にアルフはもちろん、私も首をかしげてアリシアの言葉を復唱した。

「守、る…？」

「うん、もし、ジュエルシードを集めたのが貴女の意思なら、貴女はもっと重い罪を着せられてた。でも、母さんがフェイトを奴隷の様に扱ってたら？フェイトが無理にジュエルシードを集めさせられてたと、他人に認識させていたら？」

「「あ…。」」

二人そろって呆けた声を上げる。アリシアの言葉は続く。私が考えるに至らなかった違った可能性へと

「だから、母さんは。私に似てるからこそ、私ではなかったからこそ、別の人生をフェイトに歩んで欲しかったんじゃないかな。優し

いから…自分を…犠牲にしてまで…。」

ね？とアリシアは私とアルフに笑いかける。

「でも、これだってただの推測。もっと言えば、フェイトの中の私が勝手に妄想した自意識過剰な曖昧な推察。」

「母さん…。」

ただの推測、妄想、それでも良かった。少しでも、母さんが私を思ってくれていた。その可能性があるだけで、救われた気がした。

「でもフェイト？ここに居れば、そんな推測になるかもしれない母さんも、夢の中ならいるよ？
ね？夢の中でもいいじゃない。ずっと一緒に、ここでなら、私は生きていられる。フェイトの、お姉さんで居られる。アルフと、リニスと、私と、そして母さんと。みんなと一緒に居られるんだよ…？」

フェイトが欲しかった幸せ。みんな、ここにあるよ？

そう、ここには私が欲しかった全てがある。でも、それでも…私は…

魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ　第二十四話
虚夢

ＳＩＤＥ　ＣＡ…

家に帰ってきた。お姉ちゃんと父さんはまだ帰ってないらしい。なんでもお姉ちゃんは、ゼミの研究で、父さんは緊急の会議が入ったとそれぞれの理由で、今日は遅くなるそうだ。

リエと別れてから、私は再びおかしな違和感に苛まれることとなった。違和感に加え、可笑しな既視感。以前も似たようなことがあったかのような。母さんにただいまと一言かけ自室に入り机に座るも、中々勉強に身が入らない。リエの言うとおり疲れてるのかもしれない。そう考えて、私は母さんの居る居間へと降りていった。

「あら、どうしたのカータ？勉強しなくていいの？」

「う、うん。なんか捗らなくて、飲み物でも飲もうかなって。お茶無い？」

「冷蔵庫で麦茶が冷えてるわよ。」

ありがと、と一言言いながら冷蔵庫を開く。

！？

また妙な既視感。それも、車椅子に座った幼きお姉ちゃんが見えた…気がした。

コップに茶色の液体を注ぎ。一気に飲み干す。

…冷たい。

「…母さん。」

「なあに？」

「家族みんなで撮った写真、ここに飾ってあったじゃない、片付けちゃったの？」

「何言ってるの、父さんが写真嫌いなのはアンタも知ってるでしょ、写真なんか撮ったことないじゃない。」

「じゃあ名前は？父さんの名前、母さんの名前でもいいの。」

「…突然どうしたの？変よ？突然名前なんか聞いて…」

私の中にふと過ぎった疑問。

「教えて。」

「……。」

純粋な疑問。私の、大切な両親の名前が、思い出せない。

「どうして何も言ってくれないの…？」

「……。」

『カータにとって、私が…この現実が本物じゃ、なかったら？』

親友が口走った言葉が脳裏に過ぎる。

「夢の住民、だから？」

「…何を言ってるの？」

母さんの声の調子が変わった。１オクターブ低くなる。

「だったら、名前。答えれるでしょ。貴女が、私の本当の母親なら。

――――答えられない理由、私には解るよ。」

「……言ってみなさい。」

気づきたくなかった。気づけてよかった。二つの思いが私の中でグルグル回り混乱しそうな心を持ちながら言葉を続ける。

「私が…母さんの…貴女の名前を、思い出せないから…。私の中でしか……情報は得られない……だから貴女は……名前が無いの。…貴女が…夢の住民だから…。」

まるで私が懺悔をしているかのよう…。それもそのはず、だって私はぽろぽろと泣きながら言葉を紡いでいるから。
夢と気づいてしまったことに後悔してるんじゃない。大好きな筈だった母さんの名を思い出せない事が悔しくて、泣いてるのだ。

【夢ってさ、日常を再現されるんだけど、やっぱり自分の脳内の情報だけで作られてるから、やっぱり綻びが起きてくるじゃない？だから、どっかおかしいってのは解るんだけど、起きて後で思い直すまでは絶対に思いつかないんだよね、その違和感って。】

「学校に居た友達も…私の記憶の中の友達…だから、名前を呼べなかった…。」

そう、今朝私にイの一番に挨拶してくれて、私とリエの関係を笑ってくれた友達。

彼女の名前も、思い出せない。

【…でも、今私と話してるリエは、現実のリエでしょ?】

「写真が無いのも…朝から父さんが居ないのも…私が父さんの顔を…思い出せないから…。」

朝一緒にご飯を食べられなかった父さん、写真嫌いだから写真を撮ってない父さん、顔も名前も…思い出せない…。

【カータにとって、私が…この現実が本物じゃ、なかったら?】

この世界は私にとって現実なんかじゃ、無かった。
本当の私は一度死んで、よく解らない生まれ変わりをし、八神はやてと一緒に暮らし、闇の書から現れた守護騎士というちょっと不思議な…血の繋がらない家族と暮らしている。八神、カータだ。

神谷カータなんて、存在しない。

「…ばれちゃったか。」

母さん、の役を演じていた女性は悪戯っぽく笑う。

「でもね、貴女の母親だってのは本当よ？私は貴女の記憶の通りに再現されてるから。本物（オリジナル）には劣るけど、間違いなく私は貴女の母親。私が出している声音も、抱きしめられたときの温かさも、叱咤した時の五月蝿さも、作ってくれる料理の味も、全部貴女が思っている通りの貴女の母親よ。」

「この家は、違うでしょ？だって、ここは八神はやてと私と、守護騎士達が住んでいる家。情けないなぁ、自分が住んでた家の事も忘れちゃうなんて。」

「仕方ないわ、貴女は次元の壁を通り越したんだから。」

…次元の壁？通り越した？

「…ちょっと待って、それよりなんで貴女は私の知らない事実を知ってるの？」

「嗚呼、これは貴女を取り込んだ魔導書の意思の推測よ。貴女を取り込んだとき、同時にこっちで貴女が体験した全ての事実も記録したから。」

この人が言うのはつまりこういうことだ。私が姉さんの中に取り込まれたときに、『夢』を作り上げるために私の記憶を読み上げたらしい。その時に姉さんは私が体験した転生に近いアレを自分なりに推測した。こういうことだ。

「そう、貴女は何度かこんな経験をしたわよね？自分が生前に暮らしていた世界での偉人や有名人がこっちではアニメなどの架空の人

物だった。…もちろん全員じゃないけど。逆もそう、貴女はあまりそっちの知識は無かったみたいだけど、たまたま歌番組で見たアニメのキャラクターが組んでいるバンドが、こっちでは現実の人達だった。貴女はこのときこう解釈した。私が居た世界と、ここは別の所謂異世界みたいな物だと。」

そう、だから私はもう元の世界に帰ることはできない。概貴君とはそのことで一悶着あったのは今でも覚えている。

「貴女は次元の壁を越えたの。それも管理局の戦艦がやってるような次元航空なんて目じゃないくらいのことを、ね。人間の体では無理があった。それこそ、生身で大気圏を突入するような物よ。だから貴女の精神は酷く損傷をした。八神はやてに感謝しなさい。あの子ほどあんなに甲斐甲斐しく世話をしてくれるお人よしな人そうは居ないわよ。」

「…つまり、私がその『壁』ってのを無理矢理超えたせいで、私自身、壊れちゃったってこと?」

「そう、だから貴女は大切な物をたくさん失った。心血注いだその格闘技が消えなかったのは不幸中の幸いっていうか、なんていうか…。」

…そんな物欲しくなかった。このまま母さんや父さんの名前や、大事な友達との思い出を引き換えに、力なんて要らなかった。

「でも、それが今の貴女の武器になってるわ、『今の大切な物』を守るための。過去を忘れろとは言わない。でも、大事なのは現在よ。過去なんて寂れて消えてしまうだけ。寂しいけどね。」

そこで笑う母さんの哀愁漂う顔は、私の中の母さんとしてか、彼女自身…私の本心が寂しいからか。

「でも、貴女が私の名前を忘れたことに悲しんでくれてたのは嬉しかったわ、ありがとう。」

「母…さん…。」

気がつくと私は母さんに抱きついていた。私の夢が生んだ偽者でもかまわない。私が生んだ妄想でもかまわない。
また会えた事が嬉しかった。彼女の腕の中で泣いた。それはもう盛大に泣いた。今まで無意識に溜め込んでいた物を全て吐き出すかのように。

「…落ち着いた?」

ひとしきり泣き、落ち着いた私の頭を撫でる。

「…うん…母さん、概貴君は…?」

「この夢の中に居るわ、家の前で待ってるわよ。あの魔導書にとってもなかなか手に負えなかったから、貴女がここまでたどり着くまで、記憶をちょっと亡くしてもらってたの」

その言葉を聞いて安心した。早く彼と一緒にここから出なければ、夢は覚めるから夢なのだ。

「ありがとう、じゃあ…母さん…行って来ます。」

「いってらっしゃい。頑張りなさいよ。…あ、最後に一つだけ貴女

に贈り物。」

そういうと、彼女は玄関にあるメモ帳にさらさらと何かを書いた。

「これ、持っていきなさい。」

誰かの名前が書かれたメモの切れ端「神谷恵美（かみやえみ）」と書かれていた。

「貴女が忘れたかけてた、本当の名前。持っていきなさい。亡くさないようにね。」

「うん、ありがとう。あ…私も、言い忘れてたことがあった…。」

渡されたメモを大事に折りたたんでポケットの中にしまう。

そうだ、私も言わなくてはならない。意味があるかどうかは差し置いて、ここやらねば、私は一生後悔する。

「…？」

「本物の代わりに、聞いて。…貴女より先立ってしまった親不孝な娘を、赦してください。」

「…早く行きなさい。私の可愛いエミ。」

背中を向ける。もう迷いは無かった。振り返ることなく、家から飛び出す。

「おかえり。」

そこには彼が何も言わず、ただ一言だけ告げ、笑顔で手を差し出し

て待っていた。

「うん、ただいま。…帰ろう、現実へ…！」

差し出された手を掴み、もう一度彼と一つになる。

「良い夢を見させてもらったわ、御礼に、貴女を救ってあげる。」

黒い髪をなびかせ、構えを取る。そのまま拳を虚空に突き出し、私は夢(げんじつ)を、叩き壊した。

第二十四話　虚夢　後編（後書き）

カータが放ったＱＥＤに関しては結構捏造設定が多いです。
何か突っ込みをしてくださる方が居たら是非お願いします。自分もＳｔＳに向けて知識をかき集めねばならないので。
以下次回予告

夜天の主が真に目覚める。
そして聖夜の夜、幾度の悲しみを背負い続けた哀れな魔導書に名が贈られる。
魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ
祝福

第二十五話　祝福（前書き）

活動報告にもかきましたが、ＰＶが六万を超えました。これも読んでくださる読者のみなさまのおかげです。

では、本編をどうぞ。

第二十五話　祝福

ＳＩＤＥ　ＨＡＹＡＴＥ

夢を、見ていた。

ヴィータが居て、シャマルが居て、シグナムが居て、カータ居て……この銀髪の姉ちゃんは誰やろか。

みんなで一緒にご飯を食べる。買い物に行く。テレビを見る。……取り上げればそれこそ無数にある、ありきたりな日常の小さなパーツ。

それでも……そんなありきたりな日常が私には宝物だ。

お父さんとお母さんを亡くし、足が動かぬ病になり、きっと一人寂しく死ぬのだ、と

そんな事を思ってた私に、神様がくれた奇跡な時間。

彼女は言った。夢は永遠に覚める事なんて無い。覚めなければ夢は現実となる。

違う、覚めるから夢だ。覚めない夢は夢ではなく、それは逃避。嫌な現実から目を背けるだけの現象逃避だ。

……でもそれでいい。

現実に戻れば死ぬだけだ、最早あっちには大切な物は残って無い。

私が死ねば、闇の書に宿る守護騎士達も消える。カータも、私を否定して消えてしまった。

向こうに何が在るというのか、だったら、ここで醒めぬ夢を見続け

よう。永遠に……。

「ホントにバカね。私が貴女にそんな事言うわけないでしょう？」

……え？

聞き覚えがある声、誰かに似て、それでいて別人。

それが誰かとわかる前に私は夢の中から引きずりあげられた。

次に私が微睡みに戻ったその瞬間と、頬っぺたに強烈な一発が叩かれるのはほぼ同時の出来事だった。

「いったー！？」

当然ながら微睡みなんて物は荷物を纏めてお国に帰らせて戴いちゃう勢いで何処かに消えてしまった。

「目が醒めた？馬鹿姉貴。」

「カー…タ…？」

視界に映ったのは、それはもう綺麗な長く、黒い髪、これこそ大和撫子！な髪を持つ、カータ……だった……？

「なんで疑問符なのよ。」

「え…だって、え……？」

私の反応にまだ寝ぼけて居ると考えたか、カータは無言で掌を振りかぶり、僅かに赤い私の頬っぺた目掛け。

「いえ、十分目は醒めて居るでありますカータ様！」

2度目のビンタは私に当たる事無く寸止めされた。

「全く、システムを掻い潜って必死に助けに来たのが馬鹿みたいだわ。それにしても、あの糞猫姉妹……どうして呉れようかしら……。」

呆れたようにため息をつくカータは、まるで別人だった。

……言葉遣いがアリサちゃんみたいや。

何て考えているとカータが私を優しく抱き締めて来た。

「何はともあれ……姉さん、助けに来たわ。ごめんね、余分な絶望を見せて。要らないだなんて言って、ごめんね。もう何処にも行かないから。だから赦して姉さん。」

「……暖かい。」

声に出せたのは、それだけ。

後は声にならぬ嗚咽と、泣き声と、大粒の涙しか出なかった。

……何も失ってない。

あの怖いカータは私にとって本当に悪夢だったみたいや。

カータ自身が、悪夢から目覚めさせてくれた。

その安心から私彼女に抱かれながら泣いた。大声で泣い――――

「五月蝿い！」

「酷いな！？」

「そのやり取りはもう私がやったわ、貴女は静かに泣きなさい。」

なんとも理不尽な理由。
が、そんなやり取りで私はようやくこの訳解らん不思議空間で現実に戻って来れた気が――――

「ここどこや？」

「ここは――――」

「嗚呼、起きてしまわれたのですね、我が主。」

問いかけにカータが答える事は無く、代わりに先ほどの夢に出てきた銀髪の姉ちゃんが現れた。

「私の大事な家族に、下らない夢を見せないで頂戴？姉さん？」

「姉さん？」

カータが銀髪の姉ちゃんに言った一つの単語が気になる。
姉さん、という事は……。

「貴女が闇の……夜天の魔導書か？」

「はい。お初にお目にかかります。我が主、私こそが夜天の魔導書に宿る管制人格です。」

やっぱり。このイタイケな優しそうな姉ちゃんが夜天の魔導書。

完全な覚醒と同時にこの子の真の名が解った。
夜天の魔導書。そして私が、今代の夜天の主。

「そ、本当の名前が無い哀れな一冊の魔導書。紹介文が足りないんじゃない？姉さん。」

「言うなカータ。私に名など必要無い。目覚めれば全てを破壊する私に、名など不要だ。」

目覚めればって……じゃあ今の私の体は……！

「安心して、今は局員が必死になって戦ってる。はやて姉さん。この人が完全におかしくなる前に、貴女が制御して。今の姉さんになら、出来る筈よ。」

「無理だ……。自動防御プログラムが止まらない。最早制御を離れつつある……。」

二人の言葉の意味を完全に理解する事はできなかったが、つまり私がこの子を制御すれば良いのだろうか。

「止まって……。」

足元に銀の魔方陣が現れた。三角形と角に隣接する円。出来る…今のマスターは私なんや、こんな優しそうな子がマスターの言う事を聞かへんなんてことありえへん。

「…！？」

システムに介入できた…！これで外にいる管理局の人に…。

「外の方。管理局の方！…えと…そこに子の保護者、八神はやてで

す。」

『はやてちゃん!?』

「なのはちゃん!?ホンマに!?…だ、だってカータは一言もそんなこと…」

バッと視線を送る。カータは意地悪い笑いを浮かべクスクスと笑いを堪えている。…後でお仕置きやな。

『カータちゃんも居るの!?…とりあえず、いろいろあって、闇の書さんと戦ってるの。』

「ごめん、なのはちゃん。なんとかその子止めてあげてくれる?魔導書本体からコントロールを切り離したけど、その子が居ると、管理者権限が使えへん。今そっち出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから。」

『……?』

なのはちゃんから?混じりの困惑な様子しか伝わってこない。…どうした物か。すると、別の男の子の声が聞こえてきた。

『なのは!…今からいう事をなのはができれば、はやてちゃんもフェイトも、カータも助かるかもしれない!…どんな方法でもいい、目の前の子を、魔力ダメージでぶっ飛ばして!…全力全開…手加減無しで!』

「流石ユーノ。聡明。アレが出てると私も出られないからコマってたのよね。」

『うん！解りやすい！…エクセリオンバスター、バレル展開！…中距離砲撃モード。』

なのはちゃんが戦ってくれてる。今私がすべきことは…

「…おいで。」

管制人格を呼びかける。カータが背中を押し、ゆっくりと歩み寄り膝をつく。

その頬に両手を添える。魔方陣が一層強く輝いた。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る。

強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール。――――リィンフォース。」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

姉さんの魔方陣が白く輝き光に満ち、私達の視界を白く包んだ。

私もここから出なければならない。

「さて、概貴、ゲイト、私達も行くわよ。ゲイト、魔力回復度は？」

『およそ６０％ほどです。』

「上等。概貴、なのはが防御プログラムの撃破と同時に結界破壊プログラムを展開。」

『うん、任せて。』

姉さん達の傍らで魔力を練り上げる。

狙うは完全な結界の破壊。

ここに来るまでに、概貴と編み出した結界破壊に重点をおいた高威力の短距離砲撃。

自身の右腕に高密度の魔力を編みこんでいく。纏った魔力を全て拳に集中させ対象にたたきつけ一気に魔力を放出する気功波動（ターストル・バースト）の応用

「気功突破（ブレイク・ターストル）。カウントダウン。スリー」

『ｔｗｏ』

『ワン。』

「はあああああああ！」

拳を突き出す。何かにぶつかった手ごたえと同時に目の前の空間にヒビが入る。

先ほど夢を壊したときとはまた違う感触と共に私と姉さん達を包む結界空間は粉々に砕け散った。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

なのはのエクセリオンバスターが防御プログラムを撃ち貫いた閃光が途絶える。

と、其処にはフェイトとアルフ、ついでにカータと闇の書に囚われていた面々がかえってきていた。

「フェイトちゃん！アルフさん！カータちゃん！」

安心しきった表情でなのは三人に近寄る。が、それもつかの間。

『みんな！気をつけて！闇の書の反応どんどん強くなってる！』

エイミィの言葉と共に海から現れたのは、正に闇そのものと呼べる黒い淀み。淀みは大きくなりありえぬサイズに拡大していった。その手前にある小さな銀の光は八神はやての物だろう。

『その淀みが暴走が始まる場所になる。クロノくんが到着するまで、無闇に近づいちゃだめだよ！』

――――――――――――――――――――――――――――――――

はやては夜天の魔導書に起きている数々のエラーを出来うる範囲で修正していた。

魔導書の管理者権限の修正、自身のリンカーコアからの魔力使用権利、暴走までの遅延妨害、守護騎士達の破損修復。

夜天の書への決定的な修復とまではいかないが、守護騎士達の完全な復旧は成功した。

もう何も怖くない。自分には守護騎士達と、悪夢から引きずり上げてくれた心強い妹がいる。

『暴走に対し、数分程度ですが、割り込みをかけ遅延処置を施しました。』

「それだけあったら十分や。…リンカーコア送還。修復した守護騎

士システムを復旧した後に再起動。」

彼女の言葉と共に、彼女の周りを守るように囲う４つのリンカーコアが光り輝く。

「おいで…私の騎士達。」

全ての起動処置を終え。システムの再起動をかける。
彼女を包んでいた光がより一層輝き、視界を覆うほどの閃光となる。

「我ら、夜天の主のもとに集いし騎士」
「主ある限り、我らの魂尽きることなし」
「この身に命ある限り、我らは御身のもとにあり」
「我らの主、夜天の王、八神はやての名の許に」

大事な騎士…家族の声が聞こえる。私も行こう。
決意と共にはやての口が再び開く。

「リインフォース。私の杖と、甲冑を。」
『はい。』

装着された甲冑。取り出された金の杖を掴み、彼女は蒼碧の瞳を見開いた。
ソレと共に彼女は本当の意味で、夜天の王。リインフォースの真の担い手となった。
砕け散るように彼女を覆う光は消え去る。

「はやてちゃん！」
「遅い…。」

なのはとカータの声に笑顔で答える。
それと共に杖を掲げ紡ぐべき最後の言葉を口にする。

「夜天の光よ。我が手に集え。祝福の風、リインフォース。セット…アップ！」

杖は答えた。黒き閃光を閃かせ彼女に甲冑と、漆黒の翼、妹と同じ白銀の髪を授ける。
同時に到着するクロノ。その夜天の王の真の覚醒をただ静かに眼下にて見届けていた。

「「「「…。」」」」

守護騎士達は気まずそうにはやてから視線をそむける。
それもそうだ。彼女に大仰な口を叩いて、大失態。その上彼女はほぼ自分の力で立ち直った。
どの面を下げて彼女に口を開けというのか。

「何してるのみんな、おかえり、でしょ？姉さんに。」

その沈黙を破ったのはカータ。彼女の容姿に僅かながら驚きを見せるが、それ以上に彼女に一本とられたかのような気持ちの方が大きかったか、言葉を失う。

「…せやな、ただいま。そしておかえり、みんな。」

「は、はやて…。」

「ん？」

ヴィータの確認するような声。本当にはやてか、夢幻でもみているかのようなそんな彼女にはやてはいつもどおり笑顔で答える。

「はやて！…はやて…！はやて…！」

感極まったヴィータはそのまま彼女に抱きつく。夢の中でのカータのように、彼女もこのために戦ってきたのだ。
大事な主を、助ける為に。

「なのはちゃんとフェイトちゃんも、ごめんな。うちの子たちが迷惑をかけてもうて。」

「ううん。」「平気。」

腕の中で泣くヴィータの頭を撫でながら、はやては口を開く。…その姿はカータから見ては、どう考えても齢１０前後の子供とは思えなかったという。

「すまないな、水を差してしまうんだが、時空管理局執務官。クロノ・ハラオウンだ。時間が無いから手短に話す。」

見守るに徹していたクロノがようやく動き出した。再開や、喜びに沸く面々に真剣そのものの表情で続ける。

「あそこにある黒い淀み、闇の書の暴走プログラムが、後数分で暴走する。僕らはそれをなんらかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある。」

クロノが話すプランは次の通りだった。

まず一つ。グレアム提督から受け継いだ、氷結の杖デュランダルの強力な氷結の魔法で氷付けにし機能を停止させる。

二つ。宇宙にて大気しているアースラが装備する協力な魔導砲、アルカンシェルで防衛プログラムを撃ち抜く。

「…一つ目は多分難しいと思います。主の無いプログラムは、魔力の塊みたいな物ですから」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん。」

これにて第一のデュランダルのプランはＮＧ。続くアルカンシェルにて防衛プログラムを消滅させるプランは

「絶対ダメ！こんなとこで、んなもん撃ったら、はやての家まで吹っ飛んじゃうじゃんか！」

「聞き捨てならないわね、却下却下。せっかくみんな助かったのに揃ってホームレスなんてごめんだわ。」

ヴィータとカータの意見にて早々にＮＧ。

カータのこの口調に守護騎士達はようやくカータが何かしら変身状態をしていることに気がつく。

「カータ、お前、何かと融合でもしたのか…？」

「……ちょっとね。」

シグナムの問いに深く答えようとしないカータ。クロノは更に続けた。

「君たちの言い分も解る。だが、あれの暴走が本格的に始まれば被

害は更に大きくなる。そうだな？ユーノ。」

「うん、暴走が始まれば、触れた物を侵食して、無限に広がる。全次元世界が飲み込まれるという自体にだって…なりかねない。」

『みんな！暴走臨界点まで、後１５分切ったよ！解決策の決断は、お早めに！』

エイミィの報告が響く。急がなければならない事は皆重々理解している。だが、どちらも選ぶに選べない解決作であるため、そう易々と首を縦に振ることはできない。

クロノが解決策を煽るが皆黙ってしまった。そもそも守護騎士達は暴走に立ち会った事は無い。他の面々にいたってはそもそも知識が及ばない。万事休す。そんな空気が流れる中、苛立たしげにカータが口を開いた。

「…クロノ、どういうつもり？私が以前話したことにまるで触れてないんだけど…？」

防衛プログラム暴走まで残り僅か…。

第二十五話　祝福（後書き）

さて、とりあえず予約投稿です。
つぎは二日後の投稿となります。ああ、間違えて次の投稿を即効投稿にして順番を狂わせてしまわないように…

最期の決戦が迫る。

「終わりよ！姉さん！なのは！フェイト！」

勇者の声が木霊する。光ある明日へ向けて。

魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ

終焉

第二十六話　終焉（前書き）

実家に帰るので、これ移行はしばらく携帯執筆。だから少し遅くなります。

では、本編をどうぞ。

ついに防衛プログラムとの決戦です。

第二十六話　終焉

カータの問いただす言葉がクロノを射抜く・

「もう一つ…良いプランがあるじゃない。」

八神カータが口を開いた。

「私のクロック・アウトで…あの暴走プログラムを消去する。」

その口からは衝撃的な言葉が出てきた。確かに彼女の能力ならば、あの魔力の塊を無力化させることは可能かもしれない。

「代償は…私の半身くらいは持ってくんじゃないかしら。ああ、だったら下半身にして欲しいわ、上半身だったら即死だもんね。」

一人なぜか楽しそうな笑いを浮かべている様は、どう見ても自嘲的な態度だ。

そもそも彼女の能力は『彼女が計算できる範囲内』ならではの可能な業なのだ。

それを超えればデバイスの制御を通り越して、自動的にクロック・オーバーが発動し、彼女に劇的な計算能力を与えると同時にその与えた計算能力に相応した代償を要求される。

あの、この街を丸ごと簡単に吹き飛ばせそうな魔力の塊を無力化させるレベルになれば、どこかしら障害が残るどころでは済まない、むしろ彼女の命だけで支払いきれるかどうかすら怪しい。

「で、クロノ当然これを無視した理由。聞かせてくれるんでしょうね…？」

「どうもこうも、言うまでも無――――「ええわけ無いやろ！そんなプラン！」…。」

はやての張り裂けるような叱咤の声が響き渡る。予想してたのかカータはため息をつきながら肩を竦める。

「あんまりにツマラナイ内容なら聞き流すわよ？姉さん。後１０分有るか無いか、下らない事で討論してる暇は無いの。」

「もし仮に、カータがアレを消せても…カータが無事じゃないなら、意味無い…。みんなで笑顔で、明日迎える為に頑張ってきた…ちゃうか…！？」

肩を掴む。済ました顔のカータと対照的にはやては珍しく激情を顕わにして妹を諭そうとする。が

「何を言うかと思ったら、それじゃあ私が死ぬか、植物になるかの前提扱いじゃない。馬鹿にしないで。私は今このメンバーの中で最強よ？今なら、なのは。貴女のスターライトブレイカーだって鼻歌歌いながら跳ね返せるわ。」

「……。」

なのは無反応。いや、発言に呆れてしまっている。と、まあ彼女は今のカータの能力を解っているから、否定する要素が無いのだが。

「そもそも、あの程度で半身持ってかれちゃう…これだってそもそもみんなの気を悪くしないために謙遜しただけなのに、姉さんったら失礼しちゃうわ。」

「でも…！」

彼女は本心から言っているのだろう。決して姉を黙らせるために誤魔化しているわけではない。

だが、はやては食い下がる。その様子についにカータの琴線が切れた。

「それしかないじゃない！じゃあどうするの、言ってごらんなさい！クロノが持ったあの紙っぺらな杖に頼るの？それともアルカンシェルでみんな仲良く吹き飛ぶ？現実を見なさい！こんな小娘一人が片腕、片目一つを失って世界に何か影響がある？せいぜい医療機関が儲かる程度。前者二つを選んでみなさい。確実に、もっと貴女みたいに悲しみを抱く人間は無数に増えていくの！小学生でもわかる足し算引き算よ！何に問題が――」

「カータ、ストップ。」

今まで口を開かなかったフェイトが、口を開いた。

「何？フェイト。姉さんみたいな間の抜けた発言したら張り倒すわよ？」

「カータ、ロッテに言ったよね。大の為に小を切り捨てるやり方は私は大嫌いだって…。カータ、今君がやろうとしてることは、正にそれだよ？…いいの？カータ自身が大嫌いな【汚い大人】と同じになっちゃうよ…？それで…いいの…？」

ダメとは言わない。ただフェイトは問うた。…それでいいのか？自身の信念を曲げてまでもいいのかと。

「僕にも言ったな。誰かと誰かを天秤にかけるやり方は気に食わないと、もし君がそのプランを実行すると聞かないのなら、僕は君の事を過大評価しすぎてたみたいだ。詭弁を振るうだけ矮小な人間、そう評価を改めないとな。」

「……。痛いとこ、つかれちゃった。」

カータ自身、自らが発していた言葉が失言であったことに漸く気がつく。

そう、いくら自分を犠牲にし、世界の危機を救う勇者であっても、勇者にとって一番大事な人間が悲しんでは何の意味も無い。

確かに世界から見れば勇者は偉大だろう。『命を賭してこの世を守った。』

だが、肝心の勇者はそれでは何も救われていない。少なくとも、勇者に残された遺族は間違いなく不幸になる。

そんな単純な事をこの非常事態に忘れていた。

「つまらない事口走ってた馬鹿な娘は、私だったみたい。」

自嘲気味にカータは笑う。引き下がったカータにはやてはようやく安堵のため息をついた。

「でもどうするの？時間はあとわずか。だったら、前者二つ、もしくはもっと有効なカードを誰かが引き当てるのを待つしかない。…どっちにしたって選ばないといけない。」

そう、根本的な物がまだ何も解決してはいないのだ。カータの言うとおり結局は選ばなければならない。町を犠牲にするか、世界を犠

牲にするか。

「…あああもう、めんどくさいねぇ！もういっそのことみんなでずばっとやっちゃえばいいんじゃないの？」

「あ、アルフ…これはそんなに単純な話じゃ――――」

全く解決策にもならないような発言。が、ここでなのは達にある閃き。アルフの発言による刃で開いた、暗闇から漏れた僅かな…針の先にも満たないような小さな光が灯る。

「く、クロノくん！アルカンシェルってどこでも撃てるの！？」

「…なるほど、なのは冴えてるわね。やっぱり。」

「そうか…ここにアルカンシェルを撃たなければいいんだ。」

「おお、なるほどなー頭ええなーなのはちゃん。」

なのは、フェイト、はやて、カータ勝手に４人で納得する。が、肝心の問いかけられたクロノは全く理解していない。

「ど、どこでもって…例えば…？」

「アースラが待機してる、軌道上、つまり、宇宙空間…。それくらい察しなさい。お間抜けクロノ執務官さま？」

ニッコリと皮肉たっぷりの笑顔のカータからの素敵なお言葉。

事実が事実なだけに、クロノは返す言葉も無い。

『管理局のテクノロジー、舐めてもらっちゃー困りますなー…。撃てますよ…宇宙だろうが…どこだろうが！』

「ま、まさか…！」

そう、なのは達の考えるプランはこれだ。
防衛プログラムが張るバリアは魔力と物理の複合四層式。それを全員の総攻撃にて破る。
バリアが消えた後、再度バリアが生成される前になのは、フェイト、はやて、カータの４人の一斉砲撃でコアを露出。
その露出したコアをシャマル、ユーノ、アルフによる転送魔法で、軌道上に待機するアースラ前に転送しそれをアルカンシェルにて撃ち貫く。そして蒸発。
成功すればこれがベスト。アルカンシェルによる空間歪曲被害も最小限どころか、全く無いという事も考えられる。

（提督、見えますか…？）
『嗚呼、よく見えるよ。』
（闇の書は呪われた魔導書…いえ、呪われた魔導書でした。その呪いはいくつもの人生を食らいソレに関わった多くの人の人生を狂わせてきました。…アレのおかげで、僕も母さんも、他の多くの被害者遺族もこんなはずじゃない人生を、進まなきゃならなくなった。…それはきっと、貴方も、リーゼ達も…）

「なくしてしまった過去は…変えることはできない。」

言葉と共にデュランダルが起動する

『ｓｔａｎｄ　ｕｐ』

「だから、今を戦って、未来を変えます！」

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

…さて、何を使おうかしら。

『とはいっても、カータちゃんの所持する遠距離から攻撃できる魔法は一つ。』

『ええ、気功波動（タートル・バースト）、先ほどはなった魔法は、魔力素をもっと大気にばらまかねばなりません。』

そうね、じゃあまあ…原点回帰。私の最初の攻撃魔法でアレに引導を渡してやりましょうか…！

「カータ、なのはちゃん、フェイトちゃん」

不意に姉さんの声が聞こえた。

「シャマル。」

ああ、なるほど。なのはさんはぼろぼろ。フェイトさんと私もかなり魔力を消耗している。

シャマル姉さんの治療ってわけ。

「はい、みんなの治療ですね。…クラールヴィント本領発揮よ。」

『了解』

「静かなる風よ癒しの恵みを運んで…！」

指輪の形のクラールヴィントに口付けをする。んーなるほど、ああいう詠唱行為も有りかな。今度やってみ────

『全力でご遠慮いたします』

…我がデバイスながらつれないの。

なのはは受けたダメージと魔力の回復を、私とフェイトは失った魔力の補填を姉さんから受ける。流石湖の騎士。この方面では一生敵いそうにないわ。

「湖の騎士シャマルと、風のリング、クラールヴィント…癒しと補助が本領です。」

「凄いです。」

「ありがとうございます。シャマルさん。」

「ありがとう、姉さん。」

これで最強の一撃を繰り出せる。これだけ有ればフルチャージの更に上、１２０％のチャージを数発は撃てる。

ドドドドドドドドドドドドドドドド

ドドドドドドドドド

嫌な気配が濃密になっていく。どうやら始まるみたいね。最後の決戦が。

『ゲイト、概貴。演算式の準備、一発撃った後、速やかに第二撃に移行できるよう準備なさい。』

『うん、任せて。』

『了解です。』

「始まる…。」

クロノの呟きを待っていたかのように黒い淀みは大きな球体となって海面から浮き上がる。それが割れると、なんとも言葉では形容しがたい、要塞ともいえるようなその見た目の中央には本体の顕現であろう女性の形をしたモノが雄叫びのようなものを上げている。

「チェーンバインド！」
「ストラグルバインド！」

まずはユーノとアルフが先陣を切る。放たれるバリケードの役割を果たす触手のような物をバインドで括り上げそれを引きちぎる。

「縛れ…！鋼の楔…！ぃやぁあ！！」

次に兄さん、放たれたバインドによる一撃はさながら鞭の如く残骸をまとめて切り払った。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！」

痛みからか、それとも自身の体を刻まれた怒りからか、雄叫びは更に甲高く響き渡る。

「気功波動（タートル・バースト）、チャージ開始。」

腰を低く構える。そのまま腰元で掌を対象に向かい合わせ魔力を集中させる。籠められるだけの魔力を私の出番が回るまで、ありったけ圧縮する。

次はヴィータとなのはだ。
「ちゃんとあわせろよ！高町、なのは！」
「ヴィータちゃんもね！」

お互いがお互いを鼓舞するような掛け声…あの二人、なんだかんだ言ってけっこう良いコンビなのかも。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄(くろがね)の伯爵、グラーフアイゼン！」

言葉と共にカートリッジがリロードされる。やっぱり最大出力か。ゲイトには変形して能力をブーストするような物は備わっていない。必然的にこのグローブが常の戦闘フォルムとなっている。から彼女のようにころころフォームが変る事はない。

『ギガントフォーム』

「豪天…爆砕…！」

振り上げた鉄槌は大きく、更に大きくなる。自身の身の丈を軽く凌駕する槌となる。…初めてみる、あれが彼女の本気の一撃。

「ギガント…シュラアアアアアク！！！」

風切り音などという生易しい物ではない、文字通り風を叩き潰すかのような勢いで烈風を巻き起こしながら防衛プログラムを守る物理のバリアを叩き潰す。

「チャージカウント…２５…。」

「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン…いきます…！」

なのはも杖を振り上げると同時にカートリッジを数発リロードする。杖の先に桃色の魔力で出来た翼を展開させる。さきほどの自動プログラムを止めた、あの一撃を放つのか。直感的にそう感じた。

「エクセリオン…バスタアアアアアアアアアア！」

なのはの気合の篭る声に反応してか、次はやられまいと、防衛プログラムは触手を伸ばしなのはに襲い掛かる。

『Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ』

が、通用せず。近寄る触手はレイジングハートより放たれた風圧と衝撃波が篭ったバインド砲撃が、触手を全く寄せ付けず一網打尽に蹴散らす。

ここからが本命。

「ブレイク…シューット！！！」

杖の先に魔力が圧縮される、そのまま目標を撃ち抜かんと四つの閃光が刃となって魔力バリアへと突き刺さる。バリアは為す術も無く粉々に砕ける。

「カウント５０」

みんな中々やるじゃない。こっちも、気合が入ってきちゃう。

「次、シグナム！テスタロッサちゃん！」

無言の了承を出し、シグナム姉さんが剣を静かに振り上げる。

「剣の魂、シグナムが魂…炎の魔剣…レヴァンティン…。刃と連結刃に続く、もう一つの姿を…！」

カートリッジが吐き出される。そして鞘を徐に手に取ると、それを柄と一つに結合させる。

『ボーゲンフォルム』

現れたのは大型の弓。大型弓（ボーゲン）の名の通りの姿…。アレが姉さんのトッテオキってやつかしら。

足元の魔法陣から烈火が吹き荒れる。

ギリギリと弓が引き絞られ、魔力が矢へと充填されていく。凄まじい魔力が吹き荒れ炎と風が巻き起こる。

「駆けよ…！…隼！」

『シュツルム・ファルケン！』

その名が紡がれると同時に矢は射出。目にも留まらぬ…目にも映らぬ速さで物理バリアを問答無用で撃ち貫く。爆発と共にバリアを砕く。

「チャージ完了…引き続きアペンドチャージに移行。」
いつでもあれに攻撃を叩き込める。…まだ足りない。アレに致命的な隙を与えるためにはもっと威力が必要だ。

「フェイト・テスタロッサ、バルディッシュ・ザンバー…行きます…！」

「…ハァッ！！」

巨大な剣…嗚呼、『斬馬刀』かしら、アレは。まあカタカナってことは全く関係ないでしょうけど。
勢いをつけて一回転、更に回転しそのまま風圧を撃つ放つかの如く衝撃波を放つ。

もはやそんな衝撃波にすら抵抗する術はアレに残されてはいない。
衝撃波をもろに受け完全に動きを停止する。…その停止がアレの命取りとなった。

「撃ちぬけ…！雷神…！」

『ジェット・ザンバー』

それと共に刃を振り下ろす。雷を纏った正に雷神の一撃は神罰とでも言いたいのか刃を標的に伸ばし。最後に残ったバリア毎本体を袈裟に切り裂く。

「アペンドチャージ…２００％に到達。」

嗚呼、スフィア維持が少しきつくなってきたわ。…まあ楽勝には変わりないけど。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！」

遂に悲鳴は苦悶の物となる。抵抗を試みるか、触手より砲撃を撃ちはなとうと魔力がチャージされる。

「盾の守護獣、ザフィーラ。砲撃なんぞ…撃たせん！！！」

それも阻止、兄さんが放つバインドに触手共は哀れにも串刺しにされ攻撃の術をなくす。

「チャージ…２７５…！」

まだだ…まだ足りない。アレに致命打を与えるにはもっと必要だ。

「はやてちゃん！」

さあ、姉さん。私に見せて。貴女の魔法を、力を。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。」

プログラムの上空の空間が歪む、その先には神話の光の神をも撃ち貫いた弾丸がそこに在った。

「石化の槍…ミストルティン！」

突き刺さる石化の槍はプログラムに僅かな抵抗すらも赦さないか、突き刺さった部位から無情な石化の毒を体中に蔓延らす。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！」

悲鳴は断末魔となり、その体を砂としてプログラムは崩していく。

…が、シグナム姉さんが言った通り、コアがあるかぎりアレは永遠に再生し続ける。

防衛プログラムは、形を崩した矢先から、自身が取り込んだ魔導生物の形を再生させていく。その姿は、まさにカオス。この一言に尽きる。

「チャージ…３００…！！」

これで…行ける…！

「カータちゃん！」

任せなさい。視線を贈らずただ無言で私は魔力スフィアを制御する。

「食らいなさい。気功波動（タートル・バースト）アペンドチャージ加えての３倍威力！」

私の言葉に呼応したのか、はたまた魔力スフィアが限界チャージに至ったと告げただけか。スフィアからキィィィンと金属をかき鳴らしたような音が響く。

「気功波動付随（タートル・バーストアペンド）！」

魔力スフィアを突き出す。その小さなスフィアから考えられないだろう魔力の奔流が銀の光となりて再生する矢先からプログラムを灰燼と化す。
文字通り灰すら残さないつもりだったけど、流石は古代のロストロギア。原型は留めないまでもコア露出までは至る事はなかった。

『やっぱり、並みの攻撃は通じない！ダメージを入れたそばから回復されちゃう…！』

エイミィの言葉は事実だが、ちょっと納得はいかない。なんだかんだ言って原型はほぼ無くなったに等しいじゃないか。

「だが、攻撃は通ってる！プラン変更は無しだ！…行くぞ…デュランダル…！」
『ＯＫ　ＢＯＳＳ』

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ。」

さきほどのプランに上がった氷結の杖、デュランダル。その威力は凄まじかった。
既に詠唱の時点で海面は完全に氷結していく。
もちろん、その氷結対象は海面だけに収まらず、プログラムすら再生を押し留めて凍らせていく。

「凍てつけ！」

『エターナル・コフィン』

その言葉と共にプログラムは完全氷結する。

今しかない。この氷結も後数秒で恐らく決壊する。

「みんな！やるよ！」

なのはの言葉が響く。既に概貴とゲイトの計算式で第二陣の魔力チャージも半分ほど完了している。

位置についてそれぞれの魔力をチャージ。

半分のチャージなら、この数秒で事足りるはず。

「全力全開…！…スター…ライト…」

「雷光一閃…！…プラズマ…ザンバー…」

二人の声が響き、私と姉さんもチャージを始めたその時だった。

ドーン！！！！！

凄まじい爆音がとどろくとともに氷結が崩れる…それだけならまだいい。純粋な魔力の塊として暴走したそれはその暴走する塊をこっち目掛けて収束しだした。

しかもそのスピードが尋常ではない。

恐ろしい速さで並んでチャージする私達を殲滅せんと、防衛プログラムが最後の抵抗を試みてきたのだ。

なのはとフェイトは動けない。姉さんはそもそもリイン姉さんがいるからと言って、戦闘慣れをしていない。

「くっ！」

『カータちゃん！？』

『マスター！一体何を』

何も糞もない。アレが放たれたら私達に次の一手はありえないのだ。

ありえないという事は即ちそれは敗北。敗北は…これ以上は考えた

くない。

「チャージを破棄！今から来るアレを防ぐ準備を！！」

攻撃が来るってのに悠長にチャージなんかしてられない。何とかしてあの一撃を防ぐ方法を出さないといけない。

『でも、カータちゃん！カータちゃんの防御魔法は二つ。』

『イージスとゴルゴン。その何れかです。』

解ってるわそんなこと！問題はその二つのドレを選ぶかってこと。

この選択を誤れば即敗北が決定する。

まずはイージス、これはダメ。そもそもこっちが攻撃するチャンスだったはずが、向こうの反則的な乱入で台無しになったのだ。攻撃の余波が残っては唯一無二に残った最後の攻撃チャンスが永遠に失われる。

だったら

「ゲイト！ゴルゴンのプログラム補助！いいわね！」

鏡の盾（ミラージュ・ゴルゴン）しかない。

見てなさい。あの馬鹿みたいな魔力の塊をあいつ自身に跳ね返してやる。これが最善策なら、やるしかない。

『行くよ、カータちゃん。』

『ゴルゴン。出せます。』

「鏡の…盾（ミラージュ　ゴルゴン）！」

丸い円のような盾を私が手のひらを突き出すと同時に出現させると共に私の盾に信じられない衝撃が伝わった

「ア…が…」

無茶苦茶よ。これだけのベクトルを全く逆の方向に変更しろだ…とか。少々あのプログラムを甘く見すぎてたみたい。

鏡の盾（ミラージュ・ゴルゴン）は本来受けた砲撃を私の能力干渉なくしても自動的に跳ね返してくれるが、この砲撃はそれすらも無視できるほどの威力らしい。

必死に受けた砲撃の中に存在する無数の機械的な信号を上書きしていく。

その数実に数万を軽く凌駕する。

こんなの相手にクロック・オーバーなんて使えない。使えば最後…ただでさえ、既にベッド後払いが確定してるのに、これで使ったらどんな代償を請求されるか考えたくもない。

だけど、この計算も私の体に掛かる負担は半端なものではなかった。

衝撃から伝わってくるダメージは私の想像を遥かに超えていた。

このままでは跳ね返すどころか、盾を貫き私とその後ろに居る姉さんたちも巻き込みかねない。

「う…アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

声にならない雄たけびを上げる。信号の悉くを無に返す。その根底にある所有者の情報までたどり着くまであと少し。

ベクトルの変更が徐々にかかるおかげで私自身を貫く衝撃も和らいでいっている。

「あと…すこ…」

し。最後のプロテクトを書き換えて、コアであるコントローラーの変更を行う。この計算式がまた厄介だった、私とゲイト、概貴の複

合演算を持ってしても打破できない。
そうしてる間にもダメージを受けてなかった筈の私の体は悲鳴を上げ、鏡の盾（ミラージュ・ゴルゴン）にもひびわれが目立ち始めた。

「所有者…ＵＮＫＮＯＷＮ…？」

そうか、あれ自体方向性の無い魔力そのものだから所有者そのものが存在しないのか。
だったら

「魔力所有者を…八神カータに…変更…魔力消費は…八神カータの…リンカーコアから…供給」

これで…

「終わりよ！姉さん！なのは！フェイト！」

魔力の全てを請負った私はスフィア状にして固定。三人の限界砲撃と同時にあれに叩き込む！
私の叫びで全てを理解したのか、三人はこくりとうなづいた。

「「「ブレイカアアアアアアア！！！」」」

「リリース！！！」

三人の声と同時に強大な砲撃が三つに連なって暴走プログラムに襲い掛かる。
駄目押しにと、私は残った魔力の全てをつぎ込んで受け止めた砲撃の魔力とともに砲撃として『跳ね返した』。

ズガアアアアアアアアアアアアアアアン！

凄まじい爆音と共に暴走プログラムは激しい閃光に包まれた。

「…ざまあ、無いわね…私に…勝てる訳…な…い…。」

私が見た光景はそれが最後。

体に重なったダメージと、魔力を一挙に放出した虚脱感から彼との繋がりが切れる感触に微かな右目の痛みと共に私はあっけなく意識を失った。

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

その光景は一言で言うと。『有り得ない光景』だった。

巨大な砲撃…それも街一つを容易に吹き飛ばせそうな膨大な魔力を秘めた強大な砲撃を、年端もいかぬ…齢１０を超えないこの中でも一番幼い少女が一身で受け止めている。

「う…アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

片手だけをつきだしていた姿勢が耐えられなくなったのか、少女は両手で必死に砲撃を受け止める。

だがそれは不可能だ。いくらあの少女がこの中で最高のスペックを持った戦士だとしても、あの理不尽な魔力を跳ね返せればそれこそ人間業を軽く凌駕している。

が、その場に居る人間に見せた現実はそうではなかった。

現れた少女の盾をあっさり砕いて少女とその後ろに居る三人の勇者をもろとも打ち砕くかに思われた砲撃は、少女の盾に食い止められ

ている。

その砲撃も僅かであるが、内包魔力を維持しながら少しずつ勢いが収まっていくのが分かる。

だが、少女の体はもう限界としか見えない状況だった。表情は既に疲労困憊と言え、その額には玉のような汗が吹き出ている。

代わってやれるのなら、ここに居る誰もが『もういい、やめるんだ。』そういっただろう。

だが、ここに居る誰もが少女の異様な勇姿に見入っていた。

信じがたいことだが彼女を押さえつける強大な力は徐々に徐々に弱くなっているのがわかる。

…そして、砲撃が彼女の盾のまえで完全にスフィアとなって停止した。

「終わりよ！姉さん！なのは！フェイト！」

その叫びで彼女の後ろに控えた三人が同時にうなずく。

「「「ブレイカアアアアアアア！！！」」」

「リリース！！！」

三人と一人の凄まじい魔力の奔流が全ての結界を取り除かれた暴走プログラムを打ち貫く。

「！？カータ！」

はやてが空中から海へと落下するカータと融合が解除された概貴を確認するのはそれから約一秒ほど経ってから。
拾ってやろうと宙をかけようとしたその時、既に先駆者が現れていた。はやてとのユニゾンを瞬間的に解除し、銀の髪をはためかせながら海上スレスレでカータを受け止める。

ホッと胸を撫で下ろすはやてだったがまだ終わってはいない。
光の柱となって粉々に砕け散ったその身の中から確かにコアが垣間見えた。

「本体コア、露出。…捕まえ…た…！」

シャマルによって闇の書の本体のコアの座標が固定され、転送の魔法が展開される。

「長距離転送！」

「目標、軌道上！」

そこにユーノとアルフの助力が加わる。もう闇の書がいくら凄まじかろうとコアを鷲掴みにされてはどうしようも無い。

「「「転、送！」」」

コアが飛ぶ、終着駅はアースラが放つアルカンシェルの軌道上。

地上にいるカータ達が見たのは空から感じる微かな波動と閃光だけだった。が、それが闇の書が生み出す悲劇の終焉を告げることを意味するのは言うまでもない。

『というわけで現場のみんな、お疲れ様でした。状況、無事に終了しました。このあとまだ、残骸の回収とか市街地の修復とかいろいろあるんだけど、みんなはアースラに戻って一休みしてって。』

状況は言うまでもなかったが、エイミィの言葉でそこに居るもの全てが、終わったのだ。と実感できた。

「管理局、済まない。この子たちの手当てを頼みたい。」

リインフォースが胸に抱く二人の小さな勇者。さきほどまで壮絶な砲撃と死闘を繰り広げていたとは思えないほど、静かに眠っている。

『はい、医療班の手配はもうできてますから、アースラに戻り次第。応急手当をさせます。』

「そうか…ならば安心だ。」

「リイン、ごめんな。私がもうちょいはよ動け取ったら…」

はやてが申し訳なさげに呟く。あのとき彼女は気づきながらも反動で動く事ができなかった。
それが何より悔しいんだろう。

「気遣いは無用です。なにより、主の体格ではこの二人を同時に捕まえるのは無理でしょう。アレは私が動くべきだった。」

融合の解除によってカータは元の銀の髪に戻る。リインフォースがどこか誇らしげに彼女を見つめ抱きかかえる姿は、はやてには本当の姉妹のようにもみえた。

「あの…アリサちゃんとすずかちゃん達は…」

「ああ、被害の酷い場所以外の結界は解除してあるから、元居た場所に戻しておいたよ。大丈夫。」

エイミィの言葉になのはとフェイトは安堵のため息…一方そのコロアリサ達…

「あ、ありのまま！今起こったことを話すぜ！状態だねこりゃ！」

「もー！なんなのこれ！うあああくぁｑｓｗｓｗでｗ！」

「あ…はははは…」

と、街中イタイケな少女三人は道行く人の視線を攫いながら大騒ぎしていたそうな。
閑話休題。

とにもかくにも、ひとまずコレにて闇の書事件はなんの犠牲者も出さず幕を閉じた。…筈…だった…

第二十六話　終焉（後書き）

ようやくA'ｓもエピローグ…。長かった。ようやく物語が終えられそう。書き終えれるだろうか果たして…。

ここまで読んでくださってありがとうございました。では次回投稿でお会いしましょう。

「それがふざけてるって言ってるの！」
『これは貴女に与える罰です。』

少女の偽善が全てを狂わす。ありえなかった筈の犠牲。

生涯消えぬであろう罪の形。

魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ

罪

第二十七話　罪（前書き）

さて、終わりました。衝撃の展開

……ではなく超展開。

2日連続投稿。

では、どうぞ

第二十七話　罪

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

あの後、カータはアースラで応急処置を受けた。…が、カータが概貴と融合する直前に支払ったベッドは右目の視力喪失。大事に至る怪我は無かったがこれは揺るぎようが無い事実だった。

病室、カータと概貴が眠る部屋。夜天の魔導書…リインフォースは静かに佇んでいた。

「……。」

「リインフォース。これはカータの選択だ。お前が気に病む事ではない。」

「だが、私がその選択を余儀なくした。この子の失った右目は私のせいでもある。」

こうなってしまったリインフォースを宥める術はない。シグナムは掛ける言葉が見当たらず、無言で部屋を後にした。

「私はどこまでも呪われた魔導書だ。大事な家族の目を奪って尚、私は運命を破滅にしか導けん。」

自嘲気味に笑い眠るカータの頭を撫でる。

「ん…。」

声を上げたのは概貴。意識を取り戻したのか、ゆっくりと体を起き上がらせる。

「目が、覚めたようだな。」

「あ、ハイ。リインフォース、さんですよね。カータちゃんのお姉さんの。」

ベッドで座った体制のまま概貴はリインフォースに視線を向ける。

「ああ、概貴。お前のことはカータの記憶から知った。随分親しいようだな。」

「ハイ、僕の大切な、友達です。」

「友達、か。この子もまた難儀な相手に恋をした。」

概貴は、どこか意地悪く笑うようにも見えるリインフォースの意図がわからないのか、不思議そうに首を傾げた。すると、不意に思い出したかのように概貴はカータの傍らに置かれたネックレス…デバイスに目を向けた

「リインフォースさん、ちょっと席を外してもらって、いいですか？」

「…解った。時間を置いてまた来るとしよう。」

そのまま部屋を後にする。彼がデバイスと何を話すのか気になったが、隠し事が無さそうな少年がわざわざ隠したいと思ってることだ、相当なことだろう。

そう、考え彼女は直ぐに席を外した。
向かった先は、眠る彼女の主、八神はやての病室だ。あのあと、緊張の糸が解けたせいか急激な魔力消耗や疲労などで彼女は意識を失った。今までの侵食に比べれば大した事ではないし、自身が彼女を侵食するスピードは完全に止まり、治る傾向にある。
時期に彼女の足も動くようになるだろう。

だが、問題はリインフォース自身に残っていた。
彼女の中で深く根付いた改変によるバグはもはや取り返しのつかない事態にまで進行している。
人間でいうところのガンの末期症状のようなもの。
死にはしないが、永遠に防御プログラムというなの暴走を生み出す最悪の無限ループが彼女の中で出来上がっている。
事実、今彼女自身、自身の中で芽生え始める悪魔の存在に気づき始めていた。
後数ヶ月もすればまた暴走を引き起こす事は目に見えている。

やはり自分は、皆と笑顔でゴールすることはできない。
…もう十分生きた。最期に最高の名前を愛する主から授かり、守りたい物を守ることもできた。
デバイスとしてこれ以上幸せなことは無い。

カータや主に話せば、また叱られるのだろうな。

リインフォースはどこか楽しげに……どこか幸せそうに笑い内心呟く。
騎士達には告げなければならない。私の命が残り僅かという事を。
消えるのは、私一人。間際の時に名を貰い、僅かな間だが幸せを噛み締めた魔導書一冊。

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

深い眠りから、目が醒める。

……どうも視界が狭い。……そうか、姉さんとの戦いで、私は右目を支払った。清算が終わったのだ。

まだ全身が気だるい。横たわっていてこれなのだから、歩く事は出来ないだろう。所謂絶対安静と言うやつだろうか。

「おはよう、カータちゃん。」

隣から声が聞こえる。視線だけ向ける。左隣に居たのが幸いした。左目はまだ光を受信できる。

左目で概貴君を見つめる。膝元にゲイトを置いてベッドの上に座っていた。

どうやら何か話して居たらしい。

「おはよ。ゲイトと何を話してたの？」

『他愛の無い世間話です。そうですね、概貴。』

「うん。機械と会話なんて中々出来ないからね。」

……まあ仲が良いのは嬉しい事だけど。何か引っ掛かる。

『お体の具合はいかがですか、マスター。』

「しばらく起き上がれないかな。かなり体にダメージを残したみたい。」

「カータちゃん、お姉さん、どうするの？」

やっぱりそれについてか。話していた内容は

「うん、防衛プログラムは確かに破壊した。……でも、姉さんの中にはまだ厄介なバグが残っている筈。」

『そうですね、防衛プログラム自体は破壊しましたが、肝心の大元が手付かずです。』

そうだ。プログラムを生成するバグがそもそも消えて無い限り、姉さんは永遠に悲劇を生むことになる。

「じゃあ、行こうカータちゃん。もう一度、僕らの戦場へ。」

その意思には賛成だが、私の体は本当に動かない。

それこそ根性論が通じないレベルに。

「体の事なら大丈夫。僕が君の体にブーストをかける。そうすれば動ける程度にはなる筈だよ。」

「そっか、じゃあ概貴君、お願い。」

「うん、行くよ。フュージョン、イン。」

自分の中に暖かい何かが灯る感覚、きっとこの感覚が概貴君と繋がった感覚なんだと思う。

同時に私の意識が高ぶっていく。

銀の髪がゆっくりと侵食されるように真黒に変わっていく。

バリアジャケットは纏わない。戦闘をする為じゃないし、何より無駄な魔力は使いたくない。

立ち上がる。両手に後ろ髪をかけそのまま靡かせる。
概貴と融合をしても片目の視力、体力は戻らない。
まあ視力に関しては、完璧過ぎる私にいいハンデね。

「さあ、行きましょうか……最後のお掃除の時間よ。」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

―――――――――――――――――――――――――――――――

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

場所、はやてが眠る病室。
ヴォルケンリッターの面々と、リインフォースがそこに居た。

「やはりどうにかならんのか……？」

「……ならん。そもそも私の中のこれが、全ての原因だ。これが有る限り、私は永遠に呪われた魔導書だ。それを解決する手段がそこらに転がっていたなら、私は歴代の主達を侵食してはいない。」首を振る。リインフォースが話したのはこれからの自分の未来について。

自身の中に再び防衛プログラムが生成され始めていること。
今自身を破壊すれば防衛プログラムごと完全に削除できること。
自身が消えてもヴォルケンリッターの四人は消えぬという事。

当然ながら納得する彼女らでは無い。シグナムもヴィータも、勿論シャマルとザフィーラも食い下がった。
だが、彼女らもまた夜天の魔導書の一部。どうにもならないというのはどこかで解っていた事だ。

扉が開く。

「ちょっと待った…」

開いた扉の先には右目を瞑り腕を組む。……黒髪のカータがそこに居た。

「何をしてるカータ！まだ寝ていろ！」

「シグナム姉さん黙って。私はあそこの馬鹿姉貴に用があるの。」

シグナムが走り寄る。だがその言葉は彼女には届いていない。左目だけがシグナムを睨む。そこに宿った強い意思の光に思わず息を呑む。

「よくもまあ、そんなふざけた事を、しゃあしゃあと口に出せるわね？」

「ふざけてなどない、これが最良――――」

「それがふざけてるって言ってるのよ！」

リインフォースの言葉を完全に封殺してカータの怒声が病室に響き渡った。

胸ぐらを掴みカータは彼女の顔を、自身の眼前に近づけ光を失った右目を開く。

「この目を潰したのは誰？片方とはいえ、貴女は私から光を奪った。その責任を放棄して、そんな我が儘を通して逃げるだなんて、赦さない。『自己犠牲』だなんて我が儘……絶対に赦さない。」

半ば突き飛ばすようにリインフォースの胸ぐらを離す。静まり帰った病室の中腕を組むカータは口をひらく

「歪んだ基盤なんか、作り直せばいい。元がわからないなら…問題ないよう作ればいい。」

「まさか…お前…」リインフォース以外が息を呑む。事前に種を明かされているヴォルケンリッターの４人は何を言うのか解っているからだ

「将、カータは何を言っている。」

「リインフォース。こいつは、自身を糧としてお前を救うつもりだ。」

シグナムの即答といえる速さの回答にリインフォースの顔が青ざめる。その顔はみるみる怒りに変わる。

「カータ、お前は何を考えている。優しさと愚かは違うと、以前教えたはずだが？」

「どっかの誰かと一緒にしないで頂戴。私が死ぬと思う？貴女と違って私はまだ８歳なの。死なない、こんなどこの馬の骨が作ったか解らない、バグごときに殺されるもんですか」

リインフォースに歩き詰め寄る光映らぬ瞳共々姉を映し

「さあ、貴女の運命を私に委ねなさい。拒否なんて赦さない。」

王の命のようにただ言葉を突き付ける。

「……死ぬな。それを絶対に守るか……？」

「同じ事を2度も言うつもりは無いわ。御託なんていらないの。さぁ、奴隷（クライアント）さん？ご主人（ホスト）様にイエスのお返事は？」

狂気すら孕んだその笑顔。
そして差し出される右手。
悪魔の契約とも思える異様さ。
こうまでされては虚勢すらも真実に見えてくる。

その契約に魅せられたか、はたまた悪魔を信用したか、魔導書はその右手を握った。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

―――――

計算が始まる。いつもどおりの数字との戦い。だが、今回に限ってはその次元を遥かに上回っていた。そう、例えるならそろばんでパソコン並の行動をしろといっているような物だった。

否応にもクロックオーバーを引っ張り出される。

第一段階。まずはそろばんから電卓に引き上げられる。
足の感覚が無くなった。
第二段階。
電卓からパソコンに引き上げられる。
折角残った片目の光を失った。第三段階。パソコンとしての機能が引き上げられる。
右腕の感覚が無くなった。
最終段階。パソコンとしての保存容量を跳ね上げられる。
これで四肢を失った。
自然体重をリイン姉さんに預けることになる

「カータ？…大丈夫か？」

その言葉に答える余裕なんか無い。

『カータ…ちゃん…平…気…？』

大丈夫よ。貴方には指一本傷つけさせないから。

さあ、演算ね。

まずは基礎的な構造を解析する。夜天の魔導書となっているパソコンでいうマザーボード…基本基盤の全容を把握する。

内臓された魔法と機能を把握する。

バグの位置と数を把握する。

『後悔、しませんか？』

ゲイトが当たり前のことを聞いてくる。もちろんだ、迷いなんかない。後悔は後に悔やむと書く。迷いが無いのなら後悔なんてするわけもない。

『そうですか。解りました。マスターご指示を。』

そうね。ゲイト、私と一緒に死になさい。そして、どうやっても概貴くんを守ること。

『イエス、マイマスター』

ゲイトの計算能力が私に加わる。概貴との融合（フュージョン）で更に私の能力が跳ね上がる。

それでも太古から存在するバグを修正するのに十分には至らないけど。大丈夫。私にはクロックオーバーがある。

無数の0と1が私を包む。もちろんそんなのは私の中のイメージだ、本当は何が包んでるのかは私にもわからない。

まずは、厄介なプログラム。システムへの管理者権限関連の余分なシステム。

こいつへまずハッキングをかける。

いくら厄介なプログラムだろうとスーパーコンピューターと同程度ほどのスペックを有している私の計算能力…チート演算力を持った私の前では無意味だ。

「外部ハッキングから内部改竄について誤認識をかけ、あたかもシステムそのものがデータを書き換えていると認識をさせる。

それについでシステムハックを開始。中枢システムに影響を及ぼさない程度に以下の転生と再生プログラムを改竄後、宿主を取り込むバグを修正。」

そして計算に継ぐ計算。これで準備が完了。これで本体にいくら介入しようと、姉さんが取り込まれて転生することは無い。

夜天の魔導書の根底に潜むどこかのお馬鹿さんが作った、姉さんを狂わせた悪魔を探す。……そんな悪鬼はすぐに見つかった。

膨大なプロテクトの茂みの中に隠れていやがったそいつは、ものすごく単調な役割を演じている割に、有りえないくらい複雑なプログラムで組まれている。

流石の私でも、これじゃあ埒があかない。

だから、私は

「クロック…」

払ってはならないチップを

「!?、待て!カータ!」

姉さんの言葉が私の鼓膜を震わせる。だけど、もう遅い

「アップ。」

払った。

自分の中が改変されるのがわかる。命を代償にして私は常人では到達知りえない境地に達した。それこそスーパーコンピュータなんて

目じゃないくらいに。

『命を失わなければ』か、我ながら天晴れな詐欺師ぶりね。

『カータちゃん…』

彼の悲しそうな言葉が響く。ごめんなさい、……でも私はもともとイレギュラー。これが、本来在るべき形よ。

余分な思考をカットし、目の前の悪鬼を見据える。夜天の魔導書という基盤に寄生するようにへばりついたそれは引き剥がしたらおそらく基盤を真っ二つに折る。だから、予め姉さん自身のバックアップを増大した予備の記憶媒体に保存しておく。

姉さんだけで、腕一本を犠牲にした記憶容量は埋まる訳もなく、残ったスペースで作業をする。元の形なんてどうだっていい。私が新たに夜天の魔導書ではない別の魔導書を作り直せばいいだけの話。

いろいろエラーがあるだろうけど、そこは追い追い修正してけばいい。

魔力によって仮想ハードウェアを用意。ここに書き込まむ為のバックアップを作成しなければならない。

まずは魔導書に記録された、様々な魔法をコピーする。さすがに古代ベルカから蓄積され続けた全ての魔法のコピーは難しかった。

なにしろ、過去に戻れば戻るほど魔法の技術は跳ね上がっていて。古代の魔法はそれこそ容量が高すぎて私の中に入らない。だからいくつか魔法は切り捨てた。

そのかわり最新から数えたいくつかの魔法は全て新たな魔導書に書き残した。

「姉…さん。今から…貴女のデー…タを、コピーする、…多少、システムに…介入する…から、意思を…飛ばされ…かねない…気をつけなさい。」

まだ手足に感覚は残って居た。……死ぬのが怖い、そう思うと、私は姉さんに抱きついていた。……暖かい。

「カータ？まさか、見えていないのか…？」

えぇ、そうよ。もう両目は支払ったもの。見える訳無いでしょ。なんて事は言えない。言えば思考に無駄なノイズが走る。そんな事をしたら正確な演算など出来ない。

コピーしたデータを順に書き込む。
魔法、使用者のアカウント、システム、人格データ

重要なデータをまず埋め込む。それから付属品である様々な物を書き込む、

これでバックアップは出来上がった。

『バックアップをリードします。続いて仮想ハードウェアに書き込みます。』

優秀ね、私の考えてる事を先に片付けるなんて、やっぱり貴女最高。

『光栄です、マスター。』

さて、後はこのバグ。
こいつのせいで何人もの人が犠牲になった、次はお前の番。覚悟は、出来て？

……どうしてやろうかしら？

……愚問ね、そんなの決まってる

絶対助けると約束した。そのためならこの命を消失する事も厭わず。
みんなの笑顔を守る。姉さんに真の意味で笑ってもらう。

そのためにはアナタは邪魔なの。ここで夜天の魔導書ごと消えてもらう。

私の渾身の傑作よ。最後は可愛い女の子の手作りの刃で即死。

最高でしょ？

「全演算完了。仮想ハードウェアを本ハードウェアに以降。」

『了解、夜天の魔導書にアンインストールプログラム、セット完了しました。』

『アンインストール完了後、リインフォースさんに影響が無いようにシステムに修復をかけさせるよ。』

オーケー、後は魔導書が魔力を元に基盤を生成出来るわね。

『ええ、おそらくは。』

『仕上げ、行こうか。』

全身全霊、全演算能力を用いて用意したアンインストールのプログラムをバグという名の改変プログラムに叩き込む。

あれほど私たちを苦しめた暴走プログラムの元凶の消滅はあっけなかった。まあプログラムとは固よりそういう物。いかに膨大なデータだろうと削除するのは一瞬。

そして、改変プログラムと同時に闇の書…夜天の魔導書も同時に終わりを告げた。

体中から力が抜ける。

「終わった…。」

姉さんを抱き締めていた指先からも力が抜け、まるで亡者が生き物に集るかのような姿勢で、ガクリと膝をつく。

全ての演算を終えた、それは同時に最後に払ったチップの手続きが終わるということだ。

つまりは私の死。

「「「カータ！」」」「カータちゃん！」「姉ちゃん！」

みんなが私に声をかけるが多分届いてなんかいない。
ふふ、死が近くなって言葉が支離滅裂ね。
まあ意識の大半が消えていってるから、仕方ない、か。

死ぬのは、これで二度目、ね。やっぱり人というのは死ぬというのを根本的に恐れているらしい。物凄く怖い。
でも、そんな恐怖よりみんなの幸せを守りきった自己満足感のほうが何倍も上だった。

そんな混濁した意識。こんな意識に固執する必要だって、もう無い。
私は、そのまま意識を放棄した。

『マスター』『カータちゃん』
ここは、夢？

多分消え入る意識の中……リイン姉さんとはやて姉さんが会話してたのと、似た空間。

私という存在が消えかかる中同時に二人が話しかけてきた。

『何？二人とも、手短にね。もうすぐ消えちゃうから。』

だが、誰かが言っていたように人生は常にイレギュラーというのが

存在するらしい。

『いえ、マスターは消えません。』

『うん、消えるのは僕らだから。』

そんな予想外な事が起こるなんて誰も想像なんかできなかった。

私と概貴くんが融合しているということは、概貴くんにも私の意思を操作する権限があるということ。

そんな事を私はすっかり忘れていた。

『駄目…』

もう遅い拒絶を一人と一体に言う。だがもう遅すぎる。私の消滅は中断して矛先が二人に向いている。

『貴女は以前言いました。デバイスは所有者を助けるためのものだと。』

そんなの知らない、いいからお前は黙って私が消えるのを見ていればいいの。

命令だから止めなさい！マスターからの、命令が聞けないの！？

『えぇ、そうですね。なんせ、私は素行の悪いデバイスなので……懐かしいですね、なのはさんに見られた時も、私は貴女に不利になるよう仕向けた、不良デバイスでした。』

そんな昔話、後でいくらでも聞いてあげる。いいから、早く私と代わりなさい！

『『これは僕ら（私たち）からの罰だよ（ですよ）カータちゃん（マスター）。』』

……え？…どういう、事？

『君が起きる少し前にゲイトさんから、リインフォースさんを直すって話は聞いた。

君の事だから、命をきっとかける。

だから、もし君が自分を犠牲にするようなら僕らが代わりを引き受けようって。

それに君はリインフォースさんに言ったよね。「自己犠牲だなんて我が儘、赦さない」って』

概貴くんは静かな視線を向けたまま私に言う。その表情は後数分で消える人間ができる顔なんかじゃなかった。

『そんなわがままを他人にするなと言って、自分がするだなんて貴女はとんだ悪女です、マスター。だからその悲しみを貴女だけに全て押し付けます。』

胸に光る消えかけの鈍い光を放つ宝石がひときわ大きく光る。それが最後の脈動だったのか、ゲイトの光はどんどん弱弱しくなっていく。

ゲイ…ト…？……駄目。

『ここでお別れです、マスター。貴女と私の相性は最強でした。恐らく、いえ、恐らくではなく確実に、この世界の誰よりも最高の組み合わせでした。……貴女のデバイスで戦えた事……私に名を与えたのが、貴女であった事を、誇りに思います。』

私の言葉を待たずに胸の宝石はそのまま光を失うとともに光の粒子になって消えていった。

あ……アアぁ……。

『ゲイトおおおおお！！！』

私の言葉は虚空に響くだけで目的の相手に届く事は永遠に無かった。

『カータちゃん。』

今度は目の前の少年の番だ。それだけは絶対に止めないと…だって…私は…

『駄目！概貴くんが死ぬことなんてない！消えるのは私なの…なのに…なんで…！』

いくら命じてもコストの対象が変わることはない。只でさえ無理なキャンセルだったのだ。もう払い始めたコストをキャンセルして払いなおすことなんてできない。

『君と友達になれて良かった。なのはさんに、フェイトさん、後アリサさんに、すずかさん。リエちゃん。みんなとお別れできないのは悲しいけど。君とお別れできたなら僕は後悔しないよ。絶対。』

そんな御託はいい。早くその消滅を止めて。私と概貴くんが同時に命じればきちんと権限が発動する。コストが私に移る。

『それは駄目。だってコレは君に対するお仕置きだし、何より。僕は君のためだけの主人公だから。ヒーローがヒロインを救うのは物語の王道でしょ？』

そんなことを言う概貴くんはもう上半身だけの姿になっていった。じきに体も消えていく。

……が、それで彼の消滅は止まる。

『ゲイトさん、かな？自分の消滅を早めて、僕に時間をくれたのかな。……いい相棒だね、カータちゃん。』

止まってなど無い。相棒が止めている。必死に時間を稼いでいるだけだ。

……そこで漸く目が醒める。

彼らの消滅は決定的……ならば、きちんと見送るのが、私の役目だって……。

ゲイトはそんな簡単な事を、身を呈して教えてくれた。

『概貴くん。』

『なに？』

呼び掛けに彼は静かに答える。その死に面してなお落ち着いた顔…
…やっぱり私は、彼に恋をしてる。その顔を見て再認識した。

『最後のお話、しようか。……私達の、思い出話。』

『……うん、いいね。君と会ったのは、僕が転校した時だったね。』

『そうだね、初日いきなり私がヒステリック起こしちゃったんだっけ』

何気なく他愛の無い会話。
流れそうな涙を堪えて会話をする。

『あの時は怖かった。多分自覚無いんだと思うけど、カータちゃんって怒ると凄く怖いんだよ?』

『そうかな、誰だって怒れば怖いよ?』

二度と出来ぬだろう。私の心に一生消えぬ宝の時間。

『リエちゃんにも随分からかわれたよね。』

『そうだね、アイツ。姉さんの夢の中でも私にセクハラしてきたんだよ?』

『アハハ、リエちゃんらしいな。』

ここにリエが入って、馬鹿騒ぎする事も、もう無い。

『学芸会、カータちゃんの女王さま、やたらしっくりしてたよね。』

『だって、同じ役やったこと有るもの。』

『そうなの？…ちょっとずるい。』

『ふふ、私だけの特権。』

その特権で、私は彼を殺すのだ。
気がつけば、私は泣いていた。
静かに涙を流しながら、彼と笑って談笑をしている。

概貴くんもそれには触れない。だって私達の中では、放課後の教室で並んで椅子に座り、話しているからだ。

『概貴くん。』

『なに？』

『リエに伝えたい事、無い？』

『友達で良かった。さよなら言えなくて、ごめんね。……かな。』

『そっか。』

会話が途切れる。
少しだけ座り直す。座り直して距離を縮める。

『？』

不思議そうにする彼の肩に、そっと頭を乗せる。もたれかかる。

きっとどうかしてる。五年後、十年後に思い返せば、悶絶したくなるくらい、恥ずかしであろう事を、私は平然としていた。
日が沈む。

この太陽が沈めば、猶予は終わり、この時間も終わってしまう。

『カータちゃん』

『なに？』

『おじいちゃんと、おばあちゃんに、これ、渡して置いて欲しいんだ。』

顔を上げ、彼から畳まれたノートの切れ端をわたされる。

『うん、解った。……もう少し、こうしてていい？』

『いいよ。』

上げた頭をまた肩に乗せる。
目を瞑ればきっと直ぐに眠れる。それくらい心地好かった。

太陽が沈む。教室に差し込んでいた最後の夕日が消えると共に、隣で座る彼の姿が消えていく。

『時間？』

『そうだね、早く帰らないとお姉さんに叱られるよ？』

そうだ、いつまでもこうしては居られない。楽しい時間は有限だからこそ、楽しいからだ。

『女の子を一人で返すの？』

『一人じゃないよ。リエちゃんも居る。リエちゃんだけじゃない。君の周りにはたくさんの人が居る。』

違う。私は君と帰りたい。

一緒に帰ろう？

そう言いたかった。きっと彼はこう言えば一緒に帰ってくれる。奇跡を起こして、一緒に帰ってくれる。

『うん……じゃあ、概…貴くん…また明日。』

それを涙を流して堪えた。

それを言えばさっきまでの宝石の時間はただの石ころに変わる。

それだけは絶対にしてはいけない。

五年後、十年後。この恥ずかしい思い出に恥ずかしさで悶絶するために。

背を向ける。

絶対に振り返らない。いや、振り返れない。

振り返ればきっとそこに彼はいない。その事実を突き付けられる。

だから、そのまま教室の扉を開き。私は走った。走って校舎を出た。

校舎を出ると、そこで桃源郷のような夢は、終わった。

第二十七話　罪（後書き）

如何でしたか？

自分がこの小説を書いてて、一番たどり着きたかったシーンです。

色々な意見があるでしょうが、そこは追々と語る事にします。

では、次回投稿でお会いしましょう。

「夜は明けたよ……この新しい魔導書の名前は……」

闇夜が続いた夜天の魔導書。

夜天は明け朝日は昇る。

魔法少女リリカルなのは

Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ

明天

第二十八話　明天（前書き）

出かける直前の投稿。

ではでは大して盛り上がりの欠片も面白みも無い最新話です！

ブラウザバックしないでね☆

第二十八話　明天

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ

目が醒める。小さく呻き声でも上げたからだろう。

「カータ、大丈夫か？」

私が一番聞きたかった声の主が私に語りかけた。
その姿を確認しようにも部屋の明かりが全くついて居ない。

「ごめん、姉さん。部屋の明かり、つけて、くれない？」

私の言葉に息を呑む声がいくつか聞こえる。
……今私おかしな事を言っただろうか？
それよりもリイン姉さん意外にも誰か居るらしい。

「カータ。この部屋に居る人間の名を言ってみろ。」

また姉さんも明かりも点けずに変な事を言う。姉さんの声しか聞こえないのに、誰か居るかなんて解る訳ない。

「もう、悪ふざけ？早く明かり点けてよ。本当に怒――――」

言葉は出なかった。言い終わる前に誰かが私を抱き締めたから。訳が解らない。そんな私に致命的な事を誰かが伝えた。

「明かりを消してなど居ない。……カータ、光を、失ったな……？」

……何を言っているのか解らない。だって私は――――

そこまで考えが至り私は漸く現実に還る。

「概貴くんは？私と融合してたでしょ？ゲイトは？一緒に演算をしてたでしょ？」

誰も答えない。いくつかの泣き声が聞こえる。
知らないのか、知って私に伝えぬだけなのか。
恐らく後者、だって彼は――

「デバイスとあの少年は、死んだ。亡骸は、お前の隣だ。」

事実を突き付けられる。
そこで私は現状を把握した。

明かりなど消えてない。私が光を失った。
泣き声からしてお姉ちゃんを除いた私の家族が揃っている。

私を泣きながら抱き締めて居るのはリイン姉さんで、泣き声はシャマル姉さんと、ヴィータ。
兄さんは恐らく始終無言。

多分ゲイトと概貴くんは私のすぐ近く……隣のベッドに安置されているのだ。

私には見えないし、見たくも無い事実。
代わりにポケットの中を確認する。
そして、ポケットに入った、大事な預かり物の存在を確認すると共に、彼の死んだ事実が私の中で確定する。

「カータ……すまない。私のせいで、お前は様々な者を失った。……すまない。」

抱き締める姉さんの体は暖かい。それは私が、演算の最中、死への恐怖で抱き締めた時の物と同じ。
理由解らぬ安心感に、私も泣いた。

相棒を失った。

光を失った。
魔導師としてこれは致命的。

友達を失った。

初恋の人を殺した。

少女として致命的。

姉を救った。

ただ一つだけ勝ち取った私の戦利品。

失うはずがなかった、犠牲。誰かが言った。『これは貴方の罰』だと。誰かが言った。『自己犠牲なんて自己満足は赦されない』と。何かが言った。『名を与えたのが、貴女であった事が誇り』だと。誰かが言った。『君は一人じゃない。』と。

全て私のせいだ。姉さんのせいだなんてとんでもない。私が余計な事をしなければ、私が勝手な行動をしなければ、彼らは死なず、こ

の世から失われたのは私だけですんだのに。

抱きしめる力は消えない。姉さんはまだ妹（おろかもの）の為に泣いてくれている。…そうだ、まだ仕事が残っている。ゲイトと、概貴くんを殺した私に残された仕事。

「姉さん…貴女に名前をあげる。新たな魔道書として、新しい名前を。」

抱きしめる力が緩む。見えぬ両目で姉さんの顔を見つめながら私は続けた。

「永い夜は終わった。貴女の名前は――――」

新たな名を与える。その言葉を紡いだとき。漆黒の闇に塗りつぶされていた夜天の魔道書の長い夜は、本当の意味で終わりを迎えた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

翌日。なのはさんは地球に帰る事になったが、お姉ちゃんは本局の精密検査やらで残る事になった。

私は、と言えば完全に障害者となり歩く事は愚か、食事をするのも誰かの手を借りねばならなかった。だから私も残る事になる……筈だった。

「帰るだと……？」

目くじらを立てたのはリイン姉さん。

私が視力を失ってから、彼女は私の面倒を見てくれた。

今では完全に私の生活の支えとなっている人だ。

「やらなきゃいけない事があるの。今すぐに。」

向けられる視線を受けはっきり返す。……やるべき事がある。彼から、概貴くんから請け負った最後の仕事。

「……あの少年か？」

返事はしない。ただ無言で首を縦に振る。

だってそうだ。彼は昨日のお昼から帰ってない。

今頃騒ぎがあっても可笑しく無い。

「ならば、私が付き添おう。将達には私が言っておく。高町を呼んで、段取りを済ませておけ。」

「ありがとう。姉さん。」

気にするな。そう言うと姉さんは部屋から出ていった。

時刻は朝7時。なのはさんはまだ発っては居ない筈。

念話で呼び掛けを試みる。

『カータちゃん？どうしたの？』

呼び掛けから数秒待たずしてなのはさんの声が聞こえた。

『あ、その。私も一旦帰る事になって、その……一緒させてもらって、いいですか？』

『うん、大丈夫だよ。でも大丈夫？その……目、見えないんでしょ

？』

やっぱり彼女も気にかけてきた。私自身の責任なんだから気遣う必要無い……というのは野暮、かな。

『大丈夫です。リイン姉さんが付き添ってくれます。ご心配無く。』

『そっか、じゃあ３０分後にアースラの転送ポートが開くみたいだから、アースラの入り口で落ち合おう？』

『はい、ではまた後で。』

念話が切れる。椅子に座ったまま静寂に包まれた部屋に佇む。

視力が無いから、私の視界は闇に閉ざされている。当たり前だった光が消え、そして今は誰の声も聞こえない。

『君は一人じゃない。』

解っている。忘れて無いよ、概貴くん。

見えなくたって、聞こえなくたって、私は一人じゃない。

……でも暗闇はこわい。

視力を失ってから、此が私につきまとう醒めぬ悪夢。……これと生涯、私は付き合わなければならない。

何も見えぬ中、一人自分を抱き締める。感じられる自分の体温だけが救い。悪夢の中、私はこうして何とか難を凌いでいる。

「姉さん、早く戻って来て……。」

念話をしたのが一分前後、それからまた二分ほど、まだ時間は掛か

るだろう。
それまでは一人。……お笑い草だ、人の闇を晴らした奴が今度は自分が闇の中に堕ちている。
彼女と違い、私の闇は永遠に、晴れない。

そんな負の思考が空回りし続ける中、漸く扉が開く音がする。
足音が近寄り私の頭に手が置かれる。

「今戻った。とりあえず将達には話して許可は降りた。高町の方はどうだ？」

気遣う素振りを見せない姉さんの態度が、私には凄く嬉しかった。

「うん、３０分後にアースラで転送ポートを開いてくれるんだって。だから５分前くらいにアースラ入り口に落ち合おうって。」

「そうか、ならば時間的にそろそろ行かねばな。まだそう早くは歩けないだろう？」

「うん。持ってく物はな――――姉さん、ゲイトを、首にかけてくれない？」

概貴くんは連れてけないけど、彼女は連れて行ける。

「ああ、そうだな。」

何に対しての相槌か、おそらく私のすぐ近くあったであろう彼女が私の首にかけられる。
いつもの挨拶は無い。当然、いまや彼女は内部の人格無いただのアクセサリー。これが機能することも、二度と無い。けど、涙は流さ

ない。私にそんな資格はもう無いし、欲しいと思わない。それは弔いの意が無いって意味じゃなくて、それよりも前へ進むことが彼女たちの望みだと、私が勝手に考えているからだ。

「ん、じゃあ行こう。姉さん。」

差し出された手を握り部屋を後にする。

じゃあね。

そう、一人部屋に残った動かぬ友人に心の中で挨拶を送り、アースラへと向かった。

――――――――――――――――――――――――――――――――

アースラまで大体１５分程度。私の手を引き探り探り歩きながらの歩くスピードだから、ずいぶん時間がかかった。
時刻は大体７時２０分。

そこになのはさんは既に居たらしい。

「カータちゃん！リインフォースさん！」

私達を見るなりすぐ駆けつけたのか走るような足音が聞こえる。

「なのはさん、おはようございます。」

「済まないな、急な申し出をしてしまって。」

「大丈夫です。人数は居た方がいいですから。」

その場の立ち話というのも余り良くはないということで、私達はアースラの中に入った。

「カータちゃん。」

アースラ艦内、なのはさんが不意に語りかけてきた。

「なんですか?」

「その、目は大丈夫?ずっと閉じてるみたいだけど。」

なのはさんの手が私の頬に触れる。視力を失って、私は瞳を開く事を止めた。

どうしてと問われれば、答えづらい。ただ体の生理的な行動かもしれないし、もしかしたら私が何かに恐れているかもしれない。

「大丈夫じゃ…ないですね。生活に支障も出てますし。……でも」

「でも?」

「やっぱり大丈夫です。私は一人じゃない。概貴くんがそう教えてくれたから…。」

なのはさんの手を握り、なるだけ自然に笑みを作る。

「そっか。」

アースラの転送ポートまで、それ以上彼女は何も言わなかった。

「来たか。」

アースラ艦内、私達をクロノとリンディさんが迎える。別に教えてもらったからじゃなくて、気配が二人だから、声音からクロノ、もう一人はリンディさんだろう、と推測しただけだ。

「すみません、急に無理な事言って…。」

「いや、大丈夫だ。こちらとしても、ちょうど君を呼ぼうと思っていたところでね。」

「？」

クロノの言葉にいまいち合点がいかない、疑問符を頭に浮かべていると補足の声があがった。

「…彼の遺族、その人たちにきちんと話さないとならないでしょう？だからカータさん、貴女に来てもらうつもりだったの。」

なるほど、考えてみればそうだ。信じる信じないは別にして、こちらは被害者遺族である概貴くんのおじいさんとおばあさんに話す義務がある。

「…カータ、それと僕から、この件が片付いてから君に話がある。まあこれについては、記憶の片隅にでも残しておいてくれ。」

濁りながらのクロノの言葉、こちらは本当に身に覚えがない。どっ

かで粗相を起こしただろうか？
…考えても仕方ないから、こちらはとりあえず彼の言うとおり頭の片隅にでも残しておくとしよう。
なんだかんだで、ポート転送の時間になった、ということで地球への転送ポートが起動する。
今更ながら、あの老夫婦どう話せばいいのかと、頭の中で取留めも無い疑問が頭の中でループするけど、結局何の進展も無く、私は地球に到着することとなった。

ひとまず私は自宅に戻る事にした。なんだかんだいって、数時間前に死闘と呼べる戦いをしたばかりで、私自身はもちろん姉さんも、まだ体力が完全に回復しきってはいない、だから少しばかりの小休憩に自宅に戻る事にした。

家に戻ってまず私がしたことは、姉さんの着替えだった。正直、冬も窮まったこの時期にタンクトップは不味い。そりゃ本人が問題なければ問題はないけど、明らかに不振人物であるのは間違いない。
とりあえず、その上から白い厚手のセーターと下はシャマル姉さんのロングスカートでも借りた。
…というわけで、姉さんに服を着せたわけだけど、視力が無い私には今の姉さんの格好がおかしいのかどうか分からない。
というより、そもそも姉さんが着れる服を見つけられる事がそもそも奇跡に近かったし、探すと思い立ってから着せるまで、こんな単純な作業に３０分もかけてしまった。…それでも奇跡的なスピードだったんじゃないかと思う。
目を失うという事実がここまで重いとは思わなかった。

…あんまりもたもたもしていられない。リンディさんたちをあまり長く待たせるわけにもいかない。

ポケットにしまった概貴くんからの手紙とはまた違うメモに触れる。母さんがくれた最後のお守りがそこにあった。

偽者なりに、あの人は私に力をくれた。それを裏切るわけには行かない。

行こう。最後の一仕事に…。

――――――――――――――――――

――――――――――

場所は変わって概貴くんの家。リンディさんたちには私が呼ぶまで外で待っていてもらうつもり、いきなり見知らぬ人が押しかければあの老夫婦も困惑するだろうと、リンディさんからの言葉だ。

暗闇も相まり私は口も開かず思考に耽ってしまう。なまじ演算に優れた体に進化した体は思考の展開も早い、私が悪い方向に妄想を膨らませてしまうのは容易だった。

「カータ。」

声だけが聞こえる。視線は感じない、気がつけば私は強すぎるくらい姉さんのセーターの裾を握っている。おそらく声だけで私を呼びかけたんだろう。

…大丈夫。…大丈夫じゃないけど、これを越えねば全てを終えたといえない。

「大丈夫…。ありがとう姉さん。…インターフォン、押してもらっていい？」

言葉から間もなく、インターフォンが鳴らされる。声が聞こえるのはすぐだった。

『はい、どちらさま？』

落ち着いたトーンが聞こえる。この声はおばあさんかな…？

「こんにちは、カータです。八神カータ。」

『ああ、カータちゃんかい、今開けるからね。』

カチャンとインターフォンが閉じる音が聞こえ、代わりにパタパタと中から足音が聞こえる。ほどなくして玄関が開かれる音がきこえる。

「いらっしゃいカータちゃん、…おや、お姉さんかい？」

「…はい、私の姉さんです。」

「カータの姉です。リインフォースとお呼びください。」

「はじめまして、概貴の祖母です。…ごめんね。あの子、まだ――――カータちゃん、どうしたんだい？さっきから目を閉じて」

「あ…その…。」

突然の質問に声が詰る。なんと答えていいのかわからない。緊張も

相まって口の中がカラカラする。

「今日はその事もあって、この子と伺いました。お時間が在れば旦那様にも私たちの話を聞いて欲しいのですが、よろしいでしょうか…？」

言葉が出なかった私の代わりに姉さんが口を開く。それと共にリンディさんたちが門から入ってくる音が聞こえた。

「そうでしたか、ちょっと待っててくださいね。おじいさんを呼んできます。ささ、中へどうぞ。」

『カータ、落ち着け。足りぬ分は私がフォローする。最善を尽くそうとするな。お前なりに全力を尽くせばいい。』

おばあさんに促されるまま、家にお邪魔する。その最中念話がつながる。

『うん、ごめん。ありがとう。』

あの老夫婦が揃うのはそう時間はかからなかった。ちょうど二人とも暇があったのか、そろって私と姉さんを見つめている。

「わざわざすみません。」

「いや、大丈夫じゃよ、あの子の友達ならわしらにとっても孫みたいなもんじゃ。…それで、話というのは、あの子の事かね？」

「…ハイ。」

おじいさんの静かだった口調がわずかに強張るのが解る。解ったからこそ心臓が一際高く鼓動を鳴らし、目が見えぬ分だけ、余計にその鼓動を強く感じてしまう。

「…おじいさん達は、魔法を、信じますか？」

「魔法、かい？」

突拍子も無い質問、突拍子も無いがここから入らなければ彼の事を話すのは難しい。予想通り素っ頓狂な二人の表情。

「…質問を変えます。もし、私がそういった類のモノを扱う人間、と言ったら、信用、してくれますか？」

二人のどこか抜けたような表情が再び引き締まる。質問を変えたのが良かったらしく、二人は私が言いたいであろうことを察しつつあるみたい。

「君がそう言うのなら、そうなんだろうね。…それで、その君の魔法と、概貴。どういう繋がりがあるのかな？」

核心を突くおじいさんの質問。早鐘を鳴らす心臓が一際高く私の中で高鳴る。

「…概貴くんは…。」

口がそれ以上動かない。…考えてみれば、私は一度もあの事実を口

にしていない。
「鳥宮概貴の死」を私は一度も私自身の口から言い放って認めてはいないのだ。

「「……。」」

二人はきっと、私が言わんとせんことをどこかで解っていると思う。
…それで居て、私の答えを待ってくれるのだ。その気持ちに私は答えなければならない。

「…死にました。…ううん、私が…殺したような、モノ…です…。」

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

沈黙した空気が更に重くなり、やがてそれは凍結した。一人の少女の懺悔。老夫婦には、カータの言葉は報告ではなく、そのように感じた。

少女の宝石のような瞳がゆっくりと開く。それは無意識か、彼女の意思かは解らないが、その瞳には老夫婦が以前見たような輝きは無く、光を失った虚ろとも取れる色合いだった。

「殺したんです…私が…八神、カータが…。」

その瞳から涙が零れ落ちる。だがその視線はこちらを向いたまま、決してうつむこうとはせず、事実から目を逸らそうとしていない。
その意思がはっきりと伝わるカータの姿勢だった。
概貴の祖母がついに涙を零す。認めたくは無かった孫の死、その悲しみが老夫婦に降りかかる。
だが、祖父は静かにカータを見つめたまま口を開いた。

「カータちゃんや…それが事実かどうかは、ワシにはわからん。だが、君が概貴を殺してしまうとは、ワシにはとてもじゃないが考えられれん。…何があったのか、教えてはくれんか？」

カータは黙る。答えないのでは無く、答えられない。

「それについては私が話します。」

リインフォースが口を開く。だが

「姉さん…！」

カータそれを良しと許さない。許さないが

「カータ、この夫婦には真実を知る権利が在る。そして私たちには真実を語る義務がある。…わかっているだろう？」

リインフォースの語る事もまた事実。それが解っているからこそ、カータは黙るしかなかった。…自分では言えぬことを姉が語る為に。

リインフォースは静かに語った。自身の存在の事。魔法のこと。自身の中に存在していたバグが、現在の主「八神はやて」…つまりカータの姉を蝕んでいたこと。自身がカータと戦ったこと。そのとき概貴がカータと共に戦った事。カータが自身を治そうとしたこと。その時、概貴とゲイトが彼女の代わりに犠牲になり、彼女自身も、両目の光を失うと言う。一生癒えぬ傷を、体と心に刻まれたこと。

実にお昼が回るであろう時刻まで彼女はゆったりと、まるで昔語りをするかのように老夫婦に聞かせ、夫婦もまた、その話を真剣に目を逸らす事無く聞いていた。

「大きく省略はしましたが、大体はこのとおりです。カータがこの事実をこのように受けてますが、客観的な事実はこの通りと思ってください。」

ひとしきり話し終え、一息つく。沈黙が流れる、それを概貴の祖父が静かに破った。

「君の言う、魔法の類の話は、いまいちわしらには解らん話だったが、カータちゃんが、概貴を死なせたくて死なせてしまったわけではない。それはよくわかった。」

概貴の祖父は本当に、本当に静かに微笑みながら語った。ここでカータは漸く夫婦への届け物があったことを思い出す。

「おじいさん、これ…概貴くんから、です…。」

ポケットから取り出したのは、死の間際、概貴がカータに託した、概貴を養ってくれた老夫婦に向けられた手紙だった。…とはいってもノートの切れ端を折りたたんだ粗末な物だったが。

それを祖父は無言で受け取る。自身の妻に眼鏡の手配を言い、眼鏡をかけ、その手紙をゆっくり読む。

大事な孫が最後に残したメッセージ。その一文字一文字をかみ締めているのか、そのメッセージを読み終えるのに少し時間がかかった。

「…彼からのメッセージです。許してくれとは言いません。償える

ことならなんでもします。」

涙は既に流れてはいないが、その濁った青の瞳はいまだ涙で潤んでいた。

「…なら、いくつかお願いを聞いておくれ。」

「…はい。…なんでも言って下さい。」

「あの子の亡骸は、あの子の故郷のここで埋葬させて欲しい。…それとカータちゃん、なるべく、あの子のお墓参りをしてあげておくれ。」

机の上で手を組む祖父、涙に暮れても良い筈なのに、彼はカータに優しく笑いかける。

「…はい。喜んで…！私でよければ…お参り…させて、ください。」

その笑顔が…光を失ったカータにとっては、彼の優しい言葉がなにより辛かった。止まった涙をまた溢れさせる。
意味のない自己満足の謝罪を繰り返しながら。

闇の書に関する事件はこれで全て終わった。結果的に、長年問題視されたロストロギアを担当し、犠牲者一人という、奇跡的と言える数値を出したが、関係者…とはいっても主に彼の知り合いであった、なのはフェイト、カータ。前者二人はそこまで関係を築けていなかったこともあり、深い傷こそは負わなかった。

が、カータには違う。世間は一人という数値を良しと取るが、彼女にはこの一人という数値がとてつもなく重荷になった。精神的な齢は２０前後だが、彼女は一度心を破壊している。そのため実質的な彼女の精神年齢は本当に相応と取ってもいい。

光も相棒も友人も失った。一人の少女の心に大きな傷を残して、闇の書事件はこれで終了した、と誰もがそう思っていた。

クリスマスが終わり、新年を迎える年末に、再び事件は脈動する。

第二十八話　明天（後書き）

さて、これで一応アニメ本編は一通り片付きました。
次からはＰＳＰのシナリオ編です。…うまい言い方思いつかなかった・・・ｗｗリインフォースの新名称については、まあお察しくださいｗｗｗ敢えて伏せました。

滅ばされた闇の欠片が脈動する。心地よい闇へと還る為に。
少女がぶつかるのは自分自身。失った光と、代わりに得た力で、自身を救う。
魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ
去像

第二十九話　虚像　前編（前書き）

一月近く更新できずにすみませんでした。

今回からＰＳＰのゲームシナリオ編となります。ほとんどオリジナルに近い構成となるため、ｇｄ ｇｄ必至ですが最後まで見守ってくださると幸いです。

第二十九話　虚像　前編

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

１２月２９日。
艦船アースラ

事件は片付いたが、事後処理の為にその艦船はまだ軌道上に停泊している。
慌ただしく緊張していたクルー達の空気も、どこか弛緩している。
クリスマスの喧騒も皆の心に記憶として沈みかけたその時に、それは発生した。

ブリッジにて、今回のデータを一人纏めるエイミィに、そのアラートは伝わる。

とは言っても緊急というほどではない。
ごく微弱な魔力の反応を、サーチャーがキャッチしたのだ。

「なんだろう、この反応……。」

独り言を呟く。彼女の反応は最もであった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

ごく微弱なら、なのは達の誰かが魔力を発すれば、反応は示す。
が、そんな微弱な魔力にサーチャがいちいち反応していては、監視する側はいちいち確認せねばならない。し、それこそ解りきった反

応に労力を割くのはあまり合理的ではない。
が、今回サーチャはしっかりとエイミィに異変を伝えた。
なぜか。その反応が一つでは無かったからだ。

「……艦長とクロノ君に報告しないと。」

困惑の混ざった呆け顔を引き締め直すと、エイミィは端末を操作し、
クロノに通信を繋げた。
魔法少女リリカルなのは
Ｏｎｌｙ　Ｈｅｒ　Ｈｅｒｏ

去像

ＳＩＤＥ　ＣＡＴＡ
クロノから呼び出しを食らった。
どうやらこの前の話したい件とやらで呼び出したらしい。
でも、よりにもよってお姉ちゃんが髪を直してくれてるタイミング
で念話を飛ばす事は無いでしょうに……。
空気が読めないのか、間が悪いのか……。

『聞いてるのか？カータ。』

『聞いてますよー。１０時にお迎えでしょ？……クロノさん、女の
子の身繕いを邪魔するの、ブスイですよ？』

『……すまない。じゃあ君のソレが済んだら一報よこしてくれ。』

念話はそこで切断された。時刻は大体９時を過ぎた辺り。…あの事

件から五日ほどたった。あれからリエにはあってない。正確に言うと、合わせる顔がない。友達を殺して、それに加えて視力も失った。親友と言えどどの面を下げて会いにいけるというのか。

「カータ、どないしたん？」

お姉ちゃんの言葉で、我に還る。どうやらちょっと呆けていたらしい。

「ううん、なんでもない。…というわけで、１０時にちょっと出かけてくるね。」

「…カータ、人の話聞いとらへんな。」

後ろからため息が聞こえる。見えはしないけど、多分相当呆れた顔でブラシを動かしてるに違いない。

「ん？聞いてたよ？１０時にクロノがお迎えに来るんでしょ？」

「…それに付き添うんは誰や？」

「…リイン姉さんじゃないの？そもそも付き添う人なんて指定されて――――」

ない。と続ける私の言葉は再び聞こえた盛大なため息（大げさな所を考えるとわざと）が聞こえた。

「付き添いなんて必要あらへん、八神家総出のお呼び出しやで、これ。」

「…え？」

お姉ちゃんが言うにはこうらしい。先ほどの念話、私の近くに居た物にも聞こえるようにクロノは念話を繋げるようにしていたため、お姉ちゃんには勿論聞こえていた。
用事そのものは私個人に伝えてはいたが、日時の指定などの前にクロノは私を含め、夜天の主八神はやて、それとその従者達にも話をつけたいから、連れて来いと指示していたらしい。
…どうやらちょっとばかり注意力が散漫しているらしい。

「解ったかー？この寝惚すけカータ。」

ペチンと後ろから頬を叩かれいたずらっぽいお姉ちゃん笑い声が聞こえる。
反論しようにも事実だから仕方ない。

「解ったから、早く済まそ。迎えが来るんだから早く着替えないといけないし」

後ろから憎たらしい姉のクスクス笑いが聞こえるが無視。これ以上付き合ってたら遊ばれ続けるに決まってる。
お姉ちゃんは笑いながらも、ブラシを動かす手は止めない。

それにしても、あいつがわざわざ呼び出して話したい。というのはなんなんだろうか、闇の書事件の後日調査か何か？
確かに落ち着いた今になってから、私達に再度話を聞くのは間違っては無いけど、それだったら私じゃなく他の人を呼ぶ筈。

……考えられるのは、私の稀少技能（レアスキル）の事。
もしくは、私の、出世の話。

……考えてもしょうがない。
その思考に至った私は、姉が施してくれる手入れが終わるまでの、一時を楽しむ事にした。

―――――――――――――――――――――――――――――――

身支度を一通り済ませてから、私はクロノに改めて連絡を取った。
時刻は大体４０分頃。それからあいつの迎えが来るのに数分程度掛かった。

「早い、流石管理局。」

「管理局員でも遅い人間は居る。それに今回は局員として来た訳では無いから、その言い方はよしてくれ。」
鳴らされたチャイムに反応して扉を開けた私とクロノの開口一番の会話。
いきなりの疑問点、局員としてで無いって事はクロノ個人が私に…？疑問を口にしようとするが

「おぉ、クロノくん、数日振りやなぁ。」

お姉ちゃんの乱入に私は思わず口を噤んだ。

「あぁ、済まないな、こんな朝早くに。」

「ええよ。大事なお話なんやろ？妹の大事な話はお姉ちゃんにも大事なお話やからな。」

二人は軽く笑い合う。ふと思ったんだけど、お姉ちゃんとクロノっていつの間に仲良くなったの？

「立ち話も、無駄だから、そろそろ行こう。僕らが住んでいる所はそう遠い所じゃない。」

そう言ってアイツは踵を返す。置いてかれる訳にはいかないと、私はリイン姉さんに手を引かれ、みんなで後を追った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

言う通り、距離はそこまで。歩くこと十分前後。
お姉ちゃんの驚きようから、随分良いマンションに住んでいるみたい。高級マンションにでも住んでいるのかな

「今中には誰も居ない。エイミィと艦長はアースラに居るし、フェイトにも席を外してもらった。」

「じゃあ、本当に私個人と話がしたかったんだ。」

信用してませんでした。
その意を含む言葉にクロノは眉をひそめた。

「嘘をつく必要は無いだろう。僕はそんなに信用されてなかったのか。」
ため息混じりの言葉。……割りと凹んでるっぽい。
もうちょっと機械みたいな奴だと思っていたけど……。

「クロノ。本題に入ってくれ。『あの件』についてだろう？」

「あぁ、済まないシグナム。話は居間でしよう。こっちだ。」

今まで口を開かなかった姉さんが言葉を発した。
……どうやら姉さんには一度話していた事らしい。

「おいシグナム。あの件ってなんの事だよ。」

「じきに解る。クロノが語るだろう、もしくはカータが語るか、だか。」

「？」

歩く中聞こえる会話にふと振り返る。見えはしないが、感じる姉さんの視線はいつものソレではなく、鋭い。ヴォルケンリッターの将の視線だった。

「話というのは他でも無い。カータ、君の魔法の事からだ。」

居間に集まった所で、クロノが口を開いた。
『から』という言葉から、まだ先が有りそうな口振りだった。

「私の、魔法？」

「あぁ、君は魔法をどう――――――『クロノ君！話してる中ごめん！ちょっと異常事態！』……どうした？」

言葉を中断するようにエイミィさんから大型スクリーンで通信が入る。

異常事態。その単語でクロノだけでなく、私達も自然と身構える。

『うん、ついさっきからなんだけど、小さな魔力反応があちこちから出てる…！それも一つや二つじゃないし、どんどん大きくなってる……！』

下の端末を操作ながら、現状が説明されていく。

「……カータ、済まない。話は後だ。今はこれを何とかしよう。」

「了解。何か出来ることは？」

「君らで、エイミィが言う魔力反応のある区域に向かって欲しい。」

思わず首にかかったゲイト『だった』デバイスを握る。

破損箇所はデバイスのＡＩだけだったようで（私にとっては痛手たけど）、バリアジャケットと武器はまだ私に用意できる。

……けど。

「カータ、お前は残れ。」

シグナム姉さんの突き刺さる言葉。反論の余地も無い。

そう、私はもう戦える魔導師じゃない。

視力を失った私は今や家族の手助け無しでは日常すら送るのが危ういのだ。

どうやって、戦えるというのか。

「せや、ここは私達に任せてカータは大人しく待ってるんやで？」

「うん…。解ってる。」

頷くしかない。私にだって解る。今出れば足手まといにすらならない。

「リィンフォース。カータを頼んだ。こいつを家まで送ってくれ、シャマルが結界を張る。」

「あぁ。解った。…将。主はやても出撃させるつもりなのか？」

兄さんの言葉に答えると共に姉さんはシグナム姉さんに向かって問うた。

「……この方の先の言葉を聞いただろう、一度決めた事を曲げる方ではない。シャマルと共に行動させるから、安心しろ。」

方針が定まった。

私とリィン姉さん。シグナム姉さんとヴィータ、兄さんは単騎。シャマル姉さんとお姉ちゃん。

内一組、つまり私とリィン姉さんが待機と言うこと。

リィン姉さんは修復直後でまだ本調子じゃない。そう踏んでの私と着けたなだろう。

いざとなれば、私が姉さんにユニゾンすれば良い。

「なのはやフェイトにも連絡をつける。状況を掴み次第僕も向かう。」

『魔力発生ポイントはここ。じゃあみんな、お願いします。』

スクリーンに海鳴の地図とマーキングされたマップが浮かび上がる。

それを確認と共に私とリィン姉さんを除く全員がバリアジャケット

と騎士甲冑を展開する。

不意に私の頬に誰かの掌が触れる。それがお姉ちゃんだとすぐに解った。

「今度はお姉ちゃんがカータを守る番や。ノアの方ぶｎ――「お姉ちゃんそれ既出」なん……やて……？」

あぁ、ふざけなかったら最高にかっこよかったのに。

そこら辺八神はやてらしいと言えばらしいけど。

「主。お気をつけて、貴女の妹君は私がお守りしますので、ご心配なく。」

姉さんは私から離れ、おそらくお姉ちゃんの前にて言葉を紡ぐ。こういう言葉を聞くと、彼女……八神はやては夜天の最後の主なんだと再認識できる。

「任せるで？祝福の風…明天（みょうてん）の魔導書、リィンフォース。」

「はい。お任せを…。貴女と妹君から頂いたこの名に賭けて。」

お姉ちゃんの言葉に濁りはない。

目の前の魔導書の言葉を本気で信用しているからだ。

「よし、行くよシャマル。」

「はい。リィンフォース、貴女とカータちゃんが入るのを確認したら結界を起動するわ。私達の妹をよろしくね。」

「あぁ、気をつけてな。」

姉さんの言葉に答えるように、二人はベランダから飛び立った。

「よし、あたしらも行くか。シグナム。」

「そうだな。……リィンフォース、再三になるが、任せるぞ。」

「心得ている。……将、今回の異常……おそらく――――」

「あぁ、私もそう思っている。だがお互い推論。結論が出てからのが、いいだろう。」

行くぞヴィータ。と、その言葉と共に二人は飛び立った。

「行くぞ、カータ。……クロノ・ハラオウン。後は任せた。」

「任せてくれ。君は大事な物を守るといい。」

会話が終わるや否や、姉さんから魔力が一瞬迸る。……騎士甲冑を纏ったのだろう

『スレイブニール、羽ばたいて』

次いで私の体が持ち上げられる。

状況からして抱き上げられた。もしかしなくとも、赤面するのが自分でも解る。

「ちょ……姉さん、自分で飛べるよ。」

「視力を失ったお前に飛行などさせられん。良いからしっかり捕ま

っていろ。」

見えなくても解る。明らかにニヤリと擬音が似合うであろう笑みを浮かべているに違いない。
これ以上口を開いてもしょうがない、事実私は目が見えないから飛行することはできない。

飛び上がる。魔力による空中飛行。一般人が私たちを見るのではないか？という疑問が残るけどそこらへんは安心してほしい。きちんと広域結界が張ってある。

「姉さん。」

「なんだ。」

「この事件、心当たりとか、あるの？」

私が問いかけた疑問。事件というにはあまりにも小さな異常だけど、事態は確実に拡大している。
それに姉さんの態度が私はどうも疑問が残った。まるで想定内と言わんばかりの言動と態度。

「心当たりはある。恐らくそこまで大きな事件にはならんだろうが、油断はできない。これが私の見解だ。」

「そっか。」

自宅までの数分間、私達は無言。不意にクロノから連絡が入った。

『二人とも、ストップだ。君達がちょうど居る辺りに他同様の反応

が出た。』

「そうか、ここは任せてくれ。私がなんとかする。」

『済まない。援護が出せるようになったら僕が援護に駆け付ける。』

クロノからの念話が閉じると共に確かに微弱だけど、明白な魔力の淀みのような物が感じられる。

「姉さん、大丈夫？」

「あぁ、お前が治した魔道書だ。負けはありえん。」

言葉そのものは頼もしかったが、肝心の覇気が込められていない。いつかの言葉が反芻するが、今はそんな事を考えてる場合じゃない。

淀みが徐々に形を成すのが解る。それが形となったとき、妙な感覚に陥った。…こう、鏡を見ているかのような…

答えは直ぐにでた。

「やはりか、残滓から滲み出る副産物。」

目にすることは出来ないが、目の前に居るのは私だ。感じる魔力にどうも違和感を感じる所を見ると複製された私自身。

「……。」

現れた私は何も喋らない。敵意も無ければ殺意も無い。

「姉さん、これって。」

「有り体に言えば、夜天の魔道書の欠片。砕け散った防衛プログラムが持つ闇そのものの残滓。今目の前に居るカータは、過去のお前を再現されたものだ。」

やっぱり目の前に居るのは私だったらしい。姉さんも警戒心はもっているものの敵意は持たずに構えている。

「……ない。」

「え？」

不意に『私』が口を開く。その声音からはおよそ生気が感じられなかった。

「…は…いらない…。」

もう察しは付く。この『私』はあの頃の、仮面の男ロッテに言い様に言われ心を壊された時の私だ。

「私は…いらない…。」

これは私自身が消さなければならない。虚像。あの時私を救ってくれたリエの代わりをこの子に与えなければならない。

「姉さん、この子の相手は私にやらせて。…力を貸してほしい。」

「…そうだな。参考までに教えてくれ、あのカータには何が起きている。」

「勘違いしてるだけ、私は要らない子って、だからそれを訂正してあげる。私の親友がしてくれたみたいに。」

見えずとも解る。目の前の『私』はないている。声にならない心の叫びをあげながら大粒の涙を心から流している。

私が、そうだったから。

「力を貸して、姉さん。もう一度、光を見ないといけない。」

視力を失った私にも戦う術は残っている。ユニゾンデバイスでもある姉さんとの融合をすれば、私は一時的に姉さんの視覚を借りて光を得ることができる。ひとつの裏技のようなもの、本来は絶対に使うつもりはなかったけど、今回は是非も無い。なぜなら、相手が『私自身』だから

「ああ、行くぞ。」

私が『私』を救うために

「「ユニゾン」」

私は再びこぶしを握り締め

「「イン」」

再び光を得て戦士となった。

第二十九話　虚像　前編（後書き）

二部構成の予定ですがもしかしたら三部構成になるかもしれません。

プロットと相談してよく考えたいとおもいます。

読んでくださりありがとうございました。

第二十九話　虚像　後編（前書き）

どうも、お久しぶりです。

どうしようどうしようで、頭抱えて二ヶ月、俺のハートがＢｒｏｋｅｎしてから早一ヶ月弱
時間経ちすぎわろた

というわけで、第二十九話後編　どうぞ

第二十九話　虚像　後編

Ｉｎｔｅｒｌｕｄｅ

１２月２８日　午後２３時。

「将、話がある。」

シグナムの部屋にリインフォースが入ってきたのはシグナムが床に就こうとしていたときだった。

「どうした。…随分と真剣な話のようだが」

シグナムの言葉にリインフォースはコクリと頷く自身は、ベッドに座りリインフォースをいすに座らせる。

「話というのは、カータの事だ。」

「やはり、か。お前があの子を取り込んだと聞いた時点で、私もお前に聞きたい事があったところだ。」

「ならば話は早いな。あの子の、この世の在り方について推論だが、将に話すべきことがある。」

「わかった。聞かせて欲しい。お前の推論を」

事ここにこれは八神家の最大の問題。だが、彼女ら二人はまだ少し慌しいこの時期にこのことを全員に話すつもりにはなれなかった。

まず一番の理由はカータの精神状態。今一番傷ついているのは他ならぬカータであるのは二人も良く解っている。そんななか混乱を招くような事は彼女たちも避けたい。もうひとつは彼女達が懸念している闇の書の残滓が色濃くこの町に残っていると感じとっていたこと。大事にはならぬだろうが、少なくとも慌しくなるのは間違いない。

少なくとも契機が自分達に訪れるまでは話すのをためらっていた。…その契機は翌朝に訪れるのだがそれはまた別の話。

リインフォースは話した。カータの記憶、出生、彼女の心の不安定な理由。三つ目はリインフォースの完全な推論。だが、それを否と否定する要素をシグナムは持ってはいない。むしろ、彼女のその推論に納得してしまう部分が強かった。

リインフォースの語る言葉はこうだ。

異世界出身…カータは、いわばパラレルワールドの住民だとリインフォースは語る。次元の壁…この場合ミッドチルダと地球を挟む次元の海、というものでなく、文字通り世界と世界を隔てる壁である。つまりシグナム達が今いるこの世界と、カータが元居た世界を隔てる壁、その壁をカータは越えてしまった。

当然ながらその所業は普通の動作ではありえない。魔法でどうにかできるものでもないし、優れた科学でどうにかなるものでもない。そんな所業をただの人間であるカータがすれば結果。それは過ぎた行為であり、当然ながらその反動は彼女の魂そのものに跳ね返る。

結果、彼女の魂は極限まで劣化する。魂の劣化は存在の劣化と同義、その劣化した姿は人格は愚かその容姿にすら影響を及ぼす。劣化した体と心だが、そのような損傷を世界は認めない。有り得ないイレ

ギュラーは有り得ないイレギュラーにて世界は修正を施す。
その結果、彼女の体は通常では有り得ない銀髪…いわゆるアルビノという珍妙な容姿に書き換えられ、その容姿も類希な美麗なモノに変更をされた。

更にカータは以前の世界での記憶をある程度失うことになる。

これがリインフォースが話した大まかな内容。

「あくまで私の推論、カータが認めないのならば、私はそれを信用する。」

一頻り話し終えた後、リインフォースは誰に言うでもなく言い訳のようにそう口にした。

「…私に話した理由は、なんだ」

「将はあの子の異常な動揺を目の当たりにしている。…シャマルもそうだが、やはりこれは皆のリーダーでもある、将に話すべきことだと思ったからだ。」

シグナムの問いにリインフォースは迷うことなく答えた。彼女もそうと感づいていたか、はたまたその言葉に納得したか、それ以上の言及はしなかった。
話はそこまでだと、リインフォースが切り上げたことでその場は解散となったが、その約十時間後にその契機とやらは訪れるのだった。

時戻り
１２月２９日　某時刻
リインフォースと融合し、カータは目の前の自身へと視線を移す。
その瞳を蒼から朱く変え失った光をもう一度得る。

「ッ……。」

その行為をカータの複製は敵対行為と見なしたか小さく悲鳴のような声をあげる。身構える仕草は戦闘態勢と呼ぶには余りにも覚束無い痛々しささえ伝わる悲痛な物だった。
拳は半端に握られ腰の辺りまであげられた高くも低くも無い構えの位置。足の構えもほぼ棒立ち、だが棒立ちのそれでなく、僅かに構えの意思がうかがえる様子さえある。

このとき、カータ自身。自分の影と戦闘するつもりは皆無だった。
過去の自分ならば今の自分は間違いなく成長している。それに加え相手には無い姉の存在があるのだ。戦闘能力で負けることは有り得ない。
ならば、彼女は言葉で戦う。
そう構えていた。

が…。

その考えは僅か数撃の攻撃により改めさせられる。
まず手出しの一撃、これそのものは驚異ではなかった。これはカータの予想の範囲内。放たれた一撃片手で受け止める。誰よりもよく知っている自分自身の攻撃は力と重心の掛け方。それによりどう防御すればいいのか良く解っている。視覚で難なく見切りそのまま片手で受け止める。複製カータは防御と共に拳を引く。

続く次撃。これは躱す。出来るだけ紙一重に、放たれた拳は彼女の胸が在った空を切り空振りに終わる。

「…だけ。」

不意に口走ったのはカータではなく、複製カータ。

「…？」

完全に予想外の行動だが、彼女の動きを止めるほどではない。再び放たれた三の矢は再び空振りに終わる。

「それだけ。」

拳を空振りし、姿勢を次撃の為に変えるわけでもなく、光無い視線はカータを射抜いた。その言葉の真意は彼女には解らない。

「どういう意味？」

「それが貴女の全て…」

「…！」

カータ自身が、相対する者の事が解るように、複製カータ自身もカータの事が解るのかその言葉は的確にカータの言葉に突き刺さった。

「後は、大事な相棒が居ないと成立も難しい魔法と、簡単に壊れちゃう脆い心。これが今の貴女…ううん、今の貴女には驕りっていう汚い感情が付いてくるのかな。」

「何が言いたいの？」

「別に…ただ貴女が私にどんな言葉を掛けるつもりだったか、見物かな…って。」

複製カータは拳を下げ戦闘体制すら崩す。先ほどまで無かった視線に意思の光が宿る。そのカータと同じ蒼い瞳に籠もっていたのは「侮蔑」だった。

「でもそれに期待するのも無意味、所詮貴女の言葉じゃない。そうだね、有るとしたらリエかな。あの子が私の中にとって一番大きな存在で記録されてるから。」

「…ッ。」

複製カータの言葉はカータの心を縛るほどの動揺を与えるのは十分だった。反撃の機会を与えられたにも関わらず放棄せざるを得なかったカータに対し、複製カータは容赦無く言葉を続ける。

「よくもまあ、平然と使えるね。顔向けできない友人の言葉に頼るなんて。流石、私。おまけに払った代償はちゃっかり補ってる。もう呆れて物も言えない。夜天の魔導書を救ったのもそこまで計算済みだった？」

「ち、違う…そんな……。」

ユニゾンの意を示す赤い瞳に揺れる明らかな動揺の色。
元々カータの精神力は強い物ではない。
あの崩壊してから今のカータにまで立ち直りはした。が、不安定な地盤の上の建物は僅かな揺れで崩落する。

彼女の精神もそれに同じ。彼女の行動はあくまで彼女自身の確固たる意思と決意で動いている訳では無い。他人から得てきた物差し『理』によって構築された物。

そういった意味では複製カータの「全て」という言葉は間違ってはいない。カータが扱う武術は彼女の意思と決意で得た物だ。決して今の彼女の行動のように周りの意見に流されて得た「理」からではない。

が、そういった「理」は大抵の人間は持っている。カータのような人間はゴマンと存在するし、決して恥じる事ではない。むしろそういった「理」を捨て去った無頼の存在を人は勇者や英雄と呼ぶ。

そういう意味では複製カータの言葉は明らかに言い過ぎの部類に入る。

だが正論でも在るが故に、カータは複製の言葉を鵜呑みにする。そう、何故なら彼女自身も、光を得てしまう事に後ろめたさがあったから。

「だからこんな偽物自分にも、貴女は苦戦するの。こんな風に……ね！」

そんな彼女の動揺から滲み出た決定的で、致命的な隙を、複製カータは見逃さない。

「ッ……ァ……。」

完全な不意討ちに、まともに防御姿勢が取れないまま、魔力が込め

られた拳が腹部にめり込む。それと共に込められた魔力を瞬間的解放し簡易砲撃をゼロ距離で撃ち放つ。
当然ながら直撃という形でカータは大きなダメージを負い、魔力ダメージでブラックアウトしかける意識をなんとか手放さず留める。

反射的に戦闘体制を取る。が、既に彼女の中に在るのは目の前の相手と戦う意思では無く、自身の心が孕む迷いをどう処理すれば良いのかという『困惑』だった。
そんな中、複製カータは更に言葉を突きつける

「あぁ、解った。貴女は夜天の魔導書を救う為に、概貴くんを利用したんでしょ？」

「！？」

カータの動揺は更に浮き彫りになり同時に表情から困惑が消えた。
揺れていた瞳は取り敢えず落ち着きを取り戻す

「……貴女、本当に私？」

「どういう意味？」

「私は概貴くんの事をそんな風には言えない。例え嘘だとしても。」

瞳から迷いが消え、そして現れるのは怒り。それも理性を手放す程の強烈な怒り。

「だったら何？自己嫌悪でもするつもり？止めて。今のセリフだって堪えられないのに、そういう態度されるとこっちが恥ずかしくて死にたくなる。」

カータの中の何かがキレた。理性を解放し吐き出すのを塞き止める最後の線が排除されかけたその時。

「何を遊んでいる。そのような屑に手間取るお前では無かろう。」

聞いた事ある声音、カータにとって大好きなはずの声には彼女の大嫌いな感情の色が混ざっている。そんな良く解らない声音だった。

「…姉様。…申し訳ありません。少しばかり興に酔っていたようです。」

複製カータは現れた影に向けて僅かに驚愕の表情を取ると、恭しく頭を下げる。

「良い、妹の我儘を許す寛大な心も王である我には必要、そして何より可愛い妹の我儘、その程度に目くじらは立てん、顔を上げよ。」

現れた影は銀の髪と狂気を孕む翡翠の瞳をした…八神はやてに瓜二つの少女だった。複製カータの下げた頭に優しく手を乗せ、その狂気に合わぬ柔らかい笑みを浮かべると、王と名乗った少女は確かに複製カータを『妹』と呼んだ

「…誰…？」

カータは直感的に目の前の銀髪の少女が、今回の事件の中枢と悟る。そして再び意識を持ち直し戦闘態勢を構えながら静かに尋ねた。

「…屑め、気安く我の名を尋ねるでない。ヴェイニーよ、アレと同じ姿は気に食わぬ。もう遊びは終いだ。その変身魔法を解除せよ。」

「申し訳ありません姉様。…ブレイク。」

『了解。』

複製カータ…ヴェイニーは、姉の命の通り魔法を解除する。変身解除といえど簡易な物だったのか容姿に著しい変化は無く、その髪の色が銀から黒へと変化し長い髪は一まとめにポニーテールとなり、蒼の瞳は漆黒の真黒となる。敢えて変わったところを指摘するなら髪型がストレートからポニーテールへと変わった部分。

そして何よりカータの思考に引っかかったのはヴェイニーの拳で明滅する小さな宝石だった。

「…ゲイト…。」

意図せず思わず呟いた言葉。その言葉に真っ先に反応し不快感をむき出しにしたのは当然ながらヴェイニーだった。

「気安く呼ばないで、この子の名前はリンク。さも自分のデバイスのように、言わないで。」

カータと言葉を交わしてから初めて見せる怒気。それに合わせてヴェイニーは手のひらを上下に重ねる。

タートル・バーストの構えから魔力の収縮まで全くといっていいほど同じな其れは、間違いなくカータ自身に狙いを定めていた。

自身の魔法と類似しているのならば、その仕組み（プログラム）は把握している。

それを防ぎうるだけの壁を用意すればいい。

当然ながら壊す側と受ける側、戦いにおいてこの一瞬に生じるアドバンテージは当然後者にある。
これが立て続けになれば当然前者に振り子が傾くが、この一瞬において身構えるのと、其れを突破するだけの力を溜めるのでは話が違ってくる。
その身構えた側の守りが堅ければ堅いほど、溜めを要する破壊する側はそれ相応の力を溜めなければならない。
この時点に於いて相手の放つ技の凡その形に察しがついているカータがここでは完全に優位。

加えて彼女は攻撃の魔法よりも防御の魔法を得意としている魔導師。
相手の刃の形成が終わる前に彼女はプログラミングを組み立て終える。それと同時に敵の魔法も低い唸りを上げる。独特の音は彼女もよく知っているチャージ完了の汽笛。

迷う事無くカータは掌を向けると共に盾を呼び出し、攻撃に備える。
彼女にとって最高の盾が組みあがり、最悪破壊される程度、そう考え気合を込めた矢先

「…莫迦め、そんな脆弱な物ではこやつの攻撃を看破できぬわ…ヴェイニーよ見せてやれ、お前とあの屑の差を」

「はい、姉様。」

そんな会話が聞こえ、ヴェイニーの掌から魔力の奔流が大挙してカータを呑み込みにかかる。

その奔流を盾（イージス）はあっさりと受け止め……

物の数秒とかからずに盾（イージス）は消滅した

「え…？」

その呟きが声となる前に彼女の視覚は意識の断絶とは違う意味で途切れるのを感じ、その意味を咀嚼する前に凄まじい衝撃と彼女を守るようにする何かが、自身の代わりにそれを受けた。

彼女の意識はその情報を知覚するのを最後に、途切れた。

第二十九話　虚像　後編（後書き）

どっかの活動報告にもありますが、失踪するつもりは無いです。
止めるときはきちんと止める報告いたしますので。

では、次回に

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1067m/

魔法少女リリカルなのは　Only Her Hero

2011年12月2日19時55分発行